UNFINISHED CONSPIRACY VOL.11

EL ZINE



DESPERAT

nü-klē-ər blast suntan

チェコスロヴァキア・パンク・ロック/ハードコア
その知られざる歴史　1979-1989　完結編

AUTISTIC YOUTH

APΠVASKADA

AGE

BORN OUT OF DARKNESS 2010

hellshock

SLÖA KNIVAR

LAS SEÑORAS

Contents vol.11

P03 DESPERAT
P07 NÜ - KLE - ER BLAST SUNTAN
P12 PAINTBOX - ANARCHY, MADNESS & LOVE
P13 AGE/HELLSHOCK - BORN OUT OF DARKNESS 2010
P21 THE SECRET HISTORY OF PUNK ROCK AND HARDCORE IN CZECHOSLOVAKIA (1979 - 1989) - PART II
P29 SLÖA KNIVAR
P33 MIDWAY STILL JAPAN TOUR 2010
P37 NERVESKADE
P40 DE HØJE HÆLE
P41 HITOSHI FROM JABARA
P45 AUTISTIC YOUTH
P49 SAKATA - RUIDE - NO - TOBBIKIRI - TAIDAN - 1
P53 THE SECRET HISTORY OF PUNK ROCK AND HARDCORE IN CZECHOSLOVAKIA (1979 - 1989) - PART III
P59 LAS SEÑORAS
P63 WORLD MELODIC POP PUNK TRAVELLING - US
P65 SAKATA - RUIDE - NO - TOBBIKIRI - TAIDAN - 2
P69 THE THUNDERBOLT!
P70 SATANIC OCCULT DEATH III
P71 METALPUNK - YAROUZE!
P75 LASHING SPEED DEMONS
P77 KISS THE DISC
P79 MORBO
P81 MASSHYSTERI FREAKS CONVERSATION
P85 SOCIAL CHAOS
P88 NETWORK OF FANZINE
P89 ES GIBT KEIN WERT
P90 EDITOR'S NOTES/BACK ISSUES



welcome to BEGINNING →

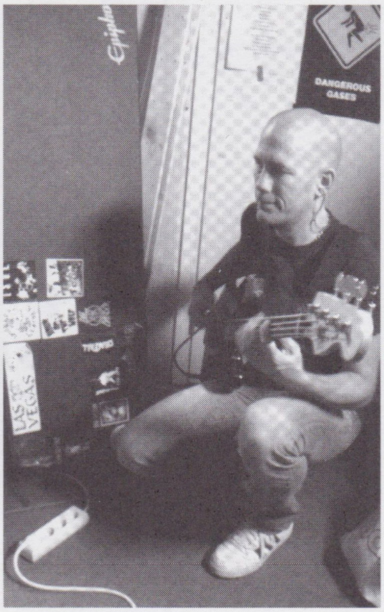
DESPERAT

KEEP UP THE MANGEL

来たぜ!!現MOB47のメンバーとWARVICTIMS/D-TAKT & RÅPUNKでお馴染みのJockeによるニュー・バンド、DESPERATが「Hardcore Deluxe」という、若干恥ずかしくなるタイトルのデモ・テープをリリース!!
ストレート・フォワードでシンプルこの上ないロウ・ハードコア・パンクは最早瑞々しさすら感じさせ、老獪さは皆無。速すぎない・煩すぎないキャッチーなサウンドで個人的にはMOB47やWARVICTIMSよりも好みだったりします(笑)。今後は7インチのリリースも予定しているようなので、この機会に是非とも注目して頂きたいと思います。







■DESPERATの結成は?もともとMOB47の現メンバー(Åke、Johan、Chrille)が新しいバンドをやろうとして、そこにJockeが加わったのですか?

Chrille「スロウなC-beatをやりたくてDESPERATを始めたんだよ。Jockeは見事に狂ってるし、Åkeよりも声がデカイからヴォーカルとして加入したのさ」

Åke「2006年にMOB47を再結成したときに俺は新曲をたくさん作ったが、MOB47のスタイルに合う曲とは思えなかったんだよ。それで新しいバンドを作ったのさ。デモを録り、MOB47のLP『Back To Attack』をリリースしていたJockeに送ってみたんだ…。そして、やつにこのバンドで歌ってみる気があるか尋ねてみたのさ」

■デモ・テープのタイトルを『Hardcore Deluxe』にしたのはなぜなんでしょう?えーと、インパクトのあるタイトルですね!

Chrille「特に考えはなかったが、残忍な感じはするよな(笑)」

Jocke「俺にもわからないよ(笑)。いつ、どうやってこれが浮かんだったっけ?バンドのMyspaceを作ったときに、俺が考えついたんだと思うよ。Myspaceのページに入れる見出しが必要でね。最初に頭に浮かんだ"hardcore deluxe"を書き入れたんだったな。生意気な感じもあるよな。でもこれっぽっちも他のバンドを見下してなんていないぜ。MOB47の『Hardcore Attack』に対するDESPERATEの返答だよ。"Gubbkäng Delux"のことも言っておこうか。これはこの後に出すデモのタイトルだよ」

■DESPERATはストレートでアグレッシヴなオールドスクール・ハードコア・パンク(MOB47ほど速くはなく、WARVICTIMSよりもノイジーではない感じ)ですね。曲を作る際に最も意識していることはなんでしょうか?

Chrille「これにはÅkeがいい答えをするぜ。俺はドラムを叩くだけだから、全くわからねぇな」

Åke「俺が曲を作るうえで考えているのは、キャッチーになるようにってことと、聴いていて魅力あるやつだね…」

Jocke「俺の友達がこう言ってたよ。"お前らのサウンドは80年代のストレートエッジ・ハードコア・バンドみたいだな。でも同時に新しいタイプのD-beatやロウ・パンクでもあるよ"とね。これは正しいと思うよ。俺たちは友達があげた両方に影響を受けている。やつはそれが素晴らしいコンビネーションだと思ったし、俺もそう思う。ミドル・テンポなのは、俺たちが歳をとったからかな。MOB47は速いD-beatをプレイするバンドにほかならないし、そこには最高のフィーリングがある。ただDESPERATはそうある必要がないんだ。速い曲は喜んでMOB47に任せておくさ、ハハハ」

■歌詞についても知りたいのですが、「Badlogga」はバンドのロゴについての曲ですか?英語の説明文もありましたが、文字があまりにも小さくて読めないんですが…。この曲を説明してもらえますか。



Chrille「Jocke、説明してやれよ」

Jocke「いいぜ。あれはバンドのロゴに関する曲なんだ。あれって相当バカだろ?なんで余計に複雑にするんだ?まず第一にどのクラスト/パンク/ハードコア・バンドも他のバンドよりいいバンド名を選んでつけようとするよな。メンバーにさえ、スペルも発音も難しいやつをさ。二番目には、描いたロゴは3日間も二日酔いして吐いたみたいな読めないものになっている。IRON MAIDENのロゴはいまだに凄いよな!DESPERAT(DESPERATE)は文句なしの素晴らしいバンド名とは言えないが、短いし、ストレートでシンプルだ」

■「Love Song」では"グリンピース、アムネスティ(人権団体)、CND(反核団体)"について言及していますよね。みんな個人的にこれらの団体をサポートしているのですか?

Chrille「グリンピースとアムネスティに関してはイエスだ」

Jocke「もちろん俺はその全部をサポートしているよ。でも定期的ってわけではないけど。俺の重要な闘争、情熱、サポートは人間の中にある。俺たちは自分たち自身から始める必要があると思うんだよな。俺たちを取り囲むやつら(友達、職場の同僚、隣人)や強い基盤があれば、環境とともに始めていくことがきると思う。長いこと俺たちは、自分



DESPERAT





のケツをレイプするようなことをやってきたが、自然は十分にあり、ゆっくりだが自然を価値あるものへと引き戻している。周りを見れば、ドラッグの乱用やホームレス、ストレスが原因の病が目に入ってくるよな。アルコール依存/ストレス時代は悪化しているし、不況で人々は苦しんでいる。自分たちを救済できないくせに、どうやって自然を守る?一つの理由は"欲"だろうな。世界中にはびこる、吐き気がする欲。長い間それに取り組んでいるが、もう遅すぎると思う。将来、子供たちに与えてあげられるものはあるのか?人間であるのが悲しくなることがあるよ」

■DESPERATの歌詞を書いているのはJockeですか?

Chrille「全部じゃないが、Jockeは本物の歌詞マスターだな」

Åke「初期の曲(2006年に書かれた曲)は俺とJugga(MOB47の元メンバー)が書いていたが、今は全ての歌詞をJockeが書いているよ」

Jocke「以前の俺はインスピレーションに欠けていたけど、最近の曲は全部俺が歌詞を書いているんだ。書くのはスウェーデン語だけだよ。初期の曲には英語で書いたのもあるけどね。英語だとどうもしっくりこないし、母国語のほうが自分自身をうまく表現できるってのが理由だな」

■『Hardcore Deluxe』のレコーディングなのですが、どうでしたか?どんな機材を使いましたか?

Chrille「順調だったのかどうかはわからないが、良くはなかったな」

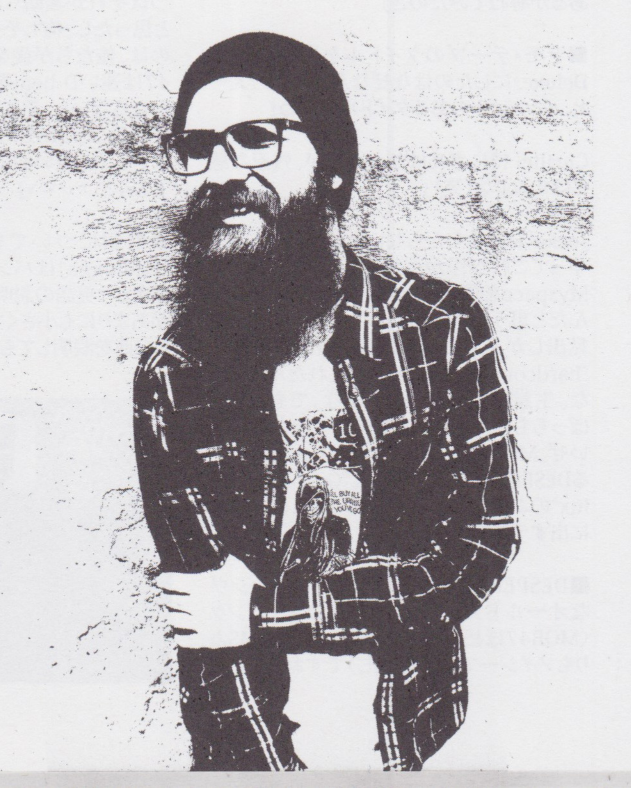
Åke「俺は順調に進んだと思うぜ…。Bowlingstudion(俺たちの練習スペース)で12曲を"ナマ"(ドラム、ベース、ギター)で2時間で録ったよ。それから俺の家で追加のギター録りをした」

ギター:Gretsch Beast 5000, 8250 ウォルナット/メイプル
アンプ:Randall RH-200 + Marshall 1960 Cab
ディストーション:MetalZone + Noise Supressor

MetalZone設定

Level:12時
Low:5時
High:5時
Mid Freq:2時
Middle:2時





Dist：5時（Max）

■全曲とも基本、Bowlingstudionでレコーディングしたんですよね。でもどうしてヴォーカルだけ他のスタジオで録ったのですか？

Jocke「ストックホルムに住んでいるJohanとChrille以外は、みんな別の街に住んでいるんだ。で、ストックホルムにある練習スペースも使っている。俺はストックホルムから北へいったエステルスンドの暗い森に住んでいて、Åkeが住んでいるのは南部のマルメ。もしÅkeにコーヒーを入れてくれと言われたら、14時間も車を走らせないとならないのさ。ちょくちょく集まれないのがわかるだろ。曲を送りあえるインターネットっていう現代のテクノロジーに感謝しないとな（笑）。それでヴォーカルはエステルスンドにあるスタジオで録ったんだよ。俺はそこで働いているし、便利だからね。このスタジオではWARVICTIMS、MARDRÖM、ELECTRIC FUNERAL、DÖDSDÖMDらもレコーディングしてるよ。最近はヴォーカル録りをEmpireスタジオでやったんだ。Åkeは俺がやつのスタジオでレコーディングできないでいるから、残念がっているみたいだよ」

■間もなく12"をリリースするかと思いますが、どんな作品になりそうですか？詳細を教えてください。

Chrille「7"が2枚になると思うよ。俺も待ちきれないぜ！」

Jocke「当初、俺たちは最初に録った「Hardcore Deluxe」デモ・テープと12"用に録った曲を合わせてリリースしようと思っていたんだ。Yannick（Feral Ward）がそれを良いスタジオでレコーディングし直したら素晴らしい作品になるんじゃないかと提案してくれて、それに賛成したんだよ。新曲をいくつか加え、結局17曲になった。そのうちの14曲がデビュー12"になる予定だったんだ。ミキシングをやってくれているPeterが作業を終えるのを待っているところだったんだけど、Yannickからきたメールには、資金面の問題があってリリースする余裕がないと書いてあった。かなりがっかりはしたが、近いうちにHardcore VictimのYeapと連絡をとることになっているんだ。彼はリリースに乗り気な返事をくれたよ。今はその作品にまた取りかかっているけど、まだ最終的なミックスはやっていないんだ。時間は刻々と進んでいる。2011年の頭には新しい作品を作る話も出ているぜ。先週、12"の代わりに7"を2枚作ることに決めたんだ。その1枚はHardcore Victimから出ることになっているよ。もう1枚はWorld Funeral（US）から出る予定だ。こういう結果に落ち着いて嬉しいね。YeapとBrandonは信頼できるナイスなやつらだぜ。でもレコードが出るまでは望みを持ちすぎないようにするよ。まだ他にも曲があるから、再レコーディングして、来年には12"をリリースしようと思っているんだ。その日が来るといいね…」

■DESPERATはあなた方にとってサイド・プロジェクトなんですか？MOB47やWAR VICTIMSもやっていますから、このバンドはみんなにとってどんな存在なのでしょうか？

Chrille「楽しむためにやっているよ。MOB47のライヴをやるのは楽しいが、MOB47の昔の曲を繰り返しやるのは退屈だからな」

Åke「MOB47でライヴをやるのはグレートだよ。でも今はDESPERATでライヴをやったり新曲を作ったりするほうに力を入れているな」

Jocke「わからないな。今年の4月にバンドに加入したからね。バンドに対しては自分が思っていた以上に真剣になってきているよ。嬉しいことだね。WARVICTIMSとTOTALT JÄVLA MÖRKERは小休止をとり、次のレコードのために新曲を作っているところだ。今の時点ではDESPERATに全エネルギーを注いでいるよ。だから俺にとっては"サイド・プロジェクト"ではないぜ」

■ところで、先日行ったMOB47のUS/カナダ・ツアーはいかがでしたか？オーディエンスの反応なんかはどうでした？

Chrille「凄ぇ良かったよ。特にモントリオールとニューヨーク、それにリッチモンドの客は狂いまくってたな。やつらは俺たちのことを、狂った年寄り連中と思ったみたいだ。まあ、その通りなんだけどな。ハハハハハ」

■インタヴューに答えてくれてどうもありがとう！読者にメッセージをお願いします。

Chrille「じゃあな。Mangelを貫けよ」

Jocke「Kenji、サポートとDESPERATに興味を持ってくれてありがとう。最近、新曲を作っているんだ。これまでのところ、いい出来になってるぜ。ギリシャで5月に1、2本のショーをやる予定があるよ。スウェーデンでもギグの要望があるから、やろうと思っている。これは俺たちが発信する最後じゃないから、耳と目を開いたままにしておいてくれよ。日本ツアーに呼んでくれ！」

http://desperathardcore.wordpress.com/







nü-klē-ər blast suntan

米国のジョージア州オーガスタを拠点に2007年から活動を続けているnü-klē-ər blast suntanがカセット・テープ～シングルに続き、「Blot Out The Worthless Sun」LPをリリースした。
クラスト・コアを下地にトランス、ノイズ、サイケなどを吸収した不協和音飛び交う異形のサウンドで、アメリカのANTISCHISMの近未来SFヴァージョンみたいな印象も受けました。まさに今この時代だからこそ生まれ出た雑食スタイルだと言えるでしょう。
日本のバンドが大好きっていうところも現代っ子のアメリカン・パンクスらしいですが、メンバー全員が非常に丁寧且つ真摯に取材に応じてくれました。

■nü-klē-ər blast suntanのヒストリーを詳しく教えてもらえますか。最初のヴォーカルだったKatieがバンドを離れて、Amiが加入したのはなぜなんでしょうか？

Grady「バンドは3年前の2007年10月に始めたよ。俺とChrisがやっているTHE SKUDSってバンドでツアーしている間にこのバンドを始めるアイデアが浮かんだんだ。Chrisはノイズ・ミュージックが大好きで、ノイズ・バンドをやりたがったんだよな。ツアーの最中、俺たちはレキシントン（ケンタッキー州）にいる時期があって、そこでAmiと出会い音楽について話をしたり、つるんだりして、彼女と強い絆を築いていったんだ。彼女にオーガスタ（ジョージア州）に移ってバンドを始めないか尋ねてみたよ。でもその頃、彼女は移ってこれなくて、半年ほど経った後、俺たちは地元のオーガスタに戻り、友達のBilly（ベース）とKatie（ヴォーカル）と一緒にバンドを始めることにした。オリジナル・ラインナップはKatie（ヴォーカル）、Billy（ベース）、Chris（ドラム）、俺（Grady/ギター）。何度かショーをやり、デモ・テープを出したぜ。Billyが旅行のためにバンドを離れた後、友達のMartinにベースをやらないか誘ったんだ。8"盤をレコーディングし、イーストコーストをツアーした。Amiとはあれからずっと連絡を取り続けていて、8"盤のアートワークをやってもらうことになったんだ。ツアーの後にKatieがバンドを離れ、ヴォーカル不在になっちまったんだよな。それでAmiにバンドに興味はないか尋ねてみたら、加入に同意してくれたんだ。その後Amiがオーガスタに移ってきて、バンドに加わったんだよ」

Martin「俺がこのバンドでベースを弾くようになる前は、友達のBilly Zassがベーシストをつとめていたよ。俺が加入したのは確か2008年の初期だったな。Billy、それにKatieは猛烈に練習する必要を感じていなかったようだ。それでAmiが1年前に加入したんだよ。彼女は強烈な声の持ち主だから、メンバーのチェンジは大歓迎だね」

Ami「2009年の夏の終わりにKatieがバンドを離れたとき、Gradyから加入しないか聞かれたの。すでにGradyとChrisとは友達だったわ。私はケンタッキー州のレキシントンに住んでいたんだけど、2人のやっているTHE SKUDSがちょくちょくギグをやりに来ていたからね。nü-klē-ər blast suntanのセルフ・タイトルの8"レコードのアートワークも私が手がけたの。だからバンドにも彼らのサウンドにも馴染みがあったわ。nü-klē-ər blast suntanで歌わないかって誘いにはとにかく興奮したわよ！私は音楽的に大したこともしていなかったし、つまらない仕事をしていて、満足してるとは言えなかった。それでバンドに入るチャンスに飛び乗ったのよ。3ヵ月後にはジョージア州オーガスタに移ってた…」

■メンバー各自の音楽キャリアを教えてください。子供の頃から現在に至るまで主に

聴いてきたバンドやミュージシャンは？

Ami「いくつかバンドの経験があるわ。でも真剣でもなかったし、レコードも出したことがないの。私はストーナー・メタルと日本のハードコア・パンク・バンドに夢中よ。パンクを聴き始めたのは14か15歳の頃。17か18になると日本のパンクにどんどん興味を持ち始めていったな。心惹かれるバンドは、DISRUPT、GAUZE、WARHEAD、ATROCIOUS MADNESS、THE COMES、HELLSHOCK、DEATH SIDEかな。これらのバンドは今でも大好きよ」

Grady「あらゆるタイプの音楽を楽しんでいるよ。特に気に入っているのは、DEATH COMES ALONG、解剖室。それからANAKRID、ANTISCHISM、THROBBING GRISTLES、G.I.S.M.、DEAD KENNEDYS、CRYPTIC SLAUGHTER、THE ACCÜSED、RATTも忘れちゃいけないな!!ハハ!」

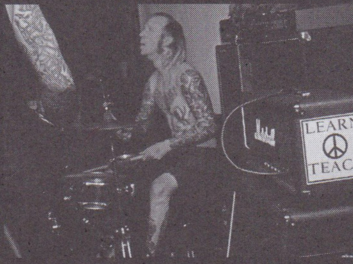
Chris「パンクやメタルと出会った大方のやつらと同じように、俺はキッズの頃のまま、たくさんのバンドに夢中なまんまだよ!AUTOPSY、BLACK SABBATH、REPULSION、BLACK WITCHERY、CONFUSE、GASMASKを聴いているぜ。これからも聴き続けていくだろうな(笑)。ファストでヘヴィなやつかノイジーなやつをね!」

Martin「俺は4年生の頃からパンクにとりつかれているよ。RANCIDの『And Out Come The Wolves』を手に入れたっけ。今の俺のベスト・バンドはBEHIND ENEMY LINESだと言っておかないとな。よく聴いているのは、SLAYERやAT THE GATESなどのメタルだね。今でもCONVERGEはお気に入りバンドの一つだよ。5年前にSKITSYSTEMやDISCHARGEに夢中になり始めたんだ。でもIMMORTAL TECHNIQUEのようなヒップホップも好きなんだよね。基本的に好きなのは、良いメッセージと力強さが存在するものだな。鳥肌が立っちまう音楽が好きなんだよね」

■バンド名がとても興味深いです。どうしてこれに決めたのですか？意味は"被爆者"？"ū"や"ē"、"ə"といった英語ではないアルファベットを使っていますが。



Martin「スペルに関してはGradyが答えるよ。俺たちの卑劣な大君主に関係があるのかもな。Gradyはエイリアンかもしれないぜ」



Grady「バンド名のことはみんなに聞かれるよ。もうしばらく秘密にしておこうかな…ハハハ!」

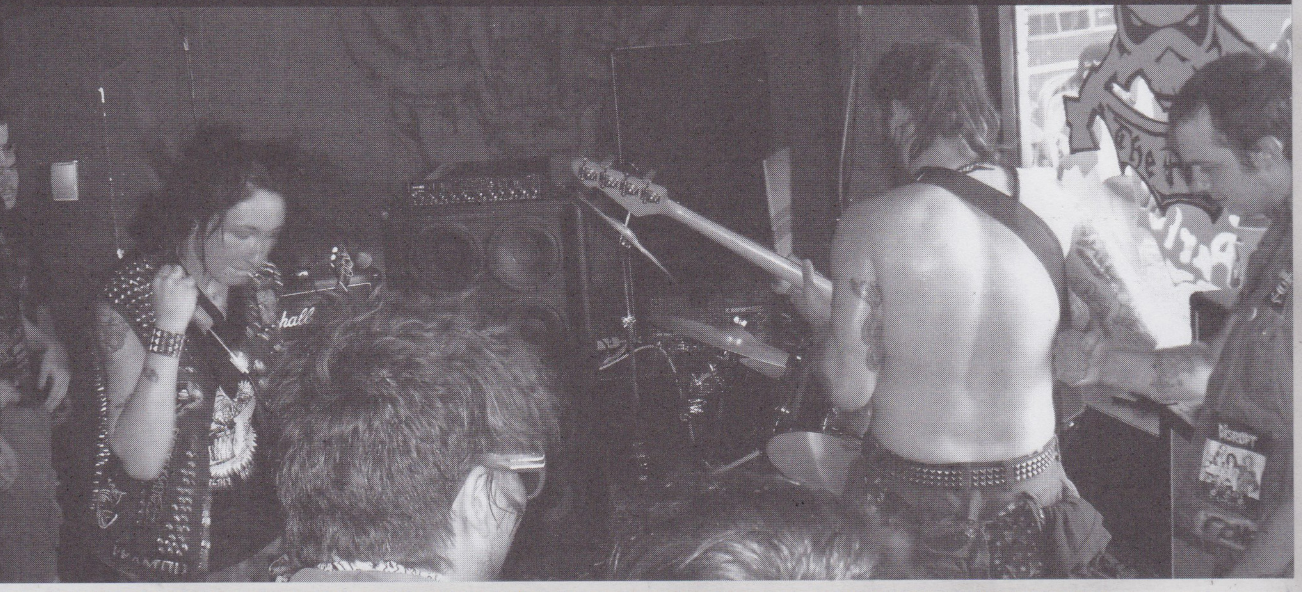
■nū-klē-ər blast suntanからはANTISCHISMやCONTROPOTERE、CATHARSIS/FROM THE DEPTHSなどといったバンドの要素も感じましたが。これらのバンドは好きですか？

Chris「ANTISCHISMは好きだよ。他のバンドは聴いたことがないな」

Grady「ANTISCHISMはサウスカロライナ州コロンビアを拠点にしていたよね。あそこは俺たちのジョージア州オーガスタから1時間ほどのところにあるから、1989年から1990年の間にライヴを数回見たことがあるんだ。あの頃、俺はまだガキだったよ。当時の俺にはとても重要なバンドだった。それは今でもだね。彼らのプレイには真剣さと説得力があったのを思い出すな。他にはない存在だよ」

Martin「ANTISCHISMは大好きだ。俺たちの12"はANTISCHISMがレコーディングしたジャム・ルームでレコーディングしたんだぜ」

Ami「私もANTISCHISMは好きよ。初めて聴いたクラスト・バンドの一つなんだからね!」







ノイジーさとヒズミは留めたまま そこに多くの異なった要素を混ぜ合わせようとしている

■でもあなた方の音楽は独創性がありますよね。クラスト、ノイズ、サイケデリック、アンビエントなど様々な音楽要素を感じます。曲はどんなふうに作っているのですか？曲作りには時間がかかるんじゃないかと思います。

Ami「私たちみんな、様々なスタイルのヘヴィー・ミュージックのファンなのよ。ノイジーさとヒズミは留めたまま、そこに多くの異なった要素を混ぜ合わせようとしていると思う。でも、そうね、新曲を作るには少し時間がかかるわね。本来のノイズやフィードバックを獲得したいのよ」

Grady「君があげたクラストやノイズ、サイケデリックやアンビエントのような要素のファンだよ。たまに楽しむことを忘れて熱狂度が下がることもあるし、逆に音楽に没頭して熱狂しすぎることもあるよ！コントロールできない、止められないぜ」

Chris「曲にもよるけど、バンドとしての雰囲気をいかに作り出すかだな。数ヶ月も時間がかかる場合もあるんだ」

Martin「俺は4曲書いているよ。準備中の曲もあるぜ。基本的にはアイデアを生み出し、みんなで練り上げるよ。Chrisがドラムを叩き、そこにギターのGradyが12のペダルを踏んでクレイジーなサウンドを作り出す。Amiが絶叫しまくると、それがnü-klē-ər blast suntanの曲のかたちになっているってわけだ」

Grady「ハハハ！ペダルは６つだよ」

■歌詞のテーマは？

Grady「「End Of The Beginning」について。俺たちは誰もが昔から繰り返される質問を問い続けているよな？なぜ俺たちはここにいるのか？わかっているのは生き残っているってことだけ。生きているってことだけだ。どれほど地球をさ迷い歩いているのか、人生の目的は何なのか？」

Ami「このバンドに入ったとき、ほとんどの歌詞はKatieの手によるものだったの。1曲だけGradyが書いていたと思う。Katieの書いた歌詞のいくつかを私は自分にしっくりくるように書き直してみたわ。でも曲の多くは彼女が伝えたいことそのままよ。私たち2人のアイデアの合体のように思えて気に入っている。Katieが歌っていた曲は、私が歌っているのとはだいぶ違うわよね。それで今のサウンドに合うように歌詞を少し変えてみたわ。私の加入後、新曲を作っているわよ。私も歌詞を書き始めている。LPやもうすぐリリース予定のEP「Arms Of Static」でね。レコードには歌詞をつけるつもり。歌詞カードのついていないレコードは嫌だわ！歌詞の内容に関しては、圧政、"日々の生活"からくるフラストレーション、社会の抑制、宗教など、典型的なパンクのテーマを扱っている。でも秘密結社とかマインドコントロール、世界のミステリーのような、オカルトや超常現象にも私の興味は向いているのよね」



■最も重要に考える信念とは。バンドを続けているモチベーションは何ですか？

Ami「パンク・ロックを愛しているってことね。旅するのも好きだし、新しい人たちに会うのも、初めての場所を訪れるのも、新しいバンドを聴くのも好き。自分が正しいとすることをやっていたり、自分をハッピーにしようとしている、あらゆる職業や地位の人たちを応援したいの！他人のルールで自分の人生を生きることほど無意味なことはないわ」

Grady「希望と平和、人生をより良くし、幸せになる。そして、後悔しまくる」

Chris「重要な信念は何だろうな…。俺は他のやつが作ったルールで生きるのは嫌だね（笑）！俺にとってのバンドはフラストレーションを解消するものかな。旅して周り、初めてのやつらと出会い、ダークサイドに引き入れることだね！ハハ」

Martin「俺は個人の自由を信じているよ。人は従うことはないというのが基本的な考えだ。誰もが他人の権利を侵害していない限り、やりたいことをやる権利がある。俺は偏見が嫌いだよ。人種差別主義者や性差別主義者にはうんざりしちまう。俺は出会った全てのやつらにポジティヴな価値を喚起させるために生きている」

■オーガスタのハードコア・シーンについて教えてください。オーガスタのバンドって全然知らないんですが、お勧めのバンドはいますか？



Grady「オーガスタは539,154人が住むとても小さな街なんだよ。俺たちはダウンタウンに住んでいるんだけど、ここは小規模な都会のエンターテインメント地区だね。パンク・ショップはないし、ジンを作っているやつもいない。でもエンターテインメント/ビジネス地区に住んでいるから、俺の住むアパートメントの3階の屋根裏みたいな部屋でショーができるんだよ。ハウス・ショーがやれるんだぜ！ここでNIGHTGAUN、HELLBASTARD、FEAR OF TOMMORROW、WITCH HUNTらがプレイしたよ」

Ami「オーガスタはパンクにとってはかなり妙なところね。ギグに興味を持つ人たちがたくさんいるし、私たちが企画したショーで楽しんでプレイしてくれるバンドもいるわ。ここにはnü-klē-ər blast suntanやTHE SKUDSの他にはパンク・バンドはあまりいない。もっとバンドをやる人が増えてプレイするようになるといいな！パンク・ロックの好きなところは、始めやすいし、音楽的な才能よりも情熱や激しさのほうに重きがあると思う。私たちはメタルをやってるわけじゃない。Gradyの屋根裏にある練習スペースでショーをやっているの。そこはがらんとした広いスペースになっているから、ショーをやるには理想的よ。頭に浮かんだだけでもHELLBASTARDやWITCH HUNT、それにFEAR OF TOMORROW、NIGHTGAUNといった素晴らしいバンドがプレイしているわ。あとは、オーガスタにはSoul BarとFire

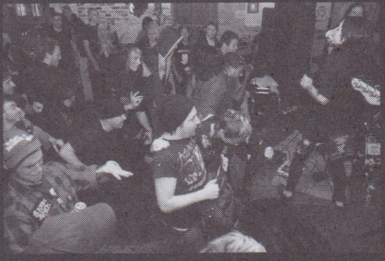


houseっていうショーをやれるバーが２つある。でもUSAではバーに入れるのは21歳になっていないと駄目なのよ」

Martin「オーガスタは進歩的なところだよ。大きな街だしな。THE DECREPITSってバンドもいるし、GradyとChrisがやっているクラスト・パンクメタルのTHE SKUDSも…。俺は名無しのプロジェクトをいくつかやっているよ。オーガスタはのんびりしているが、俺たちのハウスやショーができるバーはいつも活気づいているね。Gradyがバンドを誘うから、良いバンドがたくさんやって来るんだ」

■アメリカの政治や中間選挙の結果(オバマの民主党が共和党に惨敗)については何か意見はありますか?

Ami「今のアメリカは暮らすにはクレイジーなところよ。移民、マリファナの合法化、同性愛者の結婚など、権利に関わる問題は大きいわ。恐ろしいことに、この国は偽善的で時代遅れの宗教や価値を存続させていこうと闘うクリスチャンの狂信者にいつも牛耳られているんじゃないかと思う。共和党はこの前の中間選挙の下院で勝利した。私は投票しなかったわ。それはアメリカのこの状況のせいで無関心になっているからではないの。女性蔑視や同性愛者を嫌悪する考えを持たない、賛同できる進歩的な価値観の立候補者なら確実に投票する。でも私が賛同









できる理想を持った人物や党はここには存在しない。全てが最悪よ。腐敗している。アメリカは2大政党のもとで成り立っているけど、投票ブースの中で２つの悪魔のちょっとマシなほうを選んでいるみたいなもの。オバマが立候補したとき、多くの人は大きな希望を抱いたと思う。だけど、彼は公約をほとんど果たしていない。危機的なアメリカ経済に高い失業率、それにイラクやアフガニスタンで続いている終わりのない戦争など、ブッシュ時代の問題を引き継いでいるわ。人種はアメリカでは大きな問題なの。私たちは激しい人種差別の社会で暮らしている。人々がオバマに投票したときは、それが変わるんじゃないかと期待したわ。オバマは金持ちの年寄りの白人ではなく、若い黒人だったからね。2年前、アメリカはまだイラクに兵を送っていたし、失業者も多かった。犯罪も蔓延していて…。あるお年寄りが言っていたな。"投票して何かが変わるとしたら、不法入国者に関してだろう"って」

Martin「どの大統領も結局のところ、世界で優位に立つための手先に過ぎないと俺は確信しているんだ。誰もが自分の貪欲な政策を推し進めようとする。俺たちはさらに不況へと突き進んでいく。それが彼らのやりたいことさ。俺は戦争と宗教に反対だ。政治家は戦争と宗教を憎しみを増長させる道具に使っている。嘘つきの集団さ」

Chris「先日の選挙は投票したよ。最初で最後だ。俺は政治を気に病んじゃいない。何年も同じだし、これからも同じことが続いていくんだろうよ。腐敗は腐敗を呼ぶのさ！」

Grady「政治に対しては悩んじゃいない。俺は卑劣な人間のかたちをしたロボットを心配している。やつらが人々をコントロールしているんだ」

■ところで、みんな日本のハードコア・バンドは好きですか?DISCLOSEのTシャツを着ている姿は見ましたが。また日本のマンガも好き?アートワークからそんな雰囲気を感じました。

Ami「日本のバンドは大好きなの。日本のパンクが放つエネルギーに夢中よ。聴いたことのあるほとんどの日本のバンドは、ロウでハード・ヒッティングね！アニメ/マンガにものめりこんでいる。子供の頃からコミック・ブックやアニメに夢中でね。絵を描き始めたのも日本のアニメ/マンガにインスパイアされたからよ。お気に入りのマンガは『新世紀エヴァンゲリオン』、『HELLSING（ヘルシング）』、『寄生獣』、『アキラ』…大友克洋や貞本義行、伊藤潤二、沙村広明などのアーティストが好きなのよね」

Grady「俺ももちろん、CROW、G.I.S.M.、ZOE、CRUDE、ACROSTIX、AGE、FRAMTID、DISCLOSEなどの日本のバンドが好きだね」

Chris「アニメには興味はないけど、今も昔も日本には最高のバンドがいるよな。FREEDOM、ISTERISMO、DEFIANCE、LIFE、THE COMES、DUST NOISE、S.C.U.M.、FRAMTID、GLOOM、DESPAIR、CHAOS CHANNEL、ATTACK SS、SWANKYS、SIEG HEIL、LAST BOMBS、GAI、THE CLAY、MASTURBATION、STATE CHILDREN、MIDDLE ROCKER、reZIST…」

Martin「そうなんだよ、俺も日本のクラストやノイズはほんとに好きだね。みんなBATTLE OF DISARMとFRAMTIDを気に入っている。クラスティーズは彼らの映像をかけて、一晩中大騒ぎしているぜ。アニメーションも好きだな。アダルト・スイム（USAのカートゥーン・ネットワークで、大人向けに番組を編成するために設定した放送時間帯の名称）や日本のマンガが大好きなんだよ。Amiはグラフィック・アーティストでもあり、彼女もアニメは大好きだぜ」

■今後の予定は？

Martin「新しい音楽を作ることだね。本気で日本をツアーしてみたいな」

Ami「もっとレコードを作り、ツアーもたくさんやり、海外にも行きたい。たぶん日本ツアーもよね？」

Chris「新曲を作り、海外へ行くぜ」

Grady「日本ツアーができれば嬉しいね！デンマークのDetonate Recordsから7"（「Arms Of Static」）が出る予定だよ」

■インタヴューに答えてくれてどうもありがとうございます。日本の読者のみんなにメッセージをお願いできますか。

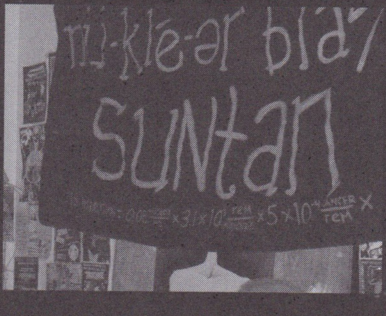
Chris「誰かOverthrow Recordsと俺たちの橋渡しをしてくれ！」

Martin「食べて酔っぱらって、陽気にやってくれ。明日にはくたばってるかもしれないからな」

Grady「人生を楽しめ！」

Ami「バンドに興味を持ってくれてどうもありがとう！オーガスタに日本のバンドを送り込んでよ!!」







PAINTBOX



"ANARCHY, MADNESS & LOVE"

2009年にHG FactからリリースされたPAINTBOXの3rdアルバム「TRIP, TRANCE & TRAVELLING」はハードコア・パンクでありながらその"規格"を超越し、真義での音楽的多様性を見せつけた。

こちらの先入観と予想の遥か彼方を自由に飛翔し、聴く度に新たな発見と興奮をもたらす、誇張なく"歴史的名盤"だと僕は思っている。

この度リリースされたPAINTBOXのDVD「ANARCHY, MADNESS & LOVE」も、通常の映像作品とは一線を画す…どころか完全に"規格外"、前代未聞の仕上がりだ。

ハードコア・パンク・バンドのライヴを収録した映像作品はこれまでも数多く発表されているが、そのいずれとも本作は根本的なところで異なっているように感じられる。「TRIP, TRANCE & TRAVELLING」のテーマの一つとして"旅"という要素があったが、本作はさながら"長編ドキュメンタリー・ロード・ムーヴィー"そのものと言えるだろう。

"The Door"のファンファーレの如き血湧き肉躍るイントロが始まりを告げ、本編は99年10月広島BAD LANDSで収録された"炎"の映像から幕を開ける。今(2010年)から11年前のライヴ、メンバーは当然若い。そこから昨年行われた秋実緊演ツアーの映像まで基本、年代を追いながら本編は進んでいくのだが、そこはPAINTBOX、一本道の平坦な旅路では全然ない。

音源とは別の一面(多面)を見せるライヴの格好良さに痺れれば、未発表曲の存在に驚き、度々挿入されるサイケデリックな映像効果やハッとするほど美しい風景画像にも目を奪われる。やり過ぎるとうるさく感じることがあるそういった差し込みも程よい案配で、雰囲気がグッと増すし曲毎のメリハリも出る。それに同じ日時/場所でのライヴ映像が何曲も延々と続くということがないから(最も続いても3曲のみ)、音質も画質もカメラ・ワークもどんどん変化していきダレることが一切ない。

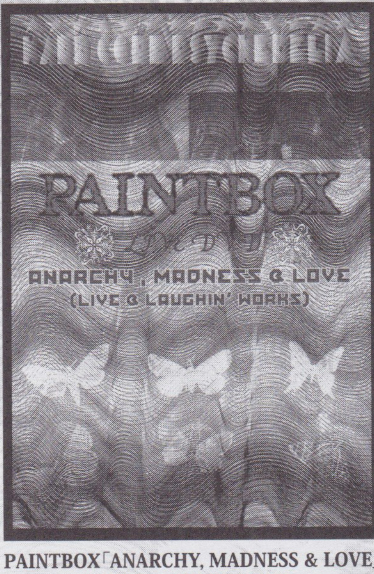
そしてMCやオフ・ショットも面白過ぎる。チェルシーさんの妙に似ている某バンドの物真似に、ハラハラ・ドキドキの緊迫シーン、外国人相手の日本語講座に、しまいには妖怪(…恐い)も現れる等々、通常では考えられない/ありえない要素とギミックが盛り沢山で、これまでの常識を覆す、まさにアナーキーな内容。

実際、トータルで146分という凄まじいヴォリュームだが、途中で飽きることなく一気に見ることができた。どうしてもこの手の映像作品だと、"続きは明日観るか"とか、"好きな曲だけ選んで"観てしまうがそれがない。PAINTBOXというバンド自体に捨て曲なんてものが存在しないということもあるが、観る者を飽きさせないよう徹底的に作り込みがなされた作品だ。単純にライヴを並べただけのものとは雲泥の差が、そこにはある。そういった意味でも今作は本当に"映画"という表現がしっくりくる。

99年(一番古い映像はトラック2"Crazy Moon"の98年)から2009年までの間に、アメリカと日本各地を全31曲で駆け巡った後、「TRIP, TRANCE & TRAVELLING」に収録のバラード・ナンバー"空蝉"と共にエンドロールが流れると、PAINTBOXの長かった旅(それは本作を観ている人も共に歩んできた旅でもある)が終わりを迎えてしまったかのような、一抹の寂しさを感じる。感動的なラスト…。

と、そのままスンナリ行かないのがPAINTBOX。"終わりは始まり"と言わんばかりに、繰り返されるロマンチストたちの宴が続き、本作の幕は降ろされるのだが、…どこまで行っても決して油断することなかれ。最後の最後にとんでもないカタルシス(爆笑の渦)が待ち構えている。

片手間に観ることは不可能。そして複製すれば呪われる(もしくは死刑)一大長編作、PAINTBOX「ANARCHY, MADNESS & LOVE」。全てを見終わった瞬間に、このタイトルと副題「LIVE & LAUGHIN' WORKS」の意味が分かるはずだ。



PAINTBOX「ANARCHY, MADNESS & LOVE」
(HG Fact HG-269)DVD



AGE HELLSHOCK

BORN OUT OF DARKNESS 2010

2007年アメリカ西海岸ツアー、2009年ジャパン・ツアー、そして今回2010年アメリカ東海岸ツアーと、留まるところを知らないAGE/HELLSHOCKの盟友スプリット・ツアーwith SOのビッグ・ファミリーの3度目の襲撃!怒涛の日々が始まりツアー日記は一日目にして即断念(苦笑)!近年自らの企画や海外のパンクスとの交流が増えてきて、浮き足立った前回とは一味も二味も違った目線で経験/体験出来たかなと感じています。ツアー・レポートと云うよりは、僕の思いと想い出を綴ってみたい所存です。

TEXT:SO(HARDCORE SURVIVES/KAOTIK HERO)

10月21日

RAW OF THE LANDを出国前ギリギリの状態でリリース…。また、年内のリリース作業に追われて前日にようやくスーツケースと備品を用意しての準備もへったくれも無い状態にて前夜を迎える。有難い事にコダマ君(ex-INTRUDERS)が送迎パーティーを予約席まで用意してくれて、へべレケになるまで呑んで朝方までのカラオケも突入して楽しい時間を過ごさせて頂きました。おまけにコダマ君のモーニングコールで目覚ましてもらい至れり尽くせりで出発!AGEのメンバーに「酒クセ～」と言われながらの完全二日酔い(と云うより酩酊)状態で成田空港で現地合流。フラッフラで出発し、緊張感や期待感は太平洋を半分と少し過ぎた位からようやく酔いも醒めて感じ始める…。カズヒコ(PUNK AND DESTROY)も言っていたけど、機内でWATER(ヲォーラー)って言うだけでナゼだか緊張してしまうんですかね?あと、今回のツアーで思ったのが、普段パンクスとの砕けた会話しかしていないので、フォーマルな場面や人に対しての丁寧なモノの言い方が曖昧だった。そんなこんなで、森の都ポートランドはPDXの陰りのある雰囲気と緑の美しい木々が見えて来て、またこの街に来られた喜びと感動をヒシヒシと感じる。

僕は派手めの髪の毛とディストロ商品を手荷物で持っていたため、AGEとはまったく関係無い素振りで最後列から入国審査を受ける。海外でツアーをする時には一番に気を付けないといけないのがこの入国審査。防犯・防疫は勿論の事、バンドの場合、要はライヴ・ツアーでお金を稼ぐ事が危惧されているので、バンド関連の所持品と見た目には十分に注意しなければならない。最悪のケースは携帯電話のメールやデジタル・カメラまでチェックされてしまうので、細心の注意が必要!合言葉はひたすら「VACATION」。そう言えばHELLSHOCKが前回来日した時は赤いTシャツに"OREGON"と書かれたシャツで普段とのギャップに笑った記憶がある。勿論、AGEのメンバーもノーマルな服装で審査を受けるもナゼか後方にいた僕自身が一番先にゲートをくぐり無事に到着!此処日本でもお馴染みの今やPDXの顔、キース(Dr/HELLSHOCK、LEBENDEN TOTEN、WARCRY、ESTRANGED)



BLACK WATER RECORDS

とダスティン(Gu/HELLSHOCK、DEATHCHARGE)、キースの彼女アレックス(BOG PEOPLE)がお出迎え。アレックスとは一度日本でも会った事があり、見慣れた顔触れに一安心。続々とメンバーもゲートを抜け、1年半振りの再会に笑みがこぼれる。

一路、キース/ダスティンがルームシェアしている自宅へ。前回は何度となくお世話になったこの家と直ぐ近くにあるコーヒー・ショップ"HUNGY TIGER"はその存在だけで僕等をリラックスさせてくれる。基本的にアメリカのパンクスは3～5人位で一軒家をシェアしていて、居住者の出入り/移転も早い。今回は彼等二人の他にアダム(vo/DEATHCHARGE)やもう二人位かな?が住んでいた。荷物の整理やお土産品を渡したり、RAW OF THE LANDのカズヒコのレヴュー内容の間違いを指摘されて弁明したりする。確実にやって来る時差ボケと格闘し、少しばかりの休憩を取りながらマッタリとした時間を過ごす。到着初日から早速、キースが運営/経営するBLACK WATER RECORDSアジトでのライヴ。話には聞いていたけれど、ようやく全貌を見る事が出来た。12畳ばかりのレコード店内を抜け、ステージ/PA設備/照明/楽屋まで付いた完璧なライヴ・スペース、そしてたむろ出来るイリーガルなスペース、裏口には家庭菜園と充実の空間。隣の建物ではリハーサル・スタジオまで併設。数多くのバンドで数十回と世界中をツアーしてきたキースが様々な事を吸収して創り上げた正に理想的な場所にただただ



感動!キースやるじゃん!!羨ましい反面、特に東京ではなかなか難しい事に歯がゆい思いを感じるが、いつか必ずと決意する。ジョエル(Vo/HELLSHOCK)、ブライアン(Gu/HELLSHOCK、BURNING LEATHER、DEFIANCE etc)や2010年春に日本に遊びに来てちょこちょこお世話して上げたキュートな二人組みのミラ(RIPPER)やナオミにも会い、嬉しい再会。NERVESKADEのメンバーが別にプレイするバンドや、LEBENDEN TOTENもこの日は出演し、前回の経験からAGEも状況を把握しているのか、最高のステージングと気分での初陣!ツアー前に抜けてしまったHELLSHOCKのベースのデレク(ESTRANGED)も駆け付けてくれた。今回からベースは一時期DOG SOLDIERでもプレイしていたジゴロでエロスなイーサン(GUIDED CRADLE)に変わり、はじめまして!DOG SOLDIERもジャパン・ツアーを一緒に周ったり、酒浸りの日々で思い出深いバンド。メンバーの事情でなかなか活動が出来ない状態のようだ。僕は嬉しい事に早速、全物販管理と販売を任されるもキースの適当さ加減にツアー前半戦はてんてこ舞いになる(苦笑)。ライヴ後は同会場にて打ち上げし、シャネルはマシンガン・トークで僕は相槌を打つだけ、フランクは渡したRAW OF THE LANDを熟読中、ペイジはダークウェーブな感じでチームLEBENDEN TOTENも相変わらず。ヘロヘロになるまで呑んで自宅に戻り気絶するように眠る。



10月22日

2日目もPDX。ダスティンの案内で街を散策したりとノンビリとした時間を過ごしながら、昼間の時間を費やす。笑ってしまったのが、翌日出発なのにジョエルがダスティンにメールで今晩の東海岸へのフライト時間を聞いてきて…あの～今日はHELLSHOCKのライヴ初日なんですけど…と、相変わらずのマイペースっぷりにホッコリする。2010年10月一杯で閉店してしまった80年代から存続して数多くのPDX HARDCORE PUNKSがプレイしてきたSATYRICONと云う老舗クラブが会場。大きなスペースで、さながら日本的なライヴハウス。別れを惜しむ落書きや特設された看板に、多くの人に愛された場所なんだと感じた。前回はここがツアー最終日で僕等にとっても思い出深い所だと思う。NERVESKADEのロゴをペイントした軍シャツも作り、非常に楽しみにしていた彼等のライヴ。キースに彼等のライヴは直ぐに終わってしまうから観て来いと、物販スペースを離れる許可をもらう。激烈破壊的で本当にSHORT SHARP SHOCKでヴァイオレンスなステージングに感激!RIPPERはMOTORHEAD PUNKで最高に格好良かった!!渋すぎる!!HELLSHOCKも貫禄のステージで、全ツアーを終了してから思ったのは本当にポートランドはバンドもシーンもパンクスも成熟しているなと感じた。現れてはレコードをリリースし、直ぐに解散していったPDXの盛り上がりも一段落したかのように勝手に想像していたけれど、まだまだ健在であり若かった彼等も20代後半～30代へと円熟しているように見えた。そして尚且つ10代～20代前半の若いパンクスへも脈々と引き続いている。PDXシーンと云っても色々とあるだろうけれど、僕の友人達はPUNK IS MY WAYであるのは確かだと思う。アメリカでは20代そこそこにしてパンクを辞めてしまう人が定石だとよく言われているが、此処では土着し人が人を呼んでいるなと、またしても勝手に想像しながら打ち上げのストリップBARにて鼻の下を伸ばす(笑)。

10月23日

翌朝早朝にて今ツアーのメインである東海岸へ。アメリカ地図上で云うと左上～右上へ、西～東へ、そこから南下する大移動。乗り換え時間を含めて十数時間のロング・フライト。リッチモンドと云う場所へ到着する頃にはもう既に夜も深かったと思う。さてさて、ここで登場するのが今回のツアーの大仕切り、彼が居なければツアーは成功し得なかったと思われるマットサックス、通称マット(PARASYTIC/VEX RECORDS)がお出迎え。基本的にアメリカ人は良く言えば大らかで悪く言うと大雑把だけれど、数々のバンドのツアーをオーガナイズしてきた彼は仕事の早さ、技量の良さ、気遣い等々、我々日本人が見てもそんじょそこらの人間には到底適わない"仕事"の出来る男。HELLSHOCKも彼に乗っかる形にて今回はツアーをしているようだ。食事や寝床の用意、各地のパンクスへの連絡も携帯電話を細目に取って全て彼が手配してくれた。そんな彼ともう一台の車でドライバーをしてくれる金髪流し目の色男、アレックス(PERDITION)が今回のツアー・ローディー。この二人はアメリカでは機材の盗難もあるため、車中泊で車を守ってもらい、誰よりも早く起きて全日程を運転してくれた。本当に本当に有難う!!この日は予定していた飛び込みライヴも時間



マットサックス(PARASYTIC/VEX RECORDS)



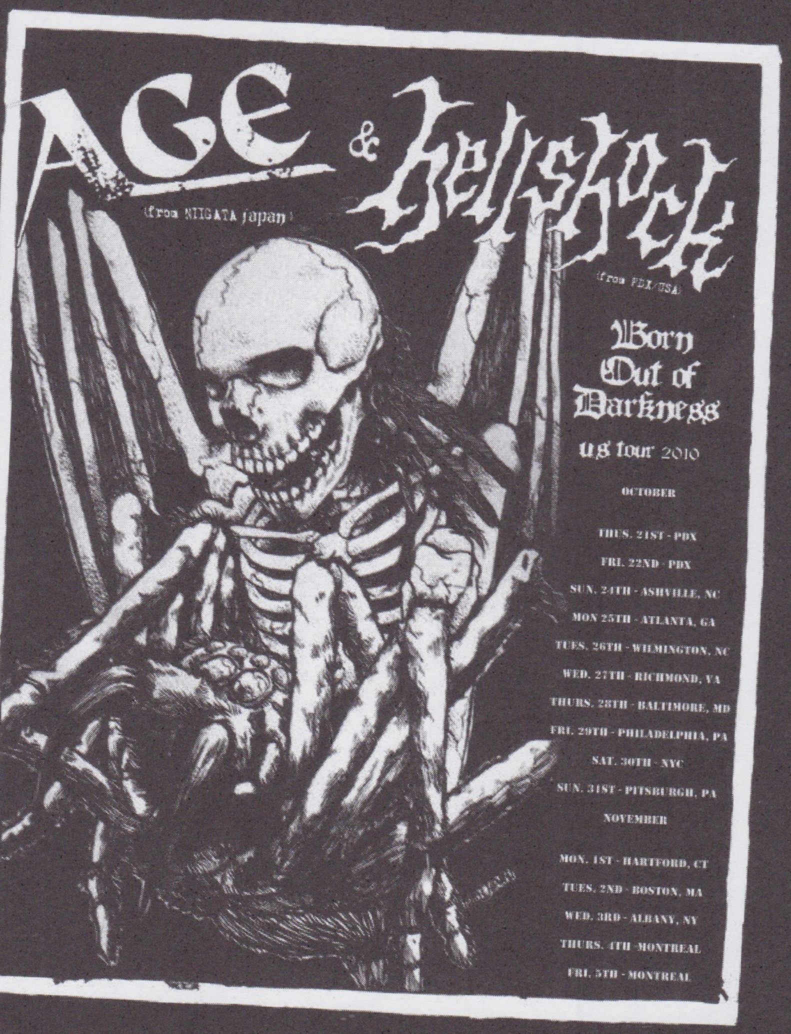
アレックス(PERDITION)



都合のためキャンセル。途轍もなく綺麗に整理された部屋と、几帳面に張り巡らされたポスター類に囲まれたマット宅にて疲れた身体で早々に床に就く。彼の人間性はこんな部屋の様子からも容易に想像出来、後にも先にもこの部屋が一番整頓された居心地の良い家であったのは言うまでもない。

はてさて、ここからが激動の日々の始まり。大きなTV付きの機材車と、人が運転席で銃殺されてまだまだ血生臭さが残る格安で手に入れたバン(!)の2台にて我等13人の大クルーのツアーが開始された。「同じメンバーで同じ車じゃ交流が無いから、メンバーを毎日混ぜながら行こうぜ!」と、キースらしからぬ気遣いがあるも、一度定着すると荷物の移動やらが面倒になってツアー中盤にして早くも各々が各自のスペースを確保する(笑)。

基本的な流れとしては、[移動～誰かの家①で食事～ライヴ～誰かの家②で打ち上げ/就寝～移動]、時間があれば散歩または観光と云った感じでツアーは進む。前回は散々彼等のレコ屋巡りに付き合わされたけど、今回は時間が許す限り観光スポットへ連れて行ってくれた。う～ん、彼等も大人になったのかなぁ。今ツアーはマットの仕切りで所謂CRUST/RAW PUNK/METALインフルエンスな感じの真っ黒なイヴェント/ツアーで東海岸を周ったため、これがアメリカン・スタイルだとは言い切れ無いのを御了承頂きたい。誰かの家①・②とは、本当に家主が誰だか分からないままにズカズカッとお邪魔して我々もHELLSHOCKのメンバーでさえも分からないままに食事を頂き、腰を置く事が多かった。意外にも「はじめまして、コンニチハ!私は○○です」と云った挨拶は少なかったように思う。僕が感じたのはアメリカは本当に何もかもがオープンで来る者拒まず去るもの追わずと云った文化なのでしょうか。人が集まり、名前も知らないままに会話やパーティーを楽しむ。特にルームシェアをしている大きな家では、沢山の人間が出入りして、ある意味誰が誰でも良いように感じた。それでも人を優しく包み込む土壌は彼等の大らかさの良いところだと思う。こちらでは、大体が身ず知らずでも目が合ったらニコッと笑ったり、ハ～イ!と挨拶するのは素敵だなぁ思った。日本ではライヴハウスで知り合いに会っても、ちょっと声を掛け辛かったりする事があるのは、自分自身も気を付けないとなぁ。食事は完全ヴェジタリアン/ヴィーガンで、サンドウィッチを基本に皆手馴れた料理で美味しかったけれど、味的には日本のヴェジ料理の方が濃厚に感じた。スープ類の汁物にありつけたのは2～3度程で、味噌汁文化の我々にとってはお米よりもこちらのホットな物を欲していた。移動中は大きなハイウェイパーキングではチーズピッザでお腹を満たしたりする事は出来たが、小さな所では広大なアメリカの大地のせいなのか、所謂日本のコンビニで手に入るパンやオニギリのような消費期限が早い簡単な食事は手に入らなかった。お菓子類は日本では殆ど食べないけれど、しょうがないので何となく買い込む。そして、量が多いので食べ残す。喫煙に関して、これは前回の西海岸よりも確実に喫煙率、場所共に許容量が大きかった。(イリーガルな場所も多々あったとは思うけれど)屋外であれば何処でも吸えるし、地域ごとに値段の差はあるものの何処でも手に入る。現状、今の日本の様相と変わらないように思う。排泄は、何処のトイレも汚く各人あまり流さない。トイレットペーパーが無い、扉の鍵が掛からないと云うのは日常茶飯事。日本のトイレが如何に清潔で綺麗かがよく分かる。外での立ち小便は厳禁!どんな非常事態でも皆





それは守っていた。ライヴ・スペースは地下室、倉庫、BAR、クラブと様々。何処でプレイしようが、人が人を呼び各地大盛況なのはこの2バンドの人気が物語っていた。

ツアーが始まる前から10月31日ハロウィンへの期待と喜びをHELLSHOCKのメンバーが何度となく口々に語っていたけれど、全くもってハロウィンなんてのは日本ではクリスマスの1/100位のイヴェント事なので、我々一同は全然ピンと来ないものの、彼等の嬉々とした表情で語られると、ムゲにも出来ず何となく愛想笑で返事してみる(ゴメンナサイ)。

10月24日

アッシュビル/巨大なガレージ倉庫。さて、東に移動してからの一発目。いつ始まるかも分からぬ状況は前回で承知済みなので、何となく時間を潰し、1バンド目を待つ。始まるのか?!と思わせ振り、始まらないのももう慣れてただただビールを流し込む。個人的にビールは全く呑めないのだけれど、何処にでもあってコレしか無い状況もあるため、このツアーで1年間日本で消費する100倍の量は胃に収めたと思う。基本的には20時スタートとフライヤーに記載して、20時位からボチボチと人が集まり始めて、22時〜23時の間にスタート、終わるのが25時位と云ったところ。ユックリ始めるもののAGE/HELLSHOCKのトリ前〜トリへの迅速な転換に、きっとアメリカのパンクスは「もっとユックリやろ〜ぜ〜!」と感じていたに違いない(笑)。 今回のツアーでは、+1〜2ローカル・バンドでの3〜4バンドと云う形が多く、自分が言うのは恐れ多いが圧倒的にこの2バンドとローカル・バンドとの差があり過ぎたように感じた。正直、名前を知らないで良かったと思えるバンドの発見は1〜2バンド位であった。

10月25日

アトランタ/しっかりとしたライヴ会場、今回のツアーでも屈指の盛り上がりを見せた所。アメリカの南の方は危険だから、一人で行動するなと口酸っぱく言われたのも頷ける、パッと見、白人も疎らでアジア系は殆ど見なく黒人が多くいる南の地域。北上して行くまでは何処へ行ってもジロジロと物珍しそうに各地で見られ続けた。特にジャラジャラとした格好の日本人、珍しいのも当たり前か。ライヴ前にはまたしてもストリップBARへ。スペシャルだからと、半笑で言われて付いて行けば、スペシャルはスペシャル違いのお母さんストリッパー群(涙)。「オバアチャン〜!」と、抱きつきたくなるような刺激的な夜を過ごして、いざライヴへ。物販も飛ぶように売れて、既にここら辺でTシャツのSサイズは無くなったかと記憶している。そもそも、Sサイズが最初から少なく、キースの発注方法に疑問を抱く。が、此処は彼の土俵。郷に入っては郷に従えで物販作業に徹する。しかし、それでもSがなかったらMでも良いよ、黒が無かったら白でも良いと言ってくれる人が殆どで、無いから買いません。と云う人は殆ど居なかった。以前に海外のパンクスが物に飢えていると云った話を聞いた事があるが、正しくその通りで、言い方は悪いけれど兎に角、何でも欲しい!と云った感じ。いくらインターネットが発達しているとはいえ、まだまだ実際に物を目にして購入する機会の少ない彼等にとっては、ライヴ会場で並べられた商品の数々は宝の山に見えるのだろう。何時でも買える、何処でも手に入る日本の状況とは明らかに違っているし、多くの人がライヴ最中にも関わらず入場して真っ先に物販スペースへ飛び込んでくる様子は純然たる欲求で嬉しかった。

10月26日

ウィリントン/書籍とファンジンに囲まれ、アーティスティックなレンガ塀が美しいインフォメーションセンターの様な佇まいのお宅にてライヴ前のご飯を頂く。続々と人が集まり、うだる様な湿った暑さと前半戦の疲れからか、何となく会話もそぞろで予定も分からぬスケジュールにただ何となくタバコに火をつける。スケジュールと云えば、やはり我々日本人にとっては、しっかりと予定を把握しておきたいところ。こちらの時間の感覚は我々とは2時間差位でユッタリと流れている。予定時間を聞けば、言われた時間の+2時間後が基本。勿論、腕時計を身につけ





ている者は誰一人としていない。僕自身を置いておくとしても、ライヴをプレイするAGEにとってみれば気持ちの持って行き方、タイミングに苦戦していたようだった。時間に追われて生活する状況に飽き飽きしながらも、生まれ育った環境には逆らえないのはしょうがないところかなとも。何処へ行っても極端に時計が少ない。暗くなったら寝て、お腹が減ったら食べる。そんな原始的で実は本能的なアメリカのパンクスの生活は羨ましくもあるが、自分自身が出来るかと言われたら疑問符も付く。もはや予定時間を聞くのもナンセンスに感じたので、個人的にはなるべく必要最低限のスケジュールしか聞かなくなったのもこの頃か。

10月27日

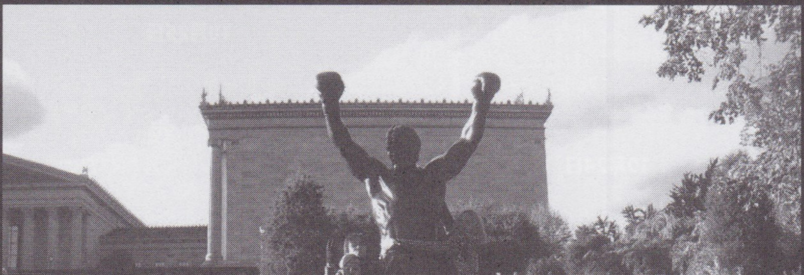
リッチモンド/マットの地元、二日振りの彼の自宅へ。一度訪れただけだけれども、見るもの全てが新しい環境に於いては、一度来た場所は何だかノスタルジックで僕等を暖かく迎えてくれている気さえする。暖かい料理とアットホームな雰囲気、そして昨晩は蛇と犬とインコに囲まれたペットショップの様な環境での入眠との相違に心穏やかに過ごす事が出来た。そんな開放心と有り余る時間から何度となくビールをあおる。そして、ライヴ会場のBARに着くなりウィスキーを3杯ショットで頂いて撃沈。本日はマットがプレイするPARASYTICが演奏する最初で最後の機会だったのに…。以後、閉口。気づいた時にはそれぞれの身支度も始まり、かれこれ12時間位は眠っていただろうか…。皆の半笑いの笑顔が胸を刺す。以降、Q:SO, WISKY?? A:NO MORE!が口癖。PASSED OUT(酔い潰れる)、BLACK OUT(気絶する)なんて単語も僕に対してよく使われていた(苦笑)。

10月28日

バルチモア/注意しろ、皆で行動しろ。会場に入ったら出るな!と散々言われてきたのも頷ける程に、街の雰囲気も妖気を漂わせていた。街頭に立つディーラーらしき人々、各ストリートに設置された監視カメラの数々に、言われなくとも殺気立つ空気がヒシヒシと肌身に感じる。打ち付けのコンクリート塀と平らで狭いスペースに機材が立ち並び、街の雰囲気そのままに粗暴な環境でのライヴ。しかしながら、暇を持て余した若者達の爆発的なエネルギーがAGE/HELLSHOCKのライヴで弾け飛ぶ。AGEのライヴではイーサンとブライアンの大柄な2人が彼等の演奏を止めないように最前列で必死にくい止める。ブライアン!いつも酒ばかり呑んでるけど、この時ばかりは格好良く見えたぜ!そんな、彼等の雄姿を見てからか、我々一同もHELLSHOCKのライヴでは前方待機。警備体制万全で臨むも、アメリカ人の圧倒的な体格差とパワーの前に開始10秒にして端へと弾き飛ばされる(笑)。PDX HARDCOREの始祖、POISON IDEAのカヴァーは心憎い演出でGOOD!前回のツアー同様、女性客に謂われ無き暴言を受ける(涙)。

10月29日

フィラデルフィア/通称フィリー、古都。映画ロッキーで階段を駆け上がり「エイドリア〜ン!」を叫ぶので有名な街。グループ2班に分かれて到着。先陣で既に「エイドリア〜ン!」をやられていたが二番煎じにも関わらず、もう一度「エイドリア〜ン!」を叫ぶ。本日の会場はWAREHOUSE、要は巨大な倉庫。こういったライヴ・スペースもこちらでは日常的に使われているようだ。前日のバルチモアに来ていたお客さんもチラホラと見かけて、物販もすこぶる盛況。物販スペースを少しの時間空けていたら、誰も居ないじゃないか!と、いつもファニーなダスティンに叱咤されたのは、彼等が如何に物販の売上げを大事にしているのかが分かった。ライヴではNIGHTFALLは所謂SWEDISHスタイルのD-BEAT RAW PUNKで、ようやくローカ



ルなバンドで良いと思えるバンドを観る事が出来た。いつも冷静なドライバーのアレックスもノっていて、彼とは音楽的な趣向が似ているし歳も近いので仲良くなったのもツアー半分に来たこの頃。車の中では早朝出発からKAAOS、RIISTETYT、MELLAKKA等のFINNISH PUNKを常時プレイしていて、ルックスもボロパンにビシッとバックルブーツを決めたクールなルックス。如何にも都会に住むヤングなパンクで日本のパンクスからの影響が垣間見れた。

10月30日

ニューヨーク/そんなアレックスの地元。長旅から帰って来た安堵感からか、表情も穏やかで口数も多くなっていた。他のPERDITIONのメンバーやテキサスから引っ越してきたマット(ex-TOLAR)等の悪ガキ・パンクスにも会った。此処では街は勿論の事、どのパンクスもスタイリッシュで都会的な雰囲気を感じられる。マットはTOLARで日本に来た事があり、JAPANESE HARDCORE PUNKへのリスペクトと愛を感じて色々な話をして仲良くなれた今ツアーのパンクスの一人。まだ彼も20代そこそこ、こちらの人間は自立も早いためか若い人間でもしっかりとしているし、大人びた印象がある。恥ずかしながら、容姿も含めてチャカチャカしている自分は良い事なのか悪い事なのか…。TRASH、SEARCH AND DESTROYの老舗パンク・ショップを周ったり、ジョエルが以前にプレイしていたAXIOMがペイントされたビスジャンが8万円位の法外な値段で売られていて一同苦笑。足早に地下鉄に乗り込みタイムズスクウェアへ。喧騒と騒音が街を駆け抜け、日本で云う新宿みたいな所かなと。観光もそこそこに出戻り、ライヴ会場はPA設備も整ったしっかりとしたショウ・スペース。事前に見ていたフライヤーで個人的に一番観てみたかったショウ。PERDITIONは出順が1番手なのを不服として、アレックスが物申す。大事なツアー・クルーのバンドが一番手とは失敬な!NERVESKADEがさされ立ったノイズコアなら、彼等は鈍器で打ち付けるノイズコア。こちらもヴァイオレンスなステージングにバッチリ!SACRILEGEヨロシクなATAKKEは、それはもう本当に格好良かった!!また何処かで観たいバンドの一つとなった。この日の夜は、場所を変えてのAGE/HELLSHOCKの2ステージ目!ハロウィン・イヴで街は賑やかとなり、皆々陽気に騒がしく、ダスティンは日本の女子高生のセーラー服にてコスチューム。フィンランドからわざわざやって来たKAKKA HATA 77がプレイする頃には殆どの人が外でドンちゃん騒ぎをしていてライヴは人も少なく悲惨だった(涙)。キャッチーなFINNISH PUNKで良かったのになぁ!そんな、慌しくも楽しい時が過ぎ1～2時間後には出発の時間。この日、少しアタマに来た事があり、アレックスになだめられるものの、二人とも完全に出来上がっていて話が四方八方へ転がっていったのも今は良い思い出。

10月31日

ピッツバーグ/遂に来たハロウィン!ライヴ場所はスケートパークが併設された何とも見慣れない不思議な場所。外には綺麗な運河が流れ、テラスから一望も出来る。到着するなり、MOTORHEADのレミー・スタイルでガッツリとコスチュームした人間もいれば、基本的にはゾンビ/スプラッター・メイクが多数を占める。しかし、昨日の浮き足立った騒々しさからは一変していて、話に聞いていた程のハロウィン感はなかった。コスチューム率は全体の1/3と云ったところか。散々言っていたHELLSHOCKのメンバーでさえ、ダスティン以外はいつもと変わらない格好。う～ん、アメリカ人は不思議だ。地元数バンドがプレイ後、古くから活動しているSUB MACHINEと云うバンドの再結成?なのかな、既にこの時点でお客さんはヒートアップ。AGEの時には群衆入り乱れて、なぜか寝袋が常時宙に舞う壮絶なライヴだった!この日は小さいお子さんがいる家庭での寝床。騒がしく出来ないので、アフター・パーティーは我々だけで小さなBARへ。ここでもPUNKがBGMで流れ、本当にアメリカではROCK/PUNK/METALが根付いているなと感じた。それだけに、若者のユースカルチャーであり登竜門、あえて言えば若気の至りでPUNKを辞めて行く人間も多いのかなと。窓口は広く出口も広い、その分どんどん人が流入し回転する。狭く深い日本でのPUNKSとしての生き方とは、そもそもの文化/土壌の違いからでもあると思った。

11月1日

ハートフォード/11月に突入し、いよいよツアー終盤だと感じ始める。片田舎のボロボロな一軒家。ここでも、家主が誰だか分からないままに、人がどんどんと出たり入ったりを繰り返しながら地下のベースメントが会場。居住者も外側から鍵が掛かるような自室の扉をつけ、もはや烏合の衆の様相を呈している。その地下室にて、MUNDO MUERTOやSEASICK等の友人達のステッカーを発見し、この同じ空間に彼等が来ていたんだと嬉しく感じる。我々が歩んできたツアー道中各所にAGEのステッカーを僕は貼ってきたのだが、いつかそれらを誰かが発見し少しでも思いを馳せる事が出来たら幸いである。ヒッピー風な若者に注意せよ、と御達しがあり、見るからに色々なモノを"キメて"いる様子で物販管理にも気を配る。見るからに10代前半の可憐な少女も"キマって"いて、彼女は突然嘔吐し途中退散。僕が感じたのは、人が集まり爆音が流れ、酒やパーティーを楽しむ。他には何もいらない。エンターテイメントに飢えた若者の吹き溜まりになっているのが、アメリカでの音楽/ライヴの楽しみ方で純粋な衝動。様々な娯楽に溢れた今の日本とはライヴに足を運ぶ行為の根本が違うように感じた。

11月2日

ボストン/昨晩、急遽言われ全員が同じTATTOOをフリーで刺れられるとの事で、人





生初のTATOOがあっさりとした形で決まってしまった。ショッピングモールにある綺麗なスタジオ。13人全員が刺れるとの事で、かなりの時間が掛かる為、各々散り散りでモール内を散歩しながら時間を潰す。他12人は手馴れたモノで、続々と終えていく。旅の疲れた頭と勢いで、初TATTOOにして"スゴい"場所へと刺れる(笑)。全員が終わった頃には日も暮れ始め、会場の学生ホールの様なスペースへ到着したのは既にライヴが始まっている時間だった。若干スポーティー

な雰囲気に戸惑いながらも、13人の結束はますます強まるばかりであった。カナダへ越境する為に、アメリカ入国の際のようにバンドマンである事を伏せなければならないので、各地のフライヤーやTシャツ、その他AGE/HELLSHOCKと云う名前の書かれたグッズは全てこの日にダンボールに詰めてカナダへ発送した。車に張られたステッカーも剥がしてある入念な準備!そう言えば、この日にツアー中最初で最後のシャワーを浴びる。自分が誰よりもステンチ・パンクスであったのは言わずもがなである。

11月3日

オールバニー/昼間はボストン市街を観光。秘密結社と謳われているフリーメーソンに纏わる建物があったり、他の土地でもフリーメーソンに関するモノを見る事が出来た。日本のメディアでは散々、謎の組織のように扱われているけれど、割と白日の下に晒された組織であるようだ。これだからメディアなんて信用出来ないんだよな。本日はアメリカ最後のライヴ。場所は街中にあるBARスペース。住宅街は何処の土地も似たようなものだから、こういった街中にある場所は雰囲気やその土地の空気感を感じられて嬉しい。ニューヨークのマットが再び合流してまた一人ツアー・クルーが増え、これからカナダまで一緒の旅。殆ど売り切れてしまった物販に、買い求めて来たパンクスに陳謝、陳謝。これはよく尋ねられた事だけれど、こちらのパンクスはパッチやバック・パッチを求めてくる。確かに、多くのパンクスがパッチを身につけていて、よく見かけた日本のバンドはDISCLOSEとFRAMTID。この2バンドの影響力と人気は凄いものだと感じた。もしアメリカへ行く機会があったら、パッチの持参をお奨めします。Tシャツよりも音源よりも常に身につけているパッチが、渡米した際の大きな証になると、AGEも作れば良かったなとメンバーと話をした。HELLSHOCKのブートのパッチを堂々と隣で売っている奴がいたのは笑ったなぁ〜。今夜もローカル+1バンドの小さなライヴであったが、アメリカ最後の夜に色々な想いも込み上げて来る。明日は遂にカナダはモントリオール。我々クルーはお酒を流し込む前に、越境の際の注意点と心構えを、全員が輪になって会議をした。HELLSHOCKはマット号で全員が同じ車に乗り、AGEと僕はアレックス号へ。何か聞かれた際は、勿論「VACATION」。ニューヨークのマットが日本に来た事があるため、その際にBARで知り合って仲良くなり案内している、と細かな嘘も作った。また、デジタル・カメラのメモリーカードも抜き取り保管してもらった。旅行に来ているのに誰一人データが無いって云うのも怪しいけど(笑)、見られるよりはマシと云う事で。何だか物々しい雰囲気に身も引き締まり、夜は更けて行く。

11月4日

カナダ・モントリオール/立て続けに行かないように、HELLSHOCKチームは早朝に我々より2時間程前に出発。パンクのパの字もない様な格好にて我々も遅れて旅立つ。途中、アレックスとニューヨークのマットも衣装変え。アレックスに至ってはトラの絵に、アニマルプラネットと書かれた無茶苦茶ダサいTシャツで参上(笑)。国境警備が近づき、車内に緊張が走る。パスポートの確認と簡単な質疑が行われ、昨日作ったBARで知り合った云々の一連の嘘も付いてバッチリ。英語を全く喋れない定でいったら、コミュニケーション方法を聞かれ、マットが「BROKEN ENGLISH!」と、すかさず答えたのは笑ったなぁ。兎に角、何事もなく無事に国境越え。ヒンヤリとした空気とフランス語の看板が多数見えてきて、カナダへ入国した事が容易に感じ取れた。国境からモントリオールは車で30分程。まずはLOUD HOUSEと云う広くてライヴも出来る、皆の憩いの場所の様な空間へ。ISTERISMOのオーストラリア・ツアーが終わったばかりの東京の友人ナム君(NARM DISCOS)とも再会。アクティヴっすね〜!ドクターからへんじさん(RADICAL PUNK ADDICT)から紹介してもらったジェイミーにも、はじめまして!ジェイミーには帰りの空港まで送ってもらったりして感謝感謝!そこから、カナダでの宿泊所のシャニーとシモンのお宅へ。ザックリとした性格のカップル。料理を振舞ってくれたり、色々と気を使ってお世話してくれて本当にナイスな二人でした!2009年にD.S.Bのヘルプで来





た事があるアベさん(LIFE)もよくこの二人の名前を口にしていた事を思い出した。彼等も「アベ、アベ」とよく言っていた(笑)。そんな二人の家でマッタリとしながら、遂に来たれりVARNING FROM MONTREALフェスティバルへと向かう。場所は大きなKATACOMBESと云う会場。まずは主催者でもあるジャニック女史(ex-AFTER THE BOMBS)に挨拶。しゃがれた声にキビキビと動くその姿は、さすがにこれだけの巨大企画を動かす人間、オーラと威厳が漂っていた。彼女やシャニー、その他のパンクスを見ていても、この土地では女性がとても力強く躍動しているように見えた。本日はAGE/HELLSHOCK共にお休みの日。我々はノンビリと優雅に2階にあるVIP席から1階のライヴを眺める。前売りチケットがSOLD OUTになっているだけに、続々とパンクスが押し寄せる。最後のTRAGEDYがプレイする頃には人が波打つ様に右へ左へ上へ下への盛り上がりを見せていた。このTRAGEDY、ベース・プレイヤーが入国出来なかったとの事でHELLSHOCKのイーサンがピンチ・ヒッター!イーサンの雄姿に我々の感動もひとしお。散々呑んで、どのタイミングで帰宅・睡眠を取ったのかが思い出せないまま朝を迎える。

11月5日

カナダ・モントリオール/フェス2日目。体調絶不調により(ただの二日酔い)一人夕方前まで眠たり起きたり。ライヴ前には女性陣による完全ヴィーガン料理の豪華フルコースでお腹を満たし満足満腹、体調回復。MOB47のメンバーや、セイラ嬢(ex-DETESTATION/QUESTION)等のパンク有名人とお話する機会もあり至福の時間。GERM ATTAKにも再会。以前から連絡を取っていたスケール(DETONATE/RESOLVE/DISTORT REALITY)もこの日からDJとして参加。40歳近い年齢にも関わらず、彼はアメリカでは珍しく現役バリバリのパンク・ファッション!ド派手なビスジャンに日本のバンドを背負ったクールなルックス。基本物静かなんだけど、ドランク・パンクスっぷりも持ち合わせて、僕の中ではミネアポリスのシガちゃん!凄く良い人。本日はPERDITIONも出演し、また再び彼等のライヴが観られるのでとても楽しみである。彼等は20代前半のヤングなパンクスで、ヤンチャな感じはあるけれど、皆気さくで気の良い連中。この日のライヴはニューヨークで観た時以上に弾けてて格好良かった!オーディエンスの反応もすこぶる良い感じ。いつか日本で観て見たいなと画策中。さ〜、いよいよBORN OUT OF DARKNESSツアーの終焉の時。過ぎてしまえば、あっという間に終わってしまうもので、キースとユックリ話してみたり。基本的に面倒臭がり屋で、疲れた、腹減ったばかり言ってるし、テンション低いし、何処に行ってもゲームばかりしてるし、ゲームに負けると本気で怒るしetc…。でも、そんなキースとはLEBENDEN TOTENを含めるともう5回も一緒にツアーを周っていて、海外のパンクスでは誰よりも一緒にいる時間が長いんだぁと、何だか感傷的な気持ちになってしまった。彼はどう思っているか知らないけど、僕の大事な大事な親友であると思っている。AGE/HELLSHOCK共に油の乗り切ったライヴで圧巻。AGEはアンコールでツアー中に盛り上がりまくったDISCHARGEのカヴァーでメ。北米大陸ツアーを無事終えるのであった。物販も全てSOLD OUTで万事全てがウマく終わった今回のツアーは、数々のツアーをオーガナイズしてきたマットが今迄にない大成功と感嘆の声を上げる程だった。朝から晩まで24時間、駆けずり回ってくれたマットにはTHANK YOUだけでは足りない位の恩義が出来た。彼が日本に遊びに来た際には、何でもして上げようと思っている。最後にキースからAGE/HELLSHOCKのツアー・フラッグを「オマエが日本に持って帰れ」と一言。もうこれ以上の言葉が無くても意味は分かっているぜ!!!

NEVER ENDING BORN OUT OF DARKNESS!!!

こんな感じで、AGEはヨーロッパ・ツアーへと旅立ち!僕は一人居残り、最終日のMOB47を観たりレコード・ショッピングしたりして日本へと帰国するのでありました。今回もヘッポコ通訳/物販係/カメラマンとして参加させて頂きましたが、ツアーは本当に何度行っても楽しいし、毎回発見や学ぶ事が多いです。こうして付いて行く為には、しっかりと役立てる様に英語力も身に付けないといけないし、邪魔にならない様に人間性ももっともっと磨きたいなと思う次第。いつも誘ってくれるAGE、来いよ!と連絡をくれるHELLSHOCK、そして今回のツアー・オーガナイザーのマットとドライバーのアレックスに最大限の感謝を!!

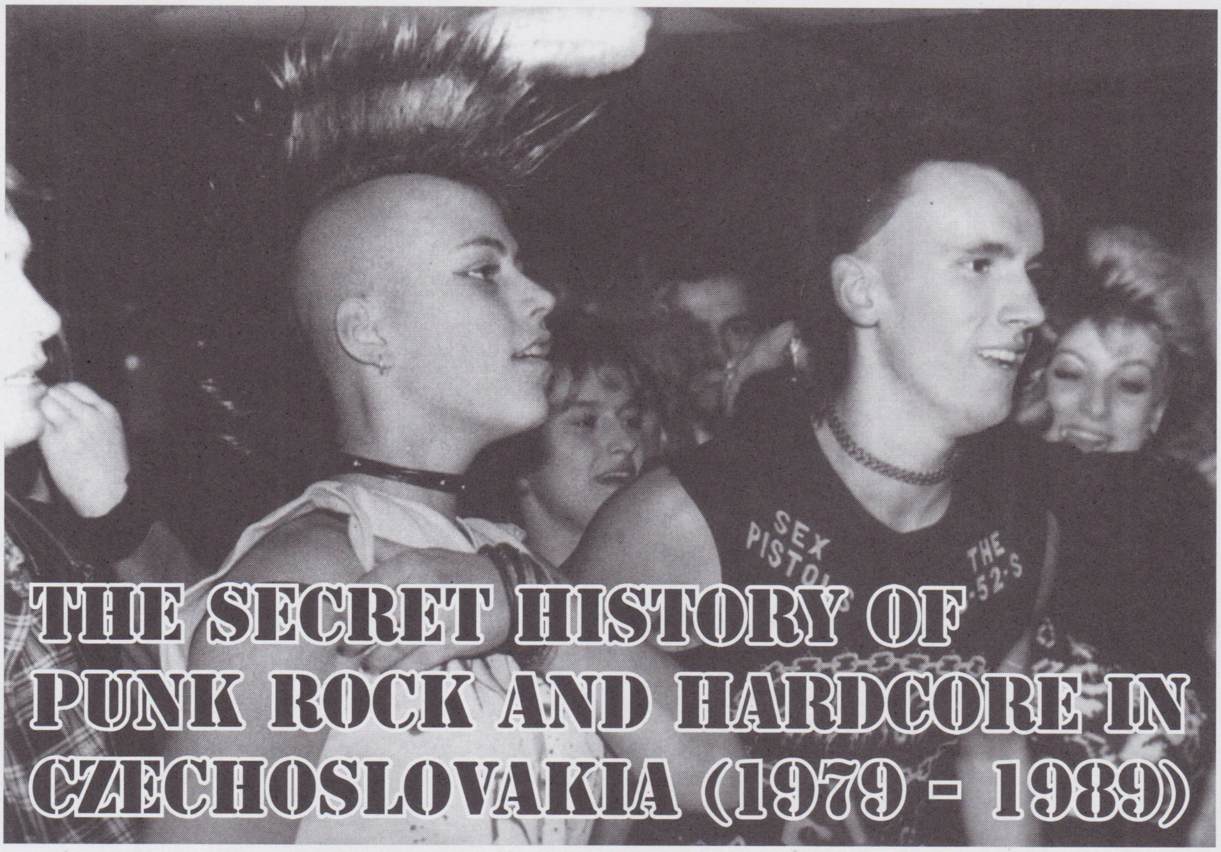
GREAT LIVE ACTS IN THIS TOUR.

NERVESKADE
RIPPER
LEBENDEN TOTEN
NIGHTFALL
PERDITION
ATAKKE
ILEGAL
TRAGEDY
QUESTION
MOB47

and AGE/HELLSHOCK!!



BORN OUT OF DARKNESS 2010



THE SECRET HISTORY OF PUNK ROCK AND HARDCORE IN CZECHOSLOVAKIA (1979 - 1989)

チェコスロヴァキア・パンク・ロック/ハードコア その知られざる歴史　第二章

TEXT:Filip
(SEE YOU IN HELL/orba@seznam.cz)

1980年代初頭から中期にかけての暗黒期

前章(前号に掲載)では政府による、反政府運動及び"アンダーグラウンド・バンド"狩りについて説明し、その最善を尽くすことができたと思う。まさにこの70年代後半に、極初期のパンク・ロック・バンドがチェコスロヴァキアにて登場したのだ。

事実として最初に言うべきことは、当時のパンクスはそれほど危険視されていなかった。秘密警察が抑圧の対象としていたのは"長髪"(ヒッピー)であり、極初期のチェコスロヴァキアのパンクスはみな短髪だったからだ!またこの頃のパンク・ロック・ファッションもイングランドのそれと比較すれば、それほど派手なものでもなかった。

極初期のパンク・ロック・バンドは通常、多少なりとも合法的に活動することが可能だった(そのほとんどはプラハ、もしくは"リベラルな風潮"を持つ大都市のことではあったが)。しかし、この状況は1981年から悪化し始める。"文化検閲官"がロック・バンドのリストを発行した結果、公でのあらゆる活動を禁じられたのだ。最終的な駄目押しは1983年に起こる。チェコスロヴァキア共産党が発行する新聞に、"時代錯誤のニューウェイヴ"という記事が掲載され、そこでロック・バンド(もちろんパンク・ロックもだ!)は以下のように記述された。"不快な音楽と下品な歌詞がもたらそうとする思想を、我々の社会と若者は断固として非難しなければならない!"と。このロック・ミュージックに対する明け透けな攻撃により、あらゆる場所での合法的な活動が不可能になってしまった。いくつかの例外として、政府から認証を受けた"公式のロック・バンド"は存在し、コンサートを行ったりレコードをリリースしていたが、彼らですら非常に厳しい管理下に置かれていた。言うまでもないが、そういったバンドは社会的関連性や思慮に欠け、完全に去勢された音楽を演奏していた。しかし、幸運にも興味深いことが起こる。第一世代のパンク・ロック・バンドが活動を禁じられたり解散することによって、彼らに感化された新世代のパンク・ロック・バンドが誕生していったのである。そして、彼らはプラハに限らず国中いたるところで産声を上げたのだ。

月日が経つにつれ、より多くの人々が西側諸国のパンク・ロックのレコードを密輸し手に入れるようになった。またそれらはテープにダビングされて広がっていく。更に国境近くの地域に暮らし、幸運に恵まれていれば、外国のラジオ放送も聴くことができた。西ドイツやポーランドのラジオ放送局は時折、ポップ・ミュージック番組の一部としてパンク・ロックもかけていたのだ。

ギグに関しても、僅かながら事態は好転していった。パンクス(ロッカーたちも)が公に活動することは不可能であったが、彼らはベストなやり方として"非公式ギグ"を行うようになったのだ。それは結婚式やバースデイ・パーティーとして開かれ、プラハでは時に、河川に蒸気船を浮かべそこで、"音楽の生演奏をする個人的なパーティー"として企画されるようになる!それらのギグは警察によって中断させられることもしばしばあったが、70年代後半と比べれば通常、それほど暴力的な制止ではなかった。

この80年代初期から中期にかけて最も重要なバンドは、F.P.B.、KECUP、A 64、VISACI ZAMEK、ZASTAVKA MILEC、PLEXIS。そしてスロヴァキア地域のEX-TIPとZONA Aである。

F.P.B.(1980 - 1987)

このバンドはプラハの北、テプリツェ出身。時にはFOURTH PRICE BAND、もしくはCTVRTA CENOVA SKUPINAとチェコでは



呼ばれている。彼らが影響を受けたバンドは幅広く、EXTEMPORE、THE DAMNED、DEVO、PERE UBU、THE RESIDENTS、EBBA GRÖN、THE CLASH、そしてKILLING JOKEが挙げられる(彼らはこれらのバンドをカヴァーしていた)。パンク・ロックに対してオリジナルのアプローチを試みようとした彼らは、メロディックなパンク・ミュージックを力強く演奏し、とても詩的な歌詞を歌った。今日においても、チェコ・パンクのベストな歌詞として挙げられるほどである。時には官僚制度の問題や、偽善、服従といった事柄も取り上げていた。

このバンドは、リーダーでベース・プレイヤー/ヴォーカルのMiroslav Wanekが精神病院に閉じ込められていた時に結成された。彼は2年間に及ぶ強制的な徴兵を避けるべく、その唯一の方法である精神病院に入ったのであった。活動を始めてからすぐに、地元での活動を禁じられると彼らはプラハへと脱出した。マネージャーの尽力により、バンドは準合法的に演奏を認可される偽造文書を入手し、活動をなんとか再開する(1989年以降、そのマネージャーが秘密警察のエージェントであったことが判明)。

彼らは1986年には一度だけだが外国でも演奏したことがある。ポーランドで開かれた大規模なヤロチン・ロック・フェスで、8000人を前にプレイしたのだ。

このギグの直後、オリジナル・メンバー2人がUZ JSME DOMA(同年に結成され現在も活動中。彼らは最低でも一度は日本ツアーを行っているはずだ!)のためにバンドを脱退。代わりに若いパンクスが2人加入した。この間、F.P.B.のスタイルはよりロウに、よりカオティックになり、狂った金切り声のヴォーカルがのる、"タガの外れた"パンクへと変化した。彼らはまた、東ドイツの教会でシークレット・ギグも何度か行った!(共産主義の東ドイツでは、教会だけが唯一パンク・ロック・バンドが演奏できた場所だったのだ)

ギタリストが1987年に強盗で逮捕されると(彼は宝石を盗んだ)、同年にバンドは解散。何人かのメンバーはその直後にSANOV Iを結成する(このバンドについては後述する)。

F.P.B.は1989年以前に音源をヴィニールに刻んだ、チェコスロヴァキアのパンク・バンドとしては希有な存在の一つである。彼らは"CTVRTA CENOVA"という短い曲を、フランスのレーベル、New Wave Recordsが1987年にリリースした「1984 The Third」ダブルLPコンピレーションに提供した。

1991年には、80年代初頭のオリジナル・ラインナップで再結成を果たし、「Kdo z koho, ten toho」(Victory Tall Over All)LPをレコーディングする。昔の楽曲を17曲、初めてキチンとしたスタジオで録音した。LPのヴィニール・ヴァージョンには80年代当時に録音された、THE RESIDENTSとKILLING JOKEのカヴァー2曲(オリジナルのチェコ語の歌詞)を収録したライヴEPも同封してリリース。2、3回ほどギグを行うも、1993年にはUZ JSME DOMAに完全に集中するため再び解散してしまう。

2008年、チェコのレーベル、Malarie Recordsが分厚い書籍と合わせた3枚組ディスコグラフィーCD「Kniha prani a stiznosti」(Wishes and Complaints Book)をリリース。全58曲入りだ!最初の2枚のディスクには1980年から1985年までの間に行われたギグの、格好良いライヴ音源が収録されている。3枚目のディスクには1991年のLPを収録。F.P.B.の膨大なバイオグラフィーと彼らの全歌詞が書籍には記載されており、全て英語に訳されている。レーベルとバンドが素晴らしい仕事をしたこのディスコグラフィーCDは絶対に手に入れるべきだ(Malarie Records: www.malarie.eu)!この一大リリースをサポートすべく、バンドは再び再結成し、2008年から2009年の間に2、3回ほどのギグを行った。

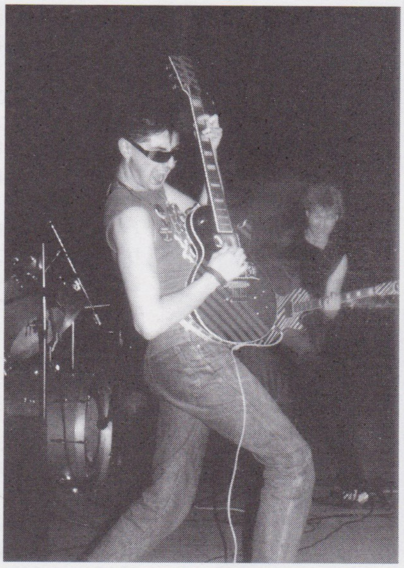
F.P.B.は古いチェコスロヴァキアのパンク・ロック・バンドの中でも最たるクラシックであり、彼らの楽曲は今尚チェコのパンク・バンドに影響を与え続けている!



A64



VISACI ZAMEK



「World Class Punk」コンピレーション・テープ



KECUP(1981 - 1983)とA 64(1983 - 1984)

両バンドともハイ・エナジーなパンク・ロックをプレイしていた。プラハ出身でメンバーが何人かダブっており、かなりのショーをこなしていたようだ。KECUP(Tomato Sauce)は半分が自身のオリジナル曲で、もう半分はUK SUBSやEXPLOITED、SHAM 69、THE REZZILOSといったバンドのカヴァーだった。リリースは何もしなかったが、ライヴの音源はいくつか存在している。

A 64(ハンド・クリームの名前である)はKECUPが解散した後に現れた。実際彼らの演奏は速く(時々、ハードコアとして紹介されている)、そしてもっとロウだった。最も有名な曲はPETER AND THE TEST TUBE BABIESの"Banned From The Pubs"をオリジナルのチェコ語の歌詞でカヴァーしたもの。この曲は後に、イタリアでリリースされた「Czech! Till Now You Were Alone!」コンピレーションLPと、「World Class Punk」というインターナショナル・コンピレーション・テープに収録される。このテープはMaximum Rock'n'Rollジンのコラムニスト、Mykel Boardによって編集されNYCのレーベル、Roirより1984年に発売された。25カ国、27バンドが集められ、DEZERTER、B.G.K.、BASTARDS、C.C.M.、ZYKLOME A、RATOS DE PORAOなどが収録。この「World Class Punk」コンピレーションは共産主義のチェコスロヴァキアにもパンク・ロックが存在していることを、世界に知らしめる大きなステップになったと確信している。

A 64は1984年に解散し、大部分のメンバーは西側に移住した。いくつかのライヴ音源が残されているが、正式にリリースされたことはない。

VISACI ZAMEK(1982 - 現在)

このバンド名は訳すと"Padlock"になる。そして彼らは80年代のチェコスロヴァキアにおいて最も有名なパンク・ロック・バンドだ。プラハのストラホフ地区のキャンパスに通う大学生の集まりとして始まり、彼らの極初期のギグは1982年に、その地区にある007 Clubで行われた(この場所は25年以上経った今でもライヴが行われている!)。彼らが影響を受けた音楽はいくつかのパンク・バンドだけだったので明白であり、それは当時の人々も理解していた。THE DAMNED、MOTÖRHEAD、THE CLASH、そしてTHE EXPLOITED。しかし、彼らはそれをオリジナルのスタイルでプレイした。VISACI ZAMEKの曲のほとんどがひどく短く、そしてラウドで歪みまくったパンク・ソングだったが、同時に長尺の、レゲエに感化された曲もやっていた。彼らの歌詞はクソみたいな灰色の現実をうまく言い表した、ブラック・ユーモアで武装された皮肉たっぷりなものである。

また活動期間中は、異なったラインナップでの演奏を強いられていた。義務としての兵役があり、それが彼らの活動における大問題となっていたのだ。それを除けば、彼らはラッキーだった。公的な書類を手に入れていたので合法的に活動することができたのだ。

このバンドは特に重要だ。なぜなら彼らはチェコスロヴァキアで唯一、正式にパンク・ロックのレコードをリリースしたのだから! 1988年、"共産主義体制"が遂に崩壊するちょうど一年前に、VISACI ZAMEKは政府が所有しているレーベル、Supraphonから2曲入りのEPをリリースする許可を得た。もちろん、バンドは作業中に


NEW BANDS

VZ

VISACI ZAMEK
Article by Bergamo. Members of the band VZ met in high school in Prague.They were in different bands but played punk together. Their first concert was on 7th December '82 in Strahov (part of Prague), but their best one was for sure in January '84 in Zofin, where there were many people and a very good audience. The concert had a fantastic sound and pace. It was like ten concerts put together. But at the end, the police came. It was the biggest police intervention. The building was encircled by policemen with helmets, dogs and cops cars. But there was no fight. Honza (VZ n 1) says every concert is like war with the equipment, because there's no money for new one. Only Vlada Stastka (bass-VZ n 3) is in war with himself. Texts are written by Honza or poetry of writer Morgenstern. It's punk philosophy, well understanding wishes of young people and problems of poor people. VZ is one of the most well known punk bands in Prague. Lastly they added more speed to their music, but still with punk spirit. They have one excellent EP out.

VZ line-up: VZ n 1-vocals VZ n 2-guitar VZ n 3-bass VZ n 4-guitar VZ n 5-drums. Contact: Ing. Vladimir Stastka/ 25206 Mechenice 135/ CSSR/ Czechoslovakia.

Father's Car: I'm driving my father's car I'm turning right After I'm going straight on I don't turn for walkers I put on the windscreen wipers It's OK. They're pressing against strange bodies Here over my windscreen.

Traffic Signs: Traffic signs Our faithful helpers Are pointing for us in journeys on road Blue-white arrows Marked our way We're going on Joyful and without protest Traffic signs Don't admit double explanation We're beginning To get accustomed to them Coloured signboards Are our daily bread And life without them We can't imagine yet.

1985年のMRRに掲載されたVISACI ZAMEKの記事



VISACI ZAMEKのEP(1988)

苦痛な検閲を受けなければならなかった。検閲官は強制的にレコードのタイトルを2文字にまで減らし、「V.Z.」とした。また、バンドが元々録音したがっていた曲は攻撃的な歌詞だから、という理由で全て禁止となる。最終的に、昔のデンマークの詩人、Christian Morgernsternによって書かれた歌詞の曲、"Hymna sibenicnich bratri"(The Anthem of Hanging Brothers)ともう一曲オリジナルが許可されたが、それらは全く刺激のない歌詞だった。そうして1988年の終わりに、初の(そして最後となる!)正式なパンク・ロックのヴィニールがチェコスロヴァキアにおいてリリースされる。数千枚プレスされ、今でもこのサウンドは素晴らしい!しかしこのEPのアートワークは"標準化されたジャケット"で最悪だ。

それ以外には、VISACI ZAMEKは違法なライヴ・テープを80年代にリリースしている。また1989年以降、彼らは最も早くフルLPをリリースしたパンク・ロック・バンドの一つとなった。そして多くのレコードが発表され、E.M.I.の子会社からリリースされることになる。彼らの最初の2枚のLP、1990年から1991年にかけてのもの(「Visaci Zamek」と「Start」)は、大部分が80年代の曲の再録で、彼らがまだ尖っていてロウだったから最高だ。後の作品は個人的な意見になるが面白くない。Luk Haasは彼の著書「Discography of Eastern European Punk Music」でこう記している。"年をとったパンクスは、退屈なロッカーになる"と。

ZASTAVKA MILEC(1983 - 1984)

プラハだけに鮮烈でアクティヴなパンク・シーンがあるというわけではない。プルゼニ(ピルスナーというユニークなビールで世界中にその名が知られている!)という都市は、ドイツのTV番組が70年代後半に放送したSEX PISTOLSを、地元のティーンエイジャーが観たことによって始まった(西ドイツに隣接するチェコの地域では、ドイツのTV番組を受信することが可能であった。しかし通常は政府による妨害電波によってかなり中断させられる)。

ZASTAVKA MILEC(Milec Village Train Stop)は1983年に結成、シンプルながらもタイトなパンク・ロックで、少しRAMONESやTHE CLASHに似ていた。1984年、彼らはかなり良いスタジオ録音のテープをレコーディングし、国中にその作品は広まった。しかし当局と問題を起こし、更には徴兵のためこの3人組は同年に解散。彼らは3、4回のギグをしただけであったが、メンバーは後に別のパンク・ロック・バンド、ZNOUZECTNOSTを始めることになる(詳細は後ほど)。



ZASTAVKA MILEC

PLEXIS(1984 - 1986。1988年に再結成)

プラハ出身の典型的なイカれたパンク・バンドだったが、悲しいことに後に退屈な"GUNS'N'ROSES/THE CULT"の物真似バンドへと変貌する。極初期の頃、このバンドは警察からの嫌がらせと尋問ばかり喰らっていた。PLEXISは燃えさかるほどに速く、その大部分が一分未満の曲を50曲ほど書いていた。Petr "Sid" Hosekがギターを弾き歌っていたが、すぐに彼はチェコスロヴァキア・パンク・ロックにおける最も著名な人物となる。15回もギグをやらないうちに、バンドは秘密警察によって徹底的に禁止された。アルコール中毒とファシズムを助長し、"犯罪要素"を含む絵をショーの最中に描いたため、起訴されたのだった。



PLEXISが1988年の秋に再結成した時(ちなみに彼らのうちの何人かはVISACI ZAMEKでプレイしていた)、彼らはスタイルをそれまでとは全く変えた。以前よりも更にパンクになっているであろうと期待した人々は、彼らの復帰後初となるショーを観て呆然としたのだった。

1989年以降、彼らは2、3枚のハード・ロック然としたレコードを出し、いくつかのコンピレーションLPにも参加した(この頃のまともな曲は1990年にリリースされたVA「Epidemie」LP収録曲だけである)。後にドラッグの問題で解散するが、2000年代に入り再び再結成を果たす。

80年代中期のPLEXISは、コンピレーション・テープに何曲か参加しただけだった。いくつかロウなライヴ音源はあるが、発表はされていない。

EX-TIP(1981 - 1984。1988年に再結成)とZONA A(1984 - 現在)

スロヴァキアの首都、ブラチスラヴァ(1993年以前は、スロヴァキアはまだチェコスロヴァキアの一部分だった)。そこは1989年以前にスロヴァキアでパンク・ロックがプレイされた中心地であり、そして唯一の場所であった。政府によるパンク・ロックへの弾圧はチェコ地域よりも酷いものだったのだ。

ブラチスラヴァのパンク・ロック・バンドはトラディショナルな77スタイルのパンク・ロックの型にのめり込んでいた。また、これらのバンドは合法的に活動するための許可を得ようと、"ヤング・ミュージック・タレント・コンサート"の類いに必死になっていた。その頃のチェコ地域にあったような、違法なギグのアンダーグラウンド・ネットワークはスロヴァキアには皆無だったのだ。

秘密警察の永続的な管理下におかれ、1989年以降にはバンド・メンバーの何人かが秘密警察のスパイだったことも判明した。1987年9月、ZONA Aのヴォーカルが違法ギグをブラチスラヴァの大学のキャンパスで企画しようとしたところ、イヴェントは警官



ZONA A



SANOV I



HRDINOVE NOVE FRONTY

によって破壊され、30人以上のパンクスが逮捕された。彼らは駅で叩きのめされ、モヒカンを切られてしまった。

EX-TIPはスロヴァキアの極初期のパンク・ロック・バンドだ。RAMONESとMOTÖRHEADからかなりの影響を受け、後にTHE EXPLOITEDにも感化される。その初期のほとんどをブラチスラヴァで活動し、何人かのメンバーはpre-ZONA Aとも言うべきバンド、PARADOXでもプレイしていた。1984年、EX-TIPが解散するとZONA Aとなり、このバンドはすぐにチェコスロヴァキアのベスト・バンドの地位を獲得する。彼らはキャッチーでメロディックなパンクを狂ったヴォーカルと共に演奏し、初期UKのバンド、THE ADICTSやSEX PISTOLS、そしてADVERTSといったバンドからの影響が顕著だった。80年代に4本の非公式なスタジオ・テープを制作したが、そのいずれも素晴らしい。そして80年代後半には若者向けのロック・ミュージックのTV番組にも登場し、1989年にはデビューLP「Potopa」(The Flood)をリリース。昔の曲の再録がほとんどだった。その後、2枚のEPをドイツのパンク・ロック・レーベル、Incognitoからリリース。世界中のスキンヘッド/Oi!コンピレーションにも参加するようになる。彼らは未だ活動中であり、CDのリリースも今日まで続けている。そのどれもがほぼ同じスタイルだ。

1989年以前のブラチスラヴァにはもういくつか、似たようなパンク・ロックをやっているバンドがいた。LORD ALEX、MLADE ROZLETY(DEAD KENNEDYSの影響大)、PROBLEM 5、KRACHがそれにあたる。

Rockfestsと チェコスロヴァキア社会主義共和国の最後

1985年以降、政府の様々な取り組みにも関わらず、ここではロック・ミュージックが定着し、完全に禁止することなど不可能となっていた。そのため政府の文化研究所は新たな戦略として、ポーランドのヤロチン・ロック・フェスのような若いロック・バンドが演奏できる巨大ロック・フェスティバルを、社会主義青年同盟(政府が承認した若者のための組織)が開催することを許可した。しかし、いくつかのバンドは未だに活動を禁止され、違法ギグに対する弾圧もハッキリと行われていたから、全てのバンドに対して開かれたものではなかったのだ。

"Rockfest"(イヴェントはこう呼ばれていた)は、ほぼ、"私たちは若者と彼らの音楽を支持します"というプロパガンダを広めるための道具であった。フェスティバルのメイン・イヴェントは、チェコスロヴァキア共産党の有力者が普段は使用し、総会が行われる、プラハの巨大な"文化宮殿"にて年に一度開催された。

また"local Rockfests"も存在し、それは国中至るところで企画された。

パンク・バンドのいくつかは、そのプラハでの大規模なRockfestでの演奏を許可された。最初は1986年と1987年に何バンドかが(F.P.B.、VISACI ZAMEKなど)。そして1988年には"Hard Core"と呼ばれる特別なパンク・ロックの舞台がRockfestの一部として用意され、1000人にも及ぶオーディエンスが駆けつけた。

80年代後半には公的な音楽誌にパンク・ロックの記事が初めて掲載され、違法なファンジンも登場した。大量のパンク/ハードコア・バンドがプラハ以外の地域で活動を始めると、最早彼らのすべてをリスト化するのは不可能となっていた。この時期に登場した興味深いバンドたちについて言及してみよう。

HRDINOVE NOVE FRONTY(1985 - 1988)

英訳すると"Heroes Of The New Front"になるこのバンドは、イフラヴァ出身(プラハの南東100キロ)。そしてチェコスロヴァキアのバンドの大多数が77パンク・ロックに影響されていたのに対し、彼らはDEAD KENNEDYSとDISCHARGEからの影響が大きかった(しかしKILLING JOKEやゴシック、インダストリアル・バンドからの影響もあり)。破壊的な演奏、ロウなパンクで歪みまくったギター・ソロに希望なき叫び声。いくつかの曲は恐ろしく速いが、他の曲は遅く、ダークで、催眠術のようだった。歌詞の多くは戦争の恐怖と現代社会で生きる普遍的な絶望をテーマとしていた。

バンドのメンバーはかなり活動的にギグ、ファンジン、レコーディングに携わる。数回ほど違法なギグを都市部周辺の村で企画し、パンク・ロック・ファンジン「Punk Maglajz」(Punk Brawl)を発行し、スタジオ・テープを非公式に4本、自主でリリースした。最も知られているのが「Valka」(The War)であり、素晴らしい反応を得たようだ。1987年から1988年の間、彼らはチェコのベスト・パンク・バンドとしばしば評価されていた。1988年には、最後のテープとなる「Dum na demolici」(House For Demoliton)をリリース。彼らの作品中、確実に最速の一本で音楽的にはハードコアと言っていいだろう。同年にバンドは解散し、ゴシック・ロック・バンド、XIII. STOLETI(The 13th Century)を結成。1991年には80年代にレコーディングしたテープの収録曲を集めた「Valecny uzemi」(The War Zone)LPをリリース。2009年にはHRDINOVE NOVE FRONTYの80年代のテープの楽曲をほぼ完全に網羅した2枚組ディスコグラフィーCDがE.M.I.の子会社からリリースされるも、バンドが再結成されることはなかった。

ZNOUZECTNOST(1986 - 現在)

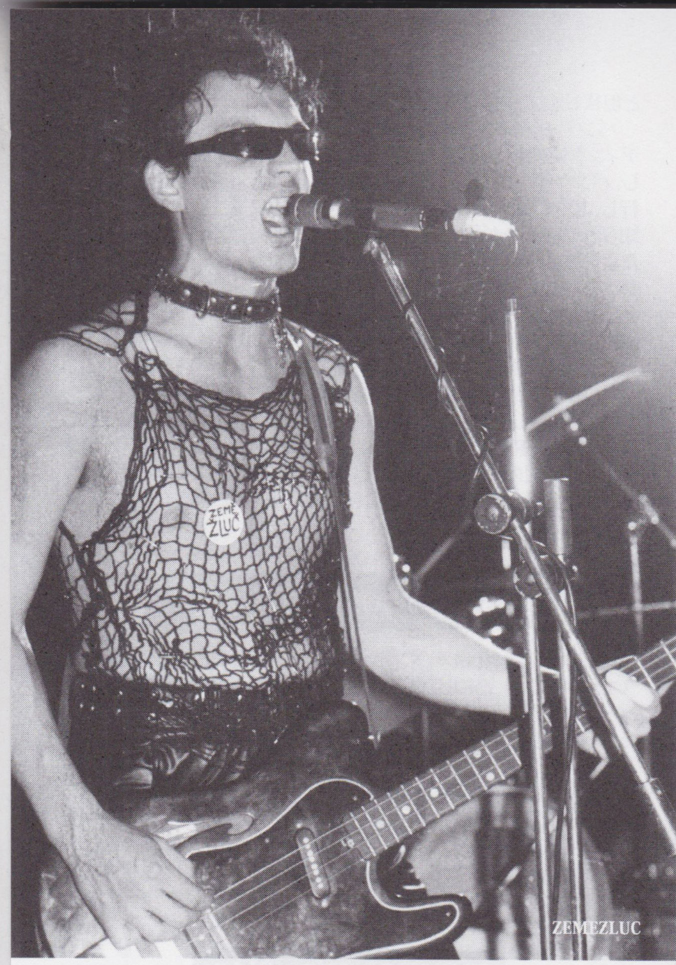
ZASTAVKA MILECのメンバーが軍隊から戻ると、彼らは似たスタイルのバンド、ZNOUZECTNOSTを始めた。THE CLASHや50's ロックンロール、フォーク・ミュージックまでからも影響を受けていたが、彼らはシンプル且つ"聴きやすい"パンク・ロックを詩的な歌詞と共に作り上げていった。1987年、秘密警察との問題によりバンドの"公認"が失敗に終わると、ドラマーが自殺をしてしまう。ZNOUZECTNOSTは1989年までに3本のスタジオ・テープを、自身の違法なレーベルから発表。その後、バンドは人気を得るとレコードも出すようになる。彼らは現在も現役であり、そのサウンドは結成当時と変わることはない。

SANOV I(1987 - 現在)

F.P.B.の終焉後、彼らのマネージャーは若い新バンド、SANOV I(テプリツェという都市にある地区からの命名)と共に歩み始める。SANOV Iは素晴らしくキャッチーなパンク・ロックをかなりの性急感でプレイするロウなスタイルだった。DEAD KENNEDYSから少し、そして80年代のポーランドのパンク・バンド、ARMIAやDEZERTERから感化されていた。彼らはこの国で当時最も過激なバンドの一つだった。歌詞はチェコスロヴァキアに駐在していたロシアの軍隊への抵抗、そして秘密警察への抵抗をあからさまにしてい



Punk Maglajzファンジン



ZEMEZLUC

最初のスタジオ/ライヴ・デモを作り、1990年には自主で素晴らしいフルLP「Fajn, bezva, prima」(Okay, Cool, Nice)をリリース。チェコスロヴァキアにおいては初めてに近い、D.I.Y.な形でリリースされたレコードであった。ZEMEZLUCは現在も活動中で、約20枚ものヴィニールを出し、何度かUKツアーも行っている。彼らは今、僕のバンド、SEE YOU IN HELLと練習場所を共有している!

NOVODUR(1984 - 1986)と TELEX(1988 - 1990)

両バンドとも南チェコ地方出身で、ほとんどのメンバーがダブっている。そして元々は両バンドとも"典型的なチェコの田舎のバンド"としてスタートを切った。ほぼ全てが外国のバンドのカヴァーで、普段は自分たちの暮らす地区の村にある集会所で活動していた。しかし、NOVODURと後期TELEXではそのサウンドは全く異なる。

彼らの活動していたジャンルでは皆がこぞってDEEP PURPLEやURIAH HEEP、QUEENといったバンドのカヴァーをやっていたが、彼らはパンク・ロックやハードコア・バンドしかカヴァーしなかった(しかもオリジナルのチェコ語の歌詞で!)。彼らがカヴァーしたものの大部分は"大御所"のUKパンク・ロック・バンドで、THE EXPLOITEDやABRASIVE WHEELS、G.B.H.、THE CLASH、THE PARTISANSといったものだったが、もっとオブスキュアなバンド、THE PLASMATICS(USA)、OLHO SECO(ブラジル)、ARMIA(ポーランド)といった、その当時、ここではほとんど知られていなかったバンドまでカヴァーしていたのだ!

NOVODURだった頃のオリジナル曲はまだ多少なりともパンク/ニューウェイヴ寄りのスタイルだったが、TELEXの後期になると荒々しいヴォーカルで遥かに速い、より攻撃的なパンクとなった。1989年に彼らは素晴らしいデモをレコーディングし、1990年に

たため、彼らのギグのほとんどが違法だったのは何ら不思議ではない。

何本かライヴ・テープが存在し、1989年以降には昔の曲を再録した「Konec sveta」(The End Of The World)LPという最高の一枚をリリースしている。このレコードは、バーのバーテンダーがパンクスに出て行けと怒鳴りつけるシーンからスタートする。そこでバンドは結婚のお祝いと偽って、ギグを開催しようとしたからなのであった!SANOV Iはまだ活動中であり、2010年においても"聴きやすい"バンドである。デビューLP「Konec sveta」は2011年にPapagajuv Hlasatel Recordsの協力のもと再発される予定だ。

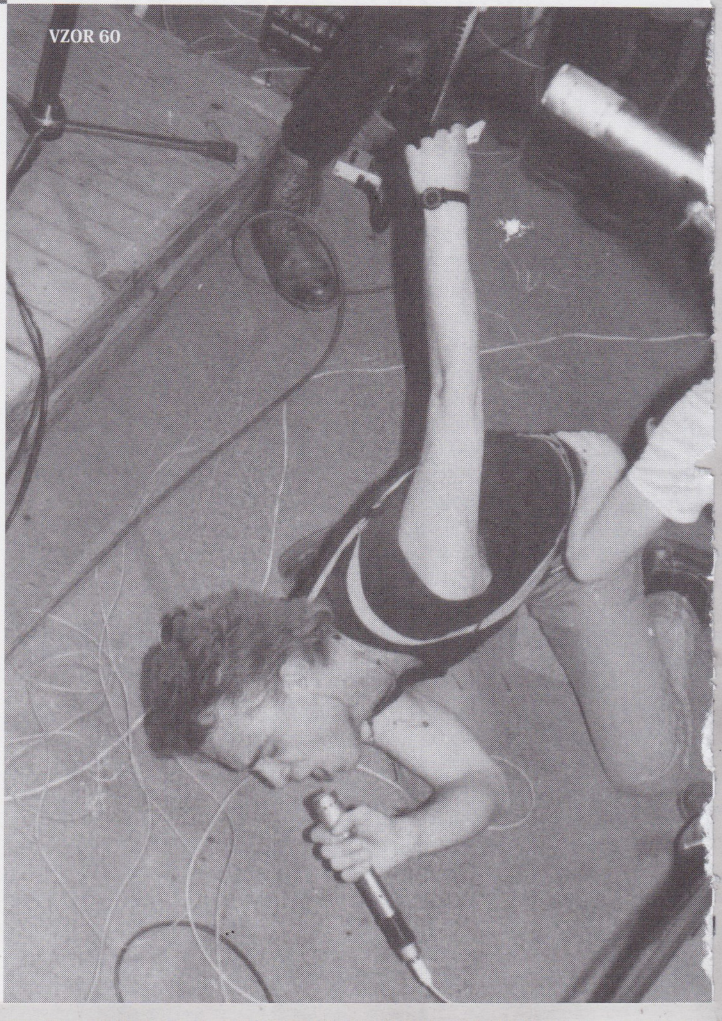
DO RADY!(1987 - 現在)

テプリツェからのもう一つのバンドで、結成は1987年。V3Sというバンドの解散後に登場した。強烈で歪んだパンクはANTI PASTIやABRASIVE WHEELSからの影響が見られる。F.P.B.やV3Sのように、1988年、DO RADY!もまたポーランドのヤロチン・フェスに非公式に潜入し、更にはプロ御用達のポーランドのスタジオでレコーディングする機会にも恵まれた。ドラマーが不在だったため、彼らはドラム・マシンを使用してレコーディングを行ったのだが(3曲のみ)、驚くべきサウンドで凄まじくブルータルなものとなった。1989年以降、何枚かのコンピレーションに参加、今でも時折プレイしている。

ZEMEZLUC(1987 - 現在)

ZEMEZLUCはブルノ出身で、典型的な、ストレートに突き進む3コードのポゴ・パンクをやっている。しかしかなりロウで、ブッ潰れたサウンドだ。特筆すべきはKRABATHOR(非常に有名だった90年代のチェコのデスメタル・バンド。一度日本ツアーも行っている!)のギタリストが結成当時在籍していたということだ!1989年に

VZOR 60





正式にリリースされる(悲しいことにテープのみ)。また1989年には80年代の曲を再録した楽曲をいくつかのコンピレーションLPに提供。解散後にメンバーの何人かはかなり格好良かったスラッシュ/クロスオーバー・バンド、L. D. TOTENKOPFを始めることになる。TELEXとしては1990年代と2000年代に、何度か再結成ショーを行った。

SMRT MLADEHO SEBEVRAHA(1987 - 1989)

このバンドは当時、地元の違法ギグで数度プレイしただけだったので、本当にオブスキュアだ。しかし1988年に録音されたスタジオ・テープがキラーなので取り上げないわけにはいかないだろう。シャープ且つタイトなパンク・ロックはイタリアの古いバンド、まるでPEGGIO PUNXや5° BRACCIOのようだった(しかし、彼らはそういったバンドは聴いたことがなかったと確信している!)。1989年以降にテープが正式に発表されるも、ヴィニールになることはなかった。このバンド名は"The Death Of a Young Suicidal Man"と訳すことができる。

VZOR 60(1988 - 1989)

もう一つのオブスキュアなバンドで、悪名高いマシンガンの銘柄からこの名は付けられた!ブルノ出身、彼らは1989年に出した最高のスタジオ・テープ、「Zbesily sen/Nasili plodi nasili」(The Crazy Dream/Violence Breeds The Violence)で知られている。ワイルドなポゴ・パンクとイカれたヴォーカル!非常に興味深い事柄として、1989年のギグで、80'sスウェディッシュ・ロウ・パンク・バンドS.O.D.のGoran Lindがヴォーカルとして加わったことがあるのだ!VZOR 60は2人のメンバーが西側諸国に移住してしまい解散。バンドは2000年代に入って再結成を試みるも、メンバー個々の温度差により実現せず。彼らのデモをヴィニールで再発しようという話しも出ていたが、今のところどうなるかは分からない。

1989年以前のチェコスロヴァキアのパンク・ロック・バンドで他に記述しておくべきバンドは、TRI SESTRY、NATEROVA HMOTA、E!E、DIVIZE T、OI OI HUBERT MACHANE、TRETI DOBA、SUCHY MOZKY、MRTVY MIMINKA、S.P.S.、MODRY TANKY、FRANTA MAST、FABRIKA、IQ60、STREDNE RYCHLE SIPY、MASOMLEJN、BRATROVA SVATBA、BURINKY II、AK PLECH、KUDY KAM、N.V.U.、CH.V.Mが挙げられる。

そして1989年11月、遂にチェコスロヴァキアの全体主義体制は崩壊するのだった…。

次章ではチェコスロヴァキアにおけるハードコアの誕生と、1989年以降のハードコア/パンクのヴィニール音源を紹介する!

80年代後半のチェコスロヴァキア・パンクス



SLÖA KNIVAR



スウェーデンのマルメ(Malmö)などを拠点に活動しているSLÖA KNIVARが1stアルバム「Ingen Klass Ingen Stil」を発表している。ワイルドなロックンロール・パンクと泥臭いメロディ、そこに酒焼けしたようなPatricia(BEYOND PINKのドラマーでもある)のヴォーカルがのった、当地のアンダーグラウンド・シーンでは近年あまり類を見ないスタイルのバンドで、頭を空っぽにして楽しめる作品に仕上がっています。ベースのPeter(親切)とヴォーカルのPatricia(姐御っぽくてちょっと怖い)が取材に応じてくれました。
ちなみに、どうもスウェーデンの人ってウメオ(Umeå)のバンドを全然相手にしていないような気がします。そして風呂くらい入れよ、と思わされたインタヴューでした(…読めば分かる)。



■SLÖA KNIVARとは英語で"Dull Knives"(切れ味の悪いナイフ/頭が鈍い)という意味になりますよね?どうしてSLÖA KNIVARと名付けたのですか?

Peter「うん、そうなるね。俺たちがこの名前にしたのは、スウェーデン語で"マヌケ"って表現にもなるからなんだ。その他の理由としては、ナイフを入れておく箱が俺の家の地下室にあるんだけど、その一つに"slöa knivar"って俺が書いててさ、もう一つの箱には"vassa knivar"て書いてあった。それの意味は"切れるナイフ"になるんだけどね」

■ヴォーカルのPatriciaはBEYOND PINKのドラムもやっていますよね?みんなの経歴をそれぞれ教えてもらいたいです。

Patricia「その通り。私はBEYOND PINKのドラマーなの。BEYOND PINKは私にとって初めてのバンドだったんだけど、バンドを始めた時に誰も楽器を何一つとして演奏できなかったのよ。それでBEYOND PINKをやりながら私は自己流でドラムの叩き方を学んでいった。ゆっくりとした行程だったけどね。私たちが楽器をうまくプレイできるようになるまでには、永遠に近いくらいの時間がかかったんだけど、今でも他のパンク・バンドと比較すると私たちの演奏はまだまだ未熟。けど結局そんなことって重要じゃないでしょ。BEYOND PINKはバンドっていうよりもなんだか変な家族みたいな感じだしね。練習しなきゃいけない時だって、私たちはうわさ話をしながらコーヒーを飲んでいるおばあちゃんみたいな感じなの。このバンドを止めることは決してないわね」

Peter「SLÖA KNIVARを結成するまで、俺はいくつかのバンドでずっとドラムを叩いていたよ。もう何バンドやっていたか本当に分からないくらいなんだけど、どのバンドも全然名を知られていないから大したもんじゃない。BACON WAGONって以前にやっていたバンドじゃ一回だけツアーにも行ったな。それだけだったけどね。だから曲を書いたりショーでプレイしたりっていうのはまだ新鮮に感じられるし興奮するんだ。SLÖA KNIVARが始まったばかりの頃はかなりぶざまだったよ。オーディエンスの前に立つとなると、どうも俺はナーヴァスになっちゃって、ドラムの機材を忘れたり呑み過ぎたりね。今でもぶざまな気分は感じているんだけど、昔よりかは良くなっている。それと俺はメンバーが酔っぱらってステージ上で醜態をさらすのも大嫌いなんだ。俺はショーに行くとき、そこに狂乱と楽しみを求めている。オーディエンスと向き合おうともしないクソつまんねぇ奴なんか見たくないんだよ。幸運なことに、Patriciaはステージ上では結構とんでもない奴になるから、俺は自分のペースで演奏技術を向上させられている。
DanielはDITT FELとSOUNDS LIKE VIOLENCEでドラムを叩いている。あいつは見ている限り本当に面白いドラマーだ。AndreasはFUTURE RUINS(ex MASSMORD)でギターを弾いてて、SHADES OF GREYではヘルプでベースを弾いている(本来のメンバーに子供ができたんだ)。AndreasとDanielはそれぞれのバンドでツアーにも出ているね。そう、Andreas以外は俺たちみんな元々ドラマーなんだよ。Phil Collinsみたいだろ」

■どうやってSLÖA KNIVARを始めたのですか?

Peter「いまいち覚えていないんだけど、PatriciaがSCATTERBRAINっていうバンドをやりたがっていて、それで俺たちは集まったんだと思う。彼女はSKITSYSTEMのAlexとバンドを始めて、そのバンドが格好良いなと思ったから俺も加入した。けどそれはうまくいかなくて、その後に改めて、新しいラインナップでSCATTERBRAINを始めたんだ。Patriciaはドラムじゃなくてヴォーカルを。BACON WAGONではドラムをやっていたMarcusがギターになって、俺はBEYOND PINKのClaraからベースを手に入れてベーシストに。Andreasもギターになったのは、俺が黄色いベースを弾きたかったからなんだよ。まず2回ショーをやってみたけど、それからは全然やらなかった。
2、3ヶ月後に友人から電話があって、俺のバンド(BACON WAGONの方だよ)にヨーテボリでプレイしてみないかって依頼があった。それで俺はイエスと答えたんだけど、結局BACON WAGONは行けなくてキャンセルした。だけどそれでもまだ俺はショーをやりたかったから、代わりにSCATTERBRAINとしてショーをやらないかってメンバーに尋ねたんだよね。みんなもやろうってことになったから、俺は会場に連絡してバンド名もSLÖA KNIVARに改名したんだ。Marcusは俺たちと一緒にやっていきたいようには全然見えなかったから、俺は学生時代から知っていたDanielに電話して誘ったんだよ。あいつは3回練習しただけで曲を覚えちまった。Danielが加入するまでは本当のバンドって感じじゃなかったな。それまでは、







他のバンドでプレイしていない時にやるだけの遊びみたいなもんでさ」

■PLASMATICSも連想しますが、具体的にどんなバンドから影響を受けましたか?

Patricia「私がやっているみたいな物凄くダークな声の女性、Wendy O'Williamsがいるから、PLASMATICSを引き合いに出されるのはとてもよくあることね。彼らと比較されても私は気にしないし、Wendy O'Williamsは素晴らしいから私としても光栄よ。他の多くの人たちは私たちをBAD BRAINSと比較する。私の声がHRっぽいというのも、多分ある程度は真実かもね。ただ、それらのバンドが必ずしも私たちのインスピレーションであるということは意味していない。自分の好きなバンドだけからインスパイアされるなんてちょっと信じられない。頭の中で鳴っている音楽や道を歩きながら考えていること、生活する上での全てにインスパイアされていると思うのよ。それに自分自身に制限を設けて他の何かと似たようなものを作ろうとすることは重要じゃない。自分たちのやり方で曲を作ろうとすべきだし、そうすれば自ずと出来上がると思うの。私はGhostface Killa(※アメリカのヒップホップ・アーティスト)の素晴らしいリズムや、"Joseph and the Amazing Technicoloured Dreamcoat"というミュージカル(※旧約聖書をベースにしたもので、欧米では有名らしい)の歌からは影響を受けているけどね」

Peter「俺はPLASMATICSは聴いたことがないけど、Wendyは驚くべき存在だし好きだよ。このバンドを始めた時に何からの影響を受けて始めたかは覚えていないけど、バンドや何かしらのスタイルから音楽的なインスピレーションを得たってことはないな。そう思っているし、そう望むよ。俺たちは楽しもうとしているだけだし、歌って実際に楽しんでいる。歌詞の内容が良くて、音楽が激しければ、それで俺たちみんなハッピーだしさ。言っておかないといけないこととして、俺は今、FASCIST FASCISTとSICK WEAPONSをめちゃくちゃ聴きまくっているってことかな。素晴らしいバンドだし、両バンドのフロントに立っているEllieに俺は夢中なんだ。彼らには感化されているけど、彼らみたいなサウンドはやりたくない。けど、音楽をプレイする衝動を彼らは与えてくれている」

■Patriciaが歌詞を書いているのですか? "Stay Dirty"の歌詞は面白いですね("食事作るの大嫌い〜シャワー浴びるの大嫌い〜なんで清潔にしてなきゃいけないの?"といったバカっぽい内容)。あれって真実ですか?ジョーク?

Patricia「そう、私が全ての歌詞を書いているけど、それが必ずしも私の意見だけを反映させているっていうわけじゃないの。時々は他のバンド・メンバーが感じていることをバンド内で議論して、それを歌詞に書いたりもしているし。私の歌詞にジョークは一つもないわよ。私はいつだって完璧に真剣。もっとも日常の生活に関する問題については、いくつか誇張しているかもしれないけどね。けど、ちょっとした些細な日常の問題を感じたとして、実際にそれはちょっとしたことなんだけど、それをおおごとに感じるときってあるじゃない。私ってジョークばっかり言う人間だけど、私が真剣にやっていることを受け入れられなくてもいいってわけじゃないのよ」

Peter「君が言いたいのは、"Stay Dirty"が真実かってことだろ?質問は、彼女がシャワーを浴びるのはマレなことかってことだよね?そうしたら、イエスだよ。あいつはクセーし、料理を作らせても最悪なんだ。おまけにトイレで皿を洗う。だから真実さ」

■アルバムのうち、"Stay Dirty"と"You're So Ordinary"だけ英語で歌っているのはどうして?

Patricia「頭に閃いた歌をその言葉で私は書いているの。もし英語で歌が湧いてきたら、その歌は英語になるし、もしスウェーデン語で湧いてきたらその歌はスウェーデン語になる。自分が何語で歌うか、言語を制限したり決めておくのは好きじゃないのよ」

■スウェーデン語の曲で"AntiCimex"というのがありますが、あれはどういう内容なんですか?

Patricia「"AntiCimex"はスウェーデンの素晴らしいパンク・バンドのことだけじゃなくて、スウェーデンの害虫駆除の会社名でもあるのよね。家の中に生息しているその手の小さな虫に、物凄く生活を苦しめられたことがある。私は家族と一緒に古くてボロい家に暮らしていたんだけど、もうピカピカで清潔な家なんかじゃなくてね。私がこの歌詞を書いたときってマルメに住んでいたんだけど、もうあらゆるアパートメントに多かれ少なかれゴキブリがウヨウヨしていて。だからこれは、掃除もしないで不潔な環境で人間が育つと、どんな影響を個人のパーソナリティに与えるかっていう歌なのよ」

■ちなみに"Krossa Mig Som En Lus"でギターを弾いているChristoferって誰ですか?

Peter「Christoferはデス/スラッシュ・メタル・バンド、"DARKANE"のギタリストなんだ。彼とは友達でね」

■アートワークにある、"ソーセージと男性の図"はどういう意図で使っているのでしょう?この男は政治家ですか?



Peter「うまそうなソーセージという餌につられて引っかかった奴って絵で、俺が描いたからこれの意味を俺は知っているはずなんだけど、ハッキリしないんだよね。思いついたのをただ描いているだけだから。色々と俺も政治的な意見は持っているんだけど、政治的な絵を描くこととはできるだけ距離

を置いておきたいんだ。誰もそんなのに興味ないだろうしさ。ただ(政治に関する)基本的な姿勢は決して変わらないし、本当にうんざりしているよ。だから俺はそのうんざりを絵にするんだろうな」

■あとアルバムの裏ジャケ、その左下にある絵って何ですか?



Peter「それはイタズラ書きだよ。みんなにクソッタレって言って廻る小男だね」

■みんなマルメに住んでいるんですか?SKITKIDSやSISTA SEKUNDEN、BEYOND PINKとか色々とバンドがいますよね。それにMODERAT LIKVIDATIONも。

Patricia「私とドラムのDanielはマルメに住んでいる。PeterとAndreasはヘルシンボリね。マルメのハードコア・バンドは大好きよ。特にSKITKIDS、彼らは常に私のお気に入りのバンド。マルメは大きすぎず小さすぎずで、生活するにも良い街よ。あなたもみんなも知っているようにパンク・シーンがここにはあるけど、十分に規模も大きくてショーは楽しいし、人も沢山集まるわ。それに色々とタイプの異なる人たちも受け入れている。街自体がそれほど大きくないから、色んな種類のパンクスが一つのショーに足を運ぶ。スキンヘッズにスケーター、クラスト・パンクス、それに14歳のモヒカンの子も一緒になるの。素晴らしいわよね。他に読者にオススメしたいマルメのバンドと言えばHÅRDA TIDER、SELF ABUSE、TERRIBLE FEELINGS、NOBELKOMMITTEN、そしてDITTFEL(私たちのドラマーDanielが別でやっているバンド)ね」

Peter「良いね、俺も君が挙げたバンドは好きだよ。けどMODERAT LIKVIDATIONのことも好きなのか?君が思っているような魅力的な奴らじゃないんだぜ…。SISTA SEKUNDENは日本に行っていたから、ショーを楽しんでもらえたらいいな!」

■マルメのハードコア・シーンはどんな感じですか?会場やパンク・ショップやレーベル、ジンなんかはどうなんでしょう?

Patricia「現在の状況はかなり良いわよ。みんながショーを企画している会場がいくつかあってUtkantenやCafé Revolt、Bodoni、Far i Hattenとかね。パンク・ショップっていうのがどういう意味か分からないけど、もちろんボンデッジ・パンツや鋲を買うことのできるパンクの服屋ならある。ただそういった店がパンク・シーンと何かしら関わっているとは思えない。レーベルもマルメにはちょっとだけあって、良いレコードをリリースしている。Instigate Records(SISTA SEKUNDENのAndyがやっている)やPunks Only Records(SISTA SEKUNDENのDennisがやっている)、Jaguar Trust Records(BALANCEのKalleがやっている)とかね。レコードを買うならRundgångっていう良い店もあるわよ。あとは中古盤を買える店がいくつか。残念ながらジンの置かれている状況はそれほどでもないわ。2000年代の初めには盛り上がっていたんだけど、ブログの存在が大きくなってからは紙のジンはどんどん減っていっている。トイレやソファに座りながらジンを読んだりできない、パソコンの前に座らなくちゃいけないなんて最悪よ」

Peter「けど少しだけならジンに良い記事を書いているライターが、マルメにもいるんだ。ただハードコアについてはあいつら触れないんだよな。彼らの多くはコミック・アーティストでジンを作り、そして書籍や雑誌の出版に携わるようになる。それでもジンをまだ作っている人も多いけど。マルメからは常に新しいアーティストも出てきている。俺が知っている限りでも、Liv StrömquistにSara Hansson、Nanna Johanssonはジンを作っているね。Sara Granérも作ってるはずだ。全員良い線行っているよ」

■あなたたちから見たストックホルムとウメオのシーンの印象を聞かせて下さい。多分、ストックホルムがスウェーデンで一番大きな都市ですよね。マルメとは全然違いますか?ウメオのバンドは日本でも結構人気があるとは思います。

Peter「俺たちウメオには行ったことがないんだ。俺にはかなり近親交配な印象があるね。どのバンドも多かれ少なかれ同じメンバーが在籍しているだろ。お互いに5つくらいバンドを掛け持ちする以外に、あそこじゃ他にやることがないんじゃないかな。そんな友達のグループに感じているけど。多分、雪と暗黒に覆われたあの土地で生き抜くためだろうね。ウメオにドライヴするのなんて、ここからイタリアに行くのと同じくらいだよ。けどいつかは行ってみたいと話したりはしているけどね。
ストックホルムについてはよく知っている。"Who killed marilyn"っていう良いクラブがあって、KAMIKATZEとTHE PERCULATORSのメンバーが運営しているんだ。あいつらはイケているスウェーデン人だ」

Patricia「ストックホルムってマルメよりもシーンが分割されているようには思うけど、よそ者が判断するのは難しいわよね」

■今後の予定を聞かせて下さい。

Peter「ちょうどレコードを出したばかりだけど、2011年のツアーについても話し合っているんだ。けど現時点ではまだ計画しているだけだね。みんなすぐツアーに行くにはちょっと忙しすぎてね。Andreasは新しい仕事、映画館の機械工の職を得たばかりだし、Patriciaは法律を大学で勉強している。Danielは教師として働いていて、3つのバンドで素晴らしいドラムを叩いてメチャクチャ沢山ショーでプレイしているね。俺は家にいて新曲のリフをできるだけ作ろうとしているんだ。次の作品は前作ほど時間をかけずに出すつもりでいるよ。だから多分、来年の夏には何かしらリリースしてツアーにも出るかな」

■どうもありがとう。日本の読者に一言お願いします。

Peter「恐れることなくロックンロールやろうぜ。ありがとう!」



11月19日　高田馬場音楽館

レーベルがリハーサルも兼ねてなんてふざけた告知していたが、冗談じゃない。日本勢はいつでも本気だしMIDWAYもそのつもりでやって貰う。メロディック・バンド来日の初日がハードコア勢で固めるのは異例?かもしれないが固執した考えなど抜きに、バンドに楽しんで貰おうと企画したまでだ。今回東京は3回GIGがあるが、HARDCORE DAY、MELODIC DAY、EMO DAYとどの会場もバンドが対バンを楽しめる企画を組めたと思うが、始まるまでこちらの思惑とは裏腹にジャンルによる分散も懸念された。しかし当日は50人以上の集客がありスタートとしては上々といえるGIGが行えた。初めて使った馬場の音楽館だが、地下に潜る感覚はまるでLIVEハウスでプレイするかのような興奮を覚えた。しかもリーズナブルなのにスタジオが広い!こんな良い場所があったとは…。スタートは春日部FAST COREことEWC(EXISTENCE WITHOUT CAUSE)。メンバーにはFASTKILLやトロゴリのメンバーが在籍し90's POWER VIOLENCEから触発された激音を放つ。企画が行われる度に自身が発行するZINE"人と人"を今回MIDWAY STILL来日特別号として作ってくれたVoリーダーである山崎には感謝。メロディック繋がりでメンバーに捧げるまさかのLEATHERFACE"HOW LONELY"カヴァーは会場に笑いを起こした。埼玉県の春日部を拠点に毎回様々なバンドを呼び、ローカル・シーンの活性化を目論む彼らの姿勢には頭が下がるばかりだ。次は自身のバンドAGAINST THE GRAIN。1st 7インチがいいタイミングでリリースされたので、レコ屋のコメント等で何かを感じたら手に取って貰えたらと。で、現在ギターに厚みを出すべく2ndギタリストを募集中!極限のスピードと混沌。このキーワードに興味があれば!今回の企画は基本はUK。とくればFILTHY HATEでしょうと思うのは俺だけですか?TANTRUM繋がりで今回出て貰ったが、MIDWAYを知っていたshii君が絶賛してくれてて、他のメンバーも音源を事前に買って予習してきてくれた事は嬉しかった。良いモノは良いって事なんです。CONCRETE SOXやELECTRO HIPPIESバリバリなSTENCH COREが炸裂し、MIDWAYメンバー3人も最前線で喜んでいた。日本のバンドはホント凄いなとメンバーが口を揃えて言ってきた。当たり

思い起こせば、イギリスのバンドのJAPAN TOURに同行するのも4回目となった。メンバーの人柄の良さもあり苦労することもなく楽しい思い出だけが残る。あっと言う間に過ぎ去った記憶を頼りに回想記をここに。

TEXT:PALA(AGAINST THE GRAIN)

MIDWAY STILL JAPAN TOUR 2010 雑記



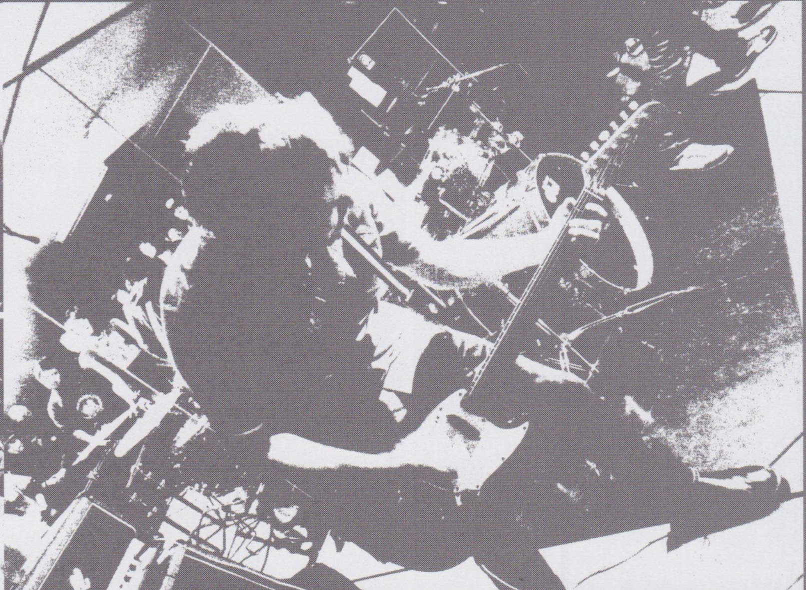
前だぜ!いよいよ日本一発目となるMIDWAYが登場。実は俺達が終わった後速攻セッティングを始めてて、まだ次じゃないよと伝えると慌ててゴメンだって(笑)。逸る気持ちは最後に爆発させてくれよな!いわゆるバンド・スタートから現在までずっと活動を続けてきたバンドではないので、所詮は再結成組的に捉えていた方も少なからずいたと思う。その通りかも知れない。だが個人的には新作を聴いてそんな考えなど直ぐに消えうせた。90年代に作った過去2作を遥かに凌ぐ出来だからだ。インディー・ロックをこよなく愛す人間や過去の作品が全てな方々からはパンク過ぎると叩かれてるらしいが冗談じゃない。こんな音源そうそう簡単に作れないぜ。正直言うとSKIMMER、SOUTHPORT、LEATHERFACEの新作は良いがベストじゃなかった。でもMIDWAYはベストなのだ。話をLIVEへと戻そう。出音から完璧。バンドだけで飯が食えてた時期もあったバンドだけに巧い。不安など一切感じさせないSAD MELODIC。この日は古い曲を中心にプレイ。恐らく皆が古い曲を期待してたと思ってであろう。まぁ一発目なんでテンションも上がり、がなったりする曲もあったり、ギターのアームが使えねーと投げ捨てたり、"HEAVY METAL"と連呼したりとオーディエンスの期待に応え曲を連発(笑)、予定してなかったであろうありえない曲数をプレイ。FILTHYメンバー盛り上げてくれてサンキュー!MY BLOODY VALENTINEの名曲カヴァー"YOU MADE ME REALIZE"はブレイク部分を客に煽る!そこへ待ってましたとSPY MASTERのHDK(笑)"♪YOU MADE ME～REALIZE!!!"と叫び曲は最高潮へ!来日時には好きな曲で必ずダイブを決める男だけに今回も大満足であろう。楽しい時間もアッという間。ヘトヘトのメンバーも笑顔で初日を終えることが出来満足していた。



11月20日　京都NANO

渋滞、渋滞。甘かった。もっと早く出発するべきだったと後悔遅し!リハ時間など完全に間に合わずスタート・ギリギリで到着。ご迷惑おかけしました。SKIMMER、SOUTHPORTもここNANOでプレイしたので馴染みの場所。雰囲気があって良いハコです。長いドライブ後、落ち着く暇もなくGIGはスタート。今京都のメロディック・シーンで話題を呼んでいるらしいKIRIE。面白いバンド名ですね。若いのに演奏力、テンション共に抜群。こりゃ話題になるわ。事前情報だとメガス(MEGA CITY FOUR)っぽいとの事でしたが、個人的にはUKメロディックっぽさは少なかった気がします。デモ売ってたんですが買い忘れちゃいました。AIWANA、BEER WULF(トモ君の作ってくれたヴィーガン・サンドウィッチには味と共に感動)とex-I EXCUSEのメンバーのバンドが続き、お次は日本へMIDWAYを呼ぶ切っ掛けを作ったトングー君のバンドLIONSの出番であります。ハコの音止め時間が厳守されているようでなんと4曲のみ(笑)。この来日を誰よ







りも楽しみにしていたハズなのに残念。が、逆に押し迫った時間の中での演奏が功を奏し最高のLIVEを魅せてくれた！演奏力、テンションといい神がかっていた！何度か彼らを観ているがまだまだ発展途上段階であり、盛り上がるLIVEなど皆無（笑）だったが、ちょっと見ない間にメチャクチャ良くなっててビックリ。本人達は全然ダメと言ってたが、何言ってやがんだ！まじ最高だよ！でした。自主でリリースした7インチが自信へと繋がったのでしょう。まだまだ話題となっていないでしょうがこの７インチは私の2010年のベストEPにランク・イン！SAD MELODIC（特にメガスの2nd）好きなら即買いの１枚。そして西武ライオンズ・ファンも（笑）。あっという間にLIONSは終わり東京から参戦したMIDDLEがプレイ。

鶯谷（WHAT'S UP）でしかやらないと言ってませんでしたっけ？厳しいリーダーのバンドはLONGBALL TO NO-ONEの影は残しつつもやはりブンさんだなと思わせるサウンド（サンディエゴ系）に日本語歌詞。しかしあからさまに分かる日本語を乗せておらずLIVE後、英語の曲やってましたよね？と聞いたらやってねーよだって（笑）。音を作るのも巧ければ歌詞も巧い。流石ベテラン。ちなみにギターがGORDON SMITHからGIBSON SGに代わってました！でMIDWAYへ。もうLIVEもスムーズですわ。PAULがしゃべる、しゃべる！で持ち時間が少ないと伝えるとおしゃべり控えサクサクとプレイ。昨日のLIVE後、古い曲もいいけど皆新作をやって欲しいと望んでると伝えた。それが通じたのか新作中心プレイ。やっぱ"NOTE TO SELF"は全曲最高です。"SAD"って言葉しか思い当たらないメロディーの良さがLIVEでも伝わる。曲数は少なかったが、昨日よりも良い音出してました。

打ち上げ場所でテレビ観れるか？とうるさいPAULとDEC。どうやらアーセナルの大事な試合があるらしい。やっぱイギリス。サッカー狂です。LIVE以上に盛り上がってた（笑）。

その後宿泊先のトングー・ハウスへ。彼の知り合いの来京バンドはほぼお世話になってるんじゃないでしょうか？昔ながらの長屋で二階が合宿所並の広さ。トングー宅のおもてなしも素晴らしく、訪れる度に楽しみにしている九州の生酒は格別。来年もまた送って下さい（笑）。

11月21日　名古屋MEMOLY POPS

NAVEL企画と言えばこの場所。広めのバーです。そのNAVELがメンバーの仕事の都合でキャンセルとなったのはMIDWAYのメンバー含め残念だった。また来年実現しましょう！

ここで一つ、このツアーで最も神がかった人間がいた事を話そう。MOL。独りぼっちの弾き語り野郎。英名ウィスキー・マン。和名千原ジュニア。奴の存在なしには名古屋に華は咲かなかった。やりすぎて最後ナーバスな出来事に繋がったのは傍から見てた人間は笑ったが、本人は笑えず。飲んでも飲まれるってことで！そのMOLがトップ。まさかのMIDWAY STILLの"DISAPPEAR"カヴァー。沁みました。前説でのディスリも更に会場を沸かせるという凄い漢です。自分の演奏後も各バンドの演奏中に絡みまくり！やってくれるぜMOL！次は名古屋の若手メロディックMINIASPACE。ドラム・ヴォーカルの3ピースでI EXCUSE影響下のスピーディーなメロディックで、ギターワークや５弦ベースが印象的。最近の若手は演奏巧いです。お次は昨日時間の関係で全力を出し切れずリベンジを図るLIONS。でも6曲ってどないやねん（笑）。もっとやれと言われ新曲含め2曲追加。やっぱ地元の方がテンション高くて良かったな。けど新曲が物凄く良かった！完全LIONSびいきです。カッコイイから仕方ないですよ。来年はいよいよアルバムか？皆期待してます！ラストMIDWAY。今日は時間の制約はないよなと、昨日出来なかった鬱憤を晴らすかの如くプレイ。また曲間にPAULがしゃべる、しゃべる。SUPER APEことDECも。機材が良かったのかかなり轟音でプレイ。BASSのRUSSELLはうるせーよ！と耳を塞ぐ始末！しかし観る側は最高。音的には一番良かったかも。LIVE後、案の定メンバーは耳がおかしいと嘆く（笑）。今日は日本のメロディック・ファンには馴染み深いBOB DYLANの"I WANT YOU"を披露。微妙（笑）。ツアー用に録音したカヴァー・ソングEPからLEATHERFACEの"BOWL OF FLIES"も。カヴァーはマイブラが一番でした

ね。やっぱ。ライヴ終了後そのまま東京へ。深夜なのに渋滞とは…。

11月22日　西荻窪FLAT

平日なので、入りが厳しいと思われたがLIVEスタート時には仕事終わりで駆けつけてくれた人達も多く良い雰囲気。ZERO FASTはいつ観ても熱くなる。LIVEは毎回ブレが無く完璧。現行3ピース・メロディックの最高峰なのはLIVEを観れば判る。込み上げる熱さとSADなメロディーに知らず知らずと拳が上がる。しばらくLIVEを観ていなかったがマジ最高。傑作の1stは永らく廃盤状態なので是非再発して欲しい。新曲もバンバン作ってるようで2ndアルバムも近いうちに出るんじゃないでしょうか?そういえば1曲入りのデモ・テープも持ってきていてそれがまた最高なのです。新作が待ち遠しいバンドですわ。続いてアルバムが好評だったガールズ・メロディック・トリオupstairs。LIVEで笑顔になれるのは久々。PENETRATES直系のファスト・ソング!これは誰が観ても気に入るんじゃないでしょうか?シリアスさなど皆無なホンワカ雰囲気を醸し出すメンバー。MIDWAYメンバーも笑顔だった(笑)。SKIMMERのケビンだったらゼッテーLIVEそっちのけだろうな。FILTHYのshii君も気に入ったようで近いうちに一緒にLIVEやる日が来るでしょう。まさにCIRCLE OF FRIENDS。そんなshii君は自身が出た初日以外の東京GIG全て観に来た!ことに感謝。これが異色SPLITリリースに繋がるとは誰が想像したでしょうか(笑)。3rdアルバムが待たれるベテランURCHINは変わらず安定したLIVEを見せる。時間が経つにつれスタジオ内もかなり人が増え、最高の状態でMIDWAYもプレイ。名古屋と一緒のセットリストだったと思うが、正直あまり覚えてません!何故だろう?そんな飲んでた訳でもないですがちょっと見飽きてたのかもしれません(笑)。ふざけんなですね。しかしPAULはどのLIVEも最高に良い声出してて喉が全く潰れない。だいたい来日バンドは途中で声出なくなるパターンですが、彼曰く腹から声出してるから喉なんか潰れる訳ねーだろ?だって。すんませーん!なめたこと言って。さぁ明日はいよいよラストGIG。

11月23日　新宿NINE SPICE

数あるハコの中でも音の良さはトップ・クラスなNINE SPICE。SKIMMERの来日時、あまりにも出音の良さに感動したのを思い出す。ここでMIDWAYもプレイ出来た事は西田君を始め、NINE SPICEのスタッフに感謝したい。そしてラストを飾るのに華を添えてくれたmalegoatとCOMEBACK MY DAUGHTERS。共に90's EMOを独自の視点で消化しオリジナル・サウンドを作ったバンド。しかし今回このメンツを疑問視する声も少なからずあった。malegoatは別とし何故カムバックなのかと。アンダーグラウンドからスタートし現在はPIZZA OF DEATHに籍を置く。しかしPIZZA所属バンドってだけで未だ一線を引かれてしまうんだなと。来日が決まった時点で絶対に1日はカムバックに出て貰おうと考えていた。勿論集客を考えてもある。そしてギタリストの白倉がUKメロディックを心底好む人間だから。バンドの数だけ考え方も様々だが流通が良く、名の知られたレーベルから音源を出せばその分音源は広まる。じゃあその名を利用してやろう。その程度じゃないのか?確かに最近の曲中心のセットリストもありMIDWAYメンバーもこれはPOP過ぎると言った。しかし過去があってこそ現在があるようにサウンドを突き詰めた結果が今のカムバックであるのは確かだ。カムバックはこの辺で。malegoatはSTIFF SLACKから出たアルバムがあまりにも良くこんなバンドいたのか?と完全遅吹き。WATERSLIDEから出てたのは知っていたが聴いたことありませんでした(笑)。LIVEは激テク集団が放つ音魂に圧倒。メロウ過ぎるEMOとは違い激しさと静寂。でも激情ではない。どの辺でLIVEをやっているのか知らないがもっと多くの人間が知って良いバンド。是非ハードコアと一緒にやって欲しい。バンド以外にも今回この企画を盛り上げてくれたのが映像集団KAMPSITE。最新のメディアを利用しリアル・タイムで会場に来れなかった人がパソコンでLIVEを体感できる画期的なシステム。LIVEに行った人も4台カメラ・ワークによる自分の目とはまた違った画が観れるという凄いシステム。未だi-podは認めずウォークマンを使用してますが時代は常に進化してるわけで。でもCDとアナログの両フォーマットで出るならアナログ買いますけど。KAMPSITEはメジャーもアンダーグラウンドも関係なく面白い事を一緒にやろうと考えている集団なので是非利用してみる価値があるかと。いや～もうMIDWAYの事はよくないですか?もう彼らについて書くことないっす。PAULが前日飲み過ぎ+風邪をひいたのだか出番まで下痢が止まらずナーバスで曲間の喋りがほとんど無かったラストGIGっていう。LIVE自体は変わらず最高でしたのでKAMPSITEがリピート放送するはずなのでそっちで確認してみて下さい。



さてここ日本で言える確かな事は、彼らを待ち望み、本気で好きな人間がいる。しかし実際イギリスでの評価はかなり低い。SHOWもその場に飲みに来た人間がほとんどで客など知り合いが5、6人程度とのこと。メンバー曰く最前列で拳突き上げる人間など皆無だと言う。冷めてんなーイギリス人。でもそれってホントなんだろうか?この目で確かめる必要があるんじゃないか?そんな期待と不安を胸に発行人と共に本場イギリスへと旅立ちます。

NERVESKADE

NOISE FROM P.D.X!!!!



LEBENDEN TOTEN～ATROCIOUS MADNESSからの洗礼をタップリ受け～と言えば、彼等がどんなバンドか想像して頂けるでしょーか？
研究されたNoise＆楽曲、怒りに満ち溢れるステージングを武器に、各国に存在するヘッポコ・ノイズコアを蹴散らす勢いで活動しまくるメンバー平均年齢22.5歳イケイケ・ヤングPUNKS！（頼むからトラブル起こすなよ…）NERVESKADE日本上陸間近！メンバー唯一、知的なGu&VoのJAKKEにインタヴュー！

INTERVIEWED:HIROSHI@D-CLONE　TRANSLATED:SAZANAMI@PUNK AND DESTROY　PHOTO:NUKKA

■君達のサウンドはすごく日本的だと感じるけど、影響を受けたバンドは？

「NERVESKADEは多くのバンドに影響を受けてると思うよ！メンバーそれぞれが聴く音楽も全然違うしね。だから曲作りはそれぞれが色んな要素を持ち寄って作る感じ。中でも一番大きな影響はDISORDER、CONFUSE、RIPCORD、GLOOM、ATROCIOUS MADNESS、LEBENDEN TOTENかな。それからD-CLONE、ZYANOSEなど、新しい日本のバンドからも！」

■PDXは素晴らしいパンク・シティーだったけど、何であんな沢山のパンクスがいるの？PDXパンク・シーンについて教えて。

「ポートランドはUSAの中でベスト・シティだと思うよ。たくさんのPunksがアメリカ中から移り住むんだ。他の地域と比べて日々の暮らしにかかるお金がとても安く済むんだ。パンク・シーンはほんとに大きいよ、新旧問わず凄いバンドがたくさんいるし、良いレコード屋やレーベル、おいしい食べ物…素晴らしいものが沢山」

■君達のギグは凄く暴力的で怒りを感じるけど、一体何をそんなに怒ってるんだい??そのパッションはどこから来るの？

「僕らのパッションは日常生活と生きている意味を見つける間から感じるものなんだ。生きている間に皆色々不満や問題を抱えてて、ライヴをやる時にその感情を吐き出すんだ。暴力的な部分はその結果だね」

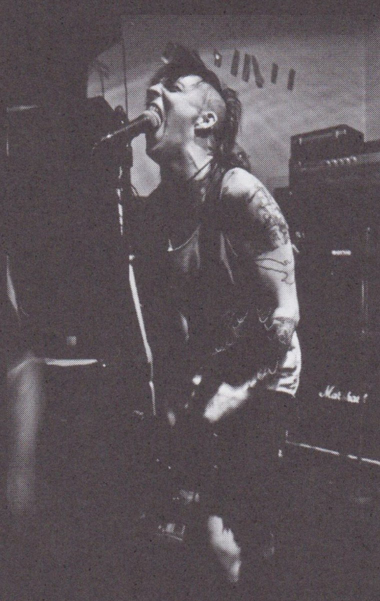
■資本主義アメリカ政府の事、どう思う？

「僕らは全員アメリカの社会構成に対して不満を抱いている。理論的には聞こえはいいんだろうけど、現実的には上手くいかないからね。アメリカ政府は貧富の差を広げている。少数な金持ちはもっと金持ちになり、大多数の貧しい者はもっと貧しくなっていく。これは皆が被害者になる、欲望と権力争いの終りのないサークルだよ」

■君達は仕事してるの？どーゆーライフ・スタイル？

「今はね、これはNERVESKADE史上初めて









のことなんだけど、全員が仕事してるよ。長い間僕らは働いていなくて、食べ物かっぱらったりして安い家で過ごしてた。3つの寝室に18人で暮らして、毎月家賃はそれぞれ25ドルで済んだから働かなくてよかったんだ。でも今は日本に行くためにみんな仕事してるんだ。ERICとIANはピザ屋で、KALVINはレストランの皿洗い、僕は倉庫で荷物を配送してるよ。クソつまんないけどね！働いてなかった時はみんな音楽をプレイしたり、ライヴを企画したり、酒飲んだりしてた」

■君達は全米飛び回って沢山のギグしてるけど、現在アメリカでアツい土地とオススメのバンドを教えて。

「NERVESKADEはこれまでにアメリカ中、小さな町から大きな都市までほんとにたくさんのライヴをしたよ。今はニューヨーク、ロサンジェルス、バージニア州リッチモンドがポートランド以外ではとってもいい場所だと思うよ！オススメのバンドはニューヨークのRAW VIOLENT PUNKなPERDITION、フロリダのアグレッシヴでセンスある、FRAMTIDみたいなバンドMAUSER、ニューヨークのDISCLOSE・DISASTER・DISCHARGEウォーシップなNOMAD(Voは東京出身で日本語ヴォーカル！)、ロサンジェルスのスペイン語Vo RAW D-BEAT HCのKRUEL、同じくロサンジェルスの80'sスタイルなスパニッシュPUNK、MUNDO MUERTOあたりかな！」

■今までのリリースと今後のリリース予定は？

「これまでのリリースはデモ・テープ、Whisper In Darknessからの1st 7"、2曲入りの「Insanity/Forced to live」7"、Black Waterからの12"があるよ。今後はD-CLONEとのSplit、LEPROSYというバンドとのSplit、単独8"のリリースを予定してるよ！」

■君はFRANK、CHANEL、KEITH(LEBENDEN TOTEN)を尊敬してるように見えたけど、彼らは君にとってどんな存在なの？

「僕らはNEVERSKADEをはじめてから年配のパンクス達から色々なサポートをしてもらったんだ。FRANKとKEITHからはリリースもさせてもらってありがたく思ってる。僕らはATROCIOUS MADNESSとLEBENDEN TOTENから大きな影響を受けてるから、好きなバンドのメンバーから色々とサポートをしてもらう事はとても嬉しい。彼らと近い事はすごくラッキーで彼らからの尊敬は物凄くありがたく思ってる」

■君はヴィーガンだけど、それを行っている理由は？

「僕はヴィーガンで、KALVINはヴェジタリアン、ERICとIANは何でも食べるよ。僕がヴィーガンな理由は自分の意思で選択ができないものの命を、人の都合の良いように勝手に奪う事は良い事ではないと思うからなんだ。それは人間にも通じる事で、人がどういう風に生きるべきかとか、人のやりたくない事を強引にやらせる事と同じだと思うんだ。ごく基本的な人の権利と動物の権利なんだ」

■メンバーが他にプレイしてるバンドは？

「僕らみんな、色んなバンドでプレイしてるよ。KALVINはBOG PEOPLE、FUNERAL PARADE(Goth-punk)、BI-MARKS、ATHETIK。IANはSEPTIK SYSTEM、BI-MARKSで、ERICはBI-MARKS、そして僕はFUNERAL PARADEでVoをやってるよ。ERICとIANはもう一つ新しいバンドをKEITHと始めたけどバンド名はまだ決まってないみたい。僕はDEATHCHARGEでもプレイしてた」

■俺はアメリカで沢山のCOOLなパンク・カップルを見たけど、パンクス同士付き合うのがフツーなのかい？パンクス恋愛事情をおしえてくれ(笑)、詳しくね！

「ははは(笑)、僕はパンク同士がデートする







NERVESKADE(from P.D.X) & D-CLONE
OBSCENE NOIZE VIOLENCE
JAPAN TOUR 2011

3/5 名古屋@HUCKFINN
w NAGOYA CITY HARDCORE
3/6 大阪@HOKAGE
w HARDCORE VICTIM
3/7 香川@RAIZIN
w LIBERATION OF MIND
3/8 福岡@KIETHFLACK
w RESIST OR COMPLAIN?
3/9 広島@BORDER
w NO U TURNS
3/10 津山@K2
w STUDIO HELL
3/11 四日市@CHAOS
w 激烈音隊突撃開始
3/12 東京@EARTHDOM
w BLOODY REVOLT
3/13 岡崎@BOPPERS
w 発狂破壊ギグ

のはとても当たり前のことだと思うよ。日本ではあまり無いことなの?(アッサリ…)」

■日本では最近、毎月のように海外のバンドが来日しているのだけど、それ以上に国外のバンドと交流を持つ機会が多いアメリカのパンクスの、国外のバンドのツアーを受け入れる体勢や企画をオーガナイズする時の仕方を教えてくれるかな?

「アメリカでツアーを立てることはすごく簡単にできるようになってきたんだ。シーンに関わりがある人間なら良いライヴをブッキングしたいときに誰にコンタクトしたらいいか分かるから、その人にコンタクトを取るんだ。海外から来てるバンドだったら、アメリカで運転手と機材を借りる人を見つけてその人にブッキングしてもらうんだ。ブッキングする人はどの町でライヴを行うか決めたり、食事の事を考えたり、何処に泊まるか、どのバンドと組むか、そういう事をオーガナイズしてもらうんだ。互いに協力し合う近い仲間なんだ。良いツアーをブッキングしてくれる人を見つければ、その人が各町の良いコンタクトを取るんだ」

■君達みたいに若くて、ノイジーで、イケイケなバンドがジャパン・ツアーをするのは初めてだと思うんだけど、意気込みを教えて。

「日本に行くのはすごく楽しみにしてるよ!日本のパンク・シーンからは大きな影響をうけてるし日本へ行ってライヴをやれる事を誇りに思ってる!日本に行ってノイズをぶちかましてパンクス達と楽しい時間を過ごすつもりだよ。FRIENDLY AND VIOLENT!」

■日本のパンクスに一言!

「AAAAAAAAAAAHHHHHHHHHHHHHHGGGGGGGGGGGRRRRRRRRRRRRRRHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHH」



DE HØJE HÆLE

デンマークK-TOWNパンク・ロック・バンド、DE HØJE HÆLE。シングルに続きMOONLESSのTommasが主宰しているレーベル、HJERNESPINDからアルバム「Skal Vi Aldrig Videre?」をリリースしたばかりなのだが、これが一歩先を行くサウンドで驚いた。ニューウェイヴ～KBDパンク～ガレージなどが混ぜ込まれた一癖も二癖もある音像で、"レトロ且つ新しい"領域に踏み込んでいる(…と思う)。そんなわけで、メンバーに質問をいくつか送りつけてみました。回答は全てバンドとしてのものです。

■まずはDHHの結成から現在に至るまでのヒストリーを紹介してください。

「Magnus(ギター/ヴォーカル)とEbber(ドラム)とが2度ほどジャムったのが始まりなんだよ。そこにMyre(ベース)が加わった。MyreはHÆRVÆRKというアナーコ・ハードコア・パンク・バンドをやっていたが、今はこのバンドは消えちまってる。12"とCDをリリースしていたよ。Magnusは様々なプロジェクトで活動してたな(そのうちの一つがHUR)。DHHが今プレイしている曲の中には、俺たちが一緒にやる前にMagnusが書いたものもあるし、DHH用にアレンジし直したものもあるんだ。Ebberもいくつかのパンク・バンドをやっていたな…」

■バンド名って"The High Heels"(ハイヒールの複数形)になるんですよね。この名前の意味は?

「まさにその通りさ。英語で"The High Heels"って意味になるよ。でも他に響きがいいからっていうのも理由にあるぜ…」

■DHHのサウンドは、典型的なパンク・ロック・バンドとは全然別物に感じるんですが。DHHの音楽的なルーツは何ですか?DEVOの要素も少し連想します。

「音楽をやってるデカい目的の一つが、他とは違うサウンドを鳴らすことにあるよ。ほとんどの曲をMagnusが書いているというのが疑いようのない事実さ。Magnusはパンク畑の出身じゃないし、少なくとも彼のインスピレーションの中心はパンクだけじゃないんだ。それに俺たちは特定の音楽を目指しているわけでもないしな。クールなサウンドだと自分たちでも思えて、それがしっくりくるまでジャムるだけさ…」

■とにかく、あなたたちのアルバムは最高です!1曲目、「Skal Vi Aldrig Videre?」のオープニングにある会話は何ですか?この曲ではどんなことを歌っているのですか?

「イントロはあるデンマーク映画の台詞なんだよ。3人の女の子が登場し、ハイスクールでおしゃべりしているんだ。その中の1人の台詞に"彼がハイヒールを好きじゃないなら、誰か彼のお尻を蹴とばしちゃいなよ"ってのがあってね。こんな素晴らしい台詞、レコードに使わないわけにはいかないだろ…。「Skal Vi Aldrig Videre?」は同じ場所に留まらずに動き続けることについてさ」

■「Hak Hak Hak」のメロディーの一部が「Batman」のテーマ曲にかなり似ているなと思ったのですが、これは偶然?たまたまですよね(笑)。

「ワオ、ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ。今まで誰一人、そんなこと考えたこともなかったぜ」

■(…うけ過ぎだろ)最後の曲の「The Stukas」は?これはTHE STUKAS(バンド名?)のカヴァーですか?

「ああ、THE STUKASは昔のイギリスのバンドだよ。この曲はもともとは「Motorbike」ってタイトルなんだ。本物のロックな曲だし、君もチェックしてみるといいぜ…」

■アルバムのレコーディングはどうでしたか?順調に進みましたか?

「このアルバムは2009年の冬にスウェーデンの田舎でレコーディングしたんだ。めちゃくちゃクールなスタジオでね、70年代のアナログ機材が備わっていたよ。Ebberは空から星が降ってくるのを一晩中、眺めていたみたいだ。アルバムまるごと3日で録ったんだ。だからじっくり考えるほどの時間もなかったな」

■ミキシングとマスタリングをJakob Hvitnov(コペンハーゲンの著名なサウンド・エンジニア)が手がけたのは?あなた方から彼にお願いしたのですか?

「アルバムのミックスはとにかくひど過ぎた。時間もかなりかかったし、たくさんの色んな人間がミックスをやることになっていたんだ。でも、Jakobと一緒にやれて幸せだよ」

■これまでにMOONLESS、THE ASSASSINATORS、SEXDROME、NIGHT FEVER、LUCIATION(ノイズ・ブラックメタル)などのデンマークのバンドにインタヴューをしてきたのですが、あなたは最近のデンマークのパンク・シーンをどう思いますか?

「このところのデンマークのシーンは本当に素晴らしいよ。たくさんのバンドがショーをやり、レコードも出している…。クールなバンドをあげてみるね。CHAINSAW EATERS、LOVE POTION、MIG OG MIN VEN、COLA FREAKS、MELTING WALKMEN、RADIO SAIGON、それに君があげたバンドもそうだし、まだまだたくさんいるぜ」

■ところで、USツアーの感想を聞かせてもらえますか。デンマークとUSとの大きな違いは何でしたか?

「USは面白いこともたくさんあったし、貴重な経験にもなったね。そう、まさに違いはデカかったよ。言葉の壁では苦労したな。アメリカ人と俺たちとが持つメンタリティにも大きな違いが横たわっていたしね」

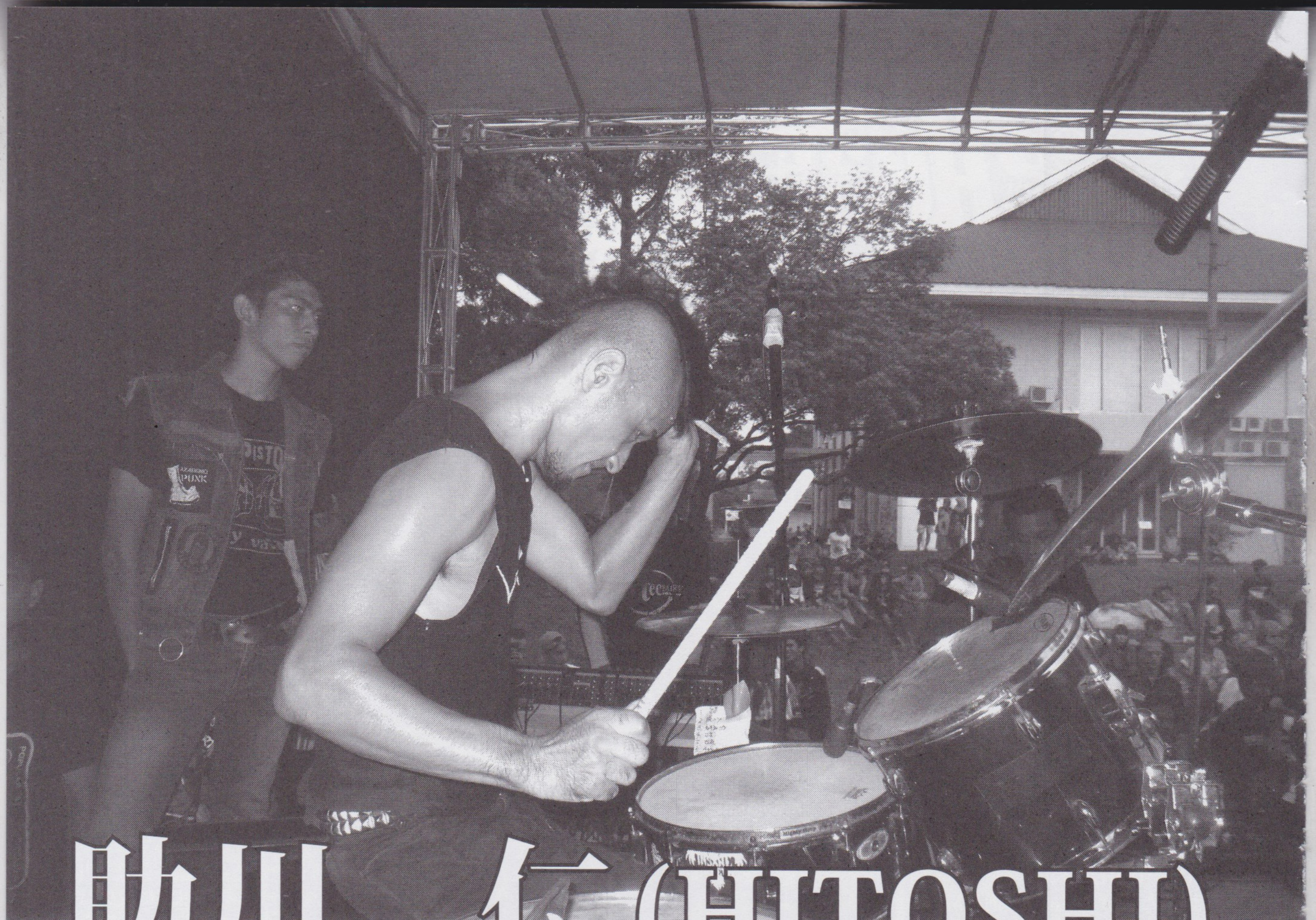
■今後の予定は?

「そうだね、2011年の1月、2月にオーストラリア・ツアーを行うことになっているよ。デンマークに戻ってきたら、新しい作品のレコーディングにも取りかかるつもりでいるしね…。それから、世界中をツアーして廻ろうとも考えているぜ…。俺たちに演ってほしい国があったら、ぜひ連絡してくれよな」

■最後に、日本の読者のみんなにメッセージをお願いします。

「俺たちのレコードを買ったらクールになれるぜ(買わなくても君らはクールだろうけどな)」





助川　仁(HITOSHI)

ex-MESSED UP, JABARA interview

ex-MESSED UP、JABARAのドラマーであるヒトシ。VIVISICKと共にインドネシア・ツアーを成功させ、沖縄のイヴェントに出演したりと精力的に活動するJABARAで、テクニカルなドラミングを見せつけてくれる氏に自身のハードコア人生について聞いてみた。

INTERVIEWED:Souichi(UNDER THE SURFACE/FORWARD/SMASH DETOX)

■生まれは北海道?函館?

「函館じゃなくて、皆には函館って言ってたんだけど隣町の七飯町ってとこ。奥地(笑)」

■カッちゃん(THE SLOWMOTIONS)の所とも違う?

「それは隣町。そこもだけど田舎特有の、市よりもっと人口が少ない町ってとこ」

■ああ町長がいるところ(笑)。

「そうそう。何にも無い所」

■小学校生活は?

「どういう感じだったかな?通信簿の後ろに先生の書く所あるでしょ、常に授業中には私語が多いと」

■しゃべっていると。

「しゃべっている事は常に書かれてた(笑)」

■中学校は?

「中学校ではそんな感じの路線でちょっと異性に関心もでてきて(笑)、流行に敏感になりつつの音楽も聴く様になったと」

■最初に聴いていた音楽は?

「マイケル・ジャクソン。ポーですよ!ポーから入りました。そしてムーンウォークに殺られた」

■MJは間違いないですよ(笑)。音楽遍歴はそっから?

「そっから一気に音楽にのめり込んじゃなく、えーとCRUDEの小西(HIDEKAZU)とかが文化祭で出てて」

■小西?同じ学校だったんだ。

「そう、一緒の中学校でその文化祭で小西がバンドで出ててヴォーカルでやってた」

■エッ、ヴォーカル?

「そうヴォーカル」

■因みにバンドをやり始めたのは?

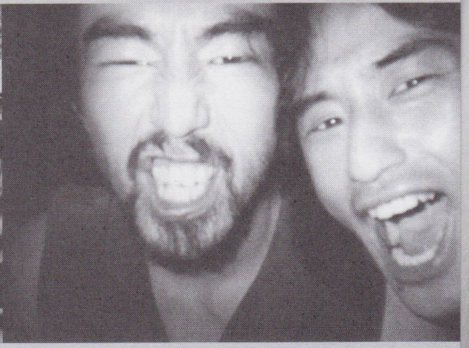
「中学校卒業して高校に入る間かな?」

■それはどんな感じのバンド?

「ピストルズ、スタークラブ、ラフィンノーズなどのコピー・バンド。オリジナルで勝負って感じではなかった」







■最初にやったオリジナルのバンドは？

「白痴」

■あのねそのバンドの名前はカッちゃんから聞いた事あるね（笑）。

「師匠（笑）！あの人にハードコア・パンクを初めて聴かせてもらいました。VA「FARE WELL TO ARMS」に感銘を受けてそこから一気にハードコアに夢中になり、もうボーとは叫ばなくなりました（笑）。で白痴はカッちゃんに誘われて立ち上げたバンド」

■その時はドラム？

「ハードコア・バンドやるってなってベース買ったんだけど、全然出来なくて。あとベースっていうこだわりも無かったから、すぐドラムに転向した（笑）」

■地元の先輩な訳？

「そう。俺等の年代の奴らはバンド・ブームなんか経てカヴァーなんかやってたんだけど、その中で地元でパンクやってるようなヤツラを集めて企画してたのがカッちゃんだった。その時にはすでにオリジナルやってて。ああこの人はオリジナルやってて、車も乗ってるって（笑）」

■それ大人に見えるね（笑）。

「すべてが大人でした（笑）」

■活動は函館で？

「函館」

■それは音源は残ってる？

「MCRから、VA「UNKNOWN HARDCORE DRUNKERS vol.2」に1曲、あと自主でテープ。どっちも廃盤かな」

■白痴の後は？

「白痴が無くなってからMESSED UP。17歳の時だからもう20年くらい前かな」

■MESSED UPはヒトシ達で結成したの？

「いやオリジナルではなくてジャムとタクミが既に作ってた後に入った。ヴォーカルは、オリジナルがいて→弁慶（MUSTANG、CRUDE）→小西（CRUDE）→アッチ（ATCH アナーキー）」

■どのくらいの期間やってたの？

「10年くらいやってたと思うけど活動したという感じはあまり無かったね。作品を出すごとに誰かがパクられたりしててさ。呪われたバンドだったね」

■BATTALION OF SAINTSみたいね（笑）。

「そうそう呪われてた（笑）」

■東京に出て来たのは？

「19歳くらいの時。その時は小西がヴォーカルで活動してた。20000Vとかでやってたね」

■当時の対バンは？

「その当時、NEO BURNING SPIRITSていう企画があって若手と言われるバンドをよく出しててそれに出てた。BURNING SPIRITSとはワンクッションあるみたいな（笑）。そんでその当時は夢札とかZONEも出てたり。20歳になった奴らを集めて成人式ライヴやったり」

■音源とかは？

「自主デモ・テープ x 4本とZATSU-ONから出た「Fuck Religion, Fuck War, Fuck The Lot Of Jesus!」ていうオムニバスに1曲。HG-FACTから12インチと7インチと「NO FATE」のvol.2に1曲。メンバーがチェルシー君と仲良くなって泊めてもらったりしてさ、お前等良いよって言ってくれたのが最初で、その後佐藤君も気に入ってくれて作品リリースとなりました」

■その後なんで解散したの？

「解散の理由はメンバーがパクられたりして色々あった。その後アッチ以外の3人でやる事になりバンド名を変えようと」

■それでJABARA結成になるわけですね。

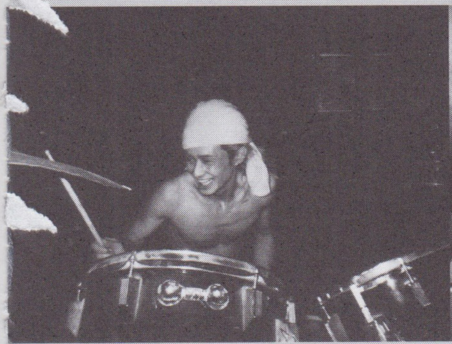
「1999年に、3人編成でHG-FACTからソノシート。いまは無いけどその当時はもう国内では最後のプレスだっていう時に出した。MESSED UPとのカップリングで。カップリングていうのもおかしい話しなんだけどそれがデビュー」

■それで2作目は？

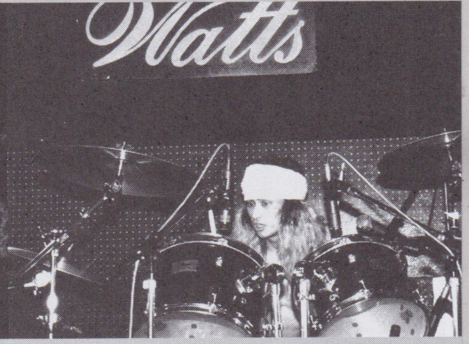
「12インチ。EVANCEとのカップリング」

■その時は4人編成だったと思うけど、ヴォーカルはノリ？

「ノリソングレイシー。いやクレイジーだ（笑）。その時にそのカップリング出して、ま







たすぐベネズエラのAPATIA NO!とでカップリングが出た。彼等が日本のバンドとスプリット作品を作りたいという事で佐藤君に紹介された」

■3rdもHGから?

「HG-FACTから」

■その後は?

「トリビュートに参加したりしてた。「SEGUIR EMOS INCONFORMES」っていうメキシコのMASACRE 68のトリビュート盤。メンバーが好きだったのは大前提だったけど何一つ自分達で動いていない(笑)。佐藤君の紹介」

■ワイドショーで全国放送されたあの事件について。

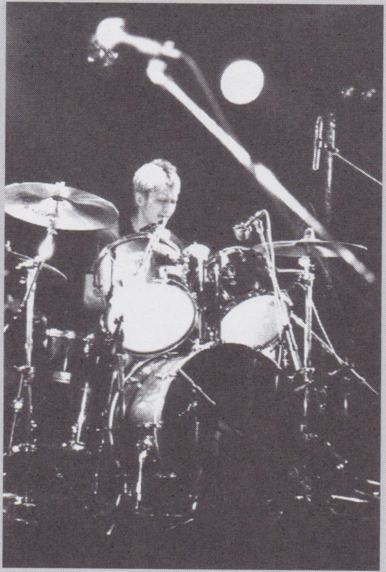
「ロック・バンドJABARAとしてテレビで全国放送された」

■その後の活動再開は?

「俺はその時は事件でまわりに迷惑もかけてたから田舎に一旦帰ってて、ジャムはこっちでJABARAで活動してました。その後に俺も身辺整理して東京に戻って来た訳なんだけど」

■それ何時位の話しだっけ?

「5年位前。それまでジャムは、カズ(π)、タカSEX(火薬)、シンヤ(陽死)に手伝ってもらいJABARAは活動してて、この時、HG-FACTからテープが出てるよ。激ハードコア!!で、俺がJABARAにもどることになり、ジャムと2人で、ソウサン(UNDER THE SURFACE、FORWARD、SMASH DETOX)やマコト(陽死)に手伝ってもらい再スタートしました。またまた高知県人ばっかり(笑)。いごっそうね(笑)。そして、タクミも何とかもどって来て、3人であの事件以来、再びJABARAがはじまったんだけど、タクミが抜けて、またジャムと2人になった(笑)。で!NO THINKのタケちゃんに手伝って貰い、ex-ANODEのジロウ





が加入して、ツイン・ギターになった。のちにタケちゃんも正式メンバーに迎え、トランペットのタツも加わり、今は5人です」

■トランペットでタツが入った経緯は?

「タツは最初はJABARAファンのお客さんだったんだけど、ジャムが「こいつ本当はホモなんじゃないか?」っていう位ファンだった。まあそれはジャムの一方的な勘違いだったんだけど(笑)。で、ジャムが一曲トランペットを入れたい所があるって。タツも中学校で吹奏楽やって以来だけどそれがきっかけで加入した」

■今の編成になったのは?

「2年前くらいかな?現在そのメンバーでアルバム作ってます」

■海外ツアーについて。インドネシアにはどういうきっかけで行ったの?

「2009年の10月にVIVISICKと、シンガポールのMAGNICIDEとでインドネシア・ショート・ツアーを敢行し2都市でプレイした。



ジャカルタではフリー・ライヴ、自分達でも機材費等を出し合って企画した」

■お金出し合ったの?

「そう。出発する前に送金して」

■それいつの話しだっけ?

「1年半前で5日間で2カ所。ジャカルタとスカブミっていう所」

■スカブミ?聞いた事の無い土地だね。

「会場が山の頂上にある所だったんだけど寒かったね」

■寒い?暑いというイメージがあるけど。

「場所によるんだろうけど平地は蒸し暑かった」

■どういう経路で入国したの?

「成田から台湾経由でジャカルタに入ったと」

■ジャカルタって首都だっけ?

「そう首都。日本から8時間くらいだったかな?結構かかった。時差は2時間位あるのかな?」

■空港着いたら迎えは来てた?

「来てた。でバスに乗って移動した」

■最初インドネシアの印象は?

「やっぱり蒸し暑かった(笑)。不安と興奮!下手な真似はできないと思った」

■ライヴ終わって打ち上げとかあったの?酒とかは?



「あの国は酒は基本的に駄目みたい。酒はコンビニとかに売ってる事は売ってるよ。限られた所ではパンクスも自分等で酒を密造してる。生ぬるい赤玉パンチみたいなやつ(笑)」

■客のテンションは高い?

「大爆発してます(笑)」

■客なんかトラックの荷台に沢山乗り合わせてライヴにやってくるんでしょ?

「ジャカルタではトラックの荷台とか４人乗りのバイクとか。大学の構内でやったんだけど沢山人が来てた」

■聞く話しによると、客が２千人位居たみたいだけど?

「誰が数えたか知らないけどそんくらい居たみたい(笑)。ウチらはインドネシアしか行った事が無いから他の外国のシーンと比較出来ないけどライヴはものすごかった。ジャカルタでは、フリー・ライヴだったので、子供も多かったのにびっくり。3-6歳位の子が一杯居たんだけど見た事も無い鋲をつけてたりで面白かった。あとインドネシア・パンクスの絶大なる協力のもと自分達の企画であるツアーが実現出来た事に感謝します」

■因みに物販は売れるの?

「ステッカーとバッジを持って行ってたんだけど売れなかった。くれくればっかでした(笑)」

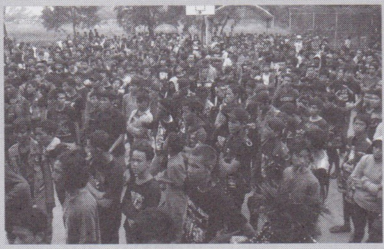
■あっちでは色んな友達は出来た?

「友達は一杯できました!」

■また行く予定はあるの?

「来年に行こうかと考えてるんだけど、なんかインドネシアでは９月からラマダンっていうお祭りで厳粛に過ごさなくちゃならない





期間があって、その終わった後が一番盛り上がるらしいから10月くらいに行こうかと予定してる」

■交通費とかは?

「航空運賃が５万くらいで向こうでは贅沢しなければ100円くらいで１日やってけるよ。あと同じアジアだしなんか懐かしいっていう。しかも子供が多いっていうのが良いかなと」

■ツアーから帰って以来頻繁に活動してると思うし、JABARAは一緒にやる対バンにも偏りがないね。

「うん、そういう風にしたいっていうのはある」

■そう言えばこの間沖縄も行ったでしょ?

「RAGSとチャンネル６とかが年1回東京からバンド呼んで盛り上げてるイヴェントに出演した。今年は４回目で3DAYSだった。米兵たちの前でやれるって聞いてたので物凄く興奮した。ハードコアだけじゃなく、色々な人たちが、色んな表現方法でコブシ挙げてました。最高に楽しかった」

■これからの活動的には?

「今は自主で音源作ってってCDとアナログを出す予定でそれに集中してる。11曲入りのCD。自主で色々チャレンジって事で。LPも日本とアメリカで出す予定。かなり迫力のある、ハードコアな作品に仕上がった」

■レコーディング・スタジオ使わずに練習スタジオでMTR持ち込みにミキサーの人呼んでやったんだもんね。

「MESSED UPの時代から福田君っていうPAINTBOXとかのミックスもやってた吉祥寺のPENTAにいたエンジニアの人で、そっからの付き合い。色々アドバイスして貰い自分達で録りました。ウチらも色々こだわりがあったから、自分らで出来るっていうのは強いです。最終的には、ジャムがMTR使いこなしてた(笑)」

■タイトルは?

「「伸縮自在」11曲入り」

■今後のライヴの予定は?

「1/29に20000V。あっ二万電圧か(笑)。REDNECKSの企画で。あと1/30にROCKET企画で中野ムーンステップ」

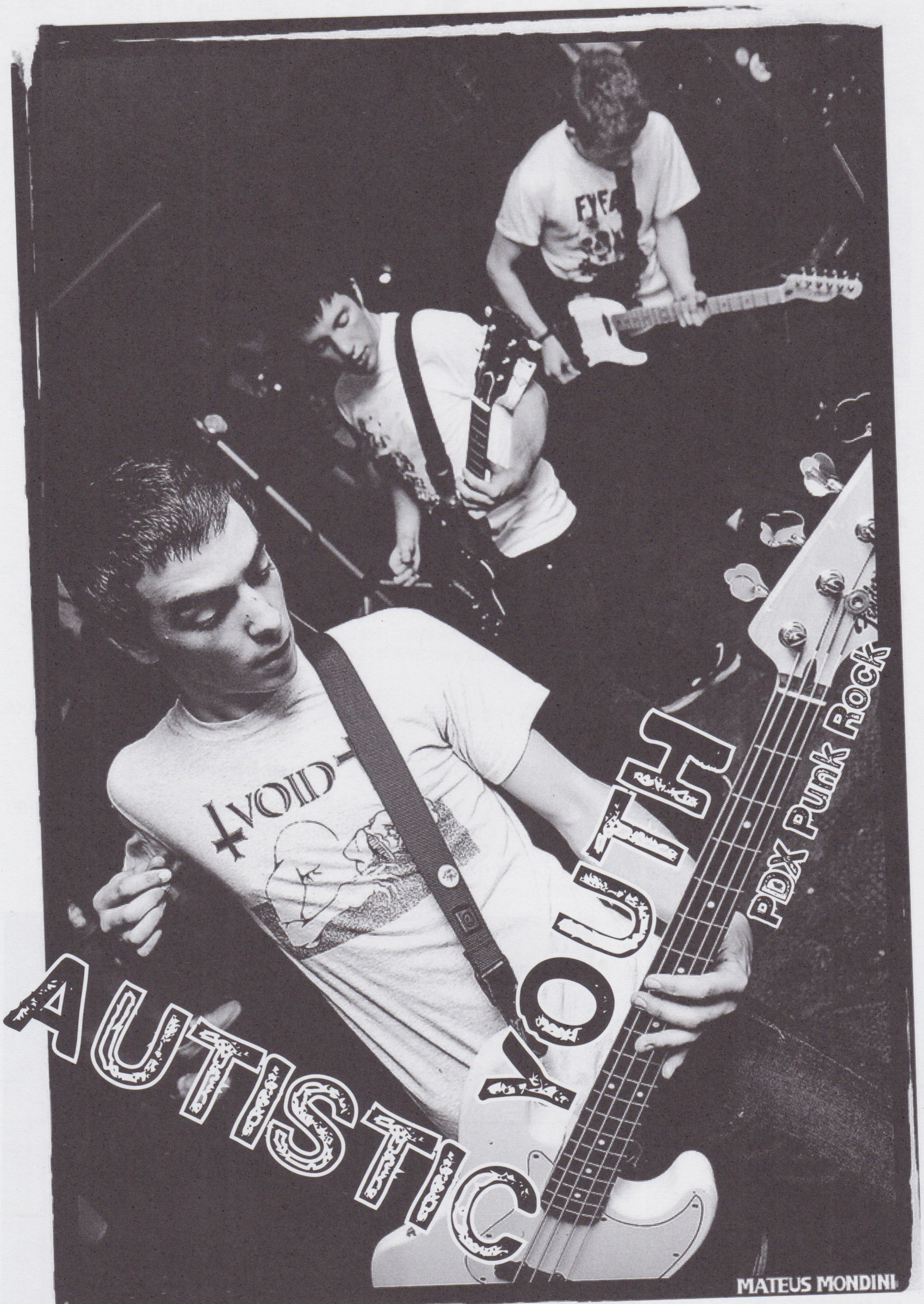
■最近の気になるバンドはありますか?

「一番気になってるバンドはDISCRIMINADOS。かなりお勧めです」

■これからの世代に一言。

「自分で、自分をあげていこう!!「伸縮自在」聴くべし!!」




AUTISTIC YOUTH
PDX Punk Rock
VOID
MATEUS MONDINI

NERVESKADEにSo君によるツアー・レポートと、今号は俄にPDXづいていますが、ここでもう一発! MASSHYSTERIともヨーロッパ・ツアーを行い、HELLSHOCK/ESTRANGEDなどのKeithが運営するBlack Water Recordsからのリリースもあるパンク・ロック・バンド、AUTISTIC YOUTHの登場です。ESTRANGEDとのスプリットも出しているとは言え、当地のハードコア・シーンとは若干距離を置いているのかと思っていましたが、全然そんなことはないようです(笑)。
世界各地に存在し、日々進化を遂げている現在進行形のパンク・ロックが好きで、もし彼らを見落としている人がいれば是非チェックを!ローカルではなく、ワールドワイドで通用するクールなバンドの一つだと思います。

■まずAUTISTIC YOUTHのヒストリーを日本の読者に詳しく紹介してもらえますか。

Nick「コンニチワ、オレはベースのNick Vicario。このバンドに加入して2年になるよ。オレが入ったのは2004年だったはず。AUTISTIC YOUTHはオレにとっての初バンドじゃなくて、その前にはTHE DISKORDS、THE GOP、ABSOLUTE RULERSってバンドで活動していたんだ。最近はCOWERもやっている。それからAlex(ギター/ヴォーカル)と新バンドを始めたところさ」

Seve「ボンジュール、ドラムのSeve Sheldonです。オリジナル・ドラマーと言ってもまあいいかな。オレの前はChristianてやつがいたり、ドラム・マシンを入れたりしていたようだね。オレが加入したのは7年前。AUTISTIC YOUTHは初めてのバンドじゃないよ。Adam(ギター/リード・ヴォーカル)とオレは11年前に出会って以来、ずっと一緒にバンドをやっているんだ。AUTISTIC YOUTHの前には恐ろしくなるほどたくさんのバンドをやってきたよ。PRF、SELF ABUSE、それにAPEshitなんかでもプレイしていた。最近、パリに移り、80年代ハードコア・バンドを始めたところなんだ。まだ名前はないんだけどさ。AUTISTIC YOUTHを始めたばっかりの頃に作った曲は、ロウファイとガレージとストリート・パンクとあれやこれや合わせたようなクソみたいなやつで、ほとんどが警察なんてコノヤローって内容だった。オレたち、本物のパンク・バンドを始めたかったんだよ。始めた頃の方向性とはちょっと変わってきているな。2004年にNickが加入してくれたのは、オレたちにとってラッキーだったぜ。そこからバンドのサウンドも進歩したと思う。Nickは最高だね」

Alex「AUTISTIC YOUTHはオレの初めてのバンドさ。バンドはハイスクール在学中に作ったんだ。ギター2人にベース無し、ドラム・マシンって編成だった。その後、ドラムを入れたけど、やつにはSeveと代わってもらった。それからベーシストにも入ってもらうことにしたよ。メンバーの変更はかなり初期のことだから、自分たちの音楽をやり始めてからずっと今のメンバーでやっていたように感じるんだよな。SeveとAdamはオレと出会う前から、一緒にパンク・バンドをやっていたみたい。ベースのNickはAUTISTIC YOUTHに加入当時、DISCHORDSに関わっていたんだぜ。Nickからバンドに入りたいと聞いたときは、とにかく驚いたよ。だってDISCHORDSは偉大だって思っていたからね。Nickは音楽面でもあらゆることをこのバンドにもたらしてくれた。このラインナップで固まってからは、ライヴを週に2、3回やることもあるんだ。みんながオレたちにうんざりするまで、新曲を作りプレイし続けてやるさ」

■"AUTISTIC(=自閉症)" YOUTHと名付けたのは?

Seve「Alexが全部言うよ…」

Alex「自閉症のパンクスの友達がいてね、彼はバンドをやりたがっていたんだ。それで彼からバンド名をつけたんだよ。彼はバンドはやっていないけど、Erik Anarchyとして音楽をやっているぜ。バンド名には意味があると思う。世間には自閉症は社会的合図を読み取ることができないって理解されているよね。強迫観念にとらわれているタイプだともさ。これは若いパンクスの心を誇張したものに近いと思うんだよな。音楽に取りつかれ、社会に関するメッセージに対抗する気がないっていう」

■ADOLESCENTSなどのUSパンク・ロック・バンドに影響を受けているんじゃないかと思いますが、クラシックな70's UKパンク・ロック・バンドとかはどうです?好きですか?

Nick「もちろんだよ。初めて聴いたパンク・バンドもそうだぜ。今もそういうバンドには影響を受けまくっているよ」

Seve「ああ、70's UKパンクにも好きなバンドがいるよ。間違いなくオレたちの音に影響しているな。70's(US&UK)のパンク・バンドって、パンク・ロックにとってのスタンダードな曲を書いているよね。80年代もまたそういう…」

Alex「70's UKパンクにはデカい影響を受けているよ。BUZZCOCKSなんかがそうだね。バンドのスタート当時はストリート・パンクにもかなり影響されてたし、今もずっとそういうバンドは好きだな。でもAUTISTIC YOUTHのサウンドにそれほど影響しているとは思わないけどね。オレたちは80'sハードコアも聴いて育ってきたから、アメリカのパンクからの影響がデカいよ」

■THE ESTRANGED、そしてCOLA FREAKSとスプリットEPをリリースした理由を聞かせてください。実にピッタリの組み合わせですよね。

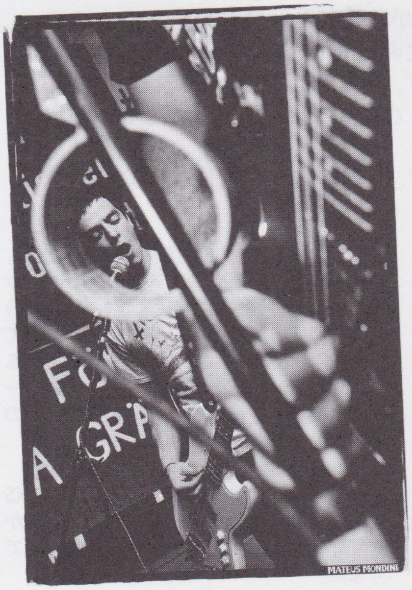
Nick「THE ESTRANGEDはポートランド出身の友達同士だし、オレたちのサウンドと共通するものがあるからね。COLA FREAKSのほうだけど、このスプリットのおかげでオレたちのヨーロッパ・ツアーが企画されたと確信してる。COLA FREAKSと会ったのは1年くらい前なんだけど、彼らがポートランドでプレイしたときに、あのレコードが出たんだぜ」

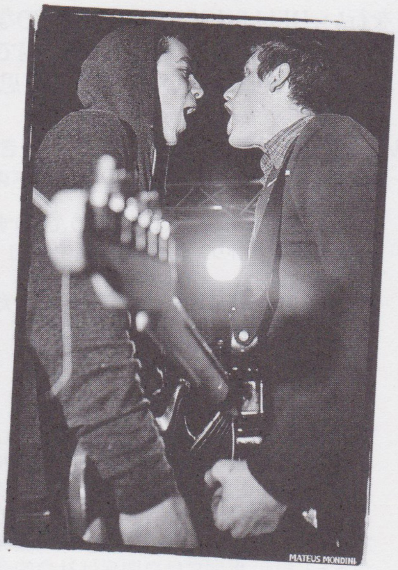
■そう、MASSHYSTERIと一緒にヨーロッパ・ツアーを行いましたね。このツアーの印象を教えてもらえますか?

Nick「MASSHYSTERIとのツアーが実現できてとてもラッキーだったね。THE VICIOUSが大好きだったし、MASSHYSTERIがポートランドでプレイした際に彼らのことを知ったんだよ。だから彼らとのツアーの話を聞いたときには、めちゃくちゃ興奮したな。毎晩彼らのライヴを見ることができて、信じられない気持ちでいっぱいだったな。MASSHYSTERIはオレの大好きなバンドの一つだよ」



MATEUS MONDINI





Alex「MASSHYSTERIとのツアーは素晴らしかったよ。彼らは本当にグレートな人たちだし、グレートなバンドだね。彼らは自分たちでも音楽的にどんなことをやっているのかわかっている。毎晩見た彼らのライヴはとにかく見事だった。よく彼らの作品は聴いているが、飽きることなんてないね。特にFeral Wardから出た最新LPは気に入っているよ」

Seve「素晴らしいツアーだったな。彼らのことを深く知れたしね。夜毎彼らを目撃できたのは、この上ないご褒美だった。素晴らしい人たちが素晴らしい音楽をやっている。彼らは本当に凄いバンドだぜ」

■最近のお気に入りのパンク・ロック・バンドはどういったものでしょう？

Nick「そうだな、やっぱりMASSHYSTERIだね。それから、BELLICOSE MINDS（ポートランド）、BI-MARKS（ポートランド）、DAY LIGHT ROBBERY（シカゴ）、LA URRS（スペイン）」

Alex「シカゴのDAYLIGHT ROBBERYとMASSHYSTERIが好きだな。この2バンドはXに影響されたヴォーカル・スタイルを持つっていうスタイルがやや共通していると思わないか。今、ポートランドに出現しているバンドも好きだね。THE ESTRANGEDもリストのトップに入っているし、テキサスのDESKONOCIDOSも良いバンドだ」

Seve「COLA FREAKS、GENTLEMAN JESSE & HIS MEN、THE MARKED MEN、DAVILA 666、THE ESTRANGED、MASSHYSTERI、WELCOME HOME WALKER、GOVERNMENT WARNING、THE BI-MARKS、DEFECT DEFECT」

■PDXのハードコア・バンドとも、一緒にショーをやっているのですか？地元のシーンについてはどう考えてます？

Nick「ポートランドのシーンはオレの好きなシーンの一つだよ。1970年代（1990年代のある部分を除いて）からずっともの凄く強固なシーンが続いているし、さらに良い状況になっていってるんじゃないかな。2年前にポートランドのシーンは失速しちまいそうだったけど、バーモント州のバーリントンから15人のキッズが移ってきて、彼らのバンド、NERVESKADEとBI-MARKSがシーンに参入してきた。あれ以来、シーンは最高のかたちで盛り上がっているよ」

Seve「ポートランドのハードコア・バンドともよくショーをやっているよ。シーンは素晴らしいよ。良い状況さ。あらゆることに重要な役割を果たすやつらが数多くいるしね。うまく動いているな。企画するやつ、料理するやつ、フライヤーを作るやつ、フライヤーを配るやつ、バンドを呼ぶやつ、写真を撮るやつ、いろいろとな。オレたちみんな、それをやりながら楽しく満足できる時間を過ごしているよ。もし楽しめないんだったら、自分で動くやつはいないだろうし、良い状況にもなっていないと保障するぜ」

Alex「ここのシーンは最高だし、オレたちはこの一部でいられてラッキーだ。ここにはたくさんの良いバンドがいるぜ。NERVESKADEからBELLICOSE MINDS、TRAGEDY、HELLSHOCK、THE HUNCHESまであらゆるバンドが活動している。バラエティにも富んでいるし、質の高いバンドが多いね」

■PDXのシーンにはある程度の年齢（30〜40代）のパンクスも結構いますよね。ジェネレーション・ギャップなんて感じたりしますか？

Alex「ジェネレーション・ギャップはあんまり気にならないよ。大規模なショーをやれば、いろんなやつがやって来る。幅広い年齢層の人たちがショーに集まってくるのを見るのは良いことだよね。歳のいったパンクスはバーでたむろってるって場合が多いんだろうけど、ここじゃバンドを見にショーに出向いたりと勢力的に動いているよ。年上のパンクスはオレたちがバンドを始めた頃によく助けてくれたんだ。新しいバンドをシーンに迎えることに理解がある人たちは本当に素晴らしいよね。ショーやツアーを企画してくれたり、機材や必要なものの面倒をみてくれたりとかさ。様々な世代がごちゃ混ぜになったほうが、音楽もバラエティ豊かになるよな」

Seve「ポートランドのパンクスは13、14歳から35、あるいは40歳以上まで年齢幅は広いね。歳は重要じゃない。クソッタレなやつじゃなければ、誰もが尊敬されるさ」

■ところで、ハードコア/パンク・ミュージックとの最初の出会いはどんな感じでしたか？そのとき何歳でしたか？

Alex「16のときに、友達からMeow Meowって会場のことを聞いてさ。ポートランドの工業地帯にある、とても小さな会場だったな。オレが見た初めてのショーはSPEDSっていう地元のバンドだった。このバンドはその後





MATEUS MONDINI

解散しちゃって、そのメンバーはTHE OBSERVERSを組んだんだ。彼らのショーは凄かったな。ヴォーカルは観客と共鳴し合って、みんなダンスしていたよ。エネルギーにあふれていた。強烈に焼きつけられちまったよ。その1年後にAUTISTIC YOUTHを結成したんだ。THE OBSERVERSとはショーで共演するようになったし、たくさんのバンドを見るようになってさらにパンクを好きになったよ」

Nick「オレが初めてパンクに夢中になったのは12歳だったね。パンク・バンドをやりたがった友達が、THE STOOGESやHEARTBREAKERS、DEAD BOYSなんかのバンドのCDをオレにくれたんだよ。そこからハードコアにのめり込み、そのまままっしぐらさ」

Seve「Adamとオレとは一緒にパンク/ハードコアに夢中になっていったよ。13のときにポートランドの地元のパンク・ショーに通い始めるようになったんだ。最初に聴いたのはNOFXとGREEN DAYだった。それからBLACK FLAG、MINOR THREAT、あとTHE GERMSなんかを発見し始めた。あれ以来、オレには素晴らしいパンク・ロックを紹介してくれる感謝すべき友達がいるよ」

■各リリース作品についてのコメントをもらえますか。一番気に入っているAUTISTIC YOUTHのレコードは?『Idle Minds』?

Nick「そうだね、『Idle Minds』は好きな作品だな。どのレコードもそれぞれ変化があるのが気に入っているんだ。ストリートパンク・バンドから始まって、今じゃオレたちの音楽がどんなふうに分類されるのか自分にもわからない。『Idle Minds』の制作にはとことん没頭したぜ。この作品に対するまわりの反応を聞くと嬉しいよ」

Seve「オレも、『Idle Minds』がお気に入りっていうのに賛成だな。長い時間かけてこのレコードに力を注いできたぜ。制作開始から終了まで1年半以上はかかったね。あと、7"『I want to see every tower fall』(4曲収録。Rock Bottom Recordsからリリース)のファンでもあるんだよな」

Alex「オレのお気に入りはソリッドな4曲の詰まったEP『I want to see every tower fall』だね。全部好きだよ。作品の中には納得いっていない曲もあるけど、この作品はサウンドも申し分ないし、全てに満足している。新作の『Idle Minds』も好きだな。これはちょっと違っているが、あえてそうしたわけじゃないぜ。過去の作品作りに比べて時間を十分にかけられたし、音楽に集中したからね。それにLP『Landmine Beach』を出した頃より、みんな成長したしさ。『Landmine Beach』も好きだけど、あれを録ったのはもうずい分昔のことになる。今じゃ気に入らない曲もあるしなぁ。THE ESTRANGEDとのスプリットはTHE ESTRANGEDが素晴らしいから良い作品になったよ。オレたちは「Deadbeat」という曲を収録しているんだけど、強烈な曲になっていると思うぜ。歌詞はかなりリアルだし、曲もいつも以上にシンプルだしね。この作品の場合は功を奏したと思うな。COLA FREAKSとのスプリットは地下で自分たちの手でレコーディングしたんだ。これもなかなかいいサウンドに仕上がって満足している。7"『Empty Eyes』も好きな作品なんだけど、これに入っている「Desperate」は自分たちの曲の中でもめちゃくちゃ好きな1曲だよ。レーベルのBlack Water RecordsのKeithが収録したいって思う2曲を選んだんだ。彼は良い選択をしたと思うぜ」

■今後の予定はありますか?

Nick「何とも言えないんだ。夏にSeveがパリに移り、いつ戻ってくるのかわからないんだよな。もしかしたらヨーロッパ・ツアーが近いかもね」

Seve「誰にもわからない…ヨーロッパ・ツアーだって??」

Alex「ツアーをやり続けて、レコードも出し続けていきたいな。今はドラムがフランスに住んでいるけど、またヨーロッパ・ツアーもやりたいし、イーストコーストもツアーしたい。過去よりも大規模なツアーをやりたいよ。日本にも行けたら最高だね。でもUSのバンドだから難しいんだろうな。実現したら面白くなるんだろうね」

■インタヴューをどうもありがとう。最後に日本の読者のみんなにメッセージをお願いできますか?

全員「興味を持ってくれてありがとう。すぐに会いたいぜ!インタヴューもありがとう。オレたちのバンドを聴いてくれてありがとう。パンクを貫いてくれよ」



サカタルイードの『とびっきり対談・TONTEKIシンドローム編』

冬だね〜っ！めちゃROCKだぜ！たとえ垂れ下がる鼻水がつららに変わっても、それはCONTINENTAL - KIDS(大好きなのです)アルバム・ジャケの殺人リスト・バンドを彷彿させるので合格っ(そこまで寒くないか…)(笑)！ボク自身のカラダに『ブルース』の血は一滴も流れていないのでロックン『ロール』のコトはよく知らないけど『パンク・ロック』って何だか『直線』で構成されているカンジでしょう？勝手なイメージだけど…そこがたまらなく良い。
CHANCE - OPERATIONはあまり聴かないのに、FRICTIONは好き。冬って血液のめぐりが悪くなって、みんなカクカク歩いている気がするな。必要最低限のコンビニorスーパーマーケットに寄ってタバコとインスタントラーメン買ったら足早に帰宅する、直線で。…勝手なイメージだけど(笑)。
それはそうとヒラヤマ君対談(Vol. 9)をそういち君(FORWARD)に『相変わらずサカタはセンス良いね』なんてメールで誉められた！アースダムで久々会ったら突然『Oh！80年代ジャパニーズ・パンクを正しく継承する者よ(北斗の拳調で)』と言われたコトもある(笑)。
1998年にマコト(CROSS FACE)ん家で『サカタ、自分がやろうと思うコトってさ、きっと今すぐ始めても「少し遅い」くらいなんだ…』(…はぁ？どうしてこんなにスゴいヒトが(当時何でもない只のダメ男の)ボクに大切なコトを教えてくれるんだろう？)アタマの中は『???』。しかしボクはその部屋を飛び出し新宿のアパートに戻り、10代の頃から全てのアイデアを書き溜めた一冊のノートを掴むと下北沢のヒロキ(Ba)ん家へ。『ヒロキ！何かスゲぇバンドやろう！』。それがTHEリトルミラーズの全身バンド『ZIKKKKEN(ジッケン)』結成の夜です。思えばちっぽけな人生だけど、分岐点には何故かいつも彼が居てくれる気がする。ホントはもっとイイ曲かけますから、誉めすぎないで下さい(笑)。100割リスペクト！
今回の対談は四日市のパンク・ショップ『VORTEX』のオーナー『バンさん』です！前回のイライザ・ロイヤルに続きレディでっす。山路さんは「女性ゲストが続くのは喜ばしいですね。」と言っていた。…？意味深だぜ(笑)。
とにかくイッてみま〜す!!

SR「何話そうネ？」
B「アハハ、フツーにネ(笑)」
SR「うん…じゃ、まずパンク・ショップを始めた『きっかけ』は？例えばどこかでバイトして、そこから『独立』したりするんでしょ？そういうのって」
B「そうですね。服屋さんで働いてて『お店をしたいな』ってのはあったんですよ。で、自分が『何屋をやる？』ってなった時に…やっぱり『PUNK』が好きだし、そこは割と自然な流れで(笑)」
SR「その働いてた服屋さんはパンクとは関係ないカンジの？」
B「うん、全然違いますね」
SR「そこに居る時からパンクは好きだった、と」
B「はい！ワタシ25歳で(VORTEXを)始めたんですけど、あんまり『アタマ良く無い』んで(笑)、深く考えずに勢いで…その時働いてた工場が不景気でいわゆる『派遣切り』で失業手当もらえるタイミングに、ちょうど良い物件があって」
SR「最初は『手探り』で？ある程度『解ってた』の？アタマん中でさ…」
B「1998年頃からロンドンには時々お金を貯めて遊びに行ってたんですね。1ヶ月とか居た時もあって、でも『仕入れ先』的なトコロも全然知らなくって…『行き当たりばったり』で(笑)」
SR「でもパンク・ショップってさ、要は『セレクト・ショップ』なワケでしょ？」
B「そうですね」
SR「大変そうだな〜、その『仕組み』が」

B「ね～、ワタシも特別『パンク服オタク』ってワケじゃ無いから、愛知だったら『エレクトリック』とかあって。それか『666』みたいな王道的な」
SR「うんうん」
B「で、最初９割『古着』だったんですね。元々ずっと古着屋さんで働いてたんで、古着の『革ジャン、ブーツ』で始めたんです」
SR「へ～！それは向こう(海外)から輸入して？」
B「アメリカとイギリスに買い付けに行って」
SR「あぁ…『古着屋さん』だね」
B「そう」
SR「今、何年くらい？」
B「今年で『10年目』になりますネ」
SR「どうですか？実際10年経ってみて」
B「最初は四日市に『シーン』だとかそういうのは全くなかったし、意識もしてなかったのに、こういう対談に私が登場してしまってる！という。『まさか』な、10年後でした(笑)」
SR「そっか(笑)」
B「５年くらい前から、全国に居るお客さんでもある、パンク『やってる側のヒト達』バンドのヒト達、もっとサポート出来たら良いなと。上手く言えないけど(笑)。ただ、衣装やアイテムを『売るだけ』の店じゃないっていう。例えば音源扱ったり、ツアーで廻って来たバンドのＴシャツを店で買い取ったり。でも狭い店だから、どんなヒト、バンドでもってワケにはいかなくて、知り合いや友達に限ってなんですけど。その『知り合い』だってどんどん広がって行くし。もっとパンクの世界の中で、色々廻せたら最高だなと。ていう考えに辿り着きました」
SR「あのさ、『VORTEX』と『ACROSTIX』って変なハナシどっちが先にあったの？」
B「ほとんど同時くらいかな…ACROSTIXはあったけどまだ『動いてない』くらいの時期でしたね」
SR「パンク・ショップって『不況』とかってくらっちゃう商売なのかな？例えば『花屋さん』みたく」
B「どうなんですかね、ウチ田舎にあるし、『通販』がほとんどなんですけどインターネットってモノがもしここまで普及してなくって、通販が無かったらとっくの前に潰れてますね」
SR「あぁ、そっか～」
B「やっぱりアンダーグラウンド内でも多少の『流行り』ってのはありますし」
SR「うん、『ファッション』だもんね？」
B「そうですね、だからそういう『ファッショナブル』なパンク・バンドみたいなのが、メディアに出てる時はそれなりに…ありましたね。今はほとんど無いじゃないですか」
SR「オレとかガキの頃パンク・ショップ行ってて、多分そこの店も『時代の流れ』読んで、途中からガンズ・アンド・ローゼスのガーゼシャツ出てきたりしちゃって、オレよく分かんなくなっちゃって(笑)」
B「(笑)」
SR「それは多分たまたまそれが『売れる』ようなトキだった、ってコトなんだよね。やっと分かった(笑)。バンさんて元々何が好き…ってパンクより前、歌謡曲とかってさ」
B「やっぱ小学生の時から『チェッカーズ』とか。TVの前にラジカセ置いて録って(笑)」
SR「チェッカーズは素晴らしいよね～(笑)！」
B「『歌謡曲マニア』じゃないですけど、クラスの中でもとりあえず『あの娘に聞けば大体の曲知ってるよ』みたいな存在で(笑)」
SR「あ～、分かる(笑)」
B「で、『バンド・ブーム』が来て。ラジオもチェックしてるとそのヒト達が聴いてきた音楽がかかったりするんですよ」
SR「そのヒト達の『ルーツ』だね？」
B「そう。それで辿ってラモーンズなりピストルズなり…何か未だにワタシそんなカンジですね。行ったり来たり(笑)」
SR「それで…海外のメジャーなやつは聴けるじゃん？分かりやすく言えばビートルズとか、だけどもう少し『ディープ』というか『コア』なパンク・ロック、日本なら『バーニング・スピリッツ』みたいなパンク・ロックとかさ。それを知ったのはいつ頃？」
B「ワタシ『ジャパニーズ・ハードコア』とかは遅くって、ほとんど店始めてからですね」
SR「あ、そうなんだ！元々海外のバンドが好きなの？」
B「ええ、ずっと…７～80年代の海外のパンクばっかり」
SR「じゃあ日本のハードコア・パンクの『きっかけ』は何？」
B「店を始めて、そういうヒト達と知り合うコトが多かったりとか…ACROSTIXを通してとか」
SR「交流が増えて？」
B「はい。当時は、ハードコアは名古屋だとS.D.Sとかのライヴとか、どちらかというと『CRUST寄り』のライヴに行ってたから、また別だったから…で、今は『みんな一緒に』」
SR「『シーン』がね」
B「前はもっと別れてて」
SR「あぁ、そうやって言うよね」
B「いわゆるジャパコアに触れる機会が無くて」
SR「ふ～ん」
B「ちょっと怖かったし(笑)。その当時この辺りやってたバンドで衝撃受けるようなバンドにあまり出会えなくて」
SR「ガツンと来るやつでしょ～(笑)？」
B「はい(笑)」
SR「それを見つけちゃったらそれに『似たバンド』とかルーツを追って行けるもんね」
B「そうなんです。だから遅かった」
SR「オレなんか例えば10代の時に『バトル・オブ・ニンジャマンズ』とか『CRACKS』観たり聴いたりしてたら絶対に今サイコ刈りしてるもん(笑)！それくらいの感覚、最初に『アタック』が欲しいよね」
B「結構ワタシ、エイリアン・スラップに行ったりとかも、色々幅広く行ってました」
SR「そんなにジャンルは気にしない方なんだ？」
B「そうですね。今も昔も。あ、四日市で10年前当時は『ガレージ』が熱かったんです」
SR「そ～なんだ！」
B「日本のガレージの主要なバンドが一杯集まるイヴェントがあったりとか」
SR「ホント？シーンがあるってコトだよね」
B「当時はあったんです。今は…」
SR「へ～。今の四日市は何が盛り上がるの、END OF SEEDSとかもこの辺？」
B「ちょっと遠いんですよ。ここから１～２時間くらい」
SR「かなり遠いね。ZONEと8000だって場所で言ったら１時間くらいは離れてるし、そんなカンジなのかな？」
B「静岡も広いですもんね。あとCONTRAST ATTITUDEも松阪や伊勢で、ACROSTIXも住んでるとこ結構バラバラで」
SR「あと『T.N.A』？元気がイイ奴ら(笑)」
B「T.N.Aも皆この辺じゃ無いんですよ、だから『四日市』って言うと別に誰も住んで無いんですよ(笑)」
SR「アハハハ(笑)！…でもケイオス(ライヴハウス)あるしね」
B「はい、ケイオスはもう13…年くらいかな？」
SR「スゲぇイイね、あそこ。マジ最高だよ(笑)！」
B「ワタシも昔あそこで少し働かさせてもらってたコトがあったりもして」
SR「ライヴの時にね、入り口に店員のヒトが居たから『ボクもそんなに沢山やってきたワケじゃないけど、この箱はとてもイイですね』って言ったの。そしたらビックリしたのがそのヒト、『ボクもそう思います』だって！スゴい自信だな～と思って(笑)。でも実際そのくらいイイからね」
B「うん」
SR「ライヴハウスとパンク・ショップがこんなに近くにあれば何か…『成り立ってる』カンジはする」
B「でも…全然『増えない』んですよね、パンクス(笑)。東京とか大阪と違って。たまに言われるのが『こんなに派手な店があるのにそういうヒト、あんまり四日市に居ないよね～』って。そういうバンドも居ないし、『ワタシのチカラ不足です』っていつも言うんですけど(笑)」
SR「いやいやいやいや(笑)」
B「昔とかってちょっと『不良』…悪いヒトとかってロック聴いてたじゃないですか？今はそうじゃ無いのかも」
SR「『選択肢』が増えたのかな？」
B「そうかな」
SR「逆にパンクでも今は『悪い』ばっかりのヒトは少ないかもね。こないだボンド(END OF SEEDS)と喋って、何かめちゃ『イイ奴』だな、って(笑)。…他にバンさん言っておきたいコトとか無いの？」
B「……何喋ろう(笑)」
SR「別に音楽カンケー無くてイイんだよ、例えばさ、『何色が好きですか？』なんて(笑)」
B「ワタシ『紫色』っ！」
SR「(笑)なんでっ？」
B「なんとなく(笑)」
SR「いや、その…『寒色系』が好きってコト？赤とか黄色じゃなくて」
B「そうそう、そうですね」
SR「オレもホントはそうなんだよ。紫と青、緑とか」
B「そうなんですよ」
SR「だけどちょっとそういう系はいまいち『ステージ映え』しなくてね、まあ自分的にだけど。結局ステージだとピンクとか赤の方が視覚的に強く感じる…ような気がして」
B「でもサカタさんは『濃いピンク』ってカンジがします」
SR「あぁ…ホント？ありがとうございます(照)。何かこないだメールでさ、オレに聞き



たいコトあるんだっけ?」
B「はい。あるんですけど、あったんですけど緊張して飛んじゃいましたネ(笑)」
SR「それじゃダメじゃん(笑)!最近好きなバンドは?ライヴ観たりとかさ」
B「ライヴね～、あまり行けて無いんですよね。でもサカタさん前にして言うワケじゃないんですが『四日市３Days』のTHEリトルミラーズはここ最近の中で一番…何か『印象的』でしたね。アレは凄かったですね」
SR「ホント?スゴく頑張ったんだよ(笑)」
B「あれから他のライヴ観てもなかなかあの衝撃を『越えられない』っていうくらい」
SR「ウチら『ハロウィン・ナイト』に演るコピー・バンドにしてもそうだけど、『高校３年の文化祭だから!』って言ってやるのね。コレ成功したらヒーローだし、コケたら一生悔やむんだ、って。原点に帰ってさ『メンバー全員モテモテだ～っ!』ってね、終わってみると別に誰もモテて無い(笑)」
B「アハハ、うんうん(笑)。自分の周りでも『良かったね～』ってヒト多くて、リトルミラーズ知らなくて観たヒトは『何だアレは?』みたいな(笑)」
SR「ウレシイね～。だけどライヴとかさ、音源…『デザイン』とかまぁ何でもそうだけど、やっぱりコッチは感想を求めてしまうじゃん?でもお客さん、『受けとる側』にも直ぐには答えなんて出せなくてさ、他と比べたり個々に経験を積んで『分析』するはずだから。演者に反応が返ってくるのって多分『10年後』とかだもん」
B「あ～」
SR「とにかく『がむしゃら』に。良いライヴやって曲つくって、いつか『昔、VORTEXの前まで何度か行ったけど恐くて入れなかったんですよ～』なんてヤツが出てくるから(笑)」
B「(笑)。そうなるとイイですね。ウチの店とかも遠くから来てくれるお客さんも居て、有難いコトに。『前から一度来たいと思ってました』とかそうやってリアルに足を運んでもらえると色々ハナシも出来るし、単純に『ウレシイ』し、実感が湧くじゃないですか。でも『通販』の場合は気持ちまでは分からないんですよね、只『検索』して欲しいモノが見つかったから『買うだけ』のヒトも勿論居るだろうし…VORTEXが『必要』とされてるのかな?って不安になったりもします(笑)。『輸入』して、それを包んで『送る』って作業が毎日で…」
SR「(笑)」
B「ホントそうなんです。時々あとで『商品届きました。すごく気に入りました!』とかってメールくれるヒトも居てくれて」
SR「そういうのスゲェウレシイよね?」
B「『反応』ってモノがあまりにも無いとよく解らなくなっちゃいます。ウチって急に『過激』な商品を提案したりするんですけど(笑)。そういう時も何にも反応無いと『アレレ?』ってなっちゃう(笑)」
SR「反応が無いと『やり甲斐』っつ～か、まず寂しいね(笑)。けど自分らのCDアルバムで言えば一番反応がある『解りやすい曲』ばっかり演るつもりも無いし。コレ…エルジンも結構みんな頑張ってやってるからさ、先月山路さんに冗談ぽく『そろそろファンレターとか来てますか?』って言ったら『ファンレターどころかひとつの感想も届かないから一体ダレが読んでいるのか謎です』だって(笑)!たまには欲しいよね、何に対しても『感想』。ワガママだけど(笑)」
B「はい(笑)。なかなか言わないですけどね、逆に自分達も」
SR「あ、そっか。バンさんなんてショップだから余計に売ってて『フツー』だもんね。お客さんはお金払って欲しい商品『買うだけ』だもん」
B「ね?言わないですよね、ショップに『感想』って(笑)」
SR「難しいなぁ(笑)」
B「あとウチはずっと買ってくれたヒトには手書きの『手紙』を付けるんです。それは前から続けてますね。そういうの『残したいな』って思って」
SR「オレ、シンとやりとりする様になったの結構『最近』でさ。普段は当たり前にメールだけど、ACROSTIXの『CD-R』を送ってくれたトキ一緒に手紙が入ってて。そういうのを入れる用の『捨てられないBOX』(笑)ってのにしまったんだけど、その中で13年前パイン(BLOWBACK)がくれた手紙と一番『NOW』なシンの手紙が重なってスゴく微笑ましかったんだ」
B「『手紙』って自分が貰ってもウレシイですもんね。実際お客さんに書く『内容』はいつも同じ様になっちゃうんですけど(笑)。サカタさんは何で『VORTEX』知ったんですか?」
SR「ん?リトルミラーズ演ってた『ナミちゃん』って娘に最初聞いて…」
B「ナミさん?あぁ、はい!」
SR「『パンク・ショップ』って言っても色々さ、鋲おいてるけどオレらに言わせるとちょっと『メタル寄り』とか、分かるでしょ(笑)?ハードロック色が少し強いお店、とか。『トランス寄り』?だったり」
B「色々ありますもんね」
SR「ただその中で一番オレの好きな『ビビッド』で『ソリッド』で…『キラー』な(笑)?なのがVORTEXっ!そのバランスに一歩入ると燃える(笑)。それってオーナーの個性なんだよね?」
B「ワタシバンド・ブームん時『ヴィジュアル系』は全く通って無くて、その頃はラバーソールの『ビート・パンク』が好みだったんで(笑)。でもヴィジュアル系が世間的に流行った時期にはそれっぽいのも仕入れて、店に置いたりしたんですね」
SR「うんうん」
B「だけどワタシ直ぐ『Sale』にしちゃうんですよ(笑)!まだ入荷して１ヶ月なのにコレ『半額』みたいな(笑)」
SR「アハハ(笑)!でもオーナーの個性が店の『色』って部分はバンドと似てるよね?」
B「はい。だからそうやって自分を『表せて』行けたら面白いな、と。作るモノとかでも」
SR「例えばオレがパソコンでホームページ見ててさ『VORTEX今度こんなＴシャツ入荷したんだ?』つってさ、もし隣に居るヤツが『あぁ、だってバンさんこういうの好きだもん!』って言ったらそれはもうバンさんの個性」
B「そうですよね(笑)。そうやって言ってもら



えたらスゴいウレシイですね」
SR「オレはそんな『POP』で、それでいて何処か暴力的な『ニオイ』に惹かれてる、かな」
B「ありがとうございます(笑)。ワタシ、まだ小さい子供が居るんであまり店に出れて無いんですね。週2くらいしか」
SR「他の日、お店にはアリサちゃんが居るの?」
B「もうひとりスタッフが居るんですけど、『仕入れ』とか『オリジナル(商品)』考えたり作ったりしてるのはワタシだけなんで、今はちょっとVORTEXが『大人しい』んですよ(笑)」
SR「その『新しい商品』?どんなの考えてるの?」
B「…内緒です(笑)」
SR「ハハハ!イイね(笑)」
B「色々『アイデア』はあるんですけど突然『突拍子も無いモノ』作っても…どうなのかな?考えてるトコロです。パンクのモノって『パクりパクられ』じゃ無いですけど元々『ヴィヴィアン』や『マルコム』だったりのベースがあって、80年代になって『ハードコア』だったり『ニューウェーブ』があって。その延長じゃないですか?ましてや『ファッション』となるとその『基本』に対してやり過ぎちゃっても『それは違う』ってなるし…その『線』が難しいですよね。カッコいいとダサいって、何て言うのかな…」
SR「『紙一重』?」
B「そうそう。その『バランス』?が難しいのかも」
SR「うんうん」
B「…サカタさんのヴォーカルって『独特』ですよね?」
SR「オレは…ね～…『曲から作る』とか『歌詞から作る』じゃなくて全部を同時に進行させていくから。ギター弾きながら作るんだけど、だからそれが止まる時がその曲が『完成』する時。SEも最初からアタマの中で鳴っているんだ」
B「ハァ～」
SR「(笑)。オレってインタヴューとかで『曲くらい幾らでも作れる』なんて言うんだけど、実はカラクリがあってさ。常にコレ(レコーダー)に『99個』の曲とかリフ?アイデアが録ってあるんだ。3桁は入んないヤツだからさ。対談のトキはいつもひとつの曲を完成させたり完全に覚えてカウント『98』に減らすじゃん?で、今バンさんとの対談を『99』のトコロに入れてるんだよ」
B「へぇ!…って言うかぁ…」
SR「何?」
B「コレもうひとつ買えばイイんじゃないですか(笑)?」
SR「あ、そうか…そうだよね、ハハハ。…すいません(笑)」
B「(笑)」

当日、対談に付き合ってくれたACROSTIXシン(色男)、DILDOSシンゴ(禁煙中)、KAT UGLYナガタ(脂身チップス)ありがとう。店員アリサちゃんにも感謝です。皆さんまたライヴで会いましょう。――――『サカタルイードのとびっきり革ジャン講座』…高校時代は悪さを繰り返し計9回、学校に親を呼ばれた。謝りに行ったら「ボウズ頭にしてもう一度出直して来い!」と言われたのでせっかく伸ばした髪をバッサリ。それを見た主任はフンと笑い「今回ばかりは無理だな」だと。アタマに来たから磐田駅で担任教師をビニール傘で刺した。それでクビに(当たり前)。それからとりあえず成り行きで一晩を共にしたオンナの子の紹介で『CLUTH』とかのレディースを扱うショップで働きだした。職場は『豊橋駅付近』にあって磐田からは少し遠い。ジーンズのセットアップにツンツンの金髪で「ダリぃな」と出勤中のある時、『ジャニ○ズ事務所スカウトマン』を名乗る謎のオヤジに声をかけられた。「SM○Pの○君はおじさんが発掘したんだよね～」…怪しすぎる(汗)。「今から大阪のTV局に行くから一緒に行ってみようか?」…ムムぅ。ん?んん?!なななんと謎ジャニおじさんのYシャツ胸ポケットには1万円の札束があぁ!「…まぁイイっスよ」なんて軽い気持ちで付いていくと謎ジャニは早速電車に乗った。ヤツは窓側の席に座りワンカップを空けるとおもむろにチノパンのジップを下ろしジャンボなナニを引きずり出した。「キミさ～、ちょっとでイイから触ってみない?」…って、どゆコト??「いやいや、ちょっとナシですね～(汗)」。なんとか小一時間をやり過ごした辺りで突然、謎ジャンボが睡魔に襲われ始めた。『今だ!』とばかり謎ンボの胸ポケットから全ての札束をわしずかみに抜き取りオレは隣の車両に移り、次の駅で降りた。「ィやったぜ!」。上り電車に乗り換え再び『豊橋駅』へ。はやる気持ちはとても抑えきれず猛スピードで革ジャンを取り扱う『ロック風古着屋』へ(今まではガキだったからショーウインドウの硝子ごしに見てたけど今日のオレはひと味違うんだぜ～)。店内に入るなり壁にかけてあるダブルのライダースを指差すと『あれ下さい』…余裕だね(笑)。しかしウチに帰ってビックリ!店では照明が暗くて分かりづらかったのだがその革ジャン、ヴィンテージ過ぎてレザーが茶色がかってやがる!しかもサイズがデカいっ!ロンドンコーンの銀色と全く噛み合わない!…悪銭(?)身につかず(涙)。10万円以上したそのライダースは誰かにあげるのもシャクだったので黙ってソッコー捨てました、エコロジーっ!!皆さん、革ジャンのサイズ選びは慎重に…。――――VEKTOR『TTTN』が着うたになりました。代表的なモバイルサイトは…着うた mob/着うた hotEXうたマガ・ベストヒットJ-POP/着うたフル hotEXうたマガ フル・ベストヒットJ-POP フル/着うたフル BounDEEフル/着うた millmo.jp★うた/着うたフル millmo.jp★うたフル/着うた mero.jpうたフル/着うたフル mero.jpうたフル/着うた M100♪g∞veうた/着うたフル 炸裂ロック!!/着うた MelodicLoverウタ・MelodicLoverフル・MelodicLoverメロ・MTV Soundsウタ・MTV Soundsフル・MTV Soundsメロ・MySoundウタ・MySoundフル・MySoundメロ・MySound動画・ゴルゴンゾーラ★Z・美音オルゴールラウンジ・美音セレブオルゴール/着うたフル MelodicLoverウタ・MelodicLoverフル・MelodicLoverメロ・MTV Soundsウタ・MTV Soundsフル・MTV Soundsメロ・MySoundウタ・MySoundフル・MySoundメロ・MySound動画・ゴルゴンゾーラ★Z・美音オルゴールラウンジ・美音セレブオルゴール/着うたフル moraケータイフル/着うた レコチョク うた・レコチョク ロック・うた/着うたフル LISMO MUSIC STORE・レコチョク フル・レコチョク ロック・フル/着うたフルプラス レコチョク フルプラス。――――THE LITTLEMIRRORS LIVE DVD「HAMAMATSU TRANSFORMATION」が12/24人間堂よりリリースされます。ヨロシクぴゅ!



チェコスロヴァキア・パンク・ロック/ハードコア
その知られざる歴史　第三章



THE SECRET HISTORY OF PUNK ROCK AND HARDCORE IN CZECHOSLOVAKIA (1979 - 1989)

TEXT:Filip(SEE YOU IN HELL/orba@seznam.cz)

ハードコアの誕生

前の2章に渡り説明したように、西側諸国の新しいレコードを入手することも、西側のパンク・バンドのライヴを観たり、そこに旅行に行くことも困難だった。そして、その世界からの文化的孤立と政府による検閲が、チェコスロヴァキアのハードコア/パンク・シーンの発展(ないしは停滞)に多大なる影響を及ぼしたのである。

情報の流入とインディペンデント・ロック・ミュージックの存在は制限され、そのことはもちろん、チェコスロヴァキアのパンク・ロック・バンドの音楽にも反映された。80年代を通して、大多数のバンドは有名な70年代のUKパンク・バンド、SEX PISTOLSやDAMNED、THE CLASH、UK SUBSからの影響を受けるか、あるいは80年代初期のUKパンク・バンド、THE EXPLOITEDやG.B.Hに感化されていた。今、挙げたようなバンドは世界的にも最も有名なパンク・バンドの類いであり、そのレコードは幅広く、普通の店にまで流通していただろう。親戚が西側諸国(大体がドイツかオーストリア)に暮らしているようなツイているパンクスなら、その親戚にパンク・ロックのレコードをクリスマスのプレゼントとして送ってもらうよう、頼むこともできた。言うまでもなく、そういったバンドのレコードは最も入手しやすいものだったからだ。

しかし、もっとアンダーグラウンドなもの、80年代のUKピース・パンクであるCrass RecordsやMortahate Records、そしてDischord Recordsといった初期アメリカのハードコアとなると、DIYなディストロや小さなインディペンデント・ショップでしか売られていなかったため、入手はほぼ不可能だった。そのため、80年代のチェコスロヴァキアのパンクスとパンク・バンドは西側諸国の有名なバンドを少しばかり知っているだけだったのだ。

80年代後半、1989年の改革が起こるまでの短期間のうちに、チェコスロヴァキアのチェコ地方で、極初期のハードコア・バンドが結成されていった(僕が知る限り、1989年以前に活動していたハードコア・バンドはスロヴァキアには存在しない)。彼らの多くは首都のプラハを拠点としていたが、注目すべき例外として、RADEGASTというバンドが挙げられる。

RADEGAST(1981 - 1993)

チェコスロヴァキアの最初期のハードコア・バンドはこの国の北東、ポーランドとスロヴァキア国境近くの都市、ハヴィジョフにて80年代初頭に産声を上げた。この地域はシレジアとも呼ばれ、大規模な炭鉱の採掘所や重工業、大気汚染、環境破壊でよく知られている。新たな生活を求めて国中からやってきた炭坑夫が暮らす都市として、ハヴィジョフは1950年代後半に設立されたのだった。そして、この酷く環境が汚染された地域で、ヴァイタリティ溢れるハードコア/パンク・シーンが誕生する!

RADEGASTのギタリスト、Milan Jonstaはパンク・ロック・バンド、HLAVY 2000(この記事の第一章で簡潔に触れている)で70年代当時から既に活動していた。彼が外国の速いバンドを知るようになると、彼は新しいバンド、RADEGASTの結成を決意する(この名前は有名な地元のビールの銘柄から取られている)。80年代初頭、彼はDIE KREUZEN、MINOR THREAT、YOUTH BRIGADE、BATTALION OF SAINTS、POISON IDEAといった初期USハードコア・バンドをポーランドのラジオ放送や密輸入されたレコードを通して知った。それらは当時、非常に目新しく、とんでもない衝撃を彼に与えることとなる。しかし、RADEGASTは幾度かのメンバー・チェンジを経験し、彼らが初めてギグをするまでには3年の月日を要した。最初のギグは80年代半ばに行われた違法ギグで、1986年には13曲入りのデモ・テープを録音する。それはマシンガンのようなドラムに耳障りな女性ヴォーカルの素晴らしいスラッシュ・ハードコアで、たった20分間の作品だった!その音源は同じ都市で活動していた他のバンドも参加した、アンダーグラウンド・テープ・コンピレーションにも収録されている。すぐにヴォーカルが脱退してしまうが、バンドは3ピースで継続され、解散するまでJonstaがギターとヴォーカルの両方を担当した。

1989年、彼らはセカンド・デモ・テープを録音する。今回は17曲で20分ほど。サウンドはよりブルータルに、よりファストになっていった。CRYPTIC SLAUGHTERやWEHRMACHT、LUDICHRISTといった80年代後期の新世代スラッシュ/ハードコア・バンドからの影響も多少はあったのかもしれない。このデモは1991年にポーランドで「Nikomu Never」(Trust Nobody)テープとして再発される。B面には1990年のブルノでのライヴ音源が収められた。この2本のテープの歌詞は、彼らの生活環境が直接的に滲み出ている。大部分は過酷な重工業に携わる日々の絶望と憂鬱、そして疎外感をテーマとしていたのだった。



ギグに関して。彼らは地元での小規模な違法ギグしか行わなかったので、活動的だったとは言い難い。しかし、プラハで87年に開催されたRockfestフェスティバルに彼らは出演し、大勢のオーディエンスにロウ・ハードコアの衝撃を与えた。1989年になると、国内ではほとんどライヴをやらなくなったが、シレジア地域やポーランドでは何度かプレイしていた。彼らはポーランドのシーンで主に活動していたので、これは何ら不思議ではない。

1992年、彼らは「Fuck Off Major Labels」コンピレーションLPに参加。ハードコア・パンク・シーンから搾取をしようとする巨大レーベルへの抵抗を示すために、Malarie Recordsがリリースしたものだった。一年後にはRADEGASTは自主で「Otravena Generace」(Poisoned Generation)LPをリリース。主に昔のデモ曲をプロフェッショナルに再録したもので、悪くはない。しかし昔のデモ・テープにあった生々しさと切迫感は決定的に欠けていた。LPがリリースされた直後の1993年、RADEGASTは解散する。

80年代のデモ・テープ2本は、チェコ・ハードコア最高のクラシックとして語り継がれている。音楽とメッセージもグレートだったのだが、素晴らしい音質にも注目したい。RADEGASTのベーシスト、Jiri Proksは小さなDIYスタジオのオペレーターをやっており、地元のバンドの音源をレコーディングしたり、違法且つDIYなやり方でコンピレーション・テープをディストロしていた。当時のハヴィジョフのパンク・シーンは、小さいながらもしっかりとした基盤を持ち、IQ60、BRACHYBLAST、STREDNE RYCHLE SIPY、KL



RADEGAST「Nikomu never」テープ

ECといったバンドもいた。時にはメンバーを共有し合い、お互いに助け合っていたのだ。これらのバンドは80年代中期/後期にかけて秀逸な音源を残している。これもProksの活動によるところが大きかった。

ところで、RADEGASTのデモ・テープはこれまでヴィニールやCDで再発されたことがない。いくつか計画はあったが、いずれも実現しなかった。チェコスロヴァキアのハードコア/パンク史は、世界に発掘される余地をまだ残しているのだ!


KRITICKA SITUACE


SUICIDAL COMMANDO


MICHAELS UNCLE


BRACHYBLAST

KRITICKA SITUACE(1987 - 1996)

KRITICKA SITUACE(Critical Situation)は1987年にプラハにて結成。メンバーのうち何人かは当時まだティーンエイジャーだったが、このバンド以前からやっていたP.S.よりもスピーディなパンクを演奏していた(P.S.は1988年の頭に、最初で最後となるデモ・テープをレコーディングして解散)。P.S.の頃は酔っぱらいやパーティーといった多少ふざけた歌詞だったのだが、KRITICKA SITUACEのメッセージは当初から政治的でシリアスなものであった。また音楽的にも成熟し、CONCRETE SOXやM.D.C.、DEPRAVED、H.D.Q.といった外国のバンドからの影響を受けていた。何回か違法ギグでプレイした後、KRITICKA SITUACEは「Zejtra je nam 20」(Tomorrow We Are 20)という初のデモ・テープを1988年にレコーディング。このタイトルは、全ての若者が当時義務化されていた徴兵(通常は2年間)のことを、叙情的に表したものだった。KRITICKA SITUACEはまた、強固な反軍国主義的且つ平和主義的なメッセージを持っていた。彼らの音楽は、かなりラフで発展途上にあるメロディック・ハードコア、そして実験的な要素も有していた。1989年のセカンド・デモ・テープ「Stale na uteku」(Still On the Run)は音質も向上し、ストレートなサウンドで確実により熟練されていた。メッセージは変わらず平和主義を力強く訴えていたが、その頃から見られるようになった受動的で、ファッション重視のパンク・シーンに対する非難も含まれるようになる。

1989年以降、KRITICKA SITUACEは何人かメンバーが変わり、より本格的に活動するようになった。すぐにヴォーカル/ギターのRobert Vlcekは、プラハに外国のバンドを招聘する最も重要なプロモーターとなり、アメリカのハードコア・バンド、MURPHYS LAWとGORILLA BISCUITSのライヴをプラハで企画する。それまでにチェコスロヴァキアで外国のバンドを見られる機会など皆無だったため、それは当時驚くべき出来事であったのだ。1991年から90年代中頃まで、彼は何百ものバンドのギグを企画する。FUGAZIやCRO-MAGS、AGNOSTIC FRONT、SHELTER、M.D.C.といったアメリカの大御所がメインだったが、DISORDER、OI POLLOI、DOOM、SO MUCH HATE、CONCRETE SOX、CHAOS UKといったバンドの企画もしたのだった。これらのギグは、90年代初頭のチェコスロヴァキア・ハードコア・シーンの発展に多大なる影響を与え、その多くがプラハの007 Clubで開催された。今でもそこは営業しており、頻繁にハードコア/パンクのギグが行われている。

1989年に全体主義が崩壊すると、KRITICKA SITUACEはレコードを正式にリリースする機会を得た。1990年には「Epidemie」(Epidemic)コンピレーションLPに3曲、昔の曲の再録で参加(他にはPLEXIS、TELEX、ZELENI KANIBALOVE、SVOBODNY SLOVOが収録されていた)。これらの3曲は彼らのベスト・ナンバーだろう。素晴らしくキャッチーなコーラスがのる、力強く直情的なハードコア/パンクだった。1993年にKRITICKA SITUACEはデビューLPを新しいインディペンデント・レーベル、Day After Recordsから発表。音質は完全にプロ仕様となり、楽曲も情熱的なメタリック・ハードコアで、まだ良いものだった(このLPには80年代の曲の再録も含まれていた)。このレコードや、チェコスロヴァキアに限らず西側にも幾度となくツアーして周ったこと、そしてバンド・リーダーのRobertのカリスマ性のおかげで、KRITICKA SITUACEは間もなく90年代初期から中期におけるチェコ・ハードコアの主役に躍り出る。1996年にはDay After Recordsから「Forgiveness」というEPをリリース。これはより"エモ"になっていて、この直後にバンドは解散する。

2000年代の頭に、チェコのバンドがKRITICKA SITUACEのカ



ヴァーをするというトリビュート・アルバムが計画されるが、実現しなかった。多くのバンドは既に彼らの曲をカヴァーしていたのである。また、LAHARやTHALIDOMIDE、SEE YOU IN HELLといったチェコのハードコア・バンドは今でも、KRITICKA SITUACEのナンバーをカヴァーしている。2010年の現在、解散から14年の月日を経て、バンドが再び練習を始めたという噂が飛び交っている。もうすぐ彼らは、再びステージ上に舞い戻ってくるのだろうか?

SUICIDAL COMMANDO(1987 - 1988)

このバンドにもP.S.のメンバーが関わっていた。SUICIDAL COMMANDOの音楽性は当初からKRITICKA SITUACEよりも完成されていたが、彼らの歌詞にある政治的な姿勢が問題となり、短命に終わる。プラハで行ったライヴの回数は1ダースほどだったが、17曲入りのデモ・テープ「Made In Perestrojka」を1988年に発表し、音楽についてのみ語るならば、それはキラーだ。SUICIDAL COMMANDOのサウンドはD.R.I.やSUICIDAL TENDENCIES、LÄRMからの影響が顕著で、非常に速いハードコア/スラッシュをプレイしていたのも当然だろう。彼らの歌詞は支配的な全体主義体制と警察に対するかなり直接的で辛辣な攻撃であったのだが、嘆かわしいことに何曲かレイシスト的な曲が存在していた。バンドのメンバーは新たに台頭してきたフーリガンやスキンヘッドのシーンに傾倒していたのだった。ちなみに、チェコスロヴァキアにおいて、スキンヘッド・サブカルチャーは80年代後半に始まり、当初はプラハに限定されていた。残念ながらその始まりからナショナリスト、レイシストの側面が強かったのだ。

SUICIDAL COMMANDOはデモをレコーディングして解散し、メンバーはPLEXISやKRITICKA SITUACE、MICHAELS UNCLEへ加入する。

MICHAELS UNCLE(1987 - 1994。2004年に再結成)

MICHAELS UNCLEは1987年にプラハで結成。当初はダークで病的なポスト・パンクをプレイしていたが、1989年になるとより速く、歪んだサウンドを獲得し素晴らしいテープ「Svine!」(Pigs!)を録音。それは後に(1992年に)、LPとしてBlack Pointレーベルより再発される。彼らはほぼ違法ギグでしか演奏していなかったが、あまりにもドラッグを過剰摂取するためその名が知られており、またその過剰摂取がバンドの終焉を引き起こすことになる。

1990年にバンドは自主でデビューLP「The End Of Dark Psychedelia」をリリース。凄まじくロウで、実験的な要素もある歪んだハードコアだった。このレコードは旧全体主義体制の堕落を荒々しく、そして直接的な歌詞で表現し、完璧な名盤となった。後にドラッグの問題でバンドは解散するが、2004年に再結成を果たし、今でも現役でレコードをリリースしている。



SUICIDAL COMMANDOのデモ・テープ

BRACHYBLAST(1986 - 1991)

BRACHYBLASTはRADEGASTの友人らによって始まった。RADEGASTと同じ都市の出身で、先に記したベーシスト、Proksによって彼らの音源はレコーディングされ、リリースに至った。2本のデモ・テープがあり(1987年と1987年/88年にかけてのもの)、両作ともラフでアグレッシヴなサウンド。DEAD KENNEDYSとCRUCIFUCKS、そしてポーランドのDEZERTERからの影響が感じられる。彼らはもう一本、デモ・テープを1991年に発表し解散。このバンドは全く知られていないし、地元以外では人気もなかった。そしてライヴもそれほどはやらなかったようだ。

NASROT(1988 - 現在)

元々は地元、ハブリーチクーフ・ブロトのサイケデリック/アンダーグラウンド・バンドのメンバーらによって結成。NASROTはハードコアと言ってもいいほどにめちゃくちゃ速いロウ・パンクをプレイしていた。DEAD KENNEDYSからの影響が一番大きかったのであろう。1989年に「Totalne Nasrot」(Totally Drunk)という16曲入りのデモ・テープをレコーディング。ショート&アグレッシヴで爆風のようなハードコア/パンクだった。

その後の1989年には「Rebelie」コンピレーションLPに参加し、1991年にはデビューLP「Destructive Tour」を発表。両リリースともにその大部分はデモ・テープの楽曲の再録だったが、サウンドはロウなまま。歌詞の多くは酔っぱらうことや気が狂うことばかりだったが、いくつかは詩的にすら感じる皮肉的なものもあった。デビューLPの直後、NASROTはその音楽性を完全にラップ/メタル、FAITH NO MOREやRAGE AGAINST THE MACHINEに似たようなものへと変化させてしまうのであった。

INSANIA(1987 - 1989/1992 - 現在)と SKIMMED(1989 - 1992)



INSANIA



SKIMMED

INSANIAはブルノ出身、チェコスロヴァキアにおいて恐らく最も早い段階でWEHRMACHTやSLAYER、VOIVOD、CRYPTIC SLAUGHTER、NAPALM DEATHに影響を受けたファスト・スラッシュ・コアをプレイしたバンドだろう。彼らはパンクスというよりもメタルヘッズとして認識されていただろうし、その英語の歌詞も、サタニックで神話的なイメージをもたらした。ライヴはユース・クラブ"Krenova 75"で数回行われ、そしてそこは80年代後半のブルノの地元のハードコア、パンク、スラッシュ/ブラック・メタル・シーンにとって、最も重要な会場でもあった。「Possessed By Insania」デモ(1988年)のレコーディング後に、バンドは秘密警察の介入により活動を停止させられる。秘密警察は、活動を続けるのなら大学の研究所にいられなくしてやるとメンバーを脅迫したのだった。

それにも関わらず、バンドは活動を継続した。ただし、バンド名をSKIMMEDに変えて、地下室でひっそりと練習する、というものであったが。また、音楽性とメッセージもハードコア寄りに多少変化した。

1990年にSKIMMEDは自主で「New Insanity」LPを45回転の9曲入りでリリース。チェコスロヴァキアのハードコア・バンドとしては、早い時期にDIYのやり方でヴィニールをリリースしたバンドの一つである。またこのバンドはチェコスロヴァキアに限らず、世界規模での人気を博した。後に、アメリカのSlap A Ham Recordsからリリースされた「Son Of Bleaurgh」コンピEPと、Malarie Recordsからの「Fuck Off Major Labels!」コンピLPに参加。1992年にSKIMMEDは解散するも、INSANIAとして再結成。しかし、この頃彼らは実験音楽とメタル指向のバンドになっていた。

S.R.K.(1988 - 1992)

ブルノ出身のもう一つのバンドで時折、INSANIA、SKIMMEDと共演していたS.R.K.。当初、彼らはTHE DAMNEDをカヴァーするようなカオティックなパンクだったが、後のデモ・テープ「Extreme Noise Maniacs」(1989年)ではよりスピーディな、S.O.D.やD.R.Iの影響下のサウンドになった。更に彼らは留まることなく、1989年に政権が交代すると、より速く、よりノイジーに、よりヴァイオレンスな音楽性、グラインド・コアやノイズ・コア(NAPALM DEATH、BRIGADA DO ODIO、MEAT SHITS、A.C.など)へと突き進んでいく。そして彼らはCZECHCORE S.R.K.と改名する。

1990年、CZECHCORE S.R.K.は自身のレーベル、Discord Recから「rock music」CDをリリースする。それは"Only For Extremists"とも呼ばれ、率直且つ政治的な歌詞がのる、ノイジーに爆発した33曲が収録された。そのうちの何曲かは翌年「Rebelie II」コンピにも収録される。後に彼らは(SUBVERTED名義で)「Absurd」CDと最終作となるテープ「Strcprstskrzkrk」を発表。両方ともドラム・マシンが使用された。

80年代後半にかけて始動したハードコア・バンドで、他に言及できるものと言えば、F.A.S.、O.P.M.、SVOBODNY SLOVO、ZELENI



KANIBALOVE、AKUTNI OTRAVAがある。その後の1990年、政権が変わった直後には、新たに多くのハードコア・バンドが登場する。例えばGUMMY PIG、STRES、ROPNEY PRODUKT、L.D. TOTENKOPF、LUES DE FUNES、MENTALLY PARASITES、LOLLIPOP、SERIOUS MUSIC。彼らの多くがLPかEPを残すか、コンピレーションLP(「Epidemie」や「Rebelie II」、「Fuck Off Major Labels!」)に参加。

この記事で主に取り上げたバンドは、チェコスロヴァキア・ハードコアの第一世代にあたる。月日が流れ、この地で演奏した外国のバンドや、1989年以前よりも遥かに流通するようになったレコードといった西側諸国からの影響を、シーンはどんどん吸収していった(チェコスロヴァキアの現地通貨がクソみたいな価値しかなかったので、レコードの価格は大きな問題にはなったが)。新たな刺激とメッセージを受け、間もなく新しいレーベルが発足し、ファンジンも増えていくと、ハードコア・シーンは反ファシズム、反レイシズム、動物の権利、反軍国主義、アナーキズムなどといった問題に対して一気に活動的となった。そして多くのデモと直接行動が首都プラハや第二の都市ブルノで繰り広げられるようになる。また、外国のクラスト・バンドたち(HIATUS、S. O. WAR、SELFISH、DOOM、WARCOLLAPSE、DISKONTOなど)もチェコスロヴァキアで演奏するようになり、ここのバンドたちに新たなジャンルとして影響を与えたのであった。それはグラインド・コアにも同様のことが起こる。

これらは全て1991年/1992年に始まり、90年代を通じて継続された。そして2000年に入ると、チェコ/スロヴァキア・ハードコアの政治性は軟化していったと言えるだろう。

1992年から90年代半ばにかけての重要なポリティカル・ハードコア・バンドと言えばHEARTLINE(SEDITION影響下のハードコア。フルEPとMASSKONTROLとのスプリットEPをリリース)、CUL DE SAC(ロウ・パンク。フルEPをリリース)、AVERZE(ファスト・ハードコア。正式な音源はない)、NONCONFORMIST(DISAFFECTのようなハードコア/パンク。フルEP、10"LP、スプリットLPをリリース)、NIHILOBSTAT(HIATUSのようなクラスト。デモ・テープのみリリース)、PACEM IN TERIS(DISORDER/VARUKERSスタイルのロウ・パンク。デモ・テープのみリリース)、LOS SOMMROS(ファスト・ハードコア/クラスト。リリースはないが、DISCLOSEとのスプリットEPが計画されていた)、MRTVA BUDOUCNOST(ロウ・パンク/クラストだったが、後にファスト・コア/パワー・ヴァイオレンスに。COEXIST、PANGS OF REMORSE、ARGUE DAMNATIONとのスプリットEPを、GRIDE、LEFT IN RUINSとスプリットLPをリリース。僕はこのバンドでギターを弾いていた…)。

オーケー、僕からは以上だ。興味を持ってくれてどうもありがとう。もしここで記述したバンドか、チェコの最近のハードコア/パンク・シーンに関して知りたいことがあったら遠慮なく連絡して欲しい。また、1989年以前のチェコスロヴァキアのハードコア/パンク・シーンを網羅した僕の著書、「Kytary a rev」(Guitars And Screams)をもし欲しければ、www.phr.czまでオーダーしてもらいたい。チェコ語で書かれているが、英語による長い概要と写真がたくさん掲載されている。チェコの最近のハードコア/パンク・シーンについてもっと知りたければ、2000年代後半に焦点を当てたシーン・レポートが載っているEL ZINEのVol.1をチェックしてくれ。

この長い記事を掲載してくれて、Kenjiどうもありがとう。そして、全ての日本の友人たちに敬愛を!

S.R.K.



LAS SEÑORAS

スペインはマドリッドのキラー・パンク・ロック・バンド、LAS SEÑORAS。先頃Solo Para Punksからリリースされたそのセルフ・タイトルの1st EPが実に格好良い。90年代の名盤「CHLOROFORM」コンピ(MANGROVE)にもし入っていたとしても違和感のなさそうな荒削り且つセンスが光る楽曲に、ヴォーカルの合唱パートが多用されているところも魅力的。パンク・ロック〜ガレージ〜ハードコアとかおかまいなしに痺れるバンドです。
音源にはキーボード・プレイヤーが在籍していましたが、現在のメンバーはNuria(通称Nuri/ベース)、Clara(ヴォーカル/ギター)、Marta(ギター)、Maria(ドラム)の4人。メンバー総出でメチャクチャ丁寧に答えてくれました。至って普通のルックスですが、ジャパニーズ・ハードコアが好きだったり、GSも好きだったりと何やら引き出しを沢山持っている人たちです。

PHOTO:Michelle Olaya Ortega

■"LAS SEÑORAS"って英語で"LADIES"という意味ですよね?どうして全員女性のバンドをやろうと思ったのですか?結成の経緯を聞かせて下さい。

Nuria「LAS SEÑORASは偶然の産物、半分はジョーク、半分は真剣に始めたバンドなの。ある夜、私たちはお酒を飲みながらバンドを始めてみようかっていう話しをしていた。決まるまでちょっと時間がかかったけど、最終的には一緒にやろうってことになって、それでこのバンドができた。最初の頃はRaquelがいたんだけど、彼女はすぐにバンドを去って、Cristinaも初期の頃に加入したんだけど彼女も時間がとれなくて辞めちゃったわ。このバンド名はそう、"レディース"という意味。排他的に、女の子だけのバンドにしたかったわけじゃないんだけど、私たちの周りで起きていたことに対する反発というのもあったのよね(実際のところ、"何か"が起こっていた)。そう、笑いながらCañas(小さな生ビール)を楽しんでいた夜に、私たちは結成した」

Clara「Nuriが言う通りね。バンドのメンバーの大部分は、お互いのことをショーや夜の街なんかで見かけていたから、一緒にバンドやることになるんじゃないかってちょっと考えていた。私にとっては、もちろん、みんな女の子ってのは重要なことではあるんだけど、他のメンバーにとってはどうなのかは分からないな。この名前には同意し難かったのよ。レディースみたいな感じの意味ではあるけど、スペイン語になるとちょっと可愛らしさが減るように私は感じていて。バンドをやろうって話しをしてから、実際にバンドの練習を始めたのはそれから一年後なんだけどね。最終的な後押しとなったのは、何人かの友達が練習する場所を提供してくれてそれでようやく本腰を入れたの」

Marta「私の記憶が正しければ、バンドを始



めようって初めて話し合ったのはJAY REATARDのショーを見た後の晩だったはず。実際、全員女の子って発想は自然なものだったし気に入っている。そう、それにこれは私にとって初めてのバンドで、やる気もすごくあったし、色んなことをレディースから学んでいるわ!」

■他のメンバーにとってもLAS SEÑORASは初めてのバンドですか?他にもやっていましたか?

Nuria「ええ、私はCHOPPER CHICKSとSWEET NOTHINGSというバンドで以前プレイしてたわ。それとちょっとしたプロジェクトを2つ3つね(NURI ALABAMA Y SUS PENDEJO RANCHEROS、FLIP OUTS、PIN UPS…)。LAS SEÑORASを始める前には6年ほど別のバンドで活動していたのよ」

Clara「私がこれまでレコードを出したことのあるバンドはLAS SEÑORASとSILLA ELÉCTRICAだけね。デモを出したことのあるバンドなら、HUE & CRY(サンフランシスコ)とBOLSHEVIK BETTY AND THE BADKNOCKS(アルバカーキ)があって、もう一つABANDONというバンドではコンピにだけ参加している」

Marta「LAS SEÑORASが初めてのバンドよ!」

Maria「私はCHARADES、MITTENS、SWEET NOTHINGS(Nuriと一緒に)、FULL OF GRACE、LAS BAGUETTES、YES SIR、それに時々WILD HONEYでコーラスとパーカッション…。才能ある人たちとたくさん出会っているからね!」

■結成当初、意識していたバンドは何かありましたか?

Nuria「何かと似せようとは当初から考えていなかったと思うわ、ねぇみんな?」

Clara「うーん、そうね、誰かみたいになりたいっていうのはなかったかな。けど明らかに影響を受けたものはいくつかあるわよね。このバンドに関して私が気に入っているところは、私たち全員がそれぞれ全く異なった音楽ジャンルが好きだということ。そして更に、私たち全員に共通する音楽的な趣味も一部分だけどあるってこと。80年代初期のパンク・バンドで、ちょっとニューウェイヴがかっているLA MOVIDA MADRILEÉAっていうグループがマドリッドにいたんだけど、それに感化されたようなスタイルでやるのには興味があったな。例えば、始めたばかりの頃はCHAROLとPARAÍSOのカヴァーをプレイしていたしね」

Marta「何かしら他のバンドを模倣しようと思って練習はしていないけど、それぞれに影響されたバンドはあるし、それが曲には現れていると思う」

Maria「何か、こうやろうっていうのはないわね。私たちから溢れ出てきたことをプレイするだけ。お勉強したり事前に考えたりってのはしていないのよ」

■では、"Riot Grrrl"ムーヴメントのバンド、BIKINI KILLだったりXみたいなDangerhouse Recordsのバンドは好きですか?

Nuria「そうね、私はBIKINI KILLは大好きよ。ずっと聴いているし、あのバンドは時代を作ったわよね。Xも好きだけどAVENGERSの方がもっと好き!」

Clara「うん、そういったバンドは全部好き。Riot Grrrlが私たちの音楽に直接的な影響を与えたとは言いたくないけど、確かに私が本気で夢中になった音楽が色々とあった。XみたいなLAサウンドにTHE GO-GOS、THE BAGSは常に私のお気に入りよ」

Marta「もちろん、BIKINI KILLとTHE BAGSは最高!!」

Maria「Riot Grrrlsと90年代のシアトルのグランジ・シーンは大好きよ」

■7"EPのレコーディングはいかがでしたか?音質も凄く雰囲気があって良かったですが、どんなところを一番気にしましたか?

Nuria「7"は練習している部屋で録ったの。2日間でギターとヴォーカルの一部を除いたすべてをやったわ。かなり迅速に進んだわね。個人的にはこのサウンドは大好きだしレコーディングの時にのびのびとリラックスさせてくれたMarioに感謝したい。とても熱心にやってくれたから信頼できたし、チャーミングで素敵だったわ」

Clara「ありがとう!私も音の響き方に関しては気に入っているの。それにNuriが言ったように、私たちの友人と一緒に練習室でレコーディングしたから、スンナリと事が進んだわ。適切なサウンドを作ることもね。その上Marioは私たちの演奏を見ていてくれて、練習で録った音も事前に聴いていてくれてた。私たちがすべきことは、わざわざ説明しなくても彼には見えていたように感じている。更にミックスの作業もMariaとMarioが一緒にやったから、すごく良くなったと思う…」

Marta「うん!ありがとう!もうつけ加えることはないかな。この仕上がりにはとても満足している。Marioと一緒にしたレコーディングはとても楽しくて、ファンタスティックだった!」

■LAS SEÑORASはMyspaceを使っていないのですか?それはバンドの方針として?Myspaceをボイコットしようと言うパンク・バンドもいますが。

Nuria「Myspaceなんてゾッとするわ。Bandcampのほうがまだマシね。LAS SEÑORASはそんなもの必要としていないのよ」

Clara「バンドを聴いたり調べる上で、そこに偽りがなければ役には立つわね。でも何も持たない方がいいわよ。あとは面倒くさいっていうのと、社会的なメディアに対してちょっとアンチな姿勢も私にはあるからかな。インターネットは全てのことを多く知り過ぎてしまう。私はもっと身近な存在を大切にしたい」

Marta「私の場合、MyspaceやBandcampを作るのは別に気にならない。私たちは今、Bandcampのページを作ったしちょっと面白いわよ。Myspaceはバンドが自分たちを広めるために最も幅広く使われているツールだけど、色んなオプションがついて廻るでしょ。Bandcampのプラットフォームが一番LAS SEÑORASにあっていると思うけど」

Maria「Myspaceなんてクソね!デザインも、スパムも、ポリシーも…。私がやっていた違うバンドでは使っていたけど、Bandcampのほうがいいわ」

■歌詞のテーマについても聞かせて下さい。誰が書いているのですか?

Nuria「歌詞を要約しようとするのは少し複雑なことなの。ちょっと変わったことやクレイジーな内容で、私たちに起こった数えきれないほどの、様々な出来事について書いている。大体は"気味の悪い"ことで全然ハッピーなものじゃない。どうして自分たちを騙すのか、惨めさや、切望だったり、うーん、自分でも分からない、説明するのは難しいわね。感じたことを書いているだけだから。誰かがアイデアを思いついたら、みんなで一緒に仕上げていく。言い回しや、単語がうまくはまるように…。時々、意識の超現実的な流れに似たものが出てきたりするけど…」

Marta「そうね、Nuriが言った通り。一つのアイデアからスタートして、それが不快感や不安感、ある一つの状況だったりストーリーへと変貌していく。それが元になり、歌詞が発展していく。奇妙なことがそこには書かれているわ(笑)」

■スペイン語で歌っているのはどうしてですか?やはり英語ではなく母国語で歌いたいから?

Nuria「言葉にこだわりはないのよね。実際、私たちが作った最初の曲は英語詞だった…。でも、何かしっくりこなくて、それでスペイン語にしたの。きっとClaraがスペイン語で歌いたいっていうのがあったんだと思う(Clara、これって合ってる?)。他のメンバーにしても母国語で表現する方が簡単だしね」

Clara「そう、確かにそうだったわ。私が歌詞をスペイン語にしようって推したんだったと思う。スペイン語の語感が本当に好きなんだもん…」

Marta「私たちは英語で歌うはずだった。事実、最初の曲は英語だった。だけど、確かに、どうもうまくいかなかったのよね。Clara



PEAVEY

5150

PEAVEY
KORG

が英語に変えようって提案してくれて…、そしてそれはピッタリだった。スペイン語で歌えて嬉しい」

■スペインではどんなバンドと一緒にショーをしていますか?

Nuria「私の今のお気に入りはSILLA ELÉCTRICA(Claraもプレイしているバンドね)」

Clara「何回かFRACASOやSUDORと共演したことがある。他のバンドだと、ヴァレンシアのULTRABOTOX(LAS RODILLERASも素晴らしいけど、まだ一緒にやったことはないわね)が大好き。来月にはOBEDIENCIA(Solo Para Punksからレコードを出してくれた人がメンバーよ)と共演する予定。TETALLICAもここで活動している全員女性の素晴らしいバンドね」

Maria「私はポップが好きなんだけど、色んなジャンルで活躍しているミュージシャンの友達が沢山いる。だから私たちとは全然違ったスタイルのバンドと一緒にやるのが好きかな。5バンドも立て続けにハードコアを見るのはちょっと退屈ね…。そしてポップなのが5バンド出るのも退屈!」

■全員女性ということで、何かシーンにおいて弊害を感じたりはしますか?

Nuria「個人的にはそうは思わないな」

Clara「説明しづらいわね。私たちは音楽シーンに飛び込んだばかりの、自分たちの居場所を探しているようなティーンエイジャーじゃないから。長いことシーンに関わっている。ショーに行ったり、演奏したり、企画したりとかね。それに色んな知り合いがいるから、練習場所を確保したり、ショーをやったり、楽器を買ったり借りたりするのは容易でもある。もっと若い女の子の場合だと大変なのかもしれないけどね。多分、男性のほうが同じ環境にあればもっと楽だっていうのは事実でしょうね。けど注目を集められたり、ショーにお客さんが沢山来てくれるのは私たちが女性だから。これもまた事実」

Maria「女性が何かをするっていうのは、時には大変よね。何人かは、本当に君らが演奏できるのか、なんて考えていたり、見た目で判断して音楽に見向きもしなかったりするから…。女の子たちは自分たちで演奏していく術を自分たちの手で確立すべき!男の子と同じくらい女の子が活動していれば、そんな年中男女間の違いについて話すことなんてなくなるわ」

■日本について何か知っていることは?

Nuria「私は色んな日本のバンドのライヴを見てきた。Funtastic Dracula Carnival(スペインの音楽フェス)でMINNESOTA VOODOO MENにTHEE BAT、JACKIE AND THE CEDRICSとかね。SUPERSNAZZ(まだ活動しているのかは分からないけど)が大好き。それにGUITAR WOLF。彼らのライヴも大分前に見た。それに5678'sに少年ナイフも…。あっ!私はTEENGENERATEに夢中よ!!!色々とある日本食の中だと、マグロのお刺身が一番好き。本だと三島由紀夫ね」

Clara「サンフランシスコに住んでいた時に、驚くほど素晴らしい日本のハードコア・バンドをたっぷりと見られたのは幸運だった。強烈なバンドに首ったけなの。JUDGEMENTみたいなね。そこで暮らしていた時にはREALITY CRISISやDSB、PAINTBOXとかのショーに行ったことがあるわ。うーん、それとBOYSBOYSっていう日本のバンドで、全員女性だと思うんだけど、彼女たちの7インチは音楽的にもう常に最高だと思う」

Marta「私は60年代のグループ・サウンズと呼ばれている日本のバンドを聴いていたわ。SPIDERSにTIGERS、GOLDEN CUPS。あとは「Love, Peace and Poetry」っていうオムニバス・シリーズの日本編に参加しているグループ、SPEED GLUE & SHINKIにBLUES CREATIONとかも。あぁ、THE SAMURAIっていうバンドのシングルも好き。パンク・バンドだとGUITAR WOLFとREGISTRATORSに、最高にお気に入りなのはTEENGENERATE!!」

Maria「日本の文化って全てが素晴らしく私には映る!あらゆるもののデザインや装飾が大好きよ!」

■今後の予定は?

Nuria「ゆっくりやっていくわ!」

Clara「またレコーディングするのを楽しみにしている。多分、7インチを作って、ここスペインでもっとショーをやりたいな。Nuriがインタヴューの冒頭で言ったように、キーボードのメンバーが今年の頭に抜けちゃったから、キーボードをどうするかも考えないとね。曲は沢山書いているから、どんどん進んでいっているんだけど、練習場所に行ってワインのボトルを飲んでうわさ話に興じたりもしないといけないし。だから先のことは分からないわね…」

Marta「またレコーディングはしたいな。シングルか、その後にLPね。どうなるかしら!もちろん私にとっては、みんなで集まって演奏するだけじゃなくて、お喋りしたりして楽しみたいわ!そうそう、それにもちろんワインも飲まなくちゃね(笑)」

■インタヴューさせてくれてありがとう。最後にメッセージを。

Nuria「どうもありがとう。いつか日本に行けたらいいな!!!」

Clara「取り上げてくれてありがとう。私たちのレコードがこんな遠くまで知られていて、あなたが好きだなんて興奮するわ!」

Marta「インタヴューありがとう!うん!日本に行きたい」

Maria「日本で演奏できたらなってワクワクしている。日本で会えたらいいね!」



WORLD MELODIC POP PUNK TRAVELLING Vol.11 US

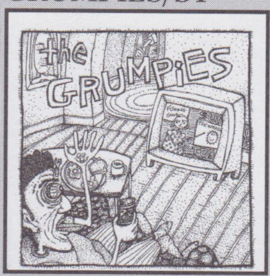
TEXT:
Yuki SP(Y)/WSオニギリ(O)

BEN GRIM/KING-SIZE SPECIAL



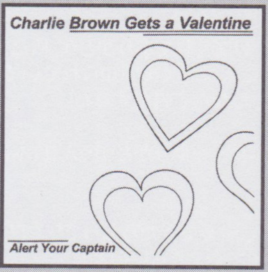
G-WHIZとスプリットをリリースしていたKING FRIDAYのメンバーも在籍しているウィスコンシンの極上CRUZIAN POP PUNKバンドの2曲入りシングル。ALL/DESCENDENTS、BIG DRILL CARファンなら脳しんとう必至のPOP PUNKサウンドで、A面タイトル曲はBEN GRIM史上2位の名曲です。B面のZERO BOYSのカヴァーもまあまあいけてます。BOSS TUNEAGEからリリースされたディスコグラフィー盤がWATERSLIDEから再発決定！これは嬉しい！(Y)
(GUMSHOE/GUM01)EP 1998年

GRUMPIES/ST



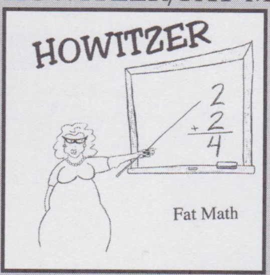
解散後10年近く経つにもかかわらず現在もショボPOP PUNKの代名詞として人気の高いミシシッピの3人組のデビュー作はコレクター泣かせレーベルSHREDDERからの4曲入り。すってんころりんすっとんとんという表現がまさにぴったりなショボくて速いそれは、この手のサウンドでは今後彼らを超えるバンドは現れないでしょう。この後にRECESSからアルバムもリリースされ最近CD盤が再発もされました。ちなみにベースのAMYちゃんは下着姿のライヴ写真でおなじみ。RECESSのビデオにそのAMYちゃんの映像が収録され(以下スペースの問題で省略)。(Y)
(SHREDDER/SH-36)EP 1997年

CHARLIE BROWN GETS A VALENTINE/ALERT YOUR CAPTAIN



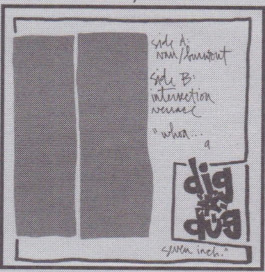
BEATNIK TERMITESの曲名から拝借したかどうかはわかりませんがステキなバンド名のCBGAVのデビュー作4曲入りシングル。ひょろひょろの青いヴォーカルと、拙いながらも心地良い疾走感のあるサウンドが、「がんばれっ！がんばれっ！」と応援したくなっちゃいます。他にはスプリットEP、MUTANT POPのSHORT-RUN CDRシリーズに参加、2枚のアルバムをリリースし、メンバーはDEAD MECHANICALとして現在も最前線で活躍中。(Y)
(SPOILED/SPR-02)EP リリース年不明

HOWITZER/FAT MATH



念願のレコード・デビュー！…で、こんな20秒で仕上がるようなジャケットにしてしまう勇気とやる気の無さは賞賛に値するでしょう。恐らく相当若かったであろう3人組によるデビュー作。授業中に机の下に鼻くそを付けていたら1日が終わっちゃいました的なチープでショボくてチープでショボいサウンドはB級どころかL級レベルには軽く達しています。しかも今となっては結構大きなレーベルからのリリースってのも見逃せません。この後スプリットもリリースしましたが、大方の予想通り消息不明に。(Y)
(ELEVATOR/品番不明)EP リリース年不明

DIG DUG/WHOA IT'S A DIG DUG



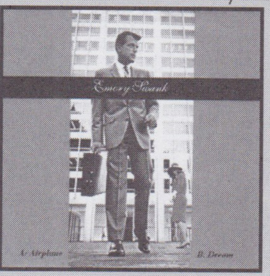
テキサスの3人組泣き泣きメロディック・バンドの単独作としては唯一のシングル。ヴォーカルのMATTはSORE LOSERでも活動しています。青臭いメロディーにハイトーン・ヴォーカルが絡みつき、学生時代に一緒に夜遅くまで学園祭の用意をしていた男女がいとも簡単にカップルになってしまう現象を指をくわえて見ているような、ヘタレでどうしようもない青年の胸の内を吐き出すようなサウンドになっております。ジャケットのアートワーク・紙質も素晴らしく、90年代ベストEPの中のひとつ。(Y)
(REBOUND/RR003)EP 1998年

JAKE AND THE STIFFS/I LIKE GIRLS



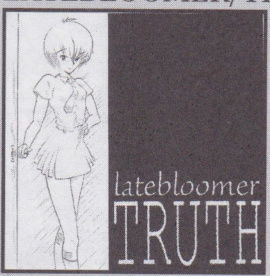
ゴルフと野球とポルノをこよなく愛するおっさんランディー・アメリカ率いる4人組の3曲入りシングル。意外とシングルを連発しておりMUTANT POPのSHORT-RUN CDRシリーズにも名を連ねていますが知名度はイマイチどころかイマサンくらいです。90's POP PUNK臭がプンプンするヴォーカルにQUEERSなんかを思い起こさせるキャッチーなメロディー。でもなんだかすごくショボいのは何故なんでしょうか。実は名曲多し。中でもこのシングルがお気に入りです。(Y)
(TRICKSHOT/TRICKSHOT-004)EP 1996年

EMORY SWANK/AIRPLANE



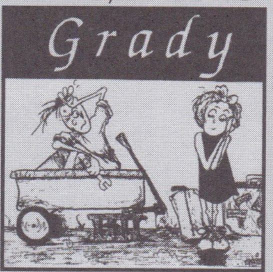
フィラデルフィアのMOD PUNKトリオ。実はこの後にリリースされる2ndアルバムは出だしのリフからすっげーかっこいい。でもこの1stは聴けば聴くほど病み付きになる。わざとらしくないしわがれ声がいいんです。そして動きまくるベースにパンク・ロック以外の音楽から影響されているであろうスマートで暗めのコード進行。音は違うけどMAKE UPとかのクールさを感じる。ROCKET FROM THE CRYPT的でもあるけど、アート・ロックっぽいのかな。でも根底はパンク・ロック。(O)
(PINKIE / NO #)7" 1994年

LATEBLOOMER/TRUTH



このジャケットを見たらメロディック・ファンは手が止まってしまうでしょう。THUMBS/現SICK SICK BIRDSのメンバーのレーベルからの唯一の音源。ジャパニメ・ジャケの共通点があるのかどうか知りませんがUKのGANやCHOPPERなんかを髣髴とさせるメロディック・サウンドで、ジャケ買いをした人の9割がガッツポーズをしたようです(当社調べ)。黒ヴィニールと青ヴィニールが存在しますがプレス数は不明。メンバーが後にSUPER CHINCHILLA RESCUE MISSIONだったり、と実に奥深いです。(Y)
(SNEEZEGUARD/品番不明)EP 1997年

GRADY/SO LONG…



意味わかんないんだけどガラスケースでレコードを陳列していて裏面すら見ることの出来ないお店で表面のみで手に入れた作品。店出て速攻中見たら好きなバンドがTHANKSに記載されててスキップしながら帰った思い出が。SAMIAMを思わせるエモーショナルなメロディックにPARASITES的なポップも搭載したすごい好きなバンド。FLATUSもこのバンドのカヴァーをしているのを後に知る。ちゃんと活動をすれば結構いい線いったのではないかと未だに思っている。(O)
(SUPERMODEL/SM01)7" 1995年

M.N.F.S.T./FANTOD



フィリーのアナキスト・ブックストアWOODEN SHOEというお店で長期に渡り居座っていた音源。FIFTEENのカヴァーやってるってだけで手に入れたら中身もFIFTEENまんまでショボショボにした感じ。限定200枚らしいけど、実際はメンバーの家の押し入れにはまだ在庫ありそうな感じです(笑)。このリリースの後SHOWER WITH GOATSというバンドに変名。こちらも知る人ぞ知るバンドって感じのB級バンド。でも憎めないやつって感じで好きですね。(O)
(SELF RELEASE/#005V)7" 1994年

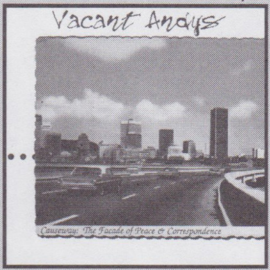
はい、こんにちは！今号はさらに暴走させていただいてます。北米大陸についに上陸です。まずは第一回目。今回紹介させていただく音源はまさに歴史から抹殺されてしまっていると思われるローカル・バンド中心です。僕がチョイスした音源はこれまで紹介されていない音源かつ、レコ屋で出会いジャケ買いやTHANKSリストをチェックして出会ったものを中心になっております。意味わかんねーと思われる音源が多いですが興味を持っていただけたら探してみて欲しいなと思うのです。SPが紹介している音源も含めてパンク専門店でない限り見付けたら破格のプライスで入手可能だと思います。多分…。これは続編かなりやれると思うのでたまにやりたいなと思ってます。

M.S.I./MORE STUPID INITIALS



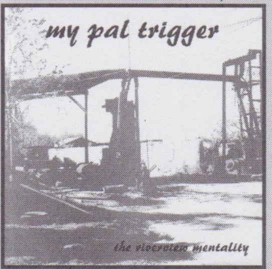
ジャケのアートワークがSTUPIDSっぽくて、レーベルのロゴがADRENALIN O.D.の「BUY OR DIE」のパクリだったから手に入れたんだと思う。そしたらサウンドもSTUPIDSをさらにアホっぽくした感じだった。SxEをバカにした曲や、ショッピングモール大虐殺なんて曲や、オズの魔法使いのカヴァーをやっていたりと下らないユーモア・センス炸裂の愛すべき奴ら。当時は有名だったのかなんて知らないけどこの7"は面白い。STUPIDSのようにクールじゃないけど、アホっぽいの好きならオススメ。(O)
(BRING YOUR OWN BANDS/WRC5-5159)7" 1987年

VACANT ANDYS/CAUSEWAY



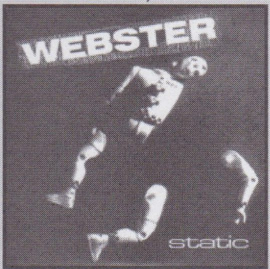
フロリダが生んだエモーショナル・メロディックの奇跡。ラスト作となる2ndシングル。JAWBREAKERの影響を下地として胸をグサグサと刺しまくる切ないメロディーに好感度の高い疾走感。B-1"UNGLUED"は聴く度に穴に入りたくなるほろ苦い記憶がありもしないのに思い出される永遠の胸キュン・アンセム・ソング。メンバーは後にDASHBOARD CONFESSIONALとしてスターダムへ。このクオリティーじゃそれも納得。100枚プレスのブルー・ヴィニールあり。(Y)
(MEISO/MEISO-001)EP 1996年

MY PAL TRIGGER/THE RIVERVIEW MENTALITY



DISCOUNTとともにCIGARETTEMANのUSツアーをサポートしたことで知られているのかどうかはわかりませんが、今も水面下では熱烈な支持を誇るフロリダのMPTの3rdシングル。JAWBREAKERにフロリダの気候をプラスしたらこんなん出ました、なこの時期に比較的多く見られる優良エモーショナル・メロディックは胸を熱くさせてくれます。現在確認しているのでこの他に2枚のシングル、2枚のスプリット、2枚のアルバムを出しています。こちらは1stプレス300枚はクリア・ヴィニール。(Y)
(MIGHTY IDY/IDY-001)EP 1996年

WEBSTER/STATIC



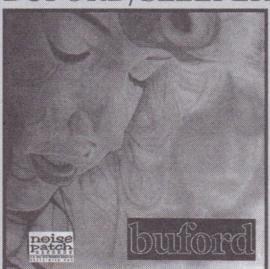
バスの乗換の時間つぶしにふらっと立ち寄ったレコ屋で、THANKS欄にFUNSIZEの名前があって手に入れた音源。レーベル名がいかにもな感じなんであまり期待してなかったけど聴いてみたらぶったまげた。アメリカ人なのにまさにSKIMMERを彷彿させる激ポップなパンク・ロックで最高だった。この音源の他に7"がもう一枚とコンピに参加している音源があるのみだと思う。こういう偶然の出会いがあるからレコード探しはやめられないという典型的な作品。(O)
(AMERICAN PUNK/APR071)7" 1996年

NINJA ATTACK/MY FIRST TIME



JAKE & THE STIFFSというバンドをリリースしているレーベル+マンガ・ジャケで購入。7曲入りなのでどうかなと思ったけどハートマークを曲名に多用しているのでいけるだろうと思ったら、スノッティーな鼻くそショボ・ポップ・パンク・ショートチューンの連発でF.Y.P.、GRUMPIES、PLOW UNITEDと同路線のサウンドににんまりでした。流通がよければ、かなり日本でも人気が出たのではないかと妄想してしまう。しかし、なんでアメリカ人の描く女の子は味がないのだろうか…。(O)
(TRICK SHOT/TRICKSHOT"#002)7" 1996年

BUFORD/SLEEPERSAURUS/SPLIT



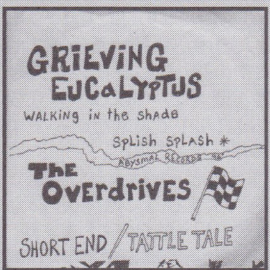
DEAD LAZLO'S PLACE～FOR SALEでギターをかき鳴らしていたLUISがメイン・ヴォーカルとして活動していたBUFORDの相性抜群スプリット。失恋直後に聴くと追加で5日間は立ち直れなさそうな物悲しいサッド・メロディック・サウンド味が十分に染み込んだ素晴らしい2曲を収録。この"AFTER DARK"で一体何人の若者とおっさんが涙したことでしょうか。対するSLEEPERSAURUSも素晴らしいです。名作。(Y)
(NOISE PATCH/MOTHER BOX/NPR005/MOTHERBOX21)EP 1996年

ONE GOOD EYE/LARGER THAN LETTERS



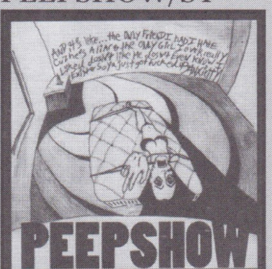
世界中に広がるエモが注目され始めメロディック・バンドが徐々に減り始めていた時期に、STRAIGHT EDGEバンドに違いないと勝手に思い込んで手に入れた作品。今でこそ、このレーベルは外れがないと思ってるけど当時は全然知らなかったから針を落としてあらびっくり！ザクザクとしたギターに動くビジー・ベース、もろにCRUZIAN POP PUNKだった。で、ど真ん中のストライクでした。このレーベルのコンピはかなり安い値段で売られたりしてるから逃さないでください。(O)
(OVER THE COUNTER/OTC-002)7" 1996年

GRIEVING EUCALYPTUS/THE OVER DRIVES/SPLIT



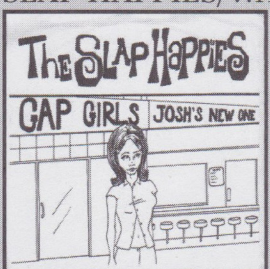
いやーこのスプリットはG.E.に尽きる。O.D.も初期GREEN DAY。UNDERHAND的なポップ・パンクで全然問題無しってか単独だったら好きだと思うけど、G.E.のオールディーズ on 45RPMな楽曲には脱帽。完全に女の子的なハイトーン・ヴォーカルで誰もが耳にしたことがありそうな激甘なメロディーで後半一気にスピードアップするこの展開。しょぼポップ・パンク・ファンだったら絶対好きだと思う。この後にFOEからリリースされるアルバムも最高です！KUNG FU MONKEYS好きな人はツボでしょう。(O)
(ABYSMAL/001-ABY)7" 1996年

PEEPSHOW/ST



当時レーベル買いしていたペンシルバニアのローカル・レーベルCREEP。PLOW UNITED、BUGLITE、CRASHを始めとして初期はダントツに素晴らしいバンドをリリースしていたけど、今じゃ…。ALLというよりBIG DRILL CAR、G-WHIZ、MARBLE、BEN GRIMに反応する人なら超オススメ。ごと間違い無しなバンドだと思う。それらのサウンドを若さに任せて勢いをつけてる感じ。未だに大好き。同名バンド多いので注意ですよ。彼等はニュージャージーのバンドなので間違いのないように。(O)
(CREEP/CREEP-014)7" 1995年

SLAP HAPPIES/WALTER KRUG/SPLIT



WESTONのベーシストが在籍してるWALTER KRUG目当てで購入したらスプリット相手の方が良くて驚いたという1枚。だってWALTER KRUGは45回転で聴きたくなる速度なんですもの。BUGLITEを思わせる哀愁漂うポップ・パンクのS.H.の疾走感溢れる2曲目はB級ファンの心を鷲掴みにする弱虫な感じで最高。控えめに主張するギタリストといい愛すべきバンド。絶対に人気は出ない音だけどこういうのに弱いんですよ。救ってあげなきゃという気持ちになっちゃって(笑)。(O)
(MELTED/MLT-007)7" 1997年



サカタルイードの『とびっきり対談・スキャップオンマイぶれない男達編』

周りの人間や付き合う女の子に昔からよく言われる、「アタマがイカレてるんじゃない?」とか「ツイテイケナイ」と。
友達は本当にイカレて頭の中に住む『ハイテックポリス』や『オバQ』と会話が出来るようになった。しかしそれは本当に『イカレて』いるのか?センスが良いだ悪いだ、この業界では日常的に使われる言葉だがセンスとは『バランス感覚』のコトだと個人的には思っている。ただ他人とはバランスの取り方がズレている?少し違うだけさ。村上龍的な言い方をすればその『症状』は『才能』かも知れないけれど。いつだってボクはバランスを保っている。10数人の中心に置いたテーブルの料理をつつくトキ、上から見た図で架空の『ライン』を描き各人物の脳の辺りに『点』を付ける。「このヒトはA型」「こいつはO…」「立ち耳」で動物占いが「狼」、この娘は三姉妹の真ん中で実家だから「ドイツ車」に乗っていてケータイは「DoCoMo」か、なんて風に。
勿論途中からは妄想でもあるがそれが事実かどうかは大した問題では無くて、この空間でのバランスを取りやすくする為に無理矢理『カテゴライズ』しているのです。分析癖とは少し違う様な気もしますが。それを続けて行くとどうなるか?「何故あの時あのヒトがああいう態度を取ったのか?」。過去の『点』が現在自分の居る場所の点まで『線』を引いて理由を連れてくる。要は解らなくてイイ事まで気付かされてしまうのです。ナガタ(KY爆弾)は「何かそういうのコワイっすね。疲れないですか?」と言ってくれたがコレってめちゃめちゃ『疲れます』(笑)!
例えば仲間の部屋で遊んで居る時、全く『ノー・データ』の人間が訪ねてくるとバランスが取りきれなくなり「オレ帰るわ」という結果になります(涙)。カツタ君いわく『オメェは構えてっからダメなんだよ!もっとこうさ、「ボクに何を与えてくれるんですか?ありがと～(笑)」ってカンジで楽しまなきゃ』なんてスタイルがお薦めらしいが、可能ならば来年こそはそう成りたいものです。疲れない『アタマ』…完全に?それってもしかしてホントに『イカレてる』のでは(笑)?たまには就寝前にビールでも呑んでみます。
今回の対談は『唯我独尊』!パンク・ロックの大先輩『ガンフロンティア』のサトちゃんです。ヤバい話?聞きたい…聞きたくない…聞きた……震えて読め～っ(笑)!

SR「それじゃ、お願いしまーす!」
S「オマエ何を聞きたいの、何をっ(笑)!」
SR「(笑)!『ガンフロンティア』は今で何年くらいになりますか?」
S「今ねぇ…活動自体は『94年～』だから。17年目かな。あっちゃんが昔やってたバンドが、まぁガンフロンティア『原型』なんだけど、それが解散する!ってなって。そん時そのバンドのBassが大坂(CROSSFACE)だったの」
SR「え!そ～なの?」
S「そ～なの(笑)。で、あっちゃんとは単車乗ってて知り合ってさ、あっちゃんは『GYPSY KOOL』ってバイク・チームで。オレもハーレー乗ってて。んで『あっちゃんのライヴがある』って聞いて観に行って。それがスゲぇカッコ良くてさ、まぁ今と同じ『スタイル』なんだけど。解散する、って日に大坂に『今日解散するってホントか?』って言ったら『そうなんだよ～』なんつって悲しい顔してやがって、で、『よっしゃ、分かった!』って楽屋飛び込んでいって『オイあっちゃん!オレと演れ!』って(笑)」
SR「へ～っ!」
S「それからだからもう、20年位になるかな?」
SR「そん時サトちゃんはバンドやってたんですか?他の…」
S「やってない。当時バイク乗ってて『唯一』バンドやってなかったのがオレくらいじゃねぇの?『バンド界隈』にはずっと居て、『アレは何者なんだろう?』って思われてたよ多分(笑)」
SR「あぁ(笑)。バンドマンばっかりのバイク・チームだったんですか?」
S「GYPSY　KOOLはそうだね…ピーちゃん

(ブルースビンボーズ)も居たし。あと『臨終懺悔』のヤツも居たり、カマノつって今『彫浅』かな?札幌でやってる、とか、可笑しな奴等がいっぱい居たよ」
SR「へ〜。元々『PUNK』は好きだったんですか?」
S「ん、も〜う昔っからパンクだったね!」
SR「サトちゃんが『スパイキー』な時期とかってあったんですか(笑)?」
S「あったあった(笑)!真っ青な髪して鋲ジャン着てスパイキーな時あったよオレ!」
SR「へぇ(笑)!それ聞きたかったんです」
S「パンクだったね。20年くらい前…東京出てきた頃は鋲ジャン着てフツーに『クチ曲げてた』もんね(笑)!」
SR「アハハハ!イメージ無いけど(笑)!」
S「中指立てて写真撮ってたよ(笑)」
SR「じゃあハナシ戻るスけど、あっちゃんとサトちゃんが作ったのが『ガンフロンティア』ですか?Drum結構代わってますよね」
S「Drumは…かなり代わってるな。一番最初が大久保の焼肉屋の息子、在日韓国人で(笑)。んで…まぁ17年前か、ある友達が死んで。そのライヴがあるから『それに出よう!』って」
SR「その『追悼ライヴ』が『初ライヴ』?」
S「そう。そん時は『GESHPENST』とか、あとマコト(CROSSFACE)が『RAW NECK』やってたのかな?確か94年の12月4日の20000Vだったかな」
SR「へ〜。『ガンフロンティア』って名前は漫画から、ですか?『松本零士』の」
S「そうそう。今はアニメにもなってるけど当時は全然知られてなくてさ、だけど何故かオレ持ってて。ほんで『3人』じゃん?ほら、『ハーロック』と『トチロー』と後『シヌノラ』ってオンナが居てさ、だからオレ『ドラムはオンナにしよう!』って言ったの。で昔『キャ→』ってバンドがあって、知ってる?」
SR「『ピラニアBOY』でしょ?」
S「そうそう。そこのミサちゃんて娘に頼もうと思ってさ、したら実家の徳島に帰ってた(笑)!で、最初はDrumはなかなか見付かんなくて、『リズムマシーン』とかでスタジオ入ったりしてて」
SR「でも当時2人で(スタジオ)入ってるトキも曲調っていうか雰囲気はあんなカンジですか?」
S「そうだよ。今やってる『荒野』もその頃の曲だし」
SR「へ〜。そこのあっちゃんとサトちゃんの『世界観』ってのはブレないんですか?」
S「ブレないね、全っ然ブレない!」
SR「前にピノキオとツアーやったでしょ?アレはガンフロンティア出来てからワリと…」
S「2〜3年のトキだよ」
SR「アレは『全国ツアー』ですか?」
S「アレ…は、静岡始まって名古屋、大阪、九州、島根?島根終わってから浜松寄ったんだな、確か」
SR「そん時ボク行ってて、さっきあっちゃんとそんな話したんだけど『アレから浜松行ってないな〜』って。今サトちゃん仕事は『ムーンステップ(ライヴハウス)』だけですか?」
S「と、たま〜に高円寺のBARで夜『バーテンの真似事』してる」
SR「あぁ、ムーンステップは働きだしてどのくらいです?」
S「帰ってきて1年、まだ1年だよ」
SR「それはどういった流れでそうなったんですか?」
S「経緯…元々『WALL』にずっと居て、ほら『姉妹店』じゃん?だからムーンステップ立ち上げの時に居たのよオレ。その頃アレコレあって一回辞めて…ミキオ(NO PROBLEM)なんかと現場行ったりしてた。でも現場だったら『作る』より『壊す方』に行きたいのよ(笑)。ブレーカーとか持って『そこにある壁を壊せ!』って仕事が合ってるな〜って(笑)、だけどなかなか無くてさ。『何がやりてぇんだろうな』って。『やっぱライヴハウスなのかな?』って思って。んでたまたまムーンステップ行ったらウチの社長が『帰ってきたんだ?ウチで働いてくんねぇかな』って」
SR「ほ〜っ!」
S「でもさ、『考えさせてくれ』って言ったんだ。オレも前んトキ『後腐れ無く』辞めたワケじゃなかったから。最初色々あって、結構…モメたから」
SR「コレ載せちゃって大丈夫ですか?」
S「ん、別にイイんじゃねぇの(笑)」
SR「(笑)」
S「でもまぁ『意識』があったからまた『戻った』ってカンジで」
SR「どうですか、ライヴハウスで働くのって。楽しい?」
S「『楽しいは『楽しい』よ。イヴェントが成功したり、単純に『ブッキング』ってカタチでノルマ取ってバンド呼んで、勿論『ゲスト・バンド』も入れてさ。客も入ったしバンドも喜んでくれた、つ〜のがあると嬉しい。それは嬉しいね」
SR「うんうん」
S「あと自分で(企画)組んでも客が入れば嬉しいし…あと客が入ってなくてもみんなが『イイ顔』してると嬉しいな」
SR「あぁ、でも毎日ライヴハウスで見てるとそういうのボクらより『敏感』に分かりそうですよね」
S「分かるね。今ね、若いバンドは『意識が低い』し」
SR「あ、そうなんですか?」
S「低い低い」
SR「例えば何が盛り上がるんですか?」
S「やっぱウチは『パンク』と『ハードコア』が盛り上がるよな」
SR「ムーンステップはワリとそういう『色』なんですか?」
S「いや、ウチは『ポップス』も居るし『歌ものロック』も居るし、『女の子ヴォーカルだけを集めたイヴェント』もやるし」
SR「へ〜」





S「だから色々ね、今『都内』に700軒くらいライヴハウスがあんの」
SR「え！そんなにあるんですか？」
S「うん、小さいのも『含めて』ね。単純に１日４バンド出てたら『2800バンド』この東京で動いてんのか？って、ゾッとするわ(笑)」
SR「へ～っ、スゴいですね～！」
S「何故か解んないけど儲かるワケ無いのにライヴハウスっつ～のはどんどん…『乱立』してくるしさ」
SR「まだ増えてるんですか？」
S「増えてる、増えてます。そのくせバンドは『減ってる』し。で、そこまでハコが多いから簡単に『入れる』」
SR「ん？」
S「『簡単にLIVE出来る』。オーディションも無いし、とりあえず埋めなきゃいけないからって、ノルマ掛けないで『イイから出てよ』って。そ～するとその実力も無いバンド達は『ウチはノルマ掛かるライヴ出ませんよ』って。そんだったら『呼んでみようか？』って呼んだら実質『客ひとりも呼ばねえ』とか。ホント、『意識が低い』！」
SR「あ～」
S「『ウチら社会人なんで』って、『ウチらだって社会人だわ！』って(笑)！」
SR「『生活があるんで』でしょ(笑)？」
S「ウチらだって生活あるわ！って(笑)。全部が『全部』じゃないけど、勿論良いバンドだって沢山居るよ。やっぱライヴハウスやってると『シーンの底上げ』が仕事じゃん？」
SR「そうっスね！」
S「若い奴ら(バンド)がスゴい『憧れてきた』バンドをゲストに入れて、そこに組んでやる、とかさ」
SR「あ～、イイですね～っ！」
S「そういうコトやれば絶対喜んでくれるし、底上げにも繋がる。極力そうやっていこうとはしてるけどね、なかなか上手くはいかんわ」
SR「サトちゃん自身は誰に憧れてる、っていうかそういうアーティスト居ます？」
S「ガンフロンティア始めてから無くなったかもな」
SR「元々好きだったのは何？バンドでも」
S「影響受けたのはオレ『ダムド』と『クラッシュ』！」
SR「そうなんすかっ？！」
S「アハハハ(笑)！ホント『丸コピ』したしな、影響受けたわ。ハードコアはやっぱ『全般』、勿論『Ｄビート』も好きだけど『キャッチー』な方が好きなんだよオレ。GBHもスゴい好きで、一番最初の来日は行ってないんだけど、それ以外は何故か全て行ってんだよね～(笑)。こないだも観てきてさ」
SR「うんうん。『日本』だったら？」
S「オレが10代…千葉にいる頃はさ『千葉ハードコア』っていう『特殊』な」
SR「『ラスト・ウォリアー』ですもんね(笑)」
S「(笑)」
SR「その頃は『狂人病』とかですか？繋がりはあった？」
S「観には行ってたけど、『こいつらと絡んじゃダメだな』って思った(笑)」
SR「サトちゃんより先輩になるんです？」
S「いっこ２個くらい上じゃね～かな？あと『G10』と…」
SR「『紅椿』？」
S「そうそう、あそこら辺。個人的にはあんま繋がり無くて、昔『ゲシュタポ』ってバンドがあって」
SR「ありましたね。シングル・サイズのオムニバスCDにめちゃめちゃカッコいい曲入ってた」
S「あのバンド作ったのが同じ『団地』に住んでる中学校の同級生、名前も忘れたけど(笑)」
SR「へ～っ！」
S「だけど18歳？位のトキ会ったら『オレもう辞めるんだ、高校出たら就職しなきゃいけないからさ』だって。ハードコアじゃ無いんだなぁ、って思ってさ」
SR「あぁ。ちょっとあっち『ヤンキー色』強いですよね？」
S「ん、強い。つ～か実際オレもそうだった(笑)」
SR「そうなんすか(笑)？」
S「パンク好きなのに『パンク狩り』とかやってたもんね(笑)！」
SR「アハハハ(笑)！ムネ(PAINTBOX)とか奥山(EVANCE)なんかは近かったんですか？」
S「ムネんトコは『海っぺり』だからスゴい『悪い方』(笑)！アイツは年下なんだけど、アイツらの中学にケンカ売りに行くじゃん？そ～すっと校門の前に『ナイフが刺さった犬』が死んでたりすんの(笑)」
SR「悪～っ(笑)！それでどうするんですか？」
S「ん？『帰ろっ』って(笑)。あっち行っちゃダメだ！っつって。奥山なんかはオレん家の裏の区域の中学なのね、アイツ結構(年)下だから。奥山の『先輩』っつ～のは良く知ってんだよ。アイツが『スゲぇ恐くてしょうがなかったヤツ』がオレん家きてファミコンやってんだわ(笑)」
SR「アハハハ！そっか(笑)。でもなんで『東京』出たんですか？」
S「やっぱ『バンドやりたい』ってのもあったし、それより只『ここじゃダメだな』って」
SR「うん、はい」
S「髪染めるモノも何処に行けば売ってんのか解んなかったし。染めたら染めたで実家帰ると『夜中来て夜中に帰れ！』なんて言われて(笑)！だからヤンキー色が強くて『リアルなパンク・シーン』が少なかったかもな。その後オヤジとオフクロもこっち(東京)引っ越して来ちゃったから」
SR「へ～。んじゃ最近の…何て言うかボクやサトちゃんが育ってきた『ジャパコア・シーン』て言うのかな？は、どうですか？」
S「最近？ん～、若いのが居ないね(苦笑)。チョロチョロ出てきてはいるけど」
SR「パンクで『こいつらイイな』っていうのは？ジャパコアじゃなくても。昔より多いじゃないですか、クラストもちゃんとシーンがあったり」
S「どうだろな？やっぱ『イイな！』ってのは『AKUTARE』とか」
SR「あぁアクタレいいですね～。ちゃんと『悪い』ですもん(笑)」
S「んで『ROCK』じゃん！あと若手でキテんのが『PSYREN』って言うヤツラ」
SR「ハードコアなんですか？」
S「うん。ホント『オールドスクール』だね、昔のモノを純粋に受け継いだ」
SR「おぉ！観たいですね～っ！」
S「『ジャパコア』って言われてるシーンがなかなか出てこないんだよね。ちょっと『ROCK系』の方に流れて来てんのかもな、ほら『芯の太い』。そういうのは増えては来てんだよ、まぁ変化ってより『進化』なんだろうけど」
SR「あぁ。ガンフロンティアって誰との対バンが多いんですか？似たバンドって未だに

ひとつも観たコト無いんですけど(笑)」
S「似たのは無いよね、ウチは『独立一歩』だから(笑)。こないだ一緒にツアー回った『野良犬』とかさ、まだ少し固いけど『コイツらイイな』と思って。イイものはイイ、『SOBUT』とかも仲良いし。『ニューヨーク・ハードコア系』もオレは得意でさ(笑)レコーディングまで行って一緒にコーラス入れてみたり(笑)」
SR「へ～っ(笑)」
S「だけどさ『エモ』とか何つ～の、『激情系』?ハードコアだ、って言ってるけどさ、ウチらの場合『生き方』を言うワケじゃん?そこら辺の意識の違いはあるかもね」
SR「ウチらサトちゃんのコト思いっきり『ハードコア』だ、って思ってるけど多分CD聴いたら『ハードコアじゃない』って言うヒトも居ると思うの…でも絶対ハードコアだし(笑)!」
S「だよね(笑)!オレん中では『生き様』がハードコアの奴以外ハードコアって言葉使うな!って思うよ。メロコアだって『メロディック・ハードコア』じゃん?」
SR「はい」
S「それにちゃんと応えてくれるバンドも居るしね。『パンク』は絶対に無くならない。『反逆精神』は誰しもがあるじゃん?」
SR「うんうん」
S「最近はさ、『日本語』の歌が増えてんのよ」
SR「え?バンドで、ですか?」
S「そうそう、ニューヨーク・スタイルだけど歌は『日本語』とかさ」
SR「ちょっと前は英語ばっかでしたもんね」
S「やっぱ歌が日本語ってのは『伝わりやすい』っての、あると思うんだ」
SR「それなら初めてライヴ観ても解りますね」
S「そ～なのよ」
SR「こないだツアーはどうだったんです?」
S「『大成功』だね(笑)!」
SR「クサカ(NAKED YEGGS)とはもう長いんですよね?」
S「ん、14～5年になるかなぁ」
SR「ガンフロンティアとネイキッド、似合いますよね?」
S「『音的』には…近いかもな」
SR「アイツも『ロックンロール』?だけど人間はモロ『ハードコア』ですもんね」
S「やっぱよ、『人間性』と『生き様』だよな」
SR「そうですね～。新曲とか作ってますか?」
S「おぉ、こないだもやったよ!」
SR「え、どれ?」
S「『トラック野郎の歌』!」
SR「あぁ!分かった!」
S「あれをよ、今度『日本トラック協会』に送りつけてやろうと思ってるよ(笑)!」
SR「アハハ!イイっスね～っ(笑)!」
S「(笑)。あのさ…」
SR「はい」
S「ホントはもっと『ヤバい事』聞きたいんじゃないの?オマエ」
SR「えっ?何スか、ヤバい事…『悪さ』してます(笑)?」
S「どっちの『悪さ』(笑)?」
SR「え…と(汗)」
S「ケンカか?」
SR「あ、はい。じゃあ『そっち』でお願いします(笑)」
S「ず～っと見てるヤツが居てさ」
SR「え?ライヴで?」
S「『呑み屋』で。その日対バンしたヤツがさ、ずっと見てんだよ」
SR「はぁ」
S「で、『オマエ何見てんだ?文句あんなら来い』って言ったらそいつ立ち上がったの!」
SR「うんうん!」
S「そいつが『格闘家』だってのは聞いて知ってたからさ」
SR「そうなんですか?!」
S「とりあえず一発『スパコーン』入れて。んで目玉に指を『ガッ!』って突っ込んで」
SR「え～っ!それで?」
S「ん?ボコボコにした(笑)」
SR「ひえ～っ!やってるんですね、相変わらず」
S「そんトキ思ったのよ『目玉って丸い!』って(笑)。そいつも一応『プロ』なんだけどさ『目に指突っ込まれたコト無いんで対処出来なかったスよ～!』だって(笑)!」
SR「あ、ケンカの後でちゃんとハナシ出来たんですね?」
S「うん、したよ」
SR「そっか、良かった。…良くないか(笑)!」
S「(笑)!」

いよいよカキイレドキってヤツですね。ウチら地元ではTEXAS-HOLIDAYが自主、ZONEがHGファクトからCDをリリースしましたのでそちらもヨロシク。

――――それでは今年のメっ!

①『VEKTOR』!ベクターは最高に楽しい。メンバーは音楽が大好きでおまけに全員バカだ(笑)。THEリトルミラーズ、日本脳炎、グラインドシャフト、屍の４人がひとつになれる場所は間違いなく此処しか無いと思う。スタジオでは威張ってばかりいるけどこの場を借りて３人へ、生まれて来たコト、そして出会えたコトに謝々。命を燃やし尽くそうぜ!

②『衝撃的瞬間!ベスト・ライヴ!』「THEクルマ(大阪)」右脳と左脳の働きが入れ替わる時、プラスチックの割れる音がするのさ。大阪には良いバンドが目白押し!ガンガン行こうぜ!「シギ(東京)」汚れきった過去を温かく包み込み、裸になったオレ達を空虚な未来に突き飛ばす。世の中の全ての物事が必要不可欠だとは到底思えない。たけどただの一度でも誰かに愛されたなら、それは価値あるモノなのかもしれない。「KIM(京都)」左耳から入り込んだKIMの声(ミュージック)はオレの意識に爪を立てた。初めて体験したそのステージに涙がこぼれそうになったから、隣に居たホンガシ(ビヨンドヘイト)のリーゼントをひっぱたいて誤魔化した(笑)。

③『ONEWORD⇔NEWDOOR』オレはまるで神様のようなオンナの子と付き合っていた。そして今年になって別れた。一緒に暮らした10年間、ほとんどケンカはしなかった。オレはリトルミラーズの「バステロ」からベクターの「シノビヨル」までの計35曲(ボツ＆未発表を入れたら100曲近く)全てを彼女のかたわらで作り上げた。ZONEのファーストCDジャケもオレ達の作品だ。毎日ギターを弾いては冗談を言い合って笑った。もちろん生活が苦しい時もあったけれど、そんなモノふたりで吹き飛ばした。オレは子供で、いつだって好き放題。結局、何ひとつしてあげられなかったよ。離ればなれになっても、地球が粉々になっても忘れるコトは無いでしょう。例えば「オレと澤さん(ZONE)」、例えば「オレと潤(WARHEAD)」の関係はクチでは説明つかないし、きっと誰にも理解できない。そんな風にサカタルイードとして生きていられるコトは誇りです。だからこれは誰ひとり割り込めない「オレと彼女」の関係。長い間お疲れさまでした、本当にありがとう。

④『気い狂て(INU)』簡単にモノがあって、簡単に手に入らない。手に入ったところで、お前のモノには成り得ない。(以下省略)チェルシー追悼ライヴ「WE LOVE CHELSEA」のステージ以来、オレが言い続けている言葉だけど…「人生を楽しもうぜ!」全国の反逆分子達よ、良いお年を!!

―――1/22(土)浜松G‐SIDE「HP night」VEKTOR、KAT UGLY、DILDOS、きのこ、OLEDICK FOGGY他。2/5(土)大阪難波ロケッツ THE LITTLEMIRRORS、MASTERPEACE他。2/12(土)新宿ANTIKNOCK THE LITTLEMIRROS、HAT TRICKERS他。3/12(土)浜松メスカリンドライブ THE LITTLEMIRRORS、ZONE、SHADY GLIMPSE、DREX、ACROSTIX他。



THE THUNDERBOLT! VOL.8

TEXT:TAKAYAMA（NIGHTMARE/PUNK AND DESTROY/FRAMTID）

親愛なるEL ZINE読者の皆様こんにちわ！どーもお久しぶりです、ウンコマン高山です、打ち切られてませんから（笑）、まだ終わりじゃないですから（笑）悪しからず！いやしかし、ちょっと仕事の方がぱつんぱつんに詰まってしまい、山路さんと相談して、ほんの一号分だけ休載、のつもりが、こちらから休載解除の報を入れる約束を忘れてて、んで、どんどん新刊が出るので不安になって、3号くらい新しい号が出てから、たまらず山路さんに「もしかしてサンダーボルト打ち切りですか!?（泣）」等と連絡を入れてしまったと言う（^^）ああ、打ち切られてなくてよかったです！（^3^）/　さて今回のthe Thunderboltですが、11月10日に発売になったザ・クロマニヨンズ-オイ！ウンボボLPを持っていないと何が何やらわからない内容かと思います、オイ！ウンボボLPを、持っていない等と言う、そのような不届き者は放置してとっとと話しを進めてみたいと思います、よろしくです！うんうん、ウンボボ！（^3^）/

模範的な優良ヒロト・ファンの僕は、もちろん予約を入れていました、アナログ盤！前の作品から移行した仕様である、なんか、古い昔ながらの手法でプレスしてくれる世界でも数少ない工場でプレスされたスペシャル豪勢な塩ビ盤！まずは手にとってじっと眺めてみる、ううむ、ジャケは何時頃からかな？な路線（まぁthe BLUE HEARTSの最初の頃から、こうと言えばこうでしたが！）、あまり面白くない、と言うか、確実にどんどん酷くなってきているが、全く愛想の無いような、シンプルさのみ、なもので、正直つまらないものですが、肝心なのは中身ですよ！まぁ気にしない気にしない！と、ビニール袋からモノを取り出し、コーティングされたジャケの紙質、手触り、折り返し、そして盤を取り出し、その匂いと重みを味わったらターンテーブルへ乗せ、いざ再生です、ばばばばーん！！

実は先行発売のシングルを聴いた時から少しガッカリしていたが、冒頭を飾る「オートバイと皮ジャンパーとカレー」からして、やはり自分には、ますます近頃のマーシー作のナンバーにグッと来る事が少なくなってしまった、僕の鼓膜を突き破り心に刺さる事もなく左から右へ通り過ぎていってしまう事が多くなりました…、でも安心です、合間を縫って鳴り響く、一聴して「これだ！」と判ってしまう程に痛快なヒロト作ナンバーは今作でも素晴らしく、どのナンバーをとってみても、生命力に満ちてピチピチしている！アルバム2曲目、「伝書鳩」や、4曲目「底なしブルー」等、the HIGH LOWSで例えるなら「ミサイルマン」みたいな感じのハードボイルドなナンバーで畳み掛ける前半からもう、ただただ痺れるばかりです！「底なし〜」なんて、ライヴ会場で狂喜乱舞する人々の姿が目に浮かんでくるような足腰高速回転ダイナマイトブギーチューンでもう最高！一方マーシー作ナンバーの方は、ザ・クロマニヨンズとなってからますます進行する、言わば「じじい化」とでも言おうか、「あったかくてうれしいな」だとか、「いきているのだ」だとか、歌詞というよりもはや爺の独り言、限りなく囁きに近い呟き、そんな様な、ちょっと異常なまでにほのぼのとした高次元を独走状態、だが今の自分は、日和った感じは求めていないので、引っかからず、楽曲アレンジも、これも一種のヘタウマ、なんてもんなのだろうけど、取ってつけたようなイージーさでまとめられているものばかり、うんうんまぁ、もちろん好きな曲もあるにはあるのだけれど！うーん…。

そうこうしてる内にもレコード盤はどんどん進んでサイドBへと移ります。冒頭、相変わらずなマーシー作ナンバーが2曲続くが、つづいてヒロト作、「ボンジュール ロマンマン」からして絶好調でしょう！大体、「○○マン」なんて言うタイトルのヒロト作ナンバーで悪い曲なんてひとつもない法則があるように、「チンパンマン」なんぞ、言わずもがな、ツボにきまくるモンキーマンオマージュネタの名曲ですよね！このロマンマンもほんわかアップテンポに陽気なナンバーで御機嫌です♪しかし続いてマーシーのナンバーでまた不発感ばりばり、とにかく、この、「オイ！ウンボボ」アルバムに収録されている、マーシー作のナンバーは、僕にはほとんどがダメだった、歌詞ももちろんなのですが、唄メロも、何だか僕の苦手とする方向のマーシーへ突き進んでいってるようで、どこまでもしっくりこないナンバーが続きます、大袈裟なようだけど、一切、僕の心の琴線に触れてこないものばかり。わざとやってるっぽくもあるっちゃーあるが、こちらの深読みもぐるり一回転して反応も普通になるというものだ。相反して続くヒロト作、「我が心のアナーキー」なんて、タイトルだけ見たらマーシー作かと思ってしまいそうなナンバーですが、暖かいメロディでシンプル極まる直球メッセージを歌い上げるミッドテンポのGREATナンバーで、無理矢理言わせてもらうならば、1st LPで言うところの「夢のロッケンロール・ドリーム」みたいな位置づけが出来そうな感じでしょうか、まぁ、文句無しに素晴らしいんだなコレが！うんうん！

そしてこの時点で既にアルバム最後を飾るヒロト作のナンバー、「南南西に進路を取れ」を、ちら見えするそのタイトルからして期待感ばりばり、早く聴きたくてしょうがなくなってくるのですが、しばし我慢、そして針が進み、ほんの2〜3秒の静寂の後、突然鳴り響くマーチングドラムと共に威勢良く掛け声が飛び出して聴こえてきた瞬間、このアルバムのこれまでの全ては、ただこの曲へと着地する為の通過地点、ささやかな冒険物語のほんの道すがらであったんだなあ、と言う事実に気づかされ愕然とし、誰しもがただただ感嘆し、感動に打ち震えてしまう事でしょう！

と、まぁ、ちょっと自分で読み返してみても一体全体何の話を語っているのだか意味不明ですけども、まだ頭おかしくなっていませんから（笑）大丈夫です、だから、まぁ、とどのつまり、僕は何時だってヒロトの唄にとても元気づけられてきたし、最初に聴いた頃から25年近く経った今でも、何なら更に、より内容濃く理解し、心の奥底深くから大好きなオレが居る！35年の内の25年ときたら、それはもう中々に大したもんで、8歳くらいまでの自我なんてあまり記憶に無いので、つまり殆どこれまでの自分の人生ずっとだ！と言う事で、別にヒロトが嫌いでしゃ乱Qが大好きな人でも何でも全然、当たり前に構わないのです、2度とはありえない、ただ一度きりのこの俺のこの人生、これだと決めたそのものをぎゅっと握って放さずに、そのことだけを見て強く優しく生きていけたら、それだけでまぁ大体は間違いが無いのではないかと！皆が本当に好きな事に夢中になれればOKなのかもしれないなと、単純な話ですが、今更ながら思うのです、あ、あと、「エロこそすべて」ね、これぞ真理と言うものだと、聴いた時、大感動したもんです！と言う訳で、僕の生命ももうとっくに折り返し地点を越えたかな？な所で一週周ってふりだしに、結局人生の殆どをPUNKにどっぷりでやってきたもんですから、それはもう小さな悩み事なんて全部吹っ切れてますし、こうなりゃこっちのもんでたっぷり開き直っているオレはもはや、惑星オレ星・オレ国の国王オレ状態！暗い話も気にはなるけどオレやっぱりただ生きる事しかできないので、とことんやってやる！

最後に、話を、アルバムのラストを飾る「南南西に進路を取れ」に戻させてもらって、「ナビゲーター」や、「Too late to die」なんかもそうですが、ヒロトの「オレオレ行進曲」的なナンバーには滅法撃たれ弱く、いつ何時でもメロメロなオレなのです！で、この曲の、2番の歌詞、ちょうど今、この原稿を仕上げにかかっているのが、愛するサエコさんと結婚をする一日前の夜なのでめちゃくちゃグッときました、ああああああ、もう、ヒロト最高かっこ良過ぎるマジでシビれるし、サエコ愛してるぜ！（笑）（^3^）/　お後がよろしいようで！あれ？です…、よね？うんうんよしよし！今回も読んでくれてありがとうございました、あと、めたくそに書いてしまったけど、基本的には好きだぜマーシー、ごめんね（笑）。

でわでわ次回the Thunderbolt!の頃まで、NO FUCKIN' SURRENDERで！「あきらめるなんて死ぬまでないから」ウンコマン高山でした！さようなら★

SATANIC OCCULT DEATH III

TEXT:二ツ木正康

今月はOFF THE DISKレーベルの7"BOXに大興奮してしまいました。う〜ん、これぞ我追い求めたり"METALPUNK"ナリ。夜ヒットの歌回しのような組み合わせの7"インチ達!!最高だなぁ。

NECRONOMICON/st



楽しみにしていました。DISコア/D-BEAT成らぬドイツ・デストラクMETAL！勿論、私はオリジナルを持っています。しかし今回はDEMOと未発写真満載で買わないわけ無いでしょ！サウンドだけでなく、革ジャンまでも本家と同じ！しかもこのバンド、元々PUNKバンドとしてスタートしており着こなしも完璧！いやー改めて聴くとホント音痴ギターで最高！けど下手なのが好きってワケじゃないんすよ！まぁ一回聴いてブチノメサレロ！
(High Roller/HRR115)2LPs

DAMNATION/Speed Anarchy



はまったぜ。カナディアン・スラッシュの86年1st/87年2nd/89年3rdデモを収録。基本的にスラッシュというよりクロスオーヴァーなテイストですがカナダの狂気が加わりその1st DEMOの印象は正に極悪メタル・ヴァージョンの初期S.O.BかD.R.I!!2nd DEMOは、時代を感じさせるファニーさを取り入れてますが元のサウンドが極悪なためブラック・ジョーク！な"ある意味ファニー"なサウンド！に成っております(笑)。メガお勧め。
(NWN!/ANTI-GOTH154)DIE HARD VERSION LP

SCHIZO/Main Frame Collapse



こちらも素晴らしい再発。伝説のイタリアTHRASH METAL。何が素晴らしいってこちらもメンバー写真が!!私は初めて見たのですが、この超絶ダーティー・スピードTHRASH METALサウンドをかましながらもメンバーにMETALが一人もいないんですね！驚きました！じゃあ何なのか？？そうです！全員、変態です!!あまりにショッキングだったのでこちらもオリジナルを持ってますが、即購入しました(笑)。
(F.O.A.D/010)LP

LEGEND/Still Screaming



NWOBHMの正に伝説、その名もLEGENDの2003年にCDで発表した復活作、アナログ化。これがまた、時代と共に少々進化していまして、年相応のアダルトでブルージーなハードロックになっております。ギターリフがどうのと言う雰囲気ではなく全体を通して感じさせる渋いヤツ!!過去曲"Hiroshima"の再録ヴァージョンを収録したボーナス7"EP付き。
(High Roller/HRR063)LP + 7"WHITE VINYL

V.A/Nuclear War Now! Live Ritual Volume 1



ドイツで開催されているNuclear War Now! Fest第1回の模様を収録したオムニバスDVD。とにかく今、旬のヘヴィメタル影響下のバンドが山盛り収録されているのですが、良い/悪いの盛り合わせです。良いバンドはDVDからでも伝わる"気"を感じることが出来ます。MIDNIGHTとREVENGE最高!!って事です。全17バンド収録。
(NWN!/ANTI-GOTH162)DVD

URCHIN/High Roller



で、以前出ていたLPはBOOTなんですかね？？メイデンのエイドリア〜ンスミスが在籍していたNWOBHMバンドで、70's PUNKマニアにも知られる7"もリリースしてますが、今回は何と未発DEMOを収録！コレがまたTHIN LIZZY系のハードロックで素晴らしいです！いや、ホントに素晴らしいですけどねぇ。僕はコレ系をホントに好きになったらバンド止めますよ！(笑)
(High Roller/HRR001)LP

KERASPHORUS/Cloven Hooves At The Holocaust Dawn



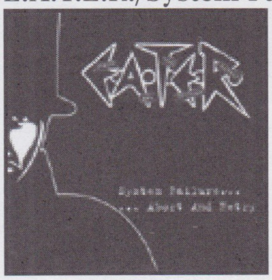
REVENGEってレコードで聴くとガッツリ最高！っていう感じにはなれなかったのですが、ex.ORDER FROM CHAOSで現在はREVENGEのPete Helmkamp先生のNEW仕事は基本に立ち返った正にOFCに回帰したとも思える、非常に基本的にカッコイイブラストメタル！今年で41歳になるようですが衝動収まることの無いPete氏には勿論渋さも完備されています。
(NWN!/ANTI-GOTH142)DIE HARD VERSION 12"

HAVERI/Into The Crypts of...



意味の無い出たがりが多いアメリカのMETAL掲示板で俺、こんなのやってます！って自ら投稿していたのがこのHAVERIだった。サンプルを聴くと正に昨今のどす黒いメタルをも彷彿とさせるD-BEATサウンドで、所謂美味しいとこどりサウンドにニヤリとさせられました。ANGER BURNING等とは違うベクトルの、正にNWN!発生後のチルドレンだと言い切れるサウンドで、DISCHARGEのカヴァーを収録しているもジェネレーション・ギャップを感じさせられる。新時代D-BEATバンド!!
(Bybbuck/品番なし)CD

E.A.T.E.R./System Failure…Abort And Reality



Distortion復活!!DISARMのリリースは他レーベルに譲ったようですが、渋い所をつき彼らが戻ってきた！ってこのレーベルの復活はホントに嬉しいのです。80'sスカンジナビアン・ハードコアの中でもちょっと横道に出た我々にはど真ん中の哀愁アタック・パンク・サウンドを聴かせるサウンドでしたね、このバンドは。84年未発表EP「Abort The System」(カッコイイ！！)、83年7"EP「Doomsday Troops」、82年カセット・テープ音源等収録。
(Distortion/DISTLP71)LP

DIOCLETIAN/Doom Cult



アナログ盤。この音源を良くないと言ったヤツに対してレーベル・オーナーは、お前の住所教えろ！綿棒送ってやるから！とマジ切れしてました。売り方も超強気でLTD1000で卸売りはなし。何だよ！っと少々思ってしまいますが、昨今、ココまでほれ込んでリリースするレーベル/バンドも中々無いのでは?!と感じ他人ごとながらも嬉しくなりました。ニュージーランドWAR BLACK傑作アルバム。
(Invictus prod/品番なし)LP

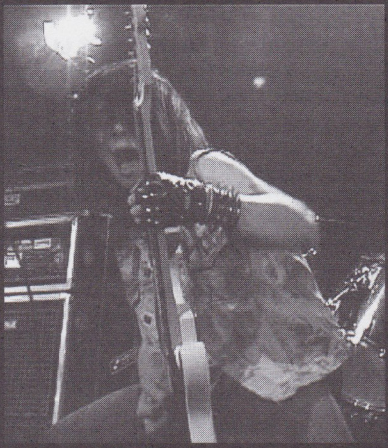
ギタリスト解剖

metal punkやろうぜ!

vol.6 ozeki

ダイエットしたい!何で痩せない!ってズッと考えてたのですが、太ってるってなんやかんやでやはり食べてるんですよね。ソレに最近気づきました。イヤーね、その論理なのですよ!!ギター上手い人は練習してるんだよやはり!!東京スラッシュ・メタルTERROR SQUADのギタリスト、大関氏の登場です!! INTERVIEWED:二ツ木正康

■あなたのお名前、バンド名は?



「TERROR SQUAD　大関慶治です」

■ギター歴は何年?

「25年ぐらいだと思います」

■現在の使用ギター、AMP、エフェクターを教えてください。

「【ギター】
Bacchus:TERROR SQUAD大関モデル2006('70sラージヘッドST/Hard Tail)
ボディ:アルダー2P(表のザグリは弁当箱ではないです)
ネック:メイプル/ローズウッド21フレット(3点留め。やや深めにセットしています)
ブリッジ:ハードテイル(ブラス)
ナット:ブラス
ピックアップ:フロント/センター:ディマジオ　SDS-1(スラントマウント)リア:ダンカンAH-1 アランホールズワースモデル('59ベースの2芯ではなくJBベースの4芯です)
ペグ:シャーラー黒/パールノブ
ピックガード:1ply
ヴォリューム:1(Sonicフルアップヴォリューム)
ジャック:スイッチクラフト
内部配線:ベルデン
特徴は、トレモロレス(裏ザグリ無しの弦裏通し)なので、いわゆる「ストラトな音」とは違う感じと思います。

【アンプ】
ヘッド:MESA BOOGIE Mk-Ⅲサイマルクラス(中域がいい感じです)
キャビ:かなり古いMarshallマイルドで気に入ってます)Electro Harmonics(2発入りキャビで持ち運びに便利でハッタリ効果有りでいい感じです)

【エフェクター】
BOSS SD-1(made in Japan)低域と高域を抑えめに整えてくれる感じです。

【ケーブル】
ベルデン9395+スイッチクラフト

【チューナー】
poly tune(tc electronic)6弦全部一気にチューニング確認が出来てかなり便利です」

■自身のギターのチューニングと使用弦メーカー/ゲージ、ピックの種類と固さ。

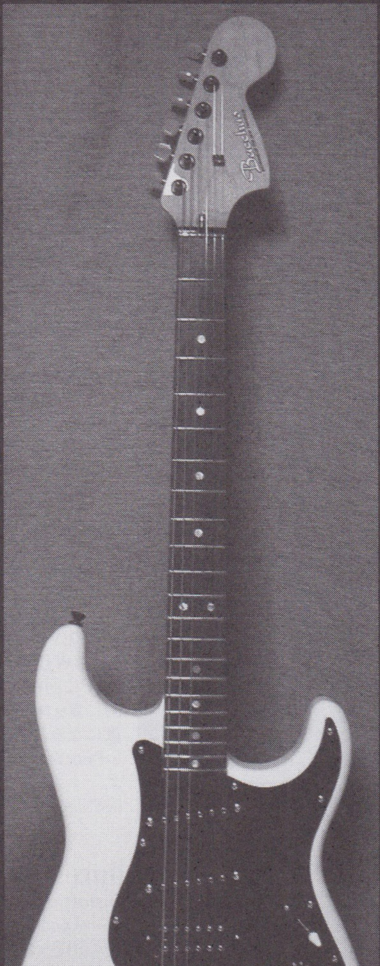
「【チューニング:D】

【弦:ERNIE BALL 10-52】
リフを弾く時の好みはレギュラーチューニングに09-46の弦ですが、テラーが何故かDチューニングなのでなんとなくこんな感じになっています。アーニーはマイルドなイメージなので好きです。

【ピック:DUNLOP gater 1.14】
先が尖っている物は好みではありません(刻みの時に簡単にザクザクしてしまうのでなんとなくズルしてるような気分になってしまいます)」

■Bacchusというギターメーカーについてお話ください。正直、私には馴染みが無かったのですがどういった経緯で使用を決めたのでしょうか?メーカーの特徴などご自身から見た決め手を教えてください。

「Bacchusにギターを作ってもらったきっかけは、浜松のSHADY　GLIMPSEのギタリストのシンヤくんから紹介してもらったのですが、彼から話を聞くまでは、安いギター売ってるメーカー?ぐらいにしか認識していませんでした。事実バッカス名義の初心者用の安いギター(名前を貸しているだけらしいです)もありましたしね。ところが「ある話」を聞いて、なんとしても紹介してほしくなってシンヤくんにお願いしました。その後モニター契約に繋がって、かなり細かく注文したギターが今のメインギターです。日本のバッカス工房では常に同系統のギターを6本



日本一の白/黒コンビ使い!と言いたいが、一般的にはACE清水氏の方が知れ渡っているであろう(笑)。

ずつしか作らないという生産ラインになっていて大量生産しません。故にものすごく丁寧なハンドメイドです。これだけでもかなり魅力ですね。
海外にも工房はあるようですが、やはり国内の工房はレベルが違うそうです。工房の制作過程の映像もネットで見れると思うので興味があったら探してみてください」

■センターピックアップは使用しますか?使用する場合その魅力をお願いします。

「センターピックアップの魅力は、邪魔な事ですね。自分はピッキングが大振りな時が多々あるのでライヴ中にセレクターがリアからセンターに切り替わっちゃったりして、途中でやっと音が変な事に気づいたりしてムカツクんですよね。あとはやはりピッキングの時にピックがセンターPUにぶつかって邪魔です。なのでセンターPUはピックガードと同じ高さまで下げます。下がりきらないと頭に来るのでオーダーする時にセンターだけザグリを深くしてPUが下がりきるようにしてくださいってお願いしたくらいです。それだけ弦からPUまで距離があるので、クリーンの時の音はかなり素敵です。テラー2ndに出てくるアルペジオは確かセンターPUだったと思います。まあテラーのステージでは使いませんけど…。センターPUが無いと見た目のバランスが悪いし、なにより格好悪いのでストラトには絶対に必要です。そんなところもセンターPUの魅力ですね」

■リアはハムですがなぜ?パワー重視ではないがパワーを求めた結果ですか?
以前、大関君はギターの低音についてキッパリと要らない、と言っていましたがバンドでのベース、バスドラ(低音担当)とのアンサンブルについて、ギタリストという立場を踏まえてどうお考えでしょうか?

「ハムを選ぶのは音色の問題です。まあある程度のパワーも求めているのもあります。シンクロのストラトのシングルコイルの音も大好きですが、テラーの曲のほとんどはハムの音色が必要なのです。シングルで弾いたのは2ndで2曲だけですね。
低音についてですが、スラッシュギターとして必要と思われている低音は自分には必要ないと感じます。ドンシャリにして歪ませれば軽くピッキングするだけで誰でも簡単にモダンなスラッシュっぽく出来ますよね?誰もテラーにそんなギターを望んでいないでしょう。やるのであれば音質でズンズンさせるより、深いミュートと深いピッキングでザクザクさせるのが好みです」

■セッティングを教えてください。自分の音の拘り、特徴もお願いします。

「基本はアンプで音を作ってます。Boogieのリードチャンネルは使わずリズムチャンネルで全開な感じです。BOSSのSD-1はVol:10、Drive:0、Tone:2〜5ぐらい。ドンシャリは好みではないです。歪んでてもアルペジオがしっかり聞こえる音が好きです。ソロでごまかしが効かないので、ちゃんと弾けなくて自分にがっかりする時が多々あります。でもそんな音が好きです」

■ブギーは全開なカンジということで50wでしょうか?リズムチャンネルでSD-1を思いっきりブースターですね。正に80s(笑)。ハードコアのギタリストでもDISTORTION派とOVERDRIVE派といますが、ご自身はOVERDRIVE派なのですか?それともセッティングは基本的にゼロ地点と置いて、ピッキングでマイルドにもトレブリーにも対応できる人間エフェクター派のようにも思えますがそういう意図でしょうか?

「ブギーは100wで鳴らしています。アンプで歪みの98%を作っている感じです。SD-1はヴォリューム10ですが、ドライブがゼロなのでその時点ではブースト効果はそれほど無い感じです。踏む事によってちょっとだけマイルドにする感じです。上記で考えるとOD派になると思います。80sに関しては異論無しというか、反論は許されませんよね。で、おっしゃるとおり、人間エフェクターが理想です。ピッキングで自在にトーンも歪みすらも操れれば最高ですね。そうなれるよう頑張ります。まあアンプやエフェクターでいろいろ考えたりもしますが、キャビ次第でどうセッティングしてもボロクソになる時もあり



何でも、先日ずっと探していたというELECTRO VOICEの古いスピーカーを2個入手した模様。近々にエレハモの方に搭載するらしい。
現在は内部配線(ベルデン9497)とハンダ(ビンテージKESTER44)の到着待ちとのこと。マニアック!!



ますよね。やはり自分のキャビを出せる時はなるべく出したいです」

■空間系のエフェクターに興味はありますか?

「もちろん興味ありますし、出来れば使いたいなと思うフレーズもあるのですが、実は自分は不器用でライヴ中にペダルを踏んだりするのが苦手なんです。しかも足元に何かあると邪魔で身動きとれなくなります。なのでステージでは足元ではなく左端にエフェクターを繋ぐようにしていますが、必要に応じて慣れていかないといけない事だと思うので、今後の課題にします」

■最初に買った、手に入れたギター、それは何故そのギター??

「最初は父親所有のガットギターを弾いてました。自分で最初に買ったギターは三鷹楽器オリジナルの¥19800のストラトです。ビートルズが好きなのでリッケンバッカーのコピーモデルが欲しかったのですが、中学の頃は欲しいギターなど買える金もなく、しかたなく近所の楽器屋で値段の安い物を選びました」

■現在までに影響を受けたアーティスト/ギタリストをあげてください。

「The Beatles(Sgt.Pepperを聴いて音楽始めました)
Tipographica(神の集団だと思います)
今堀恒雄(Tipoのリーダー。音楽の神様です)
JAKE.E.LEE(ギターヒーローです)
ALLAN HOLDSWORTH(UKしか聴いてませんがフレーズを表現するためにやむなく難しくなってしまう指使いがイカれてて良いです)
PINK FLOYD(空間に浸れます)
NIGHT RANGER(楽曲、ギターソロなど、いろいろな面で充実しています)
Bulldozer(神)
菅野よう子(コードの使い方が好きです)」

■その影響は今現在どのように自分のスタイルに反映されていますか?

「自分には「スタイル」と言えるほどの物が確立されているとは思えないので、スタイルという言葉を使うには似つかわしくないのですが、とりあえずJAKEやALLANのように「指を開く」事はいろんな意味で心がけています。JAKE FAKE(疑似ディレイ奏法や余弦押し等)は普通にプレイに取り入れています。Tipoと今堀恒雄先生の音楽は、リズムとその可能性について常に考えさせられます」

■指を開くよう心がけているのは何故?

「見た目のヒーロー性とハッタリのためです!」

■(笑)。白/黒ストラトはアラン、ジェイク、大関ってことでしょうか?一目瞭然ですが(笑)。変形のギターに興味はありますか?多くは苦手なギブソン系ですが(笑)。

「おっしゃるとおり、日本一白黒STの似合うギタリストを目指して日々努力しています!変形ギターも好きですよ♪弦楽器はセクシーな形が多いですよね。弾くのとは別で考えればセクシーなギターは基本的に好きです。変形と言えるか判りませんが、セクシー度でストラトと甲乙付けがたいのはリッケンベース(バインディング無し)ですね。ストラトとリッケン、この二つは自分の中で究極の美です。いつかリッケンシェイプでフェンダースケールのギターを作りたいんですけど、工房の担当者さんにイメージ画見せたら数十万かかると言われて断念しました。別ベクトルでセクシーなのはBICHですね。"BITCH"の名の通り。でも音は意外とおしとやかですね。あとはセクシーではないですが、EXも好きですね」

■ランディーローズでは無く何故にJAKE.E.LEEなのでしょうか?JAKEの魅力について思うところを惜しみなくお願いします!

「フレーズやプレイについて、言いだしたらキリがないと思うのですけど、たとえばJAKEは当時お金が無くてトレモロ付きのストラトが買えなくてハードテイルにした、とか。そのギターでエディみたいなフレーズ弾くためにネックベンドしたり余弦押しを開発した、とか。ホントかウソかわからない伝説があるのも魅力ですね。あとメインギターを見れば判ると思いますが、色の拘りが素晴らしいです。ボディが白でPGが黒、ペグもノブが白で本体は黒、ブリッジもコマがクロームで台座が黒、でもピックアップは白黒



見た目は同じでも初期型の国産品。現行品とは音質が全然違う。

ゼブラにしなかったところが完璧なセンスの良さです。もしそこで踏みとどまらずにゼブラにしてたらと思うとぞっとしますね。プレイについては文章ではなかなか難しいですね。いつかギターとお酒がある時に楽屋でお話できたらいいですね」

■TERROR SQUADを表現するときに、もしも引き合いに出さなければいけないTHRASH METALのバンドがあるなら正にBulldozer!って感じですが、本誌の読者には何故アランホールズワースが好きでBulldozerが神!と言えるのか理解に苦しむ方々もいると思います。Bulldozerの真の魅力をANDYのプレイを踏まえ音楽的に説明してください(笑)。

「Bulldozerに関しては、大まかに1st～2nd派と3rd～4th派に分かれると思うのですが、自分は後者で、3rd～4thは短い曲の中でリフが充実しまくってるんですよね。印象的で独創的。ソロはメタリックで、雰囲気とメロディを大事にしていてカッコイイです。「Neurodeliri」のラストの曲のスライドバーは鳥肌もんですね。テラー1stのラストの曲でマネしてスライドバー使いました。そしてやはりAC WILDの吐き捨てのセンスがただごとでは無い状態になっているので常にスリリングです。そしてギターもベースも低音無いから繰り返し聴いても疲れません。ホールズワースとBulldozerに関してですが、世の中にはVenomと中島みゆきをこよなく愛する人もいると思います。それと同じだと思います。…違うかも」

■個人的なギター練習はしますか?

「職場の喫煙所にギターを持ち込んでいるので、休憩時間は常にギター弾いています」

■ギターのコレクション、所有している本数とその内訳、特徴。

「20本ぐらいありますが組んでいる最中の物もありますので、すぐに使えるレベルの物は10数本程度です。

【エレキギター】
TS' Factory:
●大関モデル:白/黒(メイプルボディ/メイプル&ローズネック/H-S-H　配列/ハードテイル)　テラー初期'92頃にフルオーダーしたST。10年ぐらいステージとRecで使用。今は隠居してます。
Fernandes:
●Brad Gillisモデル:赤/黒(FRT-3搭載)
●JAKE.E.LEEモデル:白/黒　2本(JB搭載器とAH-1'59ベース搭載器)
●ALLAN　HOLDSWORTHモデル:白/黒(シンクロトレモロ、指板がフラットでジャンボフレット)
Charvel/Jackson:
●JAKE.E.LEEモデル:白/黒(造りと音はしっかりしていますが、JAKEモデルとしてはイマイチ)
●ディンキータイプ:黒(旧ロゴSTヘッド)
Orville:(by Gibsonの記載は無し)
●SGスタンダード:赤/黒
(前川(テラースクワッド:ベーシスト)から購入。ギブソンスケールは弾きづらいのでまったく使ってません)
Greco:
●BICH:スルーネック(一番気合い入れて改造したギター)トニーボータロ風にしたかったので赤に塗り替え、クロームエスカッションにスーパーディストーション搭載、インペリアルのペグ、ファインチューナー付きバダスブリッジ。しかしライヴで1回使ったのみで部屋の飾りになってます。ギブソンスケールは…以下同文
メーカー不明:
●VAI火の玉ギター(頂き物でインテリアとしては最高。FRT-5、ディマジオPU搭載)
自力組み上げ系:
●無塗装ストラト:マホガニーボディ/エボニー指板/リップスティックPU/ハードテイル

【アコースティック】
YAMAHA:
●フォークギター
Morris:
●12弦ギター
木曽鈴木バイオリン:
●ガットギター(父親が所有していた物)

【エレキベース】
Aria Pro II
●PRECISE　BASS:プレベモデル:ナチュラル/鼈甲　マツモク製(音が異常に太いです)
●Rickenbacker　4001s　モデル:ナチュラル　マツモク製(バインディング無し/ドットポジション/ロゴがAriaの頃のセットネック)1stのrecで使いました。前川が現在使っている物と同じ機種。PUはフェルに交換。

【預かり物】
アライアンス/オサムっち製:
●ワーロック　何故かウチで保管してます…」

■大関君の逸話に、宅録でクリムゾンのアルバムを一枚丸まるコピーしたということを聞いたことありますが真実ですか?

「誤報です。アルバム一枚ではなく、RED一曲です。そういえば当時ドライブ仲間だった根岸くん(G.A.T.E.S)に「そっくりで気持ち悪い」って言われました。当時リズムマシンとMTRを手に入れたばかりで、使い方を勉強するためにまずはコピーって事でいろいろ遊んだ中の一つです。ちなみにもうMTRの使い方は忘れてしまいました。当時驚いたのは、イントロとAパートでいきなりスピードがぜんぜん違ってて手動でリズムマシンのテンポを下げたり上げたりしなければ雰囲気が出なかった事です。曲に合わせて弾いてるだけでは気が付きませんでした」

■以前に私がヴォーカルの宇田川君と大関君に同じ質問をした際、お二人とも同じ回答をされたことがありました。それはTERROR SQUADは完全なるヘヴィメタル・バンドであると。しかし、こうして大関君にスポットをあてた場合、勿論、今までの人生で数多くのバンドに触れてきたことは周知の事実ですが、今回出てきたヘヴィメタルの要素としてのキーワードはJAKE.E.LEEとBulldozerだけですね。ご自身は"ヘヴィメタル"というジャンル(人によっては人生)に対してギタリストとしての立場も踏まえどのようなお考えを持ちますか?

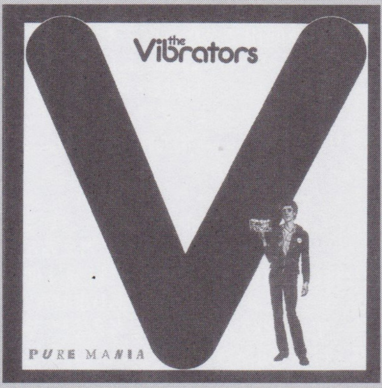
「完全なるヘヴィメタル・バンド…、言いましたっけ…。ジャンルという括りで考えるとかなり難しい質問だと思います。自分は他のメンバーほどメタルに詳しくありませんし。ギターに的を絞ってメタルを考えると、やはり開放弦の刻みって燃えますよね。あとパワーコードでビブラートさせずにダーーーーンって伸ばすだけで無駄にカッコよかったりするのも謎です。'80sのメタル、ハードロック・バンドにはギターヒーローがいましたよね。斬新なプレイ満載でときめきます。ライトハンドとか覚えたら思わずやりたくなっちゃいますよね。でも速弾きや曲芸的な奏法が行き過ぎてだんだん面白くなくなってきてヤングギターとか読むのやめちゃいました。
さて、ジャンルについてですが、まずメタルって何?ってなった場合、それはロックの中の一つなんだと思います。パンクもプログレも同様にロックですよね。メタルだからあれをやったらダメ、コレをやったらダメってのは世界が狭くなってしまいがちですよね。勿論それに拘って追求するのも素敵だと思いますが、それだとテラーではちょっと面白くないんですよね。テラーもメタルなのかもしれませんが、その辺は自由なんだと思います。でも聴く側はそういう自由が苦手な場合も多々あるでしょうからなかなか難しい部分でもあると思います。
自分がスラッシュメタルに出会った頃はメタルって屈強なイメージでしたが、いつのまにかメタルという言葉だけでダサいとか色物扱いになってる場合もありますよね。その状況や、そう言われても仕方がないようなモノたちに反発する気持ちもありましたが、自分たちのバンドに自信持っていればメタルでもパンクでも堂々と自分の事をやれば良いんじゃないかなと、最近はそう思います。
ギタリストとして、テラーの音楽をプレイする事。自分がギターを弾けば、隣には宇田川がいて、マイクがいて、後ろにはジョーカーがいて、したら自然と激しくなる。これが最高ですね。
ほんとにオレら完全なるヘヴィメタル・バンドって、言いましたっけ…。
かなり不完全なんですけど…。おしまい」

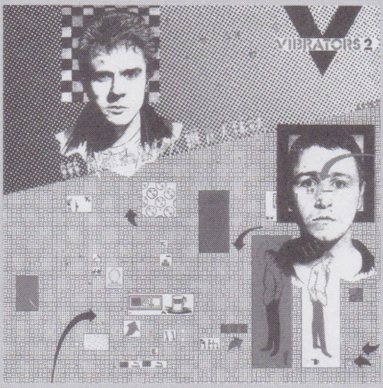
■ありがとうございました。

今回のキーワード

Q:指を開くよう心がけているのは何故?
A:見た目のヒーロー性とハッタリのためです!

LASHING SPEED DEMONS VOL.12







THE VIBRATORS

TEXT:大越よしはる

本誌VOL.8で書いたとおり、パンクと言ってもいろいろで、その中でもEL ZINEは偏った志向のファンジンだから(笑)、パンク・バンドと言ってもEL ZINE的にはあんまりストライクゾーンに入ってなさそうなバンドはたくさんある。音楽性だけで言ったら、今回紹介するTHE VIBRATORSなんかはまさにそうじゃないかと思うんだけど、何故かハードコア以降への影響が意外とあるんだよなこのバンド。そんなワケでVIBRATORSの話をしよう。

THE VIBRATORS。まずは超ざっくりと紹介しておこう。VIBRATORSは1976年2月にノックス(Vo,G)、ジョン・エリス(G)、パット・コリアー(B)、エディ(Ds)の4人で結成された。ノックスは1945年生まれというから、MOTORHEADのレミーと同い年だ(2010年現在65歳か!)。VIBRATORS結成当時既に30歳。

ミドルティーンだった50年代末からノックスはバンドをやっていたそうだが、ビート・グループ→サイケデリック・ロックの時代が終わると、ハード・ロックやプログレッシヴ・ロック中心のシーンに馴染めず、70年代初めの頃はアート・スクールで学び、絵画の道に進もうとしていたらしい。

そんなノックスがバンド活動に戻ったのは1974年のことだったという。当時はやっぱりというかパブ・ロック方面の音を出していたみたいだが、75年の年末にTHE VIBRATORSの構想をひらめいたとか。

パンク・ムーヴメント以前に音楽的なキャリアを積みながらも、70年代半ばにパンクに接近した、あるいはパンクそのもののバンドを始めたヴェテラン英国ロッカー、というのはわりと多い。U.K.SUBSを結成したチャーリー・ハーパー(当時35歳だか36歳だかという…)、THE ONLY ONESを組んだピーター・ペレットも然り。THE STRANGLERSもそうだ。前回UFOの記事で紹介したPINK FAIRIESも1976年にはかなりパンク的なスピードR&Rをプレイしていた。ノックスもそんな中の一人と言えるかもしれないが、75年といえばSEX PISTOLSが結成された年で、パンクの影響を…とかいうにはかなり早い。別にパンクに便乗したワケじゃなく、(70年代前半から活動していた)STRANGLERS同様、ノックスはレッキとしたパンク・オリジネイターと言える。

初期のSEX PISTOLSに目をかけていたことで知られるクリス・スペディング(元々ジャズ・ロック畑で活動していたのに、後年ロカビリー方面で有名になったりするワケだからかなりヘンな人)に認められたTHE VIBRATORSは、グリッター・ロックやなんかで有名だった老舗RAKレコーズから1976年11月にシングル「We Vibrate」でレコード・デビュー(同時期にクリスとコラボレイトしたシングル「Pogo Dancing」もあった)。翌77年にはエピック・レコーズとの契約を取り付けて、アルバム『PURE MANIA』をリリース。コレが全英チャート49位のヒットとなる。

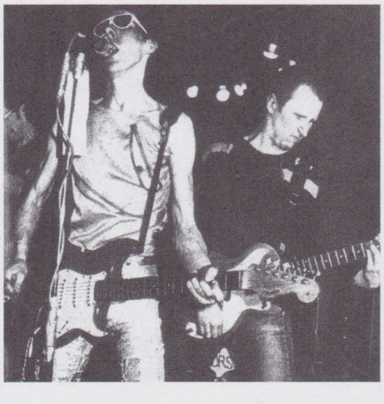
初期パンクそのものの勢いがありつつ、若いバンドとは一味違う絶妙な力の抜け具合、キャリアを活かした高い演奏力とポップな作曲能力。イギー・ポップの影響を感じさせつつ、なんともヨレッとしたノックスのヴォーカル(大体、ノックスの方がイギーよりも年上という…)。THE VIBRATORSは当時のシーンで独自のポジションを占めていた。しかし1977年夏にパット・コリアーが脱退し、以後バンドはメンバー交代を繰り返すことに。

新しいベーシストとしてゲイリー・ティブスが加入し、THE VIBRATORSは1978年に2ndアルバム『V2』をリリース、全英チャート33位と更に躍進する。しかし今度はジョン・エリスが脱退。ゲイリーも脱退し、メンバー交代の慢性化は止まらず。更に78年末にはなんとフロントマンのノックスが脱退してしまう。その後エディを中心にして、ノックス抜きでの活動がしばらく続いたが、バンドは結局80年末に解散。

ちなみに、バンドを脱退したジョン・エリスはなんと元GENESISのピーター・ゲイブリエル(!)と活動。ゲイリー・ティブスはROXY MUSIC(!)を経てADAM AND THE ANTSに加入する。…このバンド、本当に人脈が無茶苦茶です。

ところが1982年、THE VIBRATORSはいきなりオリジナル・メンバーで再結成を果たす。80年代後半以降パット・コリアーとジョン・エリスが相次いで脱退し、その後はまたしてもメンバー交代を繰り返すことになるが(パットはプロデューサーに転向、ジョンはTHE STRANGLERSに参加している)、バンドはしぶとく活動を続け、82年の『GUILTY』を皮切りに多くのアルバムをリリースしている。

結成以来、常にギター2本の4人編成だっ





たTHE VIBRATORSだったが(サックスを加えた5人編成の時期も一瞬あったけど)、1996年以降は専任ギタリスト不在のトリオ編成となり、01年3月にはノックス(Vo,G)、ロビー(B)、エディ(Ds)という編成で初来日も果たした。その後03年以降バンドのラインナップはノックス(Vo,G)、ピート(B)、エディ(Ds)の3人で固定する。

2008年にはノックスが事故でバンドを一時、というか1年以上も離脱したが、その時期のTHE VIBRATORSは90年代前半に在籍していたナイジェル・ベネットがヴォーカルとギターを担当し、ノックス抜きで活動を継続していたという(ひょっとしたらノックス死んでも続くんじゃないかこのバンド。Dr.FEELGOODの例もあることだし…)。ともあれその後ノックスが復帰し、現在も活動中(もう一度言うがノックス65歳)。再来日の噂もあるが、コレを書いている時点では未確認。

再結成以後もメンバーは変わり続け、初期と違ってチャート的な成功もないものの、1982年以降はどんなにメンバーが交代してもバンドそのものは存続し、30年近く活動し続けている。THE VIBRATORS、本当にしぶとい。…と、本当に超ざっくり紹介してみました。

個人的には、初期パンクきっての"ゆるキャラ"(違うか)という印象のあるTHE VIBRATORSだが、彼らがその後のパンク・シーンに与えた影響は大きい。単にパンクと言わず、ハードコアにも影響しているというのは、なんだか不思議な気がするんだが。

1stアルバムに収録された代表曲「Baby Baby」は、当時のパンクでもエポック・メイキングな異色ナンバーだったと思う。よく言われることだが、1977年当時のパンク・ロックに、こんな感じのいわゆるロッカ・バラードは他になかった。同じく"キャリア組"だった盟友THE STRANGLERSも「Strange Little Girl」「Golden Brown」といったリリカルなバラードをモノにしているが、それは80年代に入ってからの話だ(もっとも「Strange～」は元々74年に書かれた曲だそうだが)。

DIE TOTEN HOSENやR.E.M.やMAD3が「Baby Baby」をカヴァーしたというのは凄くよくわかる気がする(R.E.M.はちょっと意外だが)。一方、STIFF LITTLE FINGERSがTHE VIBRATORSの曲名をそのまんまバンド名にしてしまった、というのは正直、あんまりよくわからない、というか、そこまで影響受けたか!…と思わずにいられない。もしジェイク・バーンズにインタヴューする機会があったら、一度そのへん訊いてみたい(音楽的にはTHE CLASHの影響が大きかったとかいうが)。

よりEL ZINE向けのところでは、『V2』収録の「Troops Of Tomorrow」がTHE EXPLOITEDにカヴァーされ、更にEXPLOITEDはそれを自分たちのアルバムのタイトルにまでしてしまっているという事実。まあ、ハードコア好きなら誰もが知ってるパイオニア的存在とはいえ、いわゆるハードコア界ではEXPLOITEDというのは微妙な(?)ポジションにいるバンドだから、EL ZINE的にどれだけアピールするかよくわからないのだが(ちなみにこの曲はU.K.SUBSもカヴァーしているし、チャーリー・ハーパーがノックスと一緒にやっていたURBAN DOGSでも演奏されている)。

70'sパンクのカヴァーというのはまあいろんなバンドがいろんなバンドのカヴァーを演っているけれど、THE VIBRATORSもその例に漏れず、「Baby Baby」「Troops Of Tomorrow」以外にもいろいろとカヴァーされている。イタリアの90'sガレージ系バンドBOYS NEX' DOORが「Wrecked On You」を演っていたり、日本のWATER CLOSETが「Yeah Yeah Yeah」をカヴァーしていたり。

…と、1stアルバム『PURE MANIA』のポップな曲がポップなパンク・バンドに取り上げられるというのは納得出来るセンだが、先に挙げた「Troops Of Tomorrow」はポルトガルのハードコア・バンドALIEN SQUADにカヴァーされていたり(コレはTHE EXPLOITEDのヴァージョンを下敷きにしていると思われるが)、更にはあのG.B.Hも90年代に入ってから「Destroy」を演っていたり。どちらもTHE VIBRATORSの2ndアルバム『V2』からの選曲というのはなんだか興味深い。

『V2』、ジャケットからしてもなんだかニューウェイヴィー、みたいな印象のあるアルバムだが(中身はわりとそうでもない)、その中でも確かに「Troops Of Tomorrow」というのはちょっと異色なナンバーではある。2分ほどもかけてゆっくりとフェイド・インしてきて、本編に入っても異様にゆっくりしたリズムのままズンドコズンドコと続く。

2001年、THE VIBRATORS来日時のDOLLでのインタヴューを読むと、「Troops Of Tomorrow」は当時メンバー間でも賛否両論あったらしい。G.B.Hにカヴァーされた「Destroy」はドラムが勇ましいスピード・ナンバーだし、明快な曲名もあってハードコアっぽいと言えないこともないが、「Troops～」はハードコアのイメージとはまた違った激遅ナンバーだし。どうしてTHE EXPLOITEDはコレをカヴァーし、アルバム・タイトルにまでしてしまったのか。もしワッティにインタヴューする機会があったら(以下略)。

ちなみに行川和彦さんは「パンク天国2」(99年)でそこらへんを"パンクへの愛情"によるものと書いておられる。なるほど…しかし何故よりによって「Troops Of Tomorrow」だったのか。ともあれ賛否両論だったTHE VIBRATORSのメンバーも、最終的には凄い曲だという結論で一致したそうだし、『V2』をプロデュースした故ヴィック・メイル(MOTORHEADの『ACE OF SPADES』なんかもプロデュースした、英国R&R史上に残る偉人)もこの曲をとても気に入っていたという(前述、DOLLのインタヴューより)。実際、1996年にCAPTAIN Oi!からリリースされた『THE BBC PUNK SESSIONS』でも、この曲は78年3月の"ジョン・ピール・セッション"と78年5月の"BBCイン・コンサート"の2テイクが収録されている(「Destroy」もだけど)。

ともあれ、THE VIBRATORSがいなかったら、THE EXPLOITEDの名盤『TROOPS OF TOMORROW』もなかったワケで…EXPLOITED大好きな人も、ビミョ～…という人も、是非改めて聴いてみましょうVIBRATORS。

お詫びと訂正:前回、間違いがひとつ。ラリー・ウォリスはPINK FAIRIESの、3代目じゃなく2代目ギタリストでした。すいません。…さて、コレが出る頃はもうクリスマスのはずだが、ところで次のEL ZINEはいつ出るのでしょうか。それは山路編集長のみぞ知る…。ともあれまたお会いしましょう。

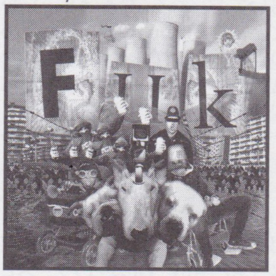


KISS THE DISC

TEXT:行川和彦

ほぼすべてが2010年に発売され、ほとんどがニュー・レコーディング作品。これを書いている11月20日の時点で入手困難になっていることが明らかな作品や、限定300枚未満と判明している作品は外してある。とはいえ今回は本誌を扱う一部のパンク/ハードコアの専門店でしか買えないレコードが大半だが、すべて国内のお店でも入手可能なディストリビューションだからチャレンジしてみていただきたい。レコードはジャケットもグレイトなものばかりだから。嗅覚にも触覚にも訴える。つまり音楽も五感で感じるのだ。

FUK/Fuk



元CHAOS U.K.のガバ(g)が率いるバンドのファースト・フル・アルバム。CDは85年以降のCHAOS U.K.をヘヴィにしたようなハードコア・パンク・ロックで12曲を19分弱で駆け抜ける。演奏もツボを心得て曲もイイし、HERESYやRIPCORDがダーティになったようなヴォーカルも元気たんまりだ。DVDはCGグラフィックを使ったミュージック・ビデオ＋ライヴ＋お馬鹿映像などでキャラを見せる。
(H.G. FACT HG-274) CD+DVD

DUDMAN/Make Noise For Free Mind Demo 2010



東京のハードコア・パンク・バンド。CHAOSMONGERSのアダチンをヴォーカルに迎えてからの初音源だが、これはもう鬼気迫る勢いにヤられた。メンバー4人のエナジーで荒ぶる音が焼け焦げて熱いのだ。表題は"デモ"だが、CD-Rリリースでないところにもリスクを冒す覚悟が感じられる。曲もツボを突き、アナログ盤みたいな奥行きのある音も良し!の約10分6曲入りの紙ジャケット仕様。オススメ。
(kaihou kaihou-2) CD

CLOSURE/MOUTH/TORN APART/BONESTORM/4 Way Split



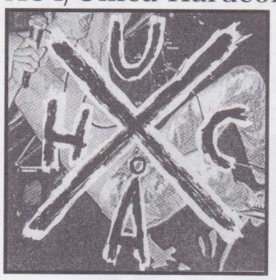
英国の4バンドを4～6曲ずつ収めた盤を二つ折りジャケットに収納。CLOSUREはRAMONESをカヴァーしつつパワー・ヴァイオレンスで迫り、TORN APARTはファスト・コア風、MOUTHとBONESTORMはユース・クルー風にも聞こえるが、全部情熱溢れ返った激烈ハードコア・パンクでスタイルを超えている。現在進行形のUKの底力を感じさせるアルバム同等の質とヴォリュームの佳作。
(HIT TIME/CRUCIFICADOS No Nmber) Split 7"EP×2

PARLAMENTARISK SODOMI/BLODSPRUT/Split



ノルウェー出身の2組のグラインダーによる2008年10～12月録音盤。政治的なバンドのPARLAMENTARISK SODOMIは、変則的で緻密な曲作りもナマな音質も完璧である。剛毅の念がうねりまくる強烈なサウンドで今回もリスナーを殲滅す。二人ともヴォーカル/ドラムのノイズ・アーティスト・デュオによるBLODSPRUTは、FEAR OF GODがAxCxに脅迫された如きプリミティヴな音で、こちらも壮絶だ。
(CRUCIFICADOS PELO SISTEMA No Number) Split 7"EP

AC4/Umea Hardcore EP



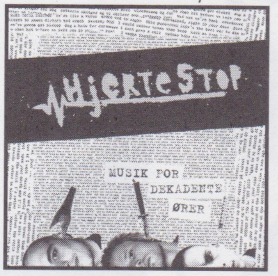
(International) NOISE CONSPIRACYを率いるデニス(vo)やREGULATIONSのメンバーらによるバンド。アルバム『AC4』の後に出たが2008年録音の6曲入り。タイトルに示した地元スウェーデンの地方都市ウーメアへの愛を感じるが、歌詞が英語という点でバランス感覚も十分だ。80年代前半のUSハードコアを基に曲作りも音作りも歌詞作りも憎ったらしいほどツボを心得ていて、さすがの出来。
(P. TRASH p.trash62) 7"EP

VOLCANIC SLUT/Blasphemaster E.P.



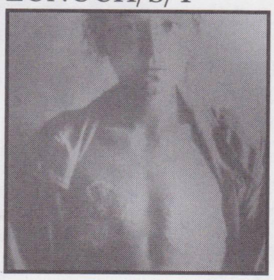
HORRID CROSSやNAZI DUSTのメンバーらによる米国フロリダ産"火山性尻軽女"の3曲入り。スラッシュ・メタルというよりは、SACRILEGEやCONCRETE SOXやONSLAUGHTの初期あたりの85年のUKメタル・ハードコア・パンクも思い出させ、引くこと知らぬ怒涛の押せ押せチューンの嵐に燃えるのみである。目いっぱい針が振り切れているヴォーカルの叫びっぷりも天晴なのであった。クール!
(VINYL RITES RITES-22) 7"EP

HJERTESTOP/Musik For Dekadente



VOIDのTシャツも着るデンマークのパンク/ハードコア・バンドが2008年のファースト・アルバムに続いて出した4曲入り。80年代の非スラッシュなUSスタイルながらも、一瞬で終わらずもう一展開した曲作りで虜にさせる。ポップ・センスもロッキン・フィーリングも「We Make Total Destroy」「Fistfuck The World」といった曲名の言語感覚も心憎く、英語の歌詞中心ならではの適度な洗練具合も好きだ。
(KICK N' PUNCH KNP24) 7"EP

EUNUCH/S/T



ボストンのLIBYANSの女性シンガーがベースを弾くバンドらしいが、そういうパンク・ロックとは対極のウルトラ・ヘヴィ・サウンドに圧殺される。歌詞も含めてBLACK FLAGの『My War』、初期SWANS、初期GODFLESHにMAN IS THE BASTARDが殴りこみをかけたかの如しなのだ。鈍重な音とフィードバック音の連続の中で煩悶を塊のまま叩きつけ続ける女性ヴォーカルも凄まじい。今後も期待大。
(EUNUCH #01) 7"EP

SYSTEMATIC DEATH/Systema Seven ep.



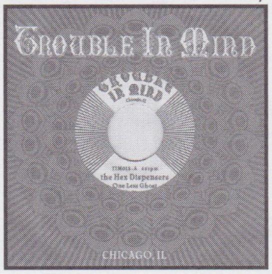
DROPDEADのギタリストのレーベルから出た2010年6月録音の4曲入り。WORLD BURNS TO DEATHのシンガーのマスタリングも影響したのか、中低音で真ん中に固めた音塊が突っ込んでくる仕上がりだ。微妙にキャッチーで一ひねり二ひねりしたアレンジが小粋な"システマ流スラッシュ・パンク"が味わい深く、メッセージ性の高い歌詞とジャケットも含めてトータルで何か感じさせる一枚。
(ARMAGEDDON 03) 7"EP

LORD GREEN/Higher Than God



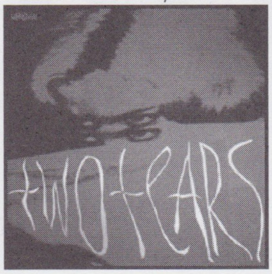
米国のヘヴィ・ロック・トリオの2曲入り。インスト・ナンバーのA面はSLEEPやELECTRIC WIZARDの流れを感じさせるドゥーム・チューンで、B面はHELLHAMMER風のファスト・パートからCHURCH OF MISERY風のドゥーミーなパートへと鮮やかに転換する。パンクっ気が強い音に加えて匂い立つメンバーのヴィジュアルにもそそられるし、アルバムにも期待を抱かずにはいられない一枚。
(GIVE PRAISE/BEZERKER No Number) 7"EP

HEX DISPENSERS/One Less Ghost



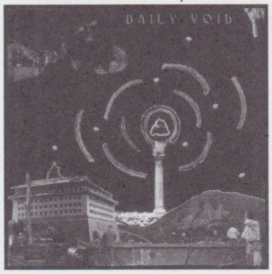
昨年の傑作セカンド・アルバム『Winchester Mystery House』に続いて出したテキサスのパンク・バンドのシングル。A面はバラードにも成り得るスロー・ナンバーをスケール大きく持っていき、ポップ&ヘヴィで微妙に土臭いところもたまらない。カヴァーも得意なバンドだが、今回は同郷のパンク・バンドOCCULT DETECTIVE CLUBの「I'm A Ghost」で疾走。共にさすがのセンスにとろけっぱなしだ。
(TROUBLE IN MIND　TIM013)7"+DLクーポン

TWO TEARS/I'm So Outta It, I Can't Get Into It



RED AUNTSやミック・コリンズのSCREWSでクールなセンスを発揮してきた、ケリー・デイヴィス(vo、g他)のパンク・プロジェクト・バンドの3曲入り。A面の2曲は後期BIKINI KILLやキル・ロックスターズ・レコードの女性バンドが簡潔かつ鋭角になった如きまっすぐな音で、B面のインスト・ナンバーはBIG BLACKがパンク・ロック化したみたいだ。はつらつとした艶っぽい歌声もグレイト!
(WINDIAN　WIN 20002)7"EP

DAILY VOID/Civilization Dust



多芸なマック・ブラックアウトがFUNCTIONAL BLACKOUTの流れでやっているような、米国シカゴのパンク・バンドの2010年5月録音。同タイトルで"死ぬ前""死後"の2曲を収めたが、音の鳴りと声の響き自体が危険だ。RUDIMENTARY PENIの狂気が破裂膨張したかの如きミッド・テンポ・パンク・ロック・チューンのA面、彷徨い泳ぐ未来的原始性アヴァン・パンク・インストのB面。グレイト!
(KENROCK　KEN 77)7"

BERNAYS PROPAGANDA/My personal Holiday



東欧マケドニア共和国を拠点にした女性ヴォーカルがフロントのバンド。"GOSSIP meets GANG OF FOUR meets JOY DYVISION with SUBMISSION HOLD"とも言うべき、跳ねる音ながらもアナーコがかったポスト・パンク・ロックだ。音もカッコイイし、自国語と思しき言語中心で歌う詞(英訳付)からも政治的なニュアンスは強く感じられるが、頭デッカチでない意志が貫く歌唱もクールで痺れる佳作。
(NARSHARDAA/MOONLEE他　No Number)LP

V.A./6×2×12"



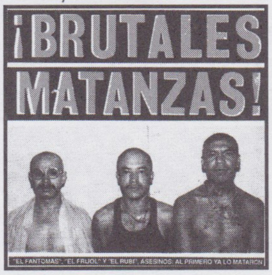
気鋭の6"パンク・バンド"6曲入り。カナダのバンドのA面は、鋭くつんのめるDEFEKTORS、だるだるインストのO VOIDS、凍りつくミッド・テンポ・チューンのSHARP ENDS。米国のバンドのB面は、Enoがパンク化したみたいなALE MANIA、ムラムラする行方知らずの音が不気味なBEATERS、暗く艶っぽく光るSPIRIT PHOTOGRAPHY。能書きなく得体の知れぬ音楽だけで飛ぶ恐るべき個性派揃いだ。
(VOLAR　05)12"EP

PROTESTERA/01.05.1886



女性と男性のヴォーカルを擁したスウェーデンのアナーコ系パンク・バンドのサード。普遍的な視点の歌詞はともかく、36ページのブックレットに書かれた政治的な文章(共に英訳付)は生活環境によって解釈が変わる。だが、集中力が凄まじく確信に満ちたドラマチックな熱情のメロディック・ファスト・チューンに飲み込まれる。と同時に強烈な女性シンガーが本作録音後に去ったのもわからなくない逸物。
(SKULD　RELEASES SKULD 084)LP

V.A./Brutales Matanzas!



メキシコとペルーのパンク・バンド10組17曲。MASTERBATOR、LOS MARGARITOS、LOS MONJO、KILLER CASSETTES、TRES AL HILO、LOS NASSI、RATAS DEL VATICANO、MORBO、INSERVIBLES、CRIMENを収めた。超絶ノイズコアから80年代の日本のメジャー・パンク風まで種々雑多だが、笑っちゃうほど元気良すぎの過剰な精力でハジけまくって空振りしながらフル回転。臭み万歳!
(CINTAS PEPE　CP-001)LP

DAY BY DAY/Animal Abuse…Is Nothing Bygone



後にLOST WORLDなどで歌う女性シンガーも在籍して91〜95年に活動した、ドイツの政治的なパンク・バンドの音源集。2枚のEPの曲や未発表曲などを収めた。LPタイトルもアートワークも"動物云々"のコンセプトで実際それもバンドの主張ではあったが、もっと幅広く感情に訴えかける。速いだけでなく頭が柔らかいメロディアスな曲にグッ!ときて、英語とドイツ語を使い分けるガラガラ声の歌唱も最高。
(TWISTED CHORDS　to[074])LP+DLクーポン

NU-KLE-AR BLAST SUNTAN/Blot Out The Worthless Sun



女性ヴォーカルを擁する米国南部拠点のバンドがカセットや超限定レコードに続いて出したファースト・アルバム。以前のトランス・ノイズは怪しく飛び交う電波音に残しつつ、骨のあるヘヴィ・ハードコア・パンク・ロックでぐいぐい押していき、アルコールを抜いたCHAOS U.K.みたいだ。初代とは対極の二代目シンガーは気合ギッチリで声を叩きつけるし、トリッキーに終わらぬこの作風も個性的で好きだ。
(SPHC/MICROPHONIC MELTDOWN　SPHC-7P)LP

NEGATIVE APPROACH/10-Songs EP



米国デトロイトのハードコア・パンク・バンド。再編後のここ数年わりとコンスタントにライヴをやっているということでリリースされた、82年のデビューEPの"お色直し盤"である。表ジャケットを今風にして音はリマスタリング。全曲収録の音源集CD『Total Recall』がグローブ付けているとしたら、こっちは素手で殴りかかってくる。アルバム『Tied Down』の何倍も血気盛んな容赦無き名盤。インナーあり。
(TOUCH AND GO　TG407)7"EP

＜追伸＞　●さすがに1ヶ月半ぐらいのインターバルが空くと、パンク・ロック/ハードコア・パンクのニュー・リリースで20タイトルの推薦盤も、どうにか揃えられる。DAY BY DAYとNEGATIVE APPROACHはリイシューものだが、やっぱり基本的に現在進行形のバンドを取り上げると燃える。●とはいえパンク・ロック/ハードコア・パンク・"クラシック"は、いつの時代でも燃える。というわけで『パンク・ロック/ハードコア　名盤100』(リットーミュージック刊)を書き下ろして、発売中だ。本誌の本欄でよく引き合いに出している種々雑多なバンドのアルバムを書いた感じで、多種多様な世界にまた一歩踏み出していただければさいわいである。

MORBO Killer Punk Rock From Peru

音程が合っているとか合ってないとか、リズムがどうとか、そんな些末なことはどうでも良くなるほどに狂おしいキラー・ロウ・パンク・ロックをプレイしているMORBO。
Vol.9でインタヴューしたINSERVIBLESのメンバーYecalが主宰するレーベル、Cintas Pepeからリリースされたメキシコ&ペルー・パンク・コンピ『Brutales Matanzas』にも収録されているバンドです。そのコンピ自体、ルールを無視したバンドらの無軌道っぷりが最高なのですが(糊がはみ出た手作りのジャケも素敵)、その中でも飛び抜けたポンコツっぷりを見せつけてくれたMORBOに取材を申し込んでみたところ、南米ペルーの首都リマにて今を生きるギタリスト、Potoが応じてくれました!

■MORBOを始めたのはいつですか?また、結成の動機は?

「2001年の12月にコンサートで演奏したのが始まりなんだよ。それが俺たちの初ギグだった。同じ日にリマのダウンタウンで大災害が起こり、何百人もの人が亡くなるということがあったんだ。俺たちが演奏している間に、コンサート会場の近くで多くの人が亡くなってしまったんだ。俺たちがそれを知ったのは翌日だった。このバンドを始めた理由はわからないんだよな。ティーンネイジャーって、音楽をやりたいし、酔っ払いたいし、楽しみたいし、叫びたいことを叫ぶもんだよな」

■MORBOはみんなにとって初めてのバンド?

「そうさ、俺の唯一のバンドだよ。ヴォーカルのManillasも同じだね。El JoeとRenzoは別のバンドもやっているよ」

■ERUCTO MALDONADOやATAQUE FRONTALなどのペルーの80年代のバンドを聴いて育った感じでしょうか?

「そうでもないな。そういうバンドは好きだけど、最初に聴いたのはLEUZEMIAやNARCOSIS、AUTOPSIA、EUTANASIA、それにもっと一般的なバンドだったよ。それからERUCTO MALDONADO、ATAQUE FRONTAL、あとはEXODOやMARIA T-TAなどを聴くようになっていったね」

■では、一番最初に聴いたハードコア/パンク・バンドというと?USやUKのバンドでしたか?

「ロック・ミュージックを初めて聴いたときは、俺はまだパンクを知らなかったんだよな。後に学校の友達が音楽のカセットを何本かくれたんだ。その中にはTHE CLASHやLEUZEMIA、他にLA POLLA RECORDS、それにESKORBUTOなんかのテープもあったね。学校を卒業するまでに、イギリスもペ



ルーもスパニッシュなパンク・バンドも同時に聴くようになっていたと思うよ」

■これまでにリリースしている作品は『De Baja Calidad』(カセット・テープ)と『Brutales Matanzas』(コンピレーション)?

「カセットの『De Baja Calidad』は4トラックのテープ・レコーダーで録音したんだ。自分たちが望んでいたような生々しくてロウ・ファイなサウンドになってて、俺は個人的に気に入っているよ。これを録るのに数ヶ月かかっちまった。働いて金を稼がないとならないから、バンドにかけられる時間があんまりなかったんだ。でも最終的には好きな作品に仕上がった。ドラムとベース、マイクを借り、まるっきりDIYで作ったよ。デジタルなサウンドやプロフェッショナルなサウンドを嫌いなわけじゃないぜ。そういうレコーディングの経験もあるしね。ただ、この作品は唯一違っていた。『Brutales Matanzas』はいつだったかな、メキシコのCintas Pepeから、ペルーとメキシコのバンドのコンピレーションLPを作りたいとメールをもらったんだ。感激して、彼らに2曲を送ることにしたんだ。それがLPとなって俺たちの手に届いた。いろいろな街に住むロウ・パンクをプレイするバンドが収録されているのには感動したね」

■曲作りについても教えてもらえますか?キラー・ロウ・パンク・ロックで最高ですね!

「ヴォーカルのManillasがほとんどの歌詞を持ってきて、練習の際に俺たちが曲をつけていく、っていうのがプロセスだね。俺が曲を書いて、それを完成させることもたまにあるかな。たいていはかなりシンプルで速いよ。アレンジはやりすぎてはいないと思うな」

■機材ってどんなのを持っていますか?

「何も持っていないんだよ。持っているのは安くてボロいヤマハのギターだけでさ。4トラックで作品を作ったときも、機材は全て借りたんだ」

■歌詞ではどんなことを歌っていますか?

「自分たちの望んでいること、時には個人的な内容もあるし、政治についても、リマに関してもあるよ。酒を飲んだり楽しんだりってのもあるし、全く内容の無いものもあるね」

■ショーはどんなところでやっていますか?面白いファンジンなんかはリマにありますか?

「企画者に呼ばれてプレイしているのが現状かな。このバンドで初めて演奏してから、家やストリート、飲んで楽しめる場所、いろいろなところでやっているよ。現在のパンク・ロックに関しては、素晴らしいコンサートが行われているし、そういうバンドの中には良い機材を持っているバンドもいるな。バンドの数は多くはないと思うけど、良いバンドを見つけられるはずだよ。インターネットが普及してからというもの、パンク・ショップは消えちまったし、ファンジンもそうだ。いくつかは存在するけど、リマの人間は速くて安くてお手軽な、デジタルのほうを好むようになっちまった」

■ペルーのパンク/ハードコア・バンドであなたのお勧めは何になりますか?

「SUICIDAS、EL TERRIBLE Y LOS MONGOLOIDES、HEROE INOCENTE、TELEVISONSS、LOS LEMMINGS、CÉSAR Nがお勧めだね。ハードコアは好きじゃないから知らないよ(笑)」

■地元のパンク/ハードコア・シーンの現状についてどう思いますか?

「良い状況だと思うよ。良い面は、この頃はオリジナル・バンドを見つけることができるようになったってことかな。自分たちのスタイルを持っていて、やりたいようにやっている。まわりなんて気にしちゃいない。例えば、キーボードを使っているバンドもいれば、60年代スタイルなのも、ロックンロールもあるし、女性がヴォーカルをとっているバンドもいるよ。数年前は誰も彼も同じようだったな。パンクっていえば、ブーツを履いて、政府に反抗する歌を歌う。それが典型的なスタイルだった。違うことをすれば、ポーザーって呼ばれてさ。素晴らしいパンク・バンドは多くないかもしれないけど、確かに存在するよ」

■ペルーとメキシコのパンク・コンピ『Brutales Matanzas』は本当に素晴らしいですね。ペルーとメキシコのバンドはよく一緒にショーをやるんですか?良好な関係にあるのでしょうか?

「メキシコとペルーは距離がもの凄く離れているから、バンド同士が行き来するのは難しいんだ。だからコミュニケーションはあんまり取れないと思うよ。80年代のメキシコのパンクのことは少しなら知っているし、このコンピを聴いて知った新しいバンドも気に入っているよ」

■ペルー国内や外国をツアーしたことは?

「まだ経験がないんだ。ペルーでツアーを企画するのは、金の問題があって難しくてさ。リマ以外でやったのも2回だけなんだよ。アヤクーチョ(ペルー南部の都市)とトルヒーリョ(ペルー北西部の都市)の2ヶ所。どっちもクレイジーな旅だったな。目いっぱい楽しんで、酒もたんまり飲んでさ。記憶がないんだよね(笑)」

■自国の政治をどう考えますか?アルベルト・フジモリに関しては?彼は優れた大統領でしたか?それともクソ野郎?

「ペルーの政治は最悪だよ。建国以来、続いていることさ。国民は背後にある危機を抱えて生きることを学んでいるよ。でも現在は、国は発展して、みんなが金を使い、至るところに新しい建物が建っているのを目にできる。今じゃ、80年代や90年代のように、街に爆弾をしかけるテロリストもいないし、食料を買うのに長い行列を作ることもなくなっている。でも政府の腐敗はいまだに続いているよ。これは決して終わらない。
フジモリは愚かだった。どの大統領も同じだな。私腹を肥やし、マスコミやテレビを洗脳している。でも最近じゃ、彼を敬愛する人たちもいるってことがわかるよ。特に貧しい人たちの中にね。彼は今刑務所にいるが、彼の娘が大統領になろうとしている。多くの人が彼を好きなのは、フジモリ時代の政府がテロリズムを止めたからなんだよ」

■日常生活についても聞かせてもらえますか。リマでの生活はどんなものなのでしょうか?

「そうだな、それぞれ仕事をしているよ。みんな極めて普通の生活をおくっている。家族もいるし、金の支払いもしているしね。ロックンロールのコンサートで演奏しているってことだけが、他の人と違うところだな。リマの生活は俺たちが子供だった昔よりは良くなっていると思う。デジタルの普及はあらゆる人に、音楽、アート、あるいはビジネスの機会を与えてくれた。どのストリートにも食料が並ぶようになったね(リマの場合だよ)。渋滞はひどいな、これは都市の大きな問題だよね。家庭や仕事を持つのは簡単だと言う人もいるかもしれないし、これは本当だけど、誰も俺たちに自由は与えてくれない」

■今後の予定は?

「ウェブサイトを立ち上げるつもりでいるよ。新曲にも取りかかり、仮想のEPを作ってウェブサイトにのせ、自由にダウンロードできるようにもしてみたいね。来年は新しい作品も作りたいと思っているんだ。今はもっと作品をリリースしていきたいよ。9年間、のんびりしすぎちまったからね」

■インタヴューに答えてくれてどうもありがとう。日本の読者にメッセージをお願いできますか。

「ありがとう、日本のみんな。最新のテクノロジーを作り続けてくれよ。それを中国がコピーすれば、めちゃくちゃ安い値段でペルーに入ってくる(笑)。みんな大好きだよ。それに"ヘンタイ"マンガも大好きだ」





MASSHYSTERI

マスヒステリ・マニアの宴

Freaks Conversation

みんな、もちろんMASSHYSTERI好きだよね?!
今年の春頃に2ndアルバムがリリースされたので、もう当然のようにインタヴューすべく、僕は動き出しました。ドラムのErikに熱烈メール・アタック!
…が、返事はありません。インタヴューを受けるのはかなりの労力と時間がかかりますし、ハッキリ言って面倒です。受けるのが好きな人もいれば嫌いな人もいるので、「返事来ないか、まぁいいや」と、リスナーとして2ndアルバムを存分に楽しんでいたのですが、連絡したことすら忘れていたある日、Erikから「インタヴューもちろんやるぜ!」といった返信が。
「遅ッ!」と流石に驚きましたが、半年以上経っていたのにも関わらず律儀にメールしてくれたことが嬉しかったので、速攻で質問を送り「20日後に回答を下さい」。そして、もう張り切っちゃうぞー!とばかりに、先頃1st 7"をリリースしたばかりの東京拠点のハードコア・バンド、AGAINST THE GRAINのPala君に「MASSHYSTERIのインタヴューが取れそうだから、それに合わせて対談やろうよ!」とお願い。僕が知る範囲において、彼は「日本一MASSHYSTERIの音源を所有している男」だったからです。
一方、MASSHYSTERIからは締め切りを過ぎても回答が寄せられません。しかし、これはまだ想定内。確実に遅れることを見込んで設定した締め切りでしたし、催促する度に、「もうちょっとで送るから!」との返事がすぐにあったのでタカをくくっていたのです。…が、僕の心境は「相変わらず遅いなぁ、ハハハ」から、「ちょっとそろそろヤバいな」→「あれ、いよいよマズい…(汗)」→「とっとと送って下さい、この野郎(泣&怒)!」と変化。結局、リアル・デッドラインも大幅に過ぎ去り、インタヴューを断念…。MASSHYSTERI好きによるオタク臭漂う対談のみ掲載と相成りました。
もうMASSHYSTERIなんて信じない!けど格好良いから大好き!というわけで、本稿をお楽しみ頂ければ幸いです。

セルフ・タイトルの1stシングル x 3枚



■最初に聴き始めたキッカケって、DS-13のメンバーがいるからVICIOUSを聴いたの?

「DS-13が解散になって落ち込んで、でもやっぱDS-13を聴いちゃうというね。その繰り返し。でメンバーが速攻違うバンド始めてて、有名どこじゃVICIOUSとかTHE LOST PATROL BANDとかかな?DS-13が凄く好きだったから新しいバンドは"なんだかな"って思って。最初はメンバーがいれば買ってたんだけど直ぐに止めたね。なんでVICIOUSはリアルタイムで聴かずMASSHYSTERIを聴いてから知った感じ」

■(MASSHYSTERIは)"そんなに良いの?"とか言ってたもんね。

「友達にVICIOUSが好きな奴がいて。そいつはDS-13からじゃなくて海外のバンドがKILLED BY DEATHスタイルでちょうど盛り上がってきた時期で、その中にVICIOUSがいて買っていた奴なんだけどさ。そいつが絶賛してて少し気になり始めて(笑)。でも、いつの間にか(VICIOUSのドラムの)André(ex DS-13のドラム)がいなくなったでしょ」

■VICIOUSからMASSHYSTERIになる時点で辞めたもんね。

「そうそう、あとAndréがヴォーカルやっているバンドがあったでしょ?」

■INSURGENT KIDか(※帰宅して調べたらINSURGENT KIDに在籍しているのはex DS-13のギタリストJonasなんで、これ間違いでした…)。

「TRISTESSだ。まずこのバンドが解散後すぐやったバンドだと思うわ。でも70'sパンクだったから全然興味なくて。138(ex DS-13のベース)がBRUCE BANNERとかやってて買ったけど"パッとしないぁ"って。しかし138の体型の変化には驚いたよ。SxEライフ実践してたころとかまじ痩せてたのによ、DS-13後期からデブ一直線だし(苦笑)。IMPERIAL LEATHERやSONIC RITUALとかも色々とやっては辞める。EL ZINEの奴のインタヴューではなんて勝手なやつなんだ!しかもまた超痩せてるし!で気付けばデストラクジャン(※高円寺のBOYが作ったオリジナル革ジャン/Vol.10参照)に絡んでいた(笑)。今思えばドールで(DS-13の)ヴォーカルのTomが言ってた解散の理由もぜって〜138が問題だったんだなと改めて思いました!」

■MASSHYSTERIは最初のセルフ・タイトルの7インチから?FERAL WARD盤(アメリカ)かHJERNESPIND盤(デンマーク)どっち買った?

「FERAL WARDだよ、FERAL WARDの1stプレス1,000枚はジャケットの紙質がザラザラなんだよね」

■そうだね。

「2ndプレス500枚はツルツル」

■あ、ホントだ。

「さらにFERAL WARDのはグリーン・ヴィニールが100枚、テスト・プレス盤がシルクスクリーン・ジャケで20枚ナンバリング入り。HJERNESPINDのもカラー盤があったはず。俺はデンマークの奴が出品してて買ったが届かなかったという怒りと悲しみが同居した思い出がある。なのでEURO盤は持ってない」

■(笑)インナーはどっちのレーベルのも一緒か。

「一緒だね、全部。ザラザラ・ヴァージョン探している奴は結構いるんじゃない?俺だけか(笑)」

■うん(笑)。僕はツルツルの2ndプレスが出ていることを知らなかったな。あとHJERNESPINDのはジャケが普通だけど、FERAL WARDのは角が丸い。で、次が「Paranoid」7"。

「リリースはイタリアのレーベルだったと思う」

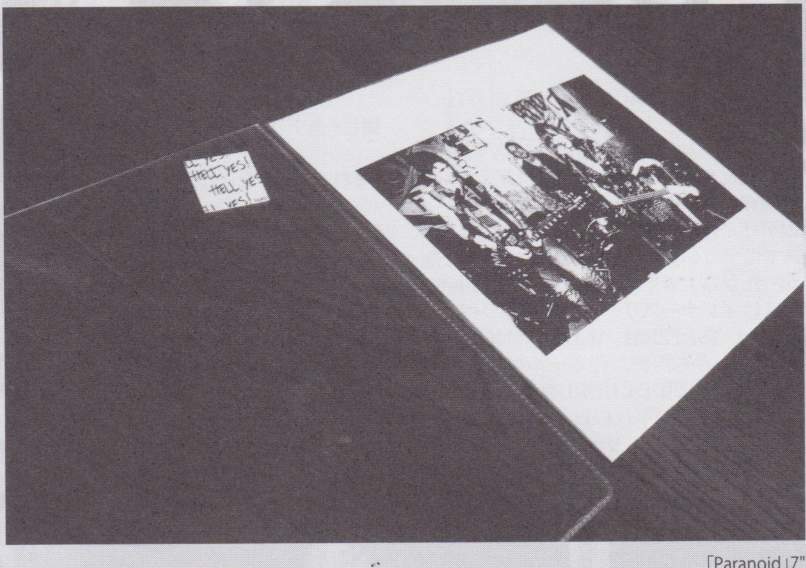
■ツアー用の音源で、だから200枚限定だったのか。

「(収録曲の"Paranoid"のこのテイクは)ここにしか入ってないと思ったら、VA「Umeå Vråljazz Giganter」にも入ったね。残念なことに(笑)。でもこの7"はナンバリング入りなんで完全コレクター・アイテムでしょ。幸運にも俺のは6番!」

■欲しいなぁ。いくらだったんだっけ?

「eBay(オークション・サイト)に出品していたのがアメリカの奴だったのかな。友達とか何回も入札で負けて50ドル近くで買っていたんだけど、俺の時は出品者が「Paranoid」を出品しているのに間違えて違うバンドのジャケット画像を載せていたから20ドルぐらいで落とせたんだよ」

■ラッキーだね(笑)。



「Paranoid」7"

1stアルバム「Vår Del Av Stan」x 6枚



「超ラッキーだったよ、それまで何回も負けていただけにね。これはレコード屋の100円コーナーにはないよな(笑)。1曲入りの片面プレスでナンバリング入り。アウターケースもあって、ホチキスでHELLYESって四角い紙にレーベル名が印刷されたのが止められている」

■ちょうだい。

「やんねーよ(笑)。俺はアルバムより1st 7"のテイクの方が好きだけどね。Saraの声に伸びがある。1stアルバムだとマスタリングで削っているのかもしれないけど(※"Paranoid"は1stアルバムにも別テイクで収録されている)」

■1st 7"の衝撃があったから、1stアルバムを初めて聴いた時はパッとしなかったなぁ。

「良い風に録っているというか、プロダクションが良くなってるのか知らないけど。荒さがあった方が格好良いよね」

■その1stアルバム、「Vår Del Av Stan」は何枚持ってる?

「5枚だね。NY VÅG(スウェーデン)の1stプレスはジャケットが白い紙でインナースリーブ。これにはカラー盤はないはず。凄い売れたんだろうな。2ndプレスは紙が灰色。紙質は一緒だけど。1stプレスはジャケットのデザインが小さかったんだけど、2ndプレスではデカくなっているんだよね。目立たなかったから大きくしたんだろうけど。2ndプレスはインナースリーブは同じでラベルも一緒か。あとFERAL WARD盤は紙質が良いよね。しかも内側が段ボールの裏みたいな。これは初期DISCHORDを思わせ最高!厚さも同様に80年代の日本のLPを思わせるよね。インナースリーブは一緒だけど角丸。絶対この角丸は金がかかっているよね。FERAL WARDの盤のラベルは最近どのバンドもこの仕様だね」

■FERAL WARDからのCDだと、ブックレットに歌詞とイラスト、あとアナログにはない写真が載っていると。

「あとはブラジル盤(NADA NADA DISCOS)が限定で出ていて。120枚限定でジャケがピンクと銀。だから各60枚ずつか」

■よく買えたね。

「出るっていうアナウンスがあってから速攻でレーベルにコンタクトとったよ。ブラジルだからちょっと躊躇ったけどさ。eBayだとブラジルは要注意が必要なんで(笑)。友達も欲しいって言ってたから全部で5枚買ったら、送料込みで90ユーロだったかな。ナンバリング入ってて、これだとインナースリーブじゃなくてインサートなんだよ。でも盤自体はNY VÅGなんだよ」

■なにそれ(笑)。ブラジルではプレスしてないのかな?

「NY VÅGから盤を買ったんじゃない?ただ、手描きでNADA NADA DISCOSってラベルには描いてある。…でもマトリックスの刻印が違うな」

■じゃあブラジルでプレスしたのか。

「それでラベルだけNY VÅGから貰ったのか?ならブラジル・プレス、だと思う。ピンクのジャケの紙はいたって普通だけど、銀の方は厚いしプリントが渋い。インサートはどっちも同じだけど、憎いことに銀にはレーベルの判子が押してあるだけ。でもピンクにはレーベルの判子とMASSHYSTERIの判子があるんだよね」

■それって単に銀の方に押し忘れたんじゃないの?

「いや違うんですよ、こういうところに拘りがある!と信じたい(笑)。両方ともジャケットの右隅にナンバリングだね。ちなみにこれも6番!運命感じるね(笑)」

■凄いね(笑)。

「これは速攻で注文したからすんなり買えたけど、すぐSOLDしたっぽいね。なんせNADA NADAのサイト全然更新されねーからさ。2ndアルバムもブラジル盤が出るってMASSHYSTERIサイドでアナウンスされているけど、NADA NADA DISCOSのサイト見ても全然更新されてない」

■針は5枚全部落としたの?聴いた?

「勿論、聴いた。全部一緒だよ。高い機材で聴けば違うのかもしれんが、いちいち音質ってチェックするか?パンクじゃあんま判らんよ。でも1stアルバムは死ぬほど聴いたね」

■じゃあ一番好きなのは?

「1stアルバムでしょ。2ndアルバムも良いけどさ」

■リリース順はVA「Umeå Vråljazz Giganter」と2ndアルバム、どっちが先だっけ?



「VAだと思うよ。(インナーにある)階段から飛んでいる写真最高だよね。ジャケットのデザインとかもさ。でも2ndのジャケは"これかよ"ってちょっと思ったけどね。もう少しやりようがあったと思うけど。2ndアルバム出る前にMyspaceに新曲が載ってて、それがキラー過ぎて泣いた(笑)、ホントに。それで出てきたのが2ndアルバムか。もうオーダーの時点でソールド・アウトだったみたいだし。NY VÅG盤は追加プレス後日本のレコ屋に入荷した感じじゃないかな。US盤先に入荷してるレコ屋が多かったし。NY VÅGのペラペラのジャケは賛否両論あるみたいだけど、それは好みだと思うし。で、FERAL WARDは2ndアルバムもジャケが厚紙。あとNY VÅGとはインナースリーブの色が違う、そして角丸」

■インナーで使っている写真はNY VÅGからのCDと一緒?

「BLACK FLAGのTシャツ着ている写真がアナログだとないんだよ。…あ、あったわ。けど他の写真で被っちゃってるじゃん!」

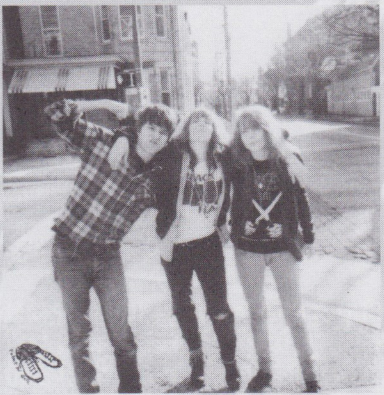
■アナログのインナーにないのは小さいイラストか。靴とか猫とかの。

「そこが憎いよね。CDも買わなくちゃいけな

VA「Umeå Vråljazz Giganter」x 2枚



いみたいな。2ndアルバムだとFERAL WARDもNY VÅGとラベルのデザインを合わせているんだよね。(ラベルの)文字の色がNY VÅGは黄色、FERAL WARDは白で違う。あとはラベルの曲名の表記がNY VÅGは筆記体、FERAL WARDはブロック体だね。筆記体の方が雰囲気あるね」



↑この靴の絵がLP盤にはない! それがどうした(笑)!?

■CDだと盤面(ラベル)がRobertの写真だね。

「多分、ジャケの撮影の時に一緒に撮った写真じゃないのかな」

■ジャケはあとは一緒?

「NY VÅGが白黒に対して、FERAL WARDはちょっと黄色っぽくて厚紙。あとは全く一緒だね」

■2ndアルバムは音がクリーンになっているよね。

「かなりね。CDだとKajsaのギターがあんまり聴こえなくて、アナログだとよく聴こえるってCDとアナログ持っている奴が言ってたよ」

■あぁ、同じ環境で聴き比べて?両方持っているけど分かんない、そんな聴き方してない(笑)。

「2ndアルバムは1stアルバムより、みんな話題にしてないような気がするけど」

■でも、今日聴き比べたら2ndアルバムの方が遥かに進化はしているよね。ただギター2本必要かは微妙な気がするけど。1stアルバムの頃からギターの音は重ねているんだし。

「Youtubeでライヴの映像見るとコードは同じの弾いているから、そんなに違いは出ないよね。歪んでいないクリーン・トーンだし。ドラムがフロア・タムだけっていうのが凄いな。このスピード感と手数が。シンプルだけどシンプルすぎないっていうのはあると思う。あとは重ねて歌うっていう、コーラスじゃなくて。それが完璧だよ」

■「もうMASSHYSTERIはビッグだから小さいバーとかじゃライヴやんねぇ」ってドイツ人が言ってたけど、実際のところはどうなんだろうね。



セルフ・タイトルの2ndアルバム x 3枚

「今なにやってんだ?」

■ライヴは今やってないんじゃないの?Myspaceにスケジュール載ってないし。

「これまで飛ばし過ぎたのかね」

■今後どうなるか勝手に予想しよう(笑)。

「飽きて解散するか、やるかのどっちかだよね」

■それ大体どのバンドもそうじゃない(笑)。

「でも外国のバンドって飽きやすいじゃん。なんだろ、しばらく止めて、とかより一気にやって一気に止めるみたいな。メジャーに行くことはないだろうけど、ただちょっと2ndアルバムで落ち着いている、限界を感じているような気もするけどね。出し切ったような」

■2ndアルバムの路線でもっとスピード落として、ガレージ～サーフになっても良いと僕は思うけど。

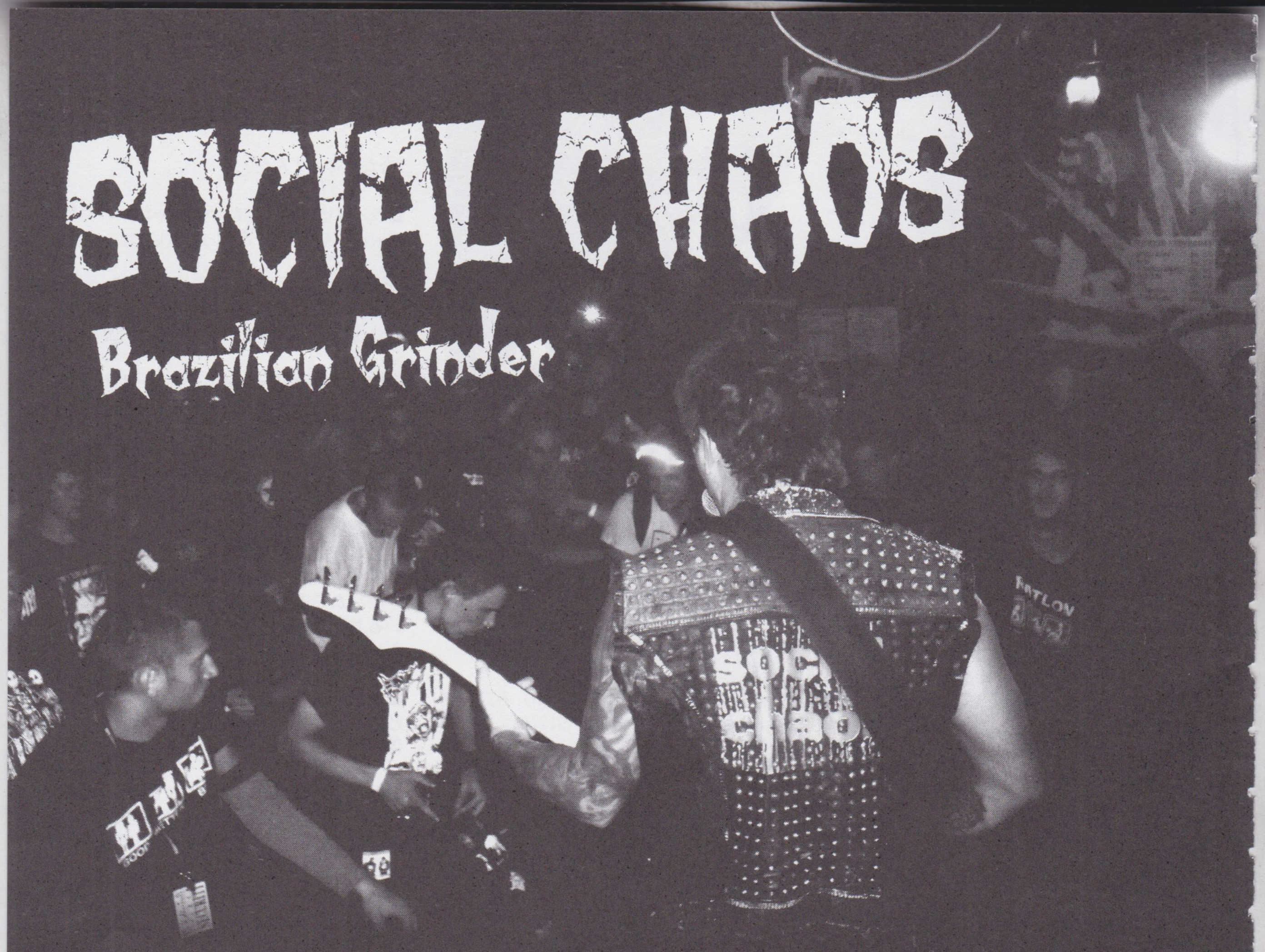
「まー、ツアーやって音源出して燃え尽きたのもあるでしょ。もっとスピード落としてメロウになったらダメになるんじゃないの?」

■ダメになるかなぁ。もうパンクじゃなくても良いんじゃない?

「パンク云々に拘りがあったらダメだろうね。楽器を増やしてTHE (INTERNATIONAL) NOISE CONSPIRACYみたいにはならないだろうけど。今回は歌もので、キャッチーなサビがあるけどさ。今後は原点回帰するかもね、充電期間をおいてさ。それでKajsaが抜ける(笑)」

SOCIAL CHAOS

Brazilian Grinder



ROTとF.D.S.のメンバーによって2001年に結成されたブラジリアン・グラインド・コア・バンド、SOCIAL CHAOS。
全ての楽曲がピュアに狂いまくっている、ブラジルのハードコア史上、最もロウでアグレッシヴなバンドの一つに挙げられる存在である。
80年代のバンド、ANTI CIMEXやAXEGRINDER、RATTUS、CONCRETE SOX、SEPULTURAなどから主に影響を受けているが、この度、日本のKarasu Killer Recordsより最新アルバム「Ciclo da Traição」をリリースした。南米に限らず、ヨーロッパ各地でも精力的な活動を続けている彼らの声をお届けしたい。

INTERVIEWED:Rafael Yaekashi

■バンドのヒストリーやディスコグラフィー、初のショーなどを話してもらえるかい。バンド名の意味も聞かせて。

「SOCIAL CHAOSは俺がF.D.S.を離れた後の2001年から動いているぜ。このF.D.S.は1989年に結成し、俺がヴォーカルのバンドだったよ。SOCIAL CHAOSでは作品もいろいろレコーディングしたけど、俺にとって重要なのはファースト・アルバムになるCHCとのスプリットLPと、最新アルバム『Ciclo da Traição』(Cycle of Betrayed)だな。バンドの名前は今の社会をそのまま表している。企業倒産の混乱、資本主義システムの裏切り、現実には目を向けられもしない、暗い歴史と運命づけられた未来、この混沌とした世の中について教えようなんて気がさらさらない今の社会をな」

■歌詞のテーマは何ですか?歌詞を書くプロセスは?

「敬いの心が欠けた生活、動物虐待、地球の破壊、いわれのない暴力など、毎日の暮らしの中で自分たちが肌で感じたことを基にしているんだ。曲は先を考えないまま作り始めて、ある瞬間に生まれてくる。そんなふうに作ってるな」

■メンバーは仕事をしているのですか?それとも音楽で生計を立てている?ブラジルでバンドをやっていくには苦労もありますか?

「メンバー全員が四六時中、失業状態にあるっていうひどい状況だぜ。バンドの活動を続けていくにも仕事を探さないとな。呼吸して生き残っていくには金が必要だ。バンドで食っていくのは無理だね。でも俺たちは警戒警報を鳴らし続けるし、自由を求めるレジスタンスの炎を燃やし続けるぜ。これがブラジルでバンドをやる唯一のやり方さ」

■最大の影響は何ですか?

「前にも少し話したように、毎日の暮らしの中で受けちまう苦しみが原因となっているあらゆる圧迫を、音楽で吐き出し表現する必要があるんだ。俺たちはカオスに影響を受けている。音楽的なことを言うなら、全てのバンドに影響されてるぜ。過去から現在までのバンドには反抗の歴史があるからな」

■最近のブラジルのアンダーグラウンドの状況はどうですか?良い面、悪い面は?サポートはありますか?

「ここではいろんなことが起こっているぜ。バンドもファンジンもあるし、様々な場面に関わっているやつもいる。でもシーンは変わりやすいし、影響を受けやすいな。絶対的な存在があれば、シーンはもっと良くなっていくんだろうけど。それにサポートもされれば地方のシーンも大きな規模で続いて

いくんだろうがね。だが結局は同じようなことになっているな。昔からの古い人間がシーンを支えている。自分でバンドをやり、ヴァーチャルではない、見本になるようなシーンを目指して、精力的かつオープンに動いているぜ」

■SOCIAL CHAOSはサンパウロのシーンの中でも最もリスペクトされているバンドの一つですね。このバンドを始めた当時、サンパウロはもちろんのこと、世界中から良い反応を得ると想像できましたか?

「実のところ、俺たちがビッグだなんて信じちゃいないよ。でも時を経るにつれ、一生懸命にやってきたことがリスペクトされてきたと信じているぜ。協力者もどんどん加わってきた。俺たちの隣を歩くやつらもな。自分たちでも予想していなかったことを成し遂げてきたかもな。それは自分たちが捜し求めているものが何かをわかっていたからだろうぜ。このブラジルには高い評価を受けるバンドのように、様々なことを成し遂げてきたバンドがいたよな」



■ヨーロッパ・ツアーはすでに何回になりますか?プレイした国はどこ?2010年のヨーロッパ・ツアーのことも少し話してもらえますか!

「2005年、2009年、2010年の3回だね。どのツアーも長丁場だったな…。訪れた国をあげてみるぜ。ドイツ、デンマーク、フィンランド、オランダ、ベルギー、フランス、イタリア、オーストリア、ルクセンブルグ、チェコ共和国、クロアチア、ポーランド、リトアニア、スロバキア、スロベニア…多すぎて忘れちまったね(笑)!2010年のツアーは大規模なフェスティバルがある夏に決めたんだ。ヨーロッパ・ツアーはフェスの企画者のおかげでハードではなかったね。いくつかフェスに出演するって目的もあったし、他にもギグを企画してもらったよ。出演したフェスをあげると、"Obscene Extremeフェスティバル"(チェコ)、"Puntala Rockフェスティバル"(フィンランド)、"Monte Paradisoフェスティバル"(クロアチア)、"Vive le Punk"(フランス)、"Break The Silence"(ドイツ)などだね。ACTIVE MINDS、OI POLLOI、DOOM、DRI、RAW POWERなんてビッグなバンドとも共演してきたぜ。重鎮バンドだけでなく、どのバンドも忘れられないな。存在感のあるやつらも多かった。特にベルリンのKATYUSHAってスラッシュ・パンク・バンドの名前をあげておくぜ」

■人生におけるパンク/ハードコアの意味は?SOCIAL CHAOSはアティテュードを大事に考えるパンク/ハードコア・バンドだと考えてもいい?

「パンクは俺たちの、自由につながる巨大な門を開くための象徴だよ。俺たちはパンク・バンドであるが、本質的には日々新しくなっているぜ」

■今はどんなバンドを聴いていますか?また、SOCIAL CHAOS以外にサイド・プロジェクトなどはやっていますか?

「そんなの書ききれないぜ。でも簡単にイメージはできるだろ(笑)。あと、俺たちはこの



パンクは俺たちの自由につながる巨大な門を開くための象徴だよ



他にはバンドはやってないよ」

■日本でもいくつかのブラジルのバンドがプレイしています。SOCIAL CHAOSが日本をツアーする可能性は？

「そうだね、たくさんのバンドが日本でプレイしたがっているよな。でも実現するには巨大な壁が立ちはだかっているし、費用がかかりすぎる。だけどこれは俺たちの次のステップでもあるぜ。すでに2012年に日本をロング・ツアーしようって計画も出ているよ」

■日本のハードコア・シーンについては知っていますか?好きなバンドや、彼らの印象は？

「80年代中期から日本のハードコアには常に本気で感心しているんだ。今もGAUZE、LIP CREAM、SYSTEMATIC DEATH、SOBを聴くよ。日本のバンドのスピード、サウンド・クオリティには衝撃を受けるね。日本人のやっていることはブラジル人やフィンランド人のように彼ら独自の特徴があるし、並外れてるよな」

■『EL ZINE』の読者と、日本に住むSOCIAL CHAOSのファンにメッセージをお願いします。

「日本のシーンには心から感服しているよ。いつか日本を訪れる機会が来る日を楽しみにしている。SOCIAL　CHAOSの怒りを見せてやるぜ。Cheers & Free"doom"!」

www.myspace.com/socialchaos01



Network of Fanzine
Vol.1 = MOUNTZA from Greece

"お気に入りのファンジンについて書いてみよう"のコーナー、題して"ネットワーク・オブ・ファンジン"です。何ら捻りのない、1秒で思いつきそうなタイトルで恐縮です。実際、何も考えずにつけました。頭にMがつくバンドのインタヴューが転けたからページ調整のため、入稿直前に泣きながら大わらわで書いているわけでは決してありません!

んで(急展開)、見知らぬ海外のファンジンがレコード屋さんで売っていると、ついつい手に取ってしまいますよね。EL ZINEを作っている本人が、パンクの紙媒体に対して無関心だったらちょっとイヤだなと自分でも思います(笑)。まぁ、見かける度にちょこちょこと買っていると、当然ですが次第に溜まってきます。そんな本の山を眺めていると、一つのアイデアが浮かび上がってきました。「バンドやレーベルはよく(…でもないのかもしれないが)、音源のトレードをしている。ならジン同士のトレードもありなんじゃないのか。…そしたら買わなくても送料だけで手に入るんじゃね?!」。

海外のパンクスから「●●のレコード持ってない?あればトレードしようよ」という話しを持ちかけられることはよくありますが、元来が面倒くさがり屋な上、時折リップ・オフされた云々という話しも聞くので、生まれてこのかたトレードというやつをしたことがないのですが、EL ZINEと交換するならモノ自体はたくさんあるのだから、万一なにかあってもいいか、と、いざトレード相手を捜します。

とりあえずMRR誌のジン・コーナーをチェックしてみますが、そそられる対象がなかなか見つかりません。ちょうどその頃、DESPERATのインタヴューでJocke(WARVICTIMS/D-TAKT & RÅPUNK)とメールをしていたので、「スウェーデンかヨーロッパで今イケてるファンジン知らない?」と訊ねてみました。

すると、「スウェーデンにはあんまりないんだけど、ギリシャのMOUNTZAはスゲーよ。発行しているPanosもイイやつだし」とのこと。ギリシャのMOUNTZA?全然知らないジンです…。

MOONLESS/HJERNESPINDのTommasからも前後してメールがあったので、「デンマークでオススメのファンジンってある?」と聞くと、「デンマークじゃないけど、ギリシャのMOUNTZAがベストだな」とのこと。ここでもMOUNTZA!!

スカンジナビア半島の最前線で活動している2人が推薦するMOUNTZAとはどれほどのものなのか。早速ウェブサイトをチェックしてみると、本頁に掲載しているようにオシャレな表紙!実際、表紙だけはカラーで、誌面もカッチリと文字組されています。いわゆるパンクっぽい切り貼り風のゴチャゴチャしたレイアウトではなく、すっきりと読みやすさを追求したかのクリーンなデザイン。これまでに4冊発行しており、肝心の掲載している対象もCRIMINAL DAMAGE(アメリカ)にBOMBENALARM(ドイツ)、HJERTESTOP(デンマーク)、MAGRUDERGRIND(アメリカ)、BURIAL(ドイツ)による日本のバンド紹介、FUCKED UP(カナダ)、イラストレーターのSugiさん(日本)、HAVOC RECORDS(アメリカ)、REGULATIONS(スウェーデン)、INSURGENT KID(スウェーデン)による中国レポートなどなど、どうも僕と趣味が近いような…。

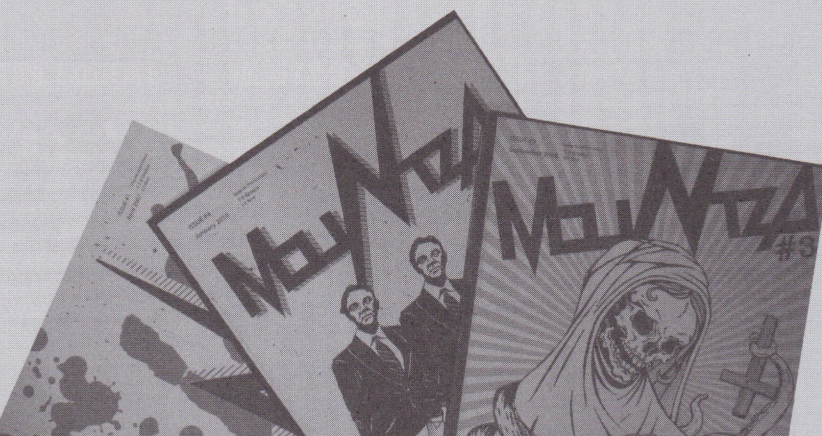
早速Panosにコンタクトをとるとリプライも迅速。しかもこのPanosさん、BURIALとのスプリットもリリースしているハードコア・バンド、ANTIMOBのメンバーだったという事実も発覚し、トントン拍子に話しが進みます。あちらの方がサイズも大きいので、EL ZINEは5冊とMOUNTZAの3冊で交換成立。すぐさま互いに発送すると、日本→ギリシャ便のほうが先に到着したようでありがたいお褒めの言葉と、「けど日本語だから全然読めねぇのが残念。いつか英語版作れよ〜」との連絡が(もちろん事前に日本語のみの内容だと伝えてあります)。稀に「読めなくても問題なし!」というアメリカEVIL MINDED誌のTom(Vol.8に掲載)のような人もいますが、この言葉の壁はどうにかならないもんかなぁと改めて痛感しました。

そうこうするうちにMOUNTZAが到着。いざ現物を手にしてみると想像以上にしっかりしている作りで、かなりの労力とお金がかかっているのが分かります。しかも最新号のVol.4は100ページを超えているにも関わらず、ギリシャ国内の定価が3ユーロ、それ以外の国だと5ユーロ(多分、ヨーロッパ圏内のことであって、送料が高いアジアやアメリカではさすがに違うと思います)。あっちじゃ印刷代がそんなにお安いの?!とその価格設定にも驚きました。

中は基本英語なのですが、一部だけギリシャ語で書かれた記事もあり、普段見慣れないδとかΛ、ε、θ、ξ、Ψといったアルファベットはまるで暗号のよう。何が書かれているのかこれっぽっちも想像できませんが、あちらも日本語を見て全く同じことを思ったのだな、と納得。とにもかくにも、JockeとTommasが推薦するのも頷ける高完成度のジンなのでした。

最後に、実はコンタクトをとった時に興奮していた僕は勢い余って、40冊ほどトレードしようぜ!と申し出たのですが、「送料がメチャクチャかかるから、経済破綻した俺の国(ギリシャ)のように俺まで破産しちまう!」と言われてしまったのです(そりゃそうだ)。

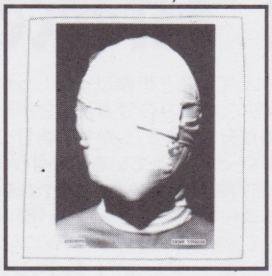
レコード屋さんに卸して日本で広められたらいいな〜と考えていたのですが、ここをご覧のレコード屋さん、もちろん個人の方も、もし興味を持たれたらhttp://mountza.blogspot.com/をチェックしてみて下さい。ヨーロッパにおける最高峰のファンジンの一つであると、僕からもオススメです!



ES GIBT KEIN WERT

BURNING LEATHER(爆走!)にMIDWAY STILL(悲哀!)、そしてJADOO(地獄!)のライヴがここ最近では素晴らしかったです。寒い日が続きますが、引きこもってないで外に出ましょう!
全然音楽と関係ないですが先日、茨城へ牛久大仏を見に行ってきました。商いの臭いが猛烈に漂っていましたが、全長120メートルの大仏様は圧巻です。そんなわけで久々のディスク・レヴュー。2010年にリリースされた新譜のみのラインナップ。お楽しみ頂ければ幸いです!

SEXDROME/GROWN YOUNGER



Vol.4にて掲載のインタヴューで過激発言を連発してくれたデンマークの狂気(凶器)、SEXDROMEが待望のLPをリリース!ささくれ立った不協和音に戦慄が走る、音楽という名の暴力。真義でのハードコアと言いたくなるほどにギミックを排除した神経剥き出しの音と、その露悪性にヤラれます。付随のブックレットも素晴らしく、アート・ブックとして単体で発売してもいいんじゃないかってくらい。
(YOUTH ATTACK 61)LP

THALIDOMIDE/ST



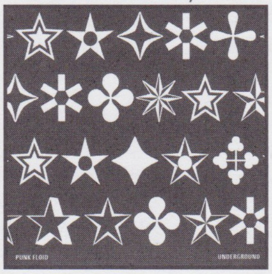
1993年に当時10代だったメンバーにより結成されたチェコ・ハードコア・パンク・バンド。8年もの歳月が注がれて完成した1stアルバムがこちら。元々はパワー・ポップをやっていたらしいが、DEAD KENNEDYSと同地のKRITICKA SITUACEのカヴァー含む全16曲は、哀愁メロディーにゴツいヴォーカルがのるスタイル。音のバランスもバッチリだし製作期間8年は伊達じゃない。フル・カラーのブックレット含めて極上!
(PAPAGAJUV HLASATEL RECORDS/RAPIDAS GRABACIONES PHR112 RG001)LP

COLA FREAKS/ST



SEXDROMEがコペンハーゲンの暗黒面なら、こちらは表舞台に立つバンドでしょうか(本人の前で言ったら殴られそうですが)。シングルを経て遂に発表されたダニッシュ・パンク・ロックの最高峰、COLA FREAKSの1stアルバム。歌詞カードもなく薄い紙を二つ折りにしたジャケットは残念ですが、LA PUNK通過後の、高湿度で不穏な空気をまとったサウンドは流石。現行のユーロ・パンクを求めている人は是非!
(HJERNESPIND HS22)CD

PUNK FLOID/UNDERGROUND



もう一発チェコ!現地で大人気のメロディック・パンク・バンド、PUNK FLOIDの4枚目となるアルバムです。英語で歌っていたらFAT系で終始してしまいそうですが、母国語のヴォーカルとコーラスが楽曲にのった途端、グッとその味わいが増幅します(3倍増しくらいで)。泣きのパンク・ロック・ナンバーもありで涙腺崩壊。前号と今号に掲載のチェコスロヴァキアの歴史を知った上で聴くと、更に感慨深いです。
(PAPAGAJUV HLASATEL RECORDS PHR116)CD

BARAKA FACE JUNTA/ST



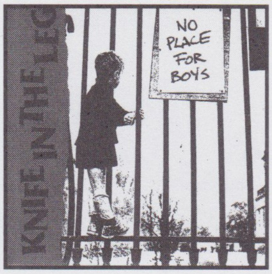
UKアナーコ・パンクからの影響が感じられるバンドの1stフル。魅力的なバンドを多数輩出しているポーランド産らしく、多彩なリズム(ジャズっぽい)と自由度の高い楽曲、母国語の男女ツイン・ヴォーカルで攻め立てる。イスラエル・パレスチナ闘争についてのメッセージ含め政治性も色濃いが、ギグの企画や練習場所の提供などシーンに対する貢献も精力的とのこと。同地のSTRACONYの元メンバーも在籍。
(TRUJACA FALA/NIKT NIC NIE WIE No Number)LP

MAD PIGS/W.W.B.L.O.



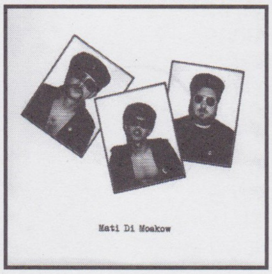
更にチェコ!Vol.6にも登場してもらったマティーノ率いるストリート・パンク・バンドの2010年録音のニュー・アルバム。自身の地元ブルノを歌った、"THIS IS BRNO, NOT L.A."(オリジナルはチェコ語)という曲から幕を開けるのですが、過去作より一皮も二皮も剥けた進化っぷりに驚きました。ギターがかなりメタリックになり、よりアダルトなハードコア・サウンドが爆発!この調子でいってくれ!
(VOLTAGE RECORDS VOL003)CD

KNIFE IN THE LEG/NO PLACE FOR BOYS



リリースが多数あるので、ポーランド好きには既にお馴染みのバンドでしょう。ex POST REGIMENTメンバーによるレコーディングで、キャッチーにスッ飛ばす80's USハードコア・インフルエンスな最新シングル。スウェーデンのAC4なんかとも共振しそうなセンスがキラリと光る絶品で、ロックなフィーリングも込みで痺れます。盤が濃い茶色、ラベルには鶯色を使用。抹茶小豆っぽくて美味しそうなレコードです(笑)。
(TRUJACA FALA/NIKT NIC NIE WIE No Number)7"

THE SECRET PROSTITUTES/MATI DI MOSKOW



インナー・スリーブに直接プリントされたメンバー写真が素敵にヤバ過ぎる、アメリカのバンドの5曲入りシングル。ヴォイス・チェンジャーを使ったかのような甲高い歌唱で、使用言語は何語か聴き取り不可能(ロシア語?)。でも音はキャッチーで抜けの良いキラー・パンク・ロック(THE NUBSのカヴァー収録)!この声とジャケのおかげで、なんだかおちょくられているような気もしてくる摩訶不思議盤。
(P.TRASH/SCHLECT HAAR LEBEN RECORDS No Number)7"

Split/KNIFE IN THE LEG + FIX MY HEAD

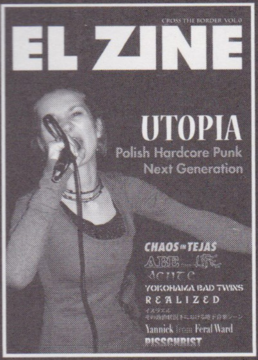


ポーランドの"足にナイフ"と、アメリカの"固定された頭"による12インチ・スプリット。2007年録音のKITLは上記の単独と同路線だが、より乾いた音質で歯切れ良い印象。対するカリフォルニアのFMHはハイテンション&目まぐるしい展開のスラッシュ・ハードコアで一点突破。ちょっとありがちだけど、ラティーノものが好きな人はイケるはず。同内容のアメリカ盤もリリースされています。
(TRUJACA FALA/NIKT NIC NIE WIE No Number)LP

DEATH DEALERS/FILES OF ATROCITY



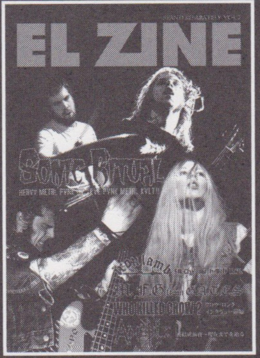
Vol.6でのRAW NOISEインタヴューでヴォーカルのDeanが語っていた新バンド、DEATH DEALERSの12曲入りデビュー・アルバム。ex ANTI CIMEXのドラマー以外はENTとRAW NOISEのメンバーで、もちろんヴォーカルはDeanとPhil!グラインドやクラスト抜きにした、前述の2バンドよりも、より普遍的なハードコア・パンクを目指しているような印象。驚きのGENOCIDE SSカヴァーで脳味噌ぶっ飛ばされます!
(MCR COMPANY/LOWLIFE RECORDS MCR254/LOW003)CD



VOL.0 UTOPIA



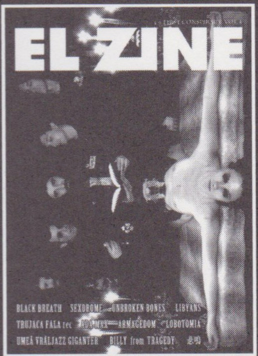
VOL.1 MOONLESS



VOL.2 SONIC RITUAL



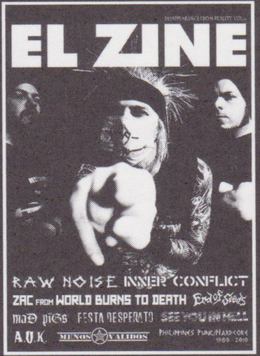
VOL.3 KALASHNIKOV



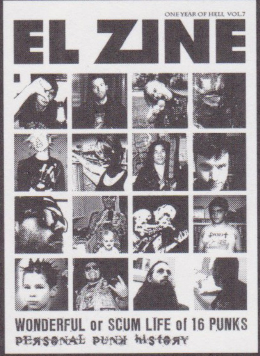
VOL.4 BLACK BREATH



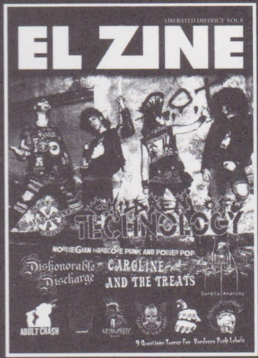
VOL.5 RUIDOSA INMUNDICIA



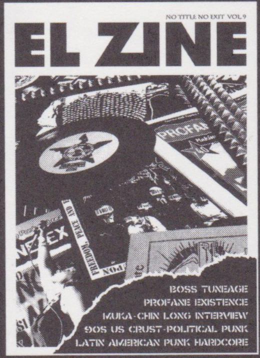
VOL.6 RAW NOISE



VOL.7 SIXTEEN PUNKS



VOL.8 CHILDREN OF TECHNOLOGY



VOL.9 PROFANE EXISTENCE



VOL.10 KASKA-DOGSTAILART

BACK ISSUES

PRICE :
ALL Five Hundreds Yen

SOLD OUT :
Vol. ZERO and Vol. ONE

always tedious editor's notes

今号は少しだけページを増量しようと思っていたのですが、やり過ぎて想像していた以上のページ数になってしまいました。…ハイ・プライスお許し下さい。さて、下記にもあるように次号の発売日は未定です。本号をもって一段落とするか、何事もなかったかのように続けていくか、それともこれまでとは全く違った形にするか、現状どうするか決めていないので僕にも分かりません。お正月に餅でも食べながら考えたいと思います。ただし、間違ってもオンライン・ジンなんかは絶対にやりません(笑)。まぁ、頑張って真面目に生きていくしかないですもんね(…何の話しだ?)。脈絡がまるでないですが、皆さんどうぞ良いお年を。Stay Cool!!

次号の発売は…未定です　※インタヴュアー及び執筆者名の記載のない原稿は全て山路健二が記した

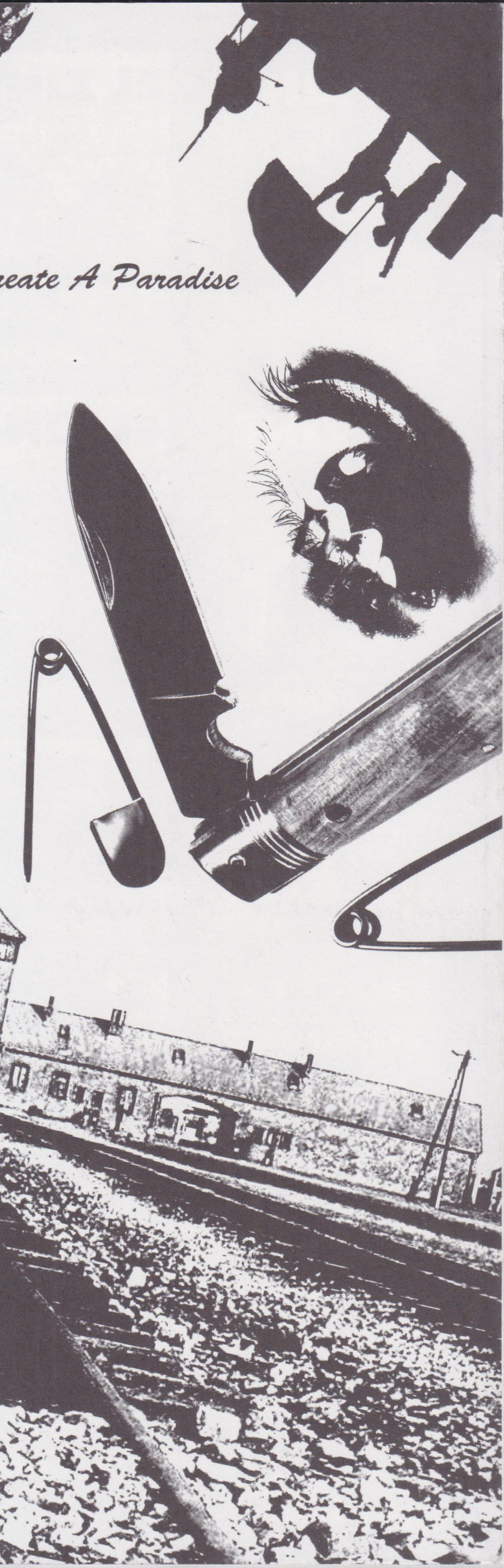
EL ZINE vol.11　2010年12月25日発行　HP・BLOG・MYSPACE・MIXI・TWITTER→NO FUN　E-MAIL→unno13@gmail.com

SHOP and DISTRO

直納しているレコード屋さんetc　ANSWER(名古屋)　BASE(東京・高円寺)　BOY(東京・高円寺)　DISK UNION(関東圏)　G-SIDE(浜松/ライヴハウス)　HARDCORE KITCHEN(神戸)　K-CLUB(高知)　record KNOX(水戸)　MISERY(広島)　NAT(東京・西新宿)　PUNK&DESTROY(大阪)　TIME BOMB(大阪)　VORTEX(三重)　WOODY(新潟/ライヴハウス)

ディストロして頂いている方々　SOUICHIさん(UNDER THE SURFACE/東京)　YUさん(SKIZOPHRENIA/津山)　はっちゃん(BURST HEAD/沖縄)　紺野さん(SPROUT RECORDS/仙台)　ONIGIRIさん(WATERSLIDE/東京)　YUKIさん(SP RECORDS/東京)　CR JAPAN(東京)　MCR COMPANY(京都)


Refugees Create A Paradise
Evacuate!



EL-ZINE

UNFINISHED CONSPIRACY VOL.11

EL Z



DESPERAT

nü-kla

チェコスロヴァキ

AUTISTIC YOUTH

その知

AGE

BORN OUT OF D

LAS SEÑORAS